

# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—XXIX—

福岡県鞍手郡鞍手町所在中屋敷遺跡の調査

1 9 7 9

福岡県教育委員会

# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—XXIX—

福岡県鞍手郡鞍手町所在中屋敷遺跡の調査

1 9 7 9

福岡県教育委員会

# 正 誤 表

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —XXIX—

本 編

誤

正

P 143	12行	新しい	古い
P 153	24行	明糸	明糸
付 録 福 岡 県 中 世 山 城 跡			
P 16	16行	(康完元)	康安元
P 16	20行	建徳 2 ( 4 )	建徳 2 (応 安 4)
P 29	4行	遺構 石塁・土塁	遺構 石垣・土塁
P 38		人杵遺構	人杵遺構
P 63	34行(右)	文献 北九州の城	文献 北九州の城・園田浦城址発掘 調査報告書
P 71	3行(右)	時代 応任年中	時代 応仁年中
P 103	20行(左)	備考	備考 柑子岳城と同じか?
P 105	8行(右)	時代 戦国期(天正15年)	時代 戦国期(建長三年)
P 161(左)	〔イ〕 3	生方城	〔ウ〕欄へ
P 163(右)	6行	志井城→椎山城	志井城→椎山城
P 166(左)	〔ヤ〕 2	安曇城(アズミ)	〔ア〕欄
P 166(左)	3	安宅城(アタカ)	〔ア〕欄
P 168(右)	12	柑子嶽城(コウジガタケ)	〔コ〕欄
P 169(左)	7行	肇穂郡桂川町	嘉穂郡桂川町
P 171(左)	〔マ〕 8	松尾城(略)…289, P 129, 付7	P 121

## 序

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の調査は、昭和44年度に始まり、昭和51年度をして大牟田市から鞍手郡鞍手町まで全路線内を終了しました。

鞍手郡鞍手町所在の遺跡群は昭和50年から翌年の51年度にかけて実施され、この中屋敷遺跡もその一部であります。その内容は弥生時代の集落跡と、最近調査の例が増している中世・近世の遺跡であります。

歴史学における文献との係りまで追究するには至りませんが、一応の成果として報告することと致しました。

本書の刊行にあたって、調査にご協力頂いた地元及び日本道路公団等関係各位に対して深くお礼を申し上げますとともに、本書を通じて文化財についてのご理解を深めていただければ幸甚に存じます。

昭和54年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 浦山太郎

## 例 言

1. この報告書は、九州縦貫自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、昭和50年度から昭和51年度にかけて発掘調査をした鞍手郡鞍手町所在の中屋敷遺跡の調査報告である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託事業として、福岡県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は、Ⅲ-2-(5)の近世陶磁器を日高正幸が、他は上野精志による。
4. 昭和50年度、昭和51年度に行なった九州縦貫自動車道関係の調査は、主として山本文和主事と、栗原和彦技術主査・石山勲・酒井仁夫・副島邦弘・上野精志・児玉真一・中間研志・池辺元明の各技師が担当した。
5. 掲載写真のうち、遺構写真は上野精志・中間研志が主として撮影し、遺物写真は九州歴史資料館技師石丸洋の指導の下に岡紀久夫・前田次郎が撮影し、平島美代子嬢の協力を受けた。
6. 実測図の作成には、遺構について上野精志・中間研志・平ノ内幸治・日高正幸・赤峰義則・佐土原逸男・宇野慎敏があたり、遺物の実測は上野精志・中間研志・日高正幸・平島勇夫・川村博・米倉鈴子・木村万里子・手柴淳子・山本祥子・大坪安子があたった。
7. 遺物の整理は九州歴史資料館岩瀬正信の指導の下に縦貫道都府楼事務所で行なった。
8. 図面の整図については、地形、遺構を上野精志・米倉鈴子・木村万里子、遺物は石器・鉄器類を上野精志、土器類を平田春美が担当した。
9. 本書の編集は、平田春美の協力により上野精志が担当した。
10. 付録として副島邦弘編集の福岡県中世山城跡を集録した。

## 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

## —XXIX—

## 福岡県鞍手郡鞍手町所在中屋敷遺跡の調査

## 目 次

	頁
I は し が き .....	1
1. 昭和50年度(第I地点)の調査の経過 .....	2
2. 昭和51年度(第II地点)の調査の経過 .....	3
II 位 置 と 環 境 .....	5
1. 位 置 と 立 地 .....	5
2. 弥生時代の周辺遺跡 .....	5
3. 歴史時代の周辺遺跡 .....	12
III 第I地点の調査 .....	16
1. 弥生・古墳時代の遺構と遺物 .....	16
(1) 竪穴住居跡 .....	16
(2) 貯蔵穴 .....	28
(3) 木棺墓 .....	35
(4) その他の遺物 .....	35
2. 歴史時代の遺構と遺物 .....	39
(1) 掘立柱建物 .....	39
(2) 土 壙 .....	39
(3) 地下式土壙 .....	47
(4) 土 壙 墓 .....	47
(5) その他の遺物 .....	50
IV 第II地点の調査 .....	87
1. 弥生時代の遺構と遺物 .....	87
(1) 住 居 跡 .....	87
2. 歴史時代の遺構と遺物 .....	87

(1) 掘立柱建物	87
(2) 土        壙	88
(3) 土壙(木棺)墓	106
(4) その他の遺物	109
V おわりに	133
1. 弥生・古墳時代	133
A 住居跡, 貯蔵穴	133
B 弥生時代の遺物	135
2. 歴史時代	138
A 掘立柱建物	138
B 土        壙	139
C 地下式土壙について	139
D 土壙(木棺)墓について	143
3. ま        と        め	153

## 目 次

		本文対照頁
P.L. 1	(1) 中屋敷遺跡発掘前の遠景(東から) .....	5
	(2) 中屋敷遺跡遠景の航空写真(南西から) .....	5
P.L. 2	(1) 中屋敷遺跡第I地点全景の航空写真(南東から) .....	16
	(2) 中屋敷遺跡第I地点全景の航空写真(北から) .....	16
P.L. 3	(1) 中屋敷遺跡第I地点第1~3号住居跡(北から) .....	16
	(2) 中屋敷遺跡第I地点第1・2号住居跡(東から) .....	16
P.L. 4	(1) 中屋敷遺跡第I地点第2号住居跡ピット内土器出土状況(東から) .....	16
	(2) 中屋敷遺跡第I地点第3号住居跡(北から) .....	19
P.L. 5	(1) 中屋敷遺跡第I地点第4・6・7号住居跡(東から) .....	19
	(2) 中屋敷遺跡第I地点第4号住居跡(北から) .....	19
P.L. 6	(1) 中屋敷遺跡第I地点第5号住居跡(東から) .....	22
	(2) 中屋敷遺跡第I地点第5号住居跡の矢板痕(西から) .....	22
P.L. 7	(1) 中屋敷遺跡第I地点第6号住居跡(東から) .....	23
	(2) 中屋敷遺跡第I地点第6号住居跡土器出土状況(東南から) .....	23
P.L. 8	(1) 中屋敷遺跡第I地点第7号住居跡(南から) .....	25
	(2) 中屋敷遺跡第I地点第7号住居跡炭化材出土状況(南から) .....	25
P.L. 9	(1) 中屋敷遺跡第I地点第8号住居跡(東から) .....	26
	(2) 中屋敷遺跡第I地点第8号住居跡土器・石庖丁出土状況(北から) .....	26
P.L. 10	中屋敷遺跡第I地点第1・2・3・4号住居跡出土土器 .....	16~22
P.L. 11	中屋敷遺跡第I地点第5・6・8号住居跡出土土器・石器 .....	22~28
P.L. 12	(1) 中屋敷遺跡第I地点第1~4号貯蔵穴(東から) .....	28
	(2) 中屋敷遺跡第I地点第1号貯蔵穴(西から) .....	30
P.L. 13	(1) 中屋敷遺跡第I地点第1号貯蔵穴(北から) .....	30
	(2) 中屋敷遺跡第I地点第3号貯蔵穴(北から) .....	33
P.L. 14	中屋敷遺跡第I地点第1・2号貯蔵穴出土土器 .....	30~32
P.L. 15	中屋敷遺跡第I地点第2号貯蔵穴出土土器・石器 .....	32
P.L. 16	(1) 中屋敷遺跡第I地点第4号貯蔵穴(北東から) .....	33
	(2) 中屋敷遺跡第I地点第4号貯蔵穴(北西から) .....	33
P.L. 17	中屋敷遺跡第I地点第3・4号貯蔵穴出土土器 .....	33

PL. 18	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点木棺墓 (東から) .....	35
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点出土石器 .....	38
PL. 19	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点第 1 号掘立柱建物 (西から) .....	39
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点 F 区北側の柱穴群 (西から) .....	39
PL. 20	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点第 1 ~ 3 号土壙 (西から) .....	39
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点第 1 号土壙 (南から) .....	39
PL. 21	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点第 2 号土壙 (南から) .....	41
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点第 3 号土壙 (南から) .....	42
PL. 22	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点第 4 ~ 8 号土壙 (南から) .....	42
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点第 4 号土壙 (東から) .....	42
PL. 23	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点第 5 号土壙 (東から) .....	42
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点第 6 号土壙 (北から) .....	45
PL. 24	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点第 7 号土壙 (南から) .....	45
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点第 8 号土壙 (北から) .....	45
PL. 25	中屋敷遺跡第 I 地点第 1・2・3・4・7・8 号土壙出土遺物 .....	41~45
PL. 26	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点地下式土壙閉塞石の状況 (南西から) .....	47
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点地下式土壙 (南から) .....	47
PL. 27	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点第 1 号土壙墓 (南東から) .....	47
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点第 1 号土壙墓土器出土状況 (南東から) .....	47
PL. 28	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点第 2 号土壙墓 (北から) .....	49
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点第 3・4 号土壙墓 (西から) .....	50
PL. 29	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点第 3・4 号土壙墓遺物出土状況 (東から) .....	50
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点第 3 号土壙墓鉄器出土状況 (東から) .....	50
PL. 30	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点地下式土壙出土土器 .....	47
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点第 1・2 号土壙墓出土遺物 .....	47
PL. 31	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点石組遺構 (西から) .....	39
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点石組遺構 (南から) .....	39
PL. 32	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点出土土師器皿・坏 .....	50
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点出土土師器坏 .....	50
PL. 33	(1) 中屋敷遺跡第 I 地点出土須恵器・瓦質土器 .....	55
	(2) 中屋敷遺跡第 I 地点出土土鍋・片口・茶釜形土器 .....	56・59
	(3) 中屋敷遺跡第 I 地点出土火舎 .....	58
	(4) 中屋敷遺跡第 I 地点出土瓦器 .....	59

PL. 34	中屋敷遺跡 第 I 地点出土青磁 ①	60
PL. 35	中屋敷遺跡 第 I 地点出土青磁 ②	60
PL. 36	中屋敷遺跡 第 I 地点出土青磁 ③	65
PL. 37	中屋敷遺跡 第 I 地点出土青磁 ④	65
PL. 38	中屋敷遺跡 第 I 地点出土青磁 ⑤	65
PL. 39	中屋敷遺跡 第 I 地点出土青磁 ⑥	69
PL. 40	(1) 中屋敷遺跡 第 I 地点出土合子	71
	(2) 中屋敷遺跡 第 I 地点出土白磁 ①	72
PL. 41	中屋敷遺跡 第 I 地点出土白磁 ②	72
PL. 42	中屋敷遺跡 第 I 地点出土白磁 ③	72
PL. 43	(1) 中屋敷遺跡 第 I 地点出土白磁 ④	75
	(2) 中屋敷遺跡 第 I 地点出土雑器	76
PL. 44	中屋敷遺跡 第 I 地点出土陶磁器 ①	77
PL. 45	中屋敷遺跡 第 I 地点出土陶磁器 ②	77
PL. 46	中屋敷遺跡 第 I 地点出土陶磁器 ③	79
PL. 47	中屋敷遺跡 第 I 地点出土陶磁器 ④	81
PL. 48	(1) 中屋敷遺跡 第 I 地点出土土製品	82
	(2) 中屋敷遺跡 第 I 地点出土石器 ①	82
PL. 49	(1) 中屋敷遺跡 第 I 地点出土石器 ②	82
	(2) 中屋敷遺跡 第 I 地点出土金属器	84
PL. 50	(1) 中屋敷遺跡 第 I 地点出土銅銭	84
	(2) 中屋敷遺跡 第 I 地点出土鋳物関係遺物	85
PL. 51	(1) 中屋敷遺跡 第 II 地点全景 (北から)	87
	(2) 中屋敷遺跡 第 II 地点全景 (西から)	87
PL. 52	(1) 中屋敷遺跡 第 II 地点 A 区と剣岳城跡 (東から)	87
	(2) 中屋敷遺跡 第 II 地点 B 区全景 (北から)	87
PL. 53	(1) 中屋敷遺跡 第 II 地点 第 1 号住居跡 (北西から)	87
	(2) 中屋敷遺跡 第 II 地点 第 1 号掘立柱建物 (北から)	87
PL. 54	(1) 中屋敷遺跡 第 II 地点 第 1 号土壇 (北から)	90
	(2) 中屋敷遺跡 第 II 地点 第 3 号土壇 (北から)	90
PL. 55	中屋敷遺跡 第 II 地点 第 1・2 号土壇出土遺物	90
PL. 56	(1) 中屋敷遺跡 第 II 地点 第 4 号土壇 (北から)	93
	(2) 中屋敷遺跡 第 II 地点 第 5 号土壇 (西から)	93

PL.	57	(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第6号土壙(西から)……………	93
		(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第6号土壙土器出土状況(西から)……………	93
PL.	58	(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第7号土壙(北から)……………	96
		(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第8号土壙(北から)……………	96
PL.	59	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第4・6・7・8号土壙出土遺物……………	93~96
PL.	60	(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第9号土壙(北から)……………	99
		(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第11号土壙(南から)……………	99
PL.	61	(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第11号土壙(東から)……………	99
		(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第12号土壙(北から)……………	101
PL.	62	(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第13号土壙(東から)……………	101
		(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第14号土壙(北から)……………	101
PL.	63	(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第15号土壙遺物出土状況(北東から)……………	101
		(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第15号土壙(東から)……………	101
PL.	64	(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第16号土壙(南から)……………	106
		(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点C区トレンチ(東から)……………	3
PL.	65	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第11・12・13・15号土壙出土遺物……………	99~101
PL.	66	(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第15号土壙出土遺物……………	101
		(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第16号土壙出土土器……………	106
PL.	67	(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号土壙墓の発掘状況(東から)……………	106
		(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号土壙墓青磁出土状況(南から)……………	106
PL.	68	(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号土壙墓(東から)……………	106
		(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号土壙墓鉄釘出土状況(南から)……………	106
PL.	69	(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第2号土壙墓(北から)……………	108
		(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第2号土壙墓(東から)……………	108
PL.	70	(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1・2号土壙墓出土遺物……………	106・108
		(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土土師器皿・坏……………	110
PL.	71	(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土須恵質土器……………	110
		(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土土鍋・片口……………	113
		(3) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土瓦器……………	113
PL.	72	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁①……………	116
PL.	73	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁②……………	116
PL.	74	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁③……………	119
PL.	75	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁④……………	119

PL. 76	中屋敷遺跡 第Ⅱ地点出土青磁⑤	119
PL. 77	(1) 中屋敷遺跡 第Ⅱ地点出土青磁⑥	123
	(2) 中屋敷遺跡 第Ⅱ地点出土高麗青磁	123
	(3) 中屋敷遺跡 第Ⅱ地点出土合子	124
PL. 78	中屋敷遺跡 第Ⅱ地点出土白磁①	124
PL. 79	中屋敷遺跡 第Ⅱ地点出土白磁②	125
PL. 80	(1) 中屋敷遺跡 第Ⅱ地点出土白磁③	128
	(2) 中屋敷遺跡 第Ⅱ地点出土雑器・陶磁器	128
PL. 81	(1) 中屋敷遺跡 第Ⅱ地点出土土製品	129
	(2) 中屋敷 第Ⅱ地点出土石製品	129
PL. 82	中屋敷遺跡 第Ⅱ地点 出土石鍋	130

## 挿 図 目 次

	頁
Fig. 1 鞍手町周辺の遺跡分布図 (縮尺1/25,000)	4-5
Fig. 2 中屋敷遺跡周辺地形図 (縮尺1/1,500)	4-5
Fig. 3 中屋敷遺跡地形図 (縮尺1/1,000)	16-17
Fig. 4 中屋敷遺跡第Ⅰ地点遺構全体図 (縮尺1/300)	16-17
Fig. 5 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1・2号住居跡実測図 (縮尺1/60)	17
Fig. 6 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第3号住居跡実測図 (縮尺1/60)	20
Fig. 7 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第4号住居跡実測図 (縮尺1/60)	21
Fig. 8 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第5号住居跡実測図 (縮尺1/60)	22
Fig. 9 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第6号住居跡実測図 (縮尺1/60)	24
Fig. 10 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第7号住居跡実測図 (縮尺1/60)	25
Fig. 11 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第8号住居跡実測図 (縮尺1/60)	26
Fig. 12 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1・2・4・5・6・8号 住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)	27
Fig. 13 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1・2・3・4号貯蔵穴実測図 (縮尺1/40)	29
Fig. 14 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1・2号貯蔵穴出土土器実測図 (縮尺1/4)	31
Fig. 15 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第2号貯蔵穴出土土器・石器実測図 (縮尺1/4・1/2)	32
Fig. 16 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第3・4号貯蔵穴出土土器実測図 (縮尺1/4)	34
Fig. 17 中屋敷遺跡第Ⅰ地点木棺墓実測図 (縮尺1/20)	35

<b>Fig. 18</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土土器実測図 (縮尺1/4) .....	36
<b>Fig. 19</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土石器実測図 (縮尺1/2) .....	37
<b>Fig. 20</b>	中屋敷遺跡第 I 地点第 1 号掘立柱建物実測図 (縮尺1/60) .....	40
<b>Fig. 21</b>	中屋敷遺跡第 I 地点第 1・2 号土壇実測図 (縮尺1/60) .....	41
<b>Fig. 22</b>	中屋敷遺跡第 I 地点第 3・5・7・8 号土壇実測図 (縮尺1/60) .....	43
<b>Fig. 23</b>	中屋敷遺跡第 I 地点第 1・2・3・4・7・8 号 土壇出土土器実測図 (縮尺1/3) .....	44
<b>Fig. 24</b>	中屋敷遺跡第 I 地点地下式土壇実測図 (縮尺1/60) .....	46
<b>Fig. 25</b>	中屋敷遺跡第 I 地点地下式土壇出土土器実測図 (縮尺1/3) .....	47
<b>Fig. 26</b>	中屋敷遺跡第 I 地点第 1・2 号土壇墓実測図 (縮尺1/20) .....	48
<b>Fig. 27</b>	中屋敷遺跡第 I 地点第 1・2 号土壇墓出土土器実測図 (縮尺1/3) .....	49
<b>Fig. 28</b>	中屋敷遺跡第 I 地点第 3・4 号土壇墓実測図 (縮尺1/20) .....	51
<b>Fig. 29</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土土師器実測図① (縮尺1/3) .....	52
<b>Fig. 30</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土土師器実測図② (縮尺1/3) .....	53
<b>Fig. 31</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土須恵器・瓦質土器実測図 (縮尺1/3) .....	54
<b>Fig. 32</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土土鍋・片口実測図 (縮尺1/3) .....	57
<b>Fig. 33</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土火舎実測図 (縮尺1/3) .....	58
<b>Fig. 34</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土瓦器実測図 (縮尺1/3) .....	60
<b>Fig. 35</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土青磁実測図① (縮尺1/3) .....	61
<b>Fig. 36</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土青磁実測図② (縮尺1/3) .....	63
<b>Fig. 37</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土青磁実測図③ (縮尺1/3) .....	64
<b>Fig. 38</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土青磁実測図④ (縮尺1/3) .....	66
<b>Fig. 39</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土青磁実測図⑤ (縮尺1/3) .....	67
<b>Fig. 40</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土青磁実測図⑥ (縮尺1/3) .....	68
<b>Fig. 41</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土合子実測図 (縮尺1/3) .....	71
<b>Fig. 42</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土白磁実測図① (縮尺1/3) .....	73
<b>Fig. 43</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土白磁実測図② (縮尺1/3) .....	74
<b>Fig. 44</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土白磁実測図③ (縮尺1/3) .....	75
<b>Fig. 45</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土雑器実測図 (縮尺1/3) .....	76
<b>Fig. 46</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土陶器実測図① (縮尺1/3) .....	78
<b>Fig. 47</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土陶器実測図② (縮尺1/3) .....	80
<b>Fig. 48</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土土製品・石製品実測図 (縮尺1/2) .....	83
<b>Fig. 49</b>	中屋敷遺跡第 I 地点出土金属製品実測図 (縮尺1/2) .....	84

<b>Fig. 50</b>	中屋敷遺跡第Ⅰ地点出土銅錢拓影 (縮尺1/1) .....	85
<b>Fig. 51</b>	中屋敷遺跡第Ⅰ地点出土鑄物關係遺物実測図 (縮尺1/3) .....	86
<b>Fig. 52</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点遺構全体図 (縮尺1/200) .....	87-88
<b>Fig. 53</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点A区遺構全体図 (縮尺1/100) .....	87-88
<b>Fig. 54</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点B区遺構全体図 (縮尺1/100) .....	87-88
<b>Fig. 55</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号住居跡実測図 (縮尺1/40) .....	88
<b>Fig. 56</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号掘立柱建物実測図 (縮尺1/60) .....	89
<b>Fig. 57</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1・2号土壙実測図 (縮尺1/30) .....	91
<b>Fig. 58</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1・2号土壙出土土器実測図 (縮尺1/3) .....	92
<b>Fig. 59</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第3・4・5号土壙実測図 (縮尺1/30) .....	94
<b>Fig. 60</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第6号土壙実測図 (縮尺1/30) .....	95
<b>Fig. 61</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第7・8号土壙実測図 (縮尺1/30) .....	97
<b>Fig. 62</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第4・6・7・8号 土壙出土土器・石器実測図 (縮尺1/3) .....	98
<b>Fig. 63</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第9号土壙実測図 (縮尺1/30) .....	99
<b>Fig. 64</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第11号土壙実測図 (縮尺1/30) .....	100
<b>Fig. 65</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第12・14号土壙実測図 (縮尺1/30) .....	102
<b>Fig. 66</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第15・16号土壙実測図 (縮尺1/30) .....	103
<b>Fig. 67</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第11・12・13・15・16号土壙出土土器実測図 (縮尺1/3) ...	104
<b>Fig. 68</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第15号土壙出土石鍋実測図 (縮尺1/3) .....	105
<b>Fig. 69</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号土壙墓実測図 (縮尺1/20) .....	107
<b>Fig. 70</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第2号土壙墓実測図 (縮尺1/20) .....	108
<b>Fig. 71</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1・2号土壙墓出土土器・ 鉄器・石器実測図 (縮尺1/3) ...	109
<b>Fig. 72</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土土師器実測図① (縮尺1/3) .....	111
<b>Fig. 73</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土土師器実測図② (縮尺1/3) .....	112
<b>Fig. 74</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土須恵質土器・ 内黒土器・土鍋・片口実測図 (縮尺1/3) .....	114
<b>Fig. 75</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土瓦器実測図 (縮尺1/3) .....	115
<b>Fig. 76</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁実測図① (縮尺1/3) .....	117
<b>Fig. 77</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁実測図② (縮尺1/3) .....	118
<b>Fig. 78</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁実測図③ (縮尺1/3) .....	120
<b>Fig. 79</b>	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁実測図④ (縮尺1/3) .....	121

<b>Fig.</b> 80	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁実測図⑤ (縮尺1/3) .....	122
<b>Fig.</b> 81	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁・合子実測図 (縮尺1/3) .....	124
<b>Fig.</b> 82	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土白磁実測図① (縮尺1/3) .....	126
<b>Fig.</b> 83	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土白磁実測図② (縮尺1/3) .....	127
<b>Fig.</b> 84	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土白磁実測図③ (縮尺1/3) .....	128
<b>Fig.</b> 85	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土陶器実測図 (縮尺1/3) .....	129
<b>Fig.</b> 86	中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土土製品・石製品実測図 (縮尺1/2) .....	130

## 表 目 次

<b>Tab.</b> 1	中屋敷遺跡第Ⅰ地点住居跡一覧表 .....	28
<b>Tab.</b> 2	中屋敷遺跡第Ⅰ地点貯蔵穴一覧表 .....	35
<b>Tab.</b> 3	中屋敷遺跡第Ⅰ地点出土銅銭一覧表 .....	85
<b>Tab.</b> 4	福岡県内地下式土壙一覧表 .....	142
<b>Tab.</b> 5	福岡県内土葬墓一覧表 .....	146~151

## I は し が き

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は福岡県内においては昭和44年度より始まり、鞍手町内の遺跡については昭和49年度を予備調査、昭和50年度、51年度を本調査として実施された。

鞍手地区における調査の経過についての概略は（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-X II-）・向山遺跡の調査。（『同』-X III-）・高木遺跡。（『同』-X X III-）・音丸城跡等に詳細に述べられているので、総体的な調査の経過についてはそれらを参照されたい。

ここでは本報告書に記載しようとする中屋敷遺跡についての概略をふれる。

中屋敷遺跡は九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査地点の福間一直方間における「直22地点」に当る遺跡である。鞍手郡内、直方市内の九州縦貫自動車道建設予定地内の遺跡分布調査は、昭和43年度より開始されたが、若宮町・宮田町は主に分布調査によって遺跡を確認する方法が採られたが、鞍手町内においては分布調査もさることながら遺跡の存在が考えられる丘陵を主体に予備調査として13ヶ所の地点を設け機械力（ブルドーザ）によりトレンチを入れて遺跡を確認することとし、中屋敷遺跡の発見となる。

この地点は、近くに中世の山城である剣岳城跡や国宝の中山不動尊があり、また識者の中で中屋敷周辺は直方（東蓮寺）藩主黒田高政の家老吉田老岐の屋敷跡と指摘されている所でもある。

本調査は、遺跡の北側部分（第I地点）を昭和50年7月1日から同年10月30日までの4ヶ月で第I次調査とし、西側部分（第II地点）を昭和51年4月5日から同年6月7日までの3ヶ月を第II次調査として両年度にて実施する。

調査主体は福岡県教育委員会として、同文化課技師が携わることとなった。

発掘調査関係者はつぎのとおりである。

### 総 括

教 育 長	森 田 實	管 理 部 長	西 村 太 郎
文 化 課 長	藤 井 功	文 化 課 長 補 佐	野 上 保
文 化 課 長 補 佐	武 久 耕 作	(前 任)	
文 化 課 調 査 係 長	松 岡 史	文 化 課 長 補 佐	川 崎 隆 夫
兼 参 事 補 佐		文 化 課 技 術 主 査	栗 原 和 彦
文 化 課 技 術 主 査	宮 小 路 賀 宏		

### 庶務会計

文 化 課 課 長 補 佐		文 化 課 庶 務 係 長	大 淵 幸 夫
兼 庶 務 係 長	野 上 保	(前 任)	

文化課庶務主事 山本文和      文化課嘱託 因 将太  
発掘調査員

文化課技師 上野精志      文化課技師 中間研志  
調査補助員

日高正幸      平ノ内幸治  
赤峰義則      佐土原逸男  
宇野慎敏

なお、日本道路公団の関係者は（『同』-XⅢ-）を参照されたい。

また、本報告書は鞍手町関係の第4冊目として刊行するものである。

## 1. 昭和50年度（第Ⅰ地点）の調査の経過

第Ⅰ次調査として1975年（昭和50年）7月1日より10月30日までに4,174㎡を調査する。以下、調査日誌より経過を抜粋する。

### 第Ⅰ次調査 1975年（昭和50年）

7月1日 器材搬入をし、テントの設定。安全作業の徹底や発掘作業の説明。合せてブルドーザを利用して遺跡の北西より表土除去作業に入る。なお、便宜上に現地形に合わせて階段状になっている地目境を一単位としてA～Iまで区割りする。

7月2日～7月5日 北西方のA区表土除去及び遺構検出。A区ではブドウ畑の基礎穴が検出される。

7月7日～7月18日 A区の東側下方をB区とする。表土除去作業を行なうも、このB区では予備調査にて住居跡が確認されており、慎重に作業を行なう。第1・2・3号住居跡の他に新たに貯蔵穴、木棺墓を発見し弥生時代の集落跡の可能性が出てくる。中世関係では第1・2号土壌を検出して改めてA区の土壌を第3号土壌とする。

7月22日～7月31日 B区の南東側をC区とし、第4号住居跡を検出。この住居跡は拡張されており手間どる。

8月1日～8月14日 B・C区の東側下方をD区とする。B・C区とD区は現状で約1mの段が付いている。D区では貯蔵穴3基と住居跡2基、土壌墓2基を検出。その他数多くのピットを検出するも建物として認められているものはない。なお、C区とD区の境にて第7号住居跡を発見する。

8月18日～8月26日 A区の南側をE区とする。ここではブドウ栽培の基礎穴が規則正しく数十個が現われる。東側の下方で2間×5間の掘立柱建物を検出し、北側では2基の土壌を発掘する。

8月27日～9月6日 C区の南, E区の東側をF区とする。F区でも南方はE区の続きでブドウ栽培の基礎穴が現われ, その穴にほとんど破壊された状態で第8号住居跡を検出する。E区の北方半分に数十のピットを検出するも掘立柱建物として認めるに苦労をする。また土壌を4基検出する。ここでD区の南方にある石組みについては現代のものと考えていたが, F区とC区の境における溝の発見やF区北方の大多数のピット検出により何らかの排水施設の可能性が生まれ本格的に調査に入る。

9月8日～9月11日 F区の東側下方をG区とし, 遺構検出に務める。

9月12日～9月13日 第I地点の発掘がほぼ終了したので全体を清掃し, 全体写真の撮影を行なう。

9月15日～9月23日 確認のためにG区のさらに下方にH区を設け, またさらにその下方についてはトレンチ (I区) を設定してダメ押し調査を行なう。

9月24日～10月18日 本格的に実測を開始する。既に検出, 発掘した遺構については随時写真撮影, 実測を実施して来ていたが, 道路公団の中心杭を利用して2m方眼を組み各ピット等の実測に入る。

10月22日～10月31日 D区とG区の境の石組遺構を取り除くと地下式土壌が検出され, 改めて発掘調査にかかる。実測者はレベル読み, また発掘後の等高線を平板にて測量する。

これら第I次調査に関して山口大学生有志の多大な協力があつた。

## 2. 昭和51年度 (第II地点) の調査の経過

第II次調査は1976年 (昭和51年) 4月5日より6月7日までに3,659 $m^2$ を調査する。以下, 調査日誌より経過を抜粋する。

### 第II次調査 1976年 (昭和51年)

4月5日 器材を搬入し, テントを設定し, 安全作業の徹底や発掘作業の説明。この地区は上・下二段の荒地であるので上段をII A区。下段をII B区とする。II A区の表土除去作業。

4月6日～4月10日 A区の表土除去を終了。

4月12日～4月19日 検出された土壌や掘立柱建物の発掘。

4月20日～5月15日 B区の表土除去作業を行なう。B区は覆土が非常に厚く堆積しており困難をきわめる。

5月17日～5月27日 B区の検出された遺構の発掘。合せてA区の実測。

5月28日～6月7日 A・B区の実測及び写真撮影を行なう。さらに全体の平板測量を実施する。また, 第II地点の遺跡範囲確認のためA・B区の北西側にトレンチ4本を設定し発掘するも遺構の検出は見られず。

以上, 第I地点, 第II地点の調査に当っては, 鞍手町教育委員会, 鞍手町中山区老人会及び

婦人会，新北区の方々に全面的な御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

#### 弥生時代の周辺遺跡（○印）

1 中屋敷遺跡 2 向山遺跡 3 高木遺跡 4 京場山遺跡 5 八尋遺跡 6 古江遺跡 7 神崎遺跡 8 入生遺跡 9 糖塚遺跡 10 立屋敷遺跡 11 垣生地遺跡 12 宮ノ下貝塚 13 城ノ越貝塚 14 岩瀬貝塚 15 中曾根・ニタ股遺跡 16-1 中之江遺跡 16-2 下大隈遺跡 16-3 唐戸遺跡 16-4 垣生遺跡 16-5 砂山遺跡 16-6 中間小学校前遺跡 17 上り立遺跡 18 八つ広遺跡 19 感田上原遺跡 20 猪の久保遺跡 21 馬場山遺跡 22 原遺跡 23 辻田遺跡 24 門田遺跡 25 香月遺跡 26 葉師丸遺跡 27 笠置山千石三の谷 28 柳ヶ谷遺跡 29 都地原遺跡 30 汐井掛遺跡 31 小原遺跡 32 茶白山遺跡 33 小金原遺跡

#### 歴史時代の周辺遺跡（□印）

34 旧芦屋小遺跡 35 西屋敷（上二）貝塚 36 宮林遺跡 37 垣生公園遺跡群 38 中ノ坊遺跡 39 三反田遺跡 40 白岩遺跡 41 茶白山城跡 42 遠園遺跡 43 剣岳城跡 44 音丸城跡



Fig. 1 鞍手町周辺の遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

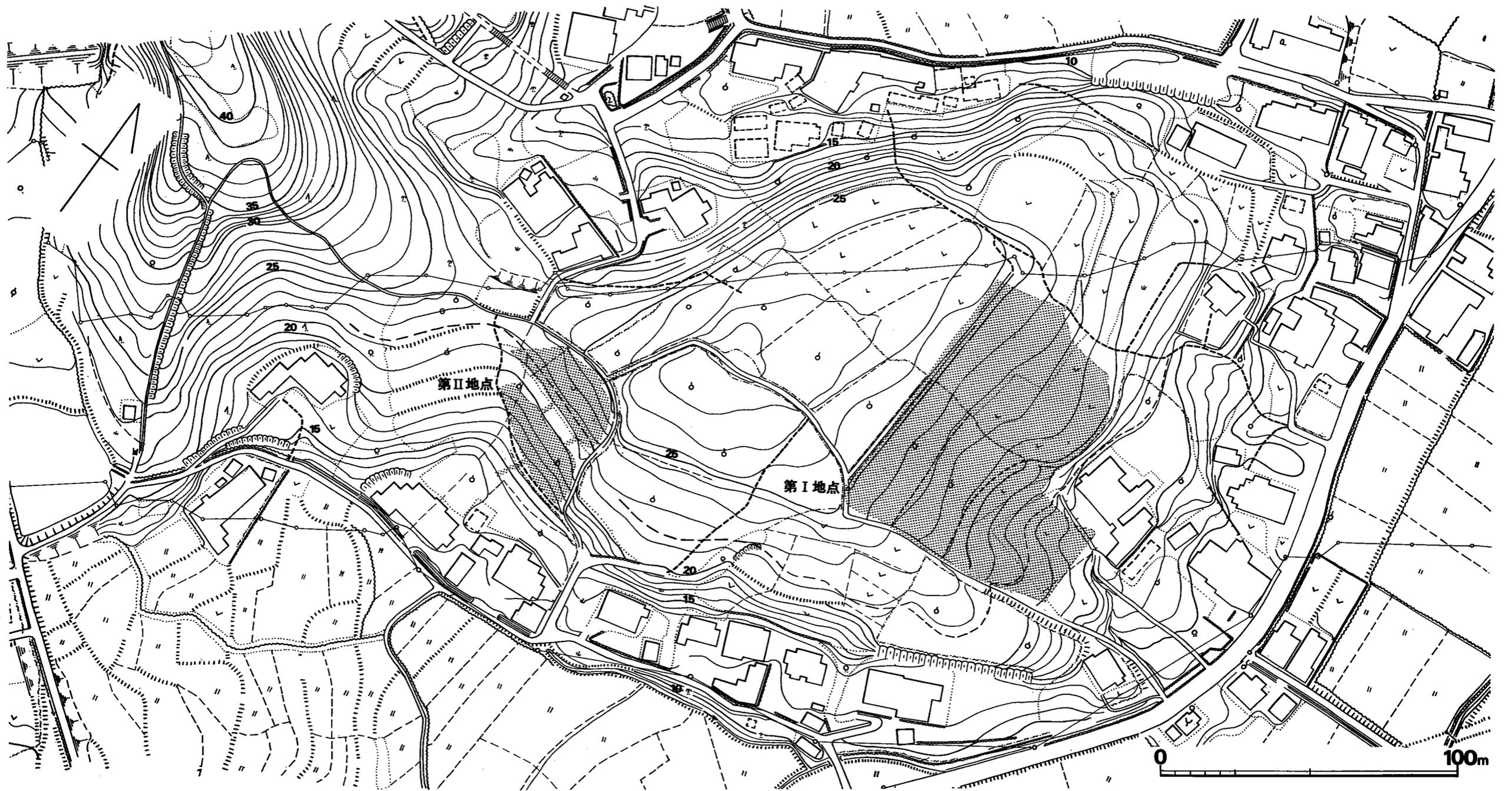


Fig. 2 中屋敷遺跡周辺地形図 (縮尺1/1,500)

## Ⅱ 位置と環境

### 1. 位置と立地

中屋敷遺跡は鞍手郡鞍手町大字中山字中屋敷に在る。鞍手町は、福岡県のほぼ中央部を南より北へ流れる遠賀川の下流域西側に位置する。遠賀川の一支流である西川流域と一部遠賀川の西側に広がる平野にまたがる。

南は鞍手郡宮田町と六ヶ岳を境としており、西方は宮田町の白山山系、さらに宗像郡宗像町と境し、北方ではおよそ西川の左岸を遠賀郡遠賀町と、右岸を中間市と境し、東方では遠賀川の平野地をして直方市と接している。中屋敷遺跡の所在する中山地区は西川の右岸で遠賀川の左岸であり、両河川に挟まれた六ヶ岳より北方に派生する低い段丘が延びており、それには剣岳を中心とした剣岳段丘とその東側方の遠賀川方面には十念山段丘があり、両段丘間に六田川が流れ中山平野を形成している。

中屋敷遺跡は剣岳段丘の東方、中山平野と接する丘陵先端の段丘上に立地している。

鞍手町内には古くより遺跡の存在が知られており数多くの遺跡が存在する。これらは先に記した西川流域や遠賀川流域の平野部。さらに、六ヶ岳や西山山系より派生した各段丘、また、山頂にも中世山城などがあり、縄文時代の貝塚や、古墳が多く存在することで知られている。

これらの各時代の諸遺跡については既に『鞍手町誌』や『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』の-XⅡ-, -XⅢ-, -XⅣ-等に紹介されているので、ここでは中屋敷遺跡と深い係りのある弥生時代、歴史時代の遺跡について鞍手町内だけでなく巨視的に遠賀川中・下流域を合せてみてみたい。(Fig. 1・2, PL. 1)

### 2. 弥生時代の周辺遺跡

遠賀川流域における弥生時代の研究は「遠賀川式土器」に象徴されるように古くより研究が盛んになされて来た。上流では飯塚市の立岩遺跡、下流では立屋敷遺跡、城ノ越貝塚が著名な遺跡である。

鞍手町内の弥生時代の遺跡は数多く見られるが、遺構の検出されたもの、石器類の発見されたものなどの各遺跡、また鞍手町周辺の重要遺跡について簡単に紹介する。

#### (2) 向山遺跡 鞍手郡鞍手町新北字向山

註(1)  
福岡県教育委員会により九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査として昭和50年度と昭和51年度に発掘調査されたもので、弥生時代関係の遺構は二つの地点に分れているが、低丘陵上に豎

穴住居跡4基。高丘陵上に貯蔵穴7基、土壇10基が検出されている。住居跡はいずれも後期で形状は方形でありベッド状遺構を有するものもある。また第1・4号住居跡の2基からは「周壁溝」が検出されている。貯蔵穴は三群に分けられ、形状は円形で壁は「袋状」を呈するもので出土遺物は土器、石斧があり時期は中期初頭である。土壇は墓と考えられるものが含まれており、出土遺物は土器片少量であるが時期は貯蔵穴と同じで中期初頭とされている。

### (3) 高木遺跡 鞍手郡鞍手町新北字高木

この遺跡も「縦貫道」により調査されたもので住居跡と墓地が検出されている。住居跡は2基で1号跡は径約6mの円形で中期後半の土器が出土している。2号跡はほぼ隅丸方形を呈し、遺物は中期中葉の土器と頁岩製の片刃石斧である。

その他遺構に伴うものではないが、頁岩製の石庖丁、硬質砂岩製石庖丁、頁岩製石戈、黒耀石製石鎌が各々1点出土している。

墓地には土壇(木棺)墓33基、箱式石棺墓2基、甕棺墓2基が検出されている。副葬品には土壇(木棺)墓より頁石製石剣2、安山岩製磨製石鎌1、頁岩製磨製石鎌2、安山岩製打製石鎌1、水晶玉2、管玉16、ガラス玉8、その他裏込め土内より小片の弥生式土器が少量出土している。これらの土壇(木棺)墓には出土遺物より中期初頭から中期後半以前と考えられている。箱式石棺墓には副葬品はないが目ばりに土器が使用されており、中期後半と判明した。甕棺墓は2基とも合口式で、使用された土器は甕形土器で中期中葉と中期後半のものである。

### (4) 京場山遺跡 鞍手郡鞍手町新延字京畑

この遺跡は石炭鉱害復旧事業の土取場となり1967年(昭和42年)の工事により発見された。遺構は小型の袋状堅穴群が存在したらしく多くの遺物が採集されている。土器は前期後半のものが多くみられる。石器には石斧4、砥石1、シルト質製と砂岩質石庖丁各々1、石鎌2である。

### (5) 八尋遺跡 鞍手郡鞍手町八尋字大谷

昭和37年に福岡県教育委員会により銀冠塚古墳群の調査が行なわれたが、その際第3号古墳の東北約55mの所のトレンチで約45度の傾斜をもって埋葬されていたもので後期末のものである。

### (6) 古江遺跡 鞍手郡鞍手町八尋字古江

大谷遺跡の北側下方の低台地上にあり、遺構は確認されていないが弥生から歴史時代にかけての数多くの遺物が採集されている。弥生時代関係を見ると、土器では前期から後期のものであり、石器では柳葉形磨製石鎌1、石戈?2、石庖丁2、石斧、石鎌などが出土している。

### (7) 神崎遺跡 鞍手郡鞍手町神崎

箱式石棺墓が数基発見されており、周辺より後漢の内行花文鏡(長宜子孫鏡)の破片が採集されているが詳細は不明である。

(8) 入生遺跡 鞍手郡鞍手町新北字入生

註(4)  
前記した向山遺跡の南方にあり同丘陵上に拡がる遺跡と思われる。弥生式土器と石庖丁が採集されている。

この他、鞍手町内には数多くの弥生時代の遺跡が確認されている。古(木)月貝塚、新延貝塚、猪倉貝塚よりも弥生式土器出土の報を聞くが詳細は不明である。

(9) 糖塚遺跡 遠賀郡岡垣町糖塚

註(6)  
昭和45年の土取り工事によって発見された遺跡で福岡教育大波多野暁三教授により調査され、住居跡1基、貯蔵穴6基が検出されている。住居跡は径6.9mの円形であり、出土遺物は中期の土器と石鏃1、鉄製品2がある。貯蔵穴は円形の袋状で、中期の土器が出土している。

(10) 立屋敷遺跡 遠賀郡水巻町伊佐座、立屋敷

註(7)  
昭和6年に名和羊一郎氏により発見され、その後弥生時代の研究には欠かせぬ遺跡となったことは周知の通りである。昭和51年に本格的な発掘調査が東京考古学会を中心として実施されて数多くの遺物が出土している。土器は莫大な量であり、石器には石庖丁、磨製石鏃、打製石鏃、石斧、砥石、紡錘車等。木製品や土製品。さらに骨角器も出土している。

昭和27年より石炭鉱害復旧工事の土取り場となり、その際にも多くの遺物が出土している。その時はさらに竪穴住居跡と思われる断面が確認され、また井戸も二ヶ所検出されている。土器は後期のものが多く、木器は多種にわたり石器は粘板岩製と輝緑凝灰岩製の石庖丁や石鏃、砥石が出土している。

(11) 垣生地遺跡 遠賀郡水巻町伊佐座字垣生地

註(8)  
昭和43年に調査されたもので立屋敷遺跡の直ぐ南側であり隣接している。二次堆積と思われるが縄文時代晩期の土器から須恵器まで数多くの遺物が出土している。弥生前期の土器が多く中・後期のものもみられ、石器では水成岩製の石庖丁、他に石錘がある。土製品では土錘と有孔円板。木器では杵、鋤状木器などが出土している。

(12) 宮ノ下貝塚 遠賀郡水巻町二

註(7-2)  
遺構は検出されていないが中期と後期の土器が貝類と共に採集されている。

(13) 城ノ越貝塚 遠賀郡遠賀町上別府

註(9)  
北九州地方における弥生式土器編年の中期前半「城の越式土器」の標式遺跡である。昭和27年と33年に日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会によって調査が行なわれた。遺構は検出されなかったが前期、中期の土器が多量にあり、特に中期の土器は重要である。石器では石鏃2、石斧4、頁岩製の石剣2、砥石4、石錘2、大型石庖丁1、石庖丁数点。その他骨角器がある。

(14) 岩瀬貝塚 中間市岩瀬字宮前965

註(10)  
水巻町宮ノ下貝塚より東方約500m離れてあり、弥生前期から中世までの複合遺跡である。

遺構は発見されていないが多数の遺物が数回にわたり採集されている。

弥生時代関係をみると土器では前期，中期，後期にわたり，特に瀬戸内地方との交流を示す壺形土器が注目される。石器には石庖丁，扁平磨製石鎌，蛤刃石斧，扁平片刃石斧，叩き石，砥石がある。土製品には紡錘車が1点ある。

(15) 中曽根・ニタ股遺跡 中間市上底井野字中曽根，ニタ股

水田面の広範囲に遺物が散布しており，数度にわたって試掘などが行なわれ，弥生から歴史時代にかけての遺物が採集されている。

弥生時代関係では土器と石器があり，土器には前期末のものがあり，石器には石庖丁4，大形石庖丁1，蛤刃石斧2，抉入石斧1がみられる。

(16) 遠賀橋周辺の遺跡群 中間市内遠賀川川床，川底

遠賀川の川床には，遠賀橋の上・下流にいくつかの遺跡が存在する。上流より1中之江，2下大隈，3唐戸，4垣生，5砂山，6中間小学校前遺跡等である。

下大隈遺跡は戦前より多くの遺物が採集されているが，そのほとんどが散逸しているのは残念である。現在みられるものに土器では前期，中期，後期のものがあり，石器には紡錘車，石鎌，蛤刃石斧，扁平片刃石斧があり，土製品には紡錘車がある。

唐戸遺跡は包含層が発見され，土器のみが採集されていて前期，中期，後期の土器がある。他に弥生時代後期と思われる楽浪系漢式土器に属する瓦質鉢形土器も出土している。

垣生遺跡は筑豊線橋脚周辺で昭和31年調査されたものである。明確な遺構の検出はないようであるが土器，石器の遺物が出土している。土器は前期，中期，後期の時期である。石器は従来発見されたものも含めてであるが，勾玉2，管玉1，打製石鎌1，磨製石鎌6，石剣3，石庖丁2であり，この内には垣生遺跡出土かどうか疑問なものもある。石材は粘板岩が多い。

その他，川砂と共に採集された遺物も多数ある。

砂山遺跡は土器，石器が採集されており，土器は前期，中期，後期のものがある。石器には石庖丁，石鎌，扁平片刃石斧，柱状片刃石斧，石製円板，砥石がみられる。

中間小学校前遺跡では土器，石器，土製品が採集されている。土器は前期，中期，後期のものがあり，石器は石庖丁，石鎌，扁平片刃石斧，石鎌，石剣がある。土製品に紡錘車，土製模造品がある。

その他，中間市内には弥生時代の墓地として(17)上り立遺跡は箱式石棺11基，壺棺1基が検出され，副葬品に鉄戈，貝輪，素環頭刀子が出土している。第10号墓は石材と甕形土器片で四壁を構成した棺であり，土器は後期中葉のものである。甕棺は中期中葉から後半の時期にあたる。

(18) 八つ広遺跡は，上り立遺跡の東方約80m離れてあり箱式石棺5基，甕棺1基が確認されており，遺物に土器と四地文鏡がある。鏡は表採品であるが副葬品と考えられている。甕棺は中期と云う。なお，石棺墓の内には古墳時代初頭のものも含まれる。

(19) 感田上原遺跡 直方市感田字上原

註(14)

昭和42年に宅地造成工事に伴い緊急調査され、住居跡4基、貯蔵穴130基以上、土壌などが検出された。住居跡はいずれも方形でありベット状遺構を有するものもある。貯蔵穴はほとんどが円形の袋状のものである。床面に1～5個の柱穴があるものが多いのが特徴である。出土遺物は莫大な数にのぼり、特に石器は重要で粘板岩製の石庖丁、石剣、石戈、扁平磨製石鏃などの未完成品、完成品、製作時の剝片が数百点出土している。また製作に欠かせない砥石も数十点出土している。土器は前期から後期のものまでみられ、特に中期前半、後半のものがほとんどである。粘板岩製石器の製作地と注目される遺跡である。

(20) 猪の久保遺跡 直方市下境字猪の久保

註(15)

遠賀川に突き出した台地の端部にあり、老人ホーム増築の際崖面より袋状の貯蔵穴が発見された。工事の時に前期土器片、石戈、打製石鏃、砥石が採集されている。この台地周辺においては数ヶ所にて多数の弥生式土器が採集されており遺跡は広範囲に拡がると思われる。

直方市内の遠賀川川底遺跡 直方市内遠賀川川底、川床

註(15)

遠賀川の川砂取りに伴い多くの遺物が採集されている。彦山川上流よりA岡森橋上、B岡森橋下、C中泉、D猪の久保、E店屋、F外町稻荷神社下、G外町、H日吉町、I知古、J感田橋西、K新出、L中ノ江遺跡がある。総て未調査の為、包含層か二次堆積か不明である。

(21) 馬場山遺跡 北九州市八幡西区馬場山字荒手

註(16)

3回にわたり発掘調査が行なわれており第1回の昭和46年次では甕棺墓、箱式石棺墓も調査されており甕棺墓は中期から後期のものである。

なお、隣接する杉守神社付近から出土した石庖丁も調査されており頁岩質のものである。

第2回の昭和48年次の調査では貯蔵竅穴遺構6基、土壌墓49基、箱式石棺墓10基、甕棺墓9基、祭祀遺構15基等が検出されている。前期末～後期前半及び後期末のものである。遺物は多数で土器のほか、小型仿製鏡、鉄鏃、鉄斧、石斧、石庖丁、石鏃、石戈、砥石等が出土している。

第3回目の調査では土壌墓を53基検出。出土遺物に石剣4、石戈2、扁平磨製石鏃1が副葬品として発見されている。

(22) 原遺跡 北九州市八幡西区馬場山字金丸

註(17)

昭和46年に調査されたもので41基の竅穴が検出されている。これらの竅穴の大半は石器製作工房であり、その他貯蔵穴と推定されるものもある。これらの時期は前期末～中期前半のものであり、その内中期初頭が最も多い。出土遺物は土器、石器、管玉2、土製投弾1であり特に石器は莫大な量で多種にわたっている。またこれらの材質も多種である。石鏃(打・磨製)、石剣、石戈、石庖丁、石鏃、扁平片刃石斧、搔器、石錘、砥石などがある。石材は凝灰岩質粘板岩が最も多く、輝緑凝灰岩、砂岩、玢岩、黒耀石、結晶片岩がある。石鏃、石剣、石戈、石庖丁、石鏃、石斧完成品と未完成品、さらに石核と剝片も出土しており石器製作が行なわれて

いたことは疑いない。なお、石庖丁は輝緑凝灰岩製のものが1点のみ出土しているがこれは立岩遺跡産であり、この遺跡で製作されたのは凝灰岩質粘板岩と砂岩製に限られている。

(22) 原遺跡第二地点 北九州市八幡西区楠橋字一本木  
註 (17)

昭和46年に調査された原遺跡の隣接地であり、昭和49年に調査が実施された地点である。竪穴26基、円形住居跡1基、掘立柱遺構1基、柱穴約150である。住居跡は径約8mの円形で中期前半とされる。竪穴は原遺跡と同じく石器工房、貯蔵穴などに利用されたものであり前期末～中期後半にわたる。出土遺物は土器と共に原遺跡同様に石器が数多く出土していて磨製石鏃、石斧、石剣、石鎌、石庖丁、砥石、石槍などで完成品と共に未完成品も多くみられる。材質は硅質頁岩、硅質砂岩、玢岩、硅質板岩などがある。その他投弾2、土板(土器片再利用)1がある。

(23) 辻田遺跡 北九州市八幡西区茶園原字辻田  
註 (18)

遠賀川の右岸にあり、住居跡や土壌が検出されており、それに伴い土器、石器が出土している。土器は中期前半のもので、石器は石庖丁、石斧、石鏃、石剣、石戈、砥石があり、これらは未完成品と完成品、および剝片も出土し、これらの石器は主に硬質頁岩を使っている。

これらより辻田遺跡は石器を生産していたことが知られる。

(24) 門田遺跡 北九州市八幡西区金剛  
註 (19)

住居跡7基と土壌2基、及び多数の柱穴が検出されており、住居跡は円形3と方形4である。中期前半のものが円形3、方形1で他の方形3はこれ以後の時期である。出土遺物は中期前半の土器と石器がある。石器は大形蛤刃石斧2、砥石36、台石3、石庖丁5、石鏃98、石匙3、石戈3があり石鏃が非常に多い。これらの石器には未完成品や剝片があって製作過程時のものであり、石器製作を示すものである。

(25) 香月遺跡 北九州市八幡西区香月旧曇月小  
註 (20)

弥生時代関係では住居跡3基、貯蔵穴43(?)基、野外炉等が検出されている。出土遺物は土器、石器、青銅器であり、土器は前期末と後期末のものがあり、石器は石庖丁、石鎌、石鏃、石戈、石剣等の完成品と未完成品及び剝片が出土しており石器製作遺跡として把握されている。

(26) 薬師丸遺跡 鞍手郡宮田町磯光字薬師丸  
註 (21)

国鉄磯光駅と犬鳴川との間の段丘上に古くより遺物が採集されている。弥生式土器、石庖丁、片刃石斧、石鏃、砥石などがあり、明治時代より文献に出てくる宮田町磯光出土の石剣(戈)はこの薬師丸遺跡出土のものようである。

(27) 笠置山千石三の谷 鞍手郡宮田町千石  
註 (21)

児島隆人氏、森貞次郎氏により飯塚市立岩遺跡の石庖丁の原石産地として著名な山であり、千石峽三の谷は無数に輝緑凝灰岩が広く散布している。それらは拳大のものから手で持ち運びのできる大きさのものや、さらに大きな石までさまざまである。

(28) 柳ヶ谷遺跡 鞍手郡若宮町水原字柳ヶ谷、同郡宮田町上有木字坂元  
註 (22)

都地原遺跡の東方、釜底池の北方丘陵上及び傾斜面にあり、地籍は若宮町（西区）と宮田町（東区）とにまたがる。東区では円形住居跡や円形貯蔵穴、西区では方形住居跡など、合せて住居跡12基と貯蔵穴3基が検出されている。出土遺物として弥生式土器、粘板岩製石剣、青銅製鋤先、石鏃、粘板岩製石庖丁が出土している。円形住居跡は弥生時代中期後半で青銅製鋤先片が出土している。現在のところ、犬鳴川流域で確認された最古の住居跡である。東区の方形住居跡のいくつかは丘陵傾斜面にあるため高い方の丘陵頂部を中心にして、住居跡外の斜面下方に逆「U」字状の大きな溝をめぐらしていて排水溝としている。また、いくつかの方形住居跡にはベット状遺構が付属している。

**(29) 都地原遺跡** 鞍手郡若宮町沼口字都地原

註(22)

山口川左岸の低丘陵上において汐井掛遺跡と柳ヶ谷遺跡との間である。九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査により発掘されて、弥生時代の遺構として住居跡3基を検出し、1号にはベット状遺構があり、2号住居跡床面には1.35×1.20m、深さ0.65mの長方形を呈する貯蔵穴が付属する。出土遺物は弥生式土器であり、時期は後期中葉である。なお、都地原遺跡の北方の同丘陵において、地域振興整備公団宮田・若宮地区工業団地に伴う発掘調査では箱式石棺墓、土壙墓などが検出されている。

**(30) 汐井掛遺跡** 鞍手郡若宮町沼口字汐井掛，同郡宮田町上有木

註(23)

弥生時代の汐井掛遺跡は、二地区の墳墓群により成り、墓地として広く利用されている。昭和49年度に調査された汐井掛B遺跡はほぼ若宮町内に属する墓地群で、箱式石棺墓4基、木棺墓16基以上、石蓋土壙墓2基、土壙1などが検出され、出土遺物として弥生式土器や鉄器類が出土している。

昭和50年度より調査を開始した汐井掛A遺跡は宮田町の地区で、木棺墓157基、箱式石棺墓18基、石蓋土壙墓12基、甕棺墓1基を検出した。出土遺物は弥生式土器、鏡（長宜子孫内行花文鏡片、飛禽鏡片、方格規矩鏡）、ガラス製小玉、ガラス製勾玉、硬玉製勾玉、碧玉製管玉、水晶製玉、鉄鏃、鉄剣、鉄刀、鉄斧、刀子、鉄鎌、鉄鍬などが出土している。

なお、以上の宮田町内の地区は、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査により発見されたものであり、その後、地域振興整備公団宮田・若宮地区工業団地に伴う発掘調査により、先の遺跡地の隣接地を調査している。木棺墓や箱式石棺墓が検出され、また、鏡などの出土遺物も発見されていて汐井掛遺跡の宮田地区は大墳墓群として把握され、木棺墓は200基以上をこえる。この墳墓群で注目されることは、木棺墓、箱式石棺墓には地表面に墓標と思われる方形の配石や、その他、置石が認められることである。

**(31) 小原遺跡** 鞍手郡若宮町山口字小原

註(24)

山口川右岸のやや低い丘陵上より傾斜地にかけての広範囲にまたがる複合遺跡であり、弥生時代関係では住居跡11基+α、貯蔵穴2基、溝状遺構1条、ピット群であり、出土遺物は弥生

式土器、鉄製品（不明鉄器、鉋）、石庖丁完成品・未完成品、石斧、砥石などが出土している。住居跡は後期後半から終末、貯蔵穴は中期末以前、溝状遺構はジョッキ形土器が出土しており、終末から古墳時代初期にかけてのものである。なお、住居跡の+αは発掘調査が行なわれた九州縦貫自動車道建設地内のみでなく、道路の北側が名糖パブリックゴルフ場の駐車場予定地にあたり、表土だけを除去して遺構の確認を行なった結果、5基以上の住居跡が検出され、その弥生時代のは過半数をこえると推定されている。

### (32) 茶臼山遺跡<sup>註(25)</sup> 鞍手郡若宮町山口字小原

山口川右岸の丘陵頂部にあり、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査による茶臼山城跡の発掘調査時に、土塁内側部にあたる丘陵頂部の平坦面より検出されたものである。遺構は、住居跡1基、箱式石棺墓2基、石蓋土壇墓2基、木棺墓1基、土壇墓1基、土壇1基が検出された。出土遺物には、住居跡より弥生式土器の壺形、甕形、埴形等で、弥生時代後期終末。箱式石棺墓より弥生式土器の甕形土器が出土していて、これら墳墓群は後期頃とされている。他に輝緑凝灰岩製の石庖丁未完成品や黒耀石製の石鎌が出土している。

住居跡は4.3×3.4mの隈丸長方形で、ベット状遺構を伴う。石棺墓等はいずれも長さが1m未満の小型である。

### (33) 小金原遺跡<sup>註(22)</sup> 鞍手郡若宮町高野字小金原

犬鳴川と黒丸川に挟まれた丘陵上一帯で、戦後開拓地となり、現在では当地の地表はほとんど失われており、原形を知り得ない。昭和30年前後に石松清氏により弥生式土器や石斧、石庖丁が採集された。なお、昭和49年には、この丘陵の東側斜面の若宮町中央公民館建設の際に、住居跡と想定される断面が発見された。それは深さ約0.5m、長さ約4mの長方形断面で底面と思われる付近に後期前半の土器がみられた。

## 3. 歴史時代の周辺遺跡

鞍手町を含む遠賀川中・下流域の歴史時代の遺跡については考古学的に発掘調査されたものはほとんど無い状態であったが、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査等を契機としていくつかの歴史時代の遺跡が発掘調査され具体的になりつつある状況である。遠賀川を挟んで対岸の北九州市八幡西区香月地区でも中世の遺跡が発掘されているので考古学的に発掘調査された遺跡を主とする。

### (34) 旧芦屋小遺跡<sup>註(26)</sup> 遠賀郡芦屋町旧芦屋小

石塁遺構と呼ばれているもので昭和46年・47年にかけて調査され、その後も遺物が採集されている。検出された遺構は二つの石塁と五ヶ所の小石群、「コ」の字形の石組遺構である。14世紀に開創された金台寺の旧址の石塁と想定されているようである。出土遺物は瓦、土師器、陶磁器、陶器、火舎、摺鉢等と、石仏、五輪塔、銅銭、鉄刀が出土している。

(35) 西屋敷(上二)貝塚 遠賀郡水巻町二字西屋敷  
註(7-2)

鎌倉時代に形成された貝塚であり、出土遺物に土師器、瓦器、陶磁器、石鍋、石鉢、土錘等がある。

(14) 岩瀬遺跡 中間市岩瀬字宮園  
註(10)

弥生時代の岩瀬貝塚と同一地点であり須賀神社西裾部で土師器、瓦器、青磁、陶器、滑石製石鍋、滑石製品、宋銭(淳化元寶)が出土している。

(36) 宮林遺跡 中間市宮林  
註(10)

昭和52年に緊急調査が実施され土墳墓(?)が検出されている。以前にも数回にわたって遺物が採集されており、これらを合すると土師器、青磁、白磁、瓦器、石鍋などがある。

(37) 垣生公園遺跡群 中間市垣生一帯  
註(10)

展望台遺跡より青磁片。垣生神社境内遺跡より土師器片。迎尾遺跡では火葬墓と推定され、人骨片や炭化物と共に、陶質の壺底部が出土している。これらは上り立(王楽)遺跡(青磁の完形品2個出土)を含む一帯は中世の垣生荘を構成した人々の墓域(祭祀)と考えられている。

(38) 中ノ坊遺跡 北九州市八幡西区香月字中ノ坊  
註(27)

昭和51年に石炭鉱害復旧事業に伴い調査されたもので、溝状遺構2、建物跡と考えられる柱穴190、土壇6基が検出された。鎌倉時代後半のものがほとんどである。出土遺物には土師器、磁器、瓦器、雑器、碾き臼、砥石、石鍋、硯、鉄器、古銭、鉄滓等が出土している。この遺跡は香月(勝木)荘を支えた村落の一部とされている。

(39) 三反田遺跡 北九州市八幡西区香月字三反田  
註(27)

積石塚で長軸12m、短軸5mの隅丸方形で積石の高さは1.1mである。石祠、上野焼と思われる埋甕、古伊万里焼、寛永通寶等が出土している。遺跡の性格は信仰の対象物と考えられている。

なお、積石塚は遠賀郡芦屋町山鹿字土器面にもあり調査が行なわれている。積石以外に遺構の発見はなく、出土遺物に土師器と銅銭(熙寧元寶)がある。

(25) 香月遺跡 北九州市八幡西区香月旧香月小  
註(20)

弥生時代の香月遺跡と重複遺跡であり、掘立柱建物、土壇、水ため用の石組、溝が検出されており、出土遺物は土師器、磁器、石鍋、石臼、鉄鏃などが出土しており室町時代(15世紀)の集落である。

(40) 白岩遺跡 北九州市八幡西区香月字白岩  
註(28)

昭和49年と同53年の二度にわたり発掘調査されており、火葬墓1基、土壇墓8基、集石遺構、積石遺構、竪穴遺構等が検出されている。土壇墓の内には土壇内に木棺を納めた木棺墓も数基ある。出土遺物は須恵器、土師器、陶磁器、陶器、瓦器、鉄釘、鉄ノミ、青銅製(?)経筒片、石鍋、硯、砥石などが出土していて、鎌倉時代後半から室町時代前期の墓地が主体である。

この他、香月地区には経塚遺跡として吉祥寺経塚（蓋は草花双鳥鏡，経筒は越州窯系磁器）と聖福寺経塚などがある。

#### (41) 茶臼山城跡 鞍手郡若宮町山口字小原

中世の山城が犬鳴川流域には多く分布している。宗像氏，大友氏，大内氏などの勢力圏の接点である本地域は幾多の戦火に相まみれたようである。若宮町では宮永城や草場城，宮田町では龍ヶ岳城や笠木城などが著名である。茶臼山城跡は，九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査にて土塁や空濠が明らかにされた。12～13世紀の城砦として福岡県内では数少ない考古学による発掘調査のなされた山城跡とされる。

#### (42) 遠園遺跡 鞍手郡若宮町山口

山口川の右岸，宗像より若宮に通じる見坂峠に近い台地上にあり，後方の丘陵頂部は尾園城と云う。九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査の折に掘立柱建物7基，土壙6基，土壙墓1基が検出され，出土遺物に土師器，須恵器，青磁，白磁，摺鉢，石鍋，刀子などが出土しており鎌倉時代から室町時代にかけての居館跡であろう。

最後に，鞍手町内の歴史時代遺跡では，発掘調査されたものは新北字音丸の中世山城である音丸城跡があるのみである。詳細は報告書に譲る。音丸城跡の歴史的背景が考察されているので参照されたい。さらに中屋敷遺跡と隣接している剣岳城跡についても述べられており，また，剣岳城跡は『鞍手町誌』上巻に詳しい。また，国宝「中山不動尊」については『中山不動尊縁起』に詳細に考察してあり合せて参照されたい。

ここでは中屋敷に関する資料を抜粋するにとどめる。『中山不動尊縁起』には（原文たて書）

#### 「辻屋敷，竹ノ屋敷，中ノ屋敷

辻屋敷は中ノ屋敷の高い丘上で，山内と中屋敷の両方にまたがっている。ここは吉田壱岐守の屋敷跡である。

吉田壱岐は寛永（1624—1629）の頃，井上周防と共に直方藩主黒田高政の家老として威勢のあった人である。……略……（筑前国統風土紀拾遺）

この外本村には竹ノ屋敷，中ノ屋敷の地名があるが，誰の屋敷であったか，はっきりわからない。……略……」

とある。

『鞍手町誌』上巻には「吉田家伝録」が記載されている。

「吉田壱岐は忠之の命令で，はじめ単身東連寺に赴任し，妻子は福岡にいていた。しかし，これでは不便なので，地行地の中山村字本村に別宅を構え，妻子と俱に居住した。……略……今本村に中屋敷，辻屋敷という地名が残っているのは，この吉田壱岐に関係あるものとい

う。」

とある。

なお、主な鞍手町内の歴史時代の遺跡について簡単に列記すると土器、陶磁器、陶器の散布地では石田堤遺跡、長家遺跡、古江遺跡、上ノ段遺跡等がある。山城跡では前記した剣岳城跡、音丸城跡、腰山城跡、古野城跡があり、寺院跡には奈良時代の創建ともいわれている国宝十一面観世菩薩立像のある亀甲山長谷寺。平安期の大膳寺跡（付近に瓦窯跡あり）。中世では銭亀山妙雲寺跡、竹森山善明寺、高樹院明福寺、華花山照専寺、宇佐寺等があり現在総て比定できないものもあるようである。その他、中屋敷遺跡の西方には八剣神社も存在している。

- 註1 中間研志編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XII— 1977年（昭和52年）3月  
 註2 副島邦弘編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XIII— 1977年（昭和52年）3月  
 註3 轟次雄編『京場山遺跡』（『西川流域歴史史料』第2集）1976年（昭和51年）12月  
 註4 鞍手町誌編集委員会編『鞍手町誌』上巻 1974年（昭和49年）9月  
 註5 松岡史『銀冠塚』（『福岡県文化財調査報告』第28集）1963年（昭和38年）3月  
 註6 波多野皖三『糖塚遺跡』（『筑紫史論』第三輯）1975年（昭和50年）10月  
 註7—1 杉原荘介『遠賀川』1943年（昭和18年）4月  
       2 黒野肇『水巻町の遺跡調査概報』『水巻町誌』1962年（昭和37年）12月  
 註8 黒野肇『垣生地』1969年（昭和44年）6月  
 註9 鏡山猛・杉原荘介・渡辺正気・大塚初重『福岡県城ノ越貝塚』『日本農耕文化の生成』1961年（昭和36年）3月  
 註10 小田富士雄・船津常人・武末純一・轟次雄『原始・古代・中世篇』（『中間市史』上巻）1978年（昭和53年）11月  
 註11 黒野肇『遠賀郡中間市唐戸遺跡』（『古代』第31集）1959年（昭和34年）  
 註12 小田富士雄・黒野肇『筑紫垣生遺跡発見遺物』（『古代』第34号）1960年（昭和35年）1月  
 註13 永井昌文・小田富士雄・橋口達也『福岡県中間市上り立弥生墳墓群調査報告』（『九州考古学』33・34）1968年（昭和43年）4月  
 註14 直方古代文化財研究会編『感田上原遺跡発掘調査概報』1969年（昭和44年）10月  
 註15 直方市史編さん委員会編『弥生時代の遺跡と遺物』（『直方市史』上巻）1971年（昭和46年）8月  
 註16 小田富士雄編『馬場山遺跡』1972年（昭和47年）2月  
       小田富士雄編『馬場山遺跡』1975年（昭和50年）3月  
       栗山伸司『馬場山遺跡における土壘墓出土の石剣切先について』（『昭和53年度九州史学会大会研究発表要旨』）1978年（昭和53年）12月  
 註17 小田富士雄編『原遺跡』1973年（昭和48年）3月  
       小田富士雄・中村修身編『原遺跡第二地点』1976年（昭和51年）1月  
 註18 中村修身『北九州市辻田遺跡出土弥生時代石器について』（『昭和52年度九州大学大会研究発表要旨』）1978年（昭和52年）12月  
 註19 梅崎恵司『北九州市門田遺跡の調査』（『昭和53年度九州史学会大会研究発表要旨』）1979年（昭和53年）12月  
 註20 北九州市教育委員会編『発掘ニュース』2+4号 1978年（昭和53年）  
 註21 上野精志・小方良臣『弥生時代』（『宮田町誌』上巻）1978年（昭和53年）4月  
 註22 池辺元明編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—VIII— 1977年（昭和52年）2月  
 註23 池辺元明編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XXVIII— 1978年（昭和54年）3月  
 註24 兄玉真一編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XI— 1977年（昭和52年）3月  
 註25 上野精志編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XVI— 1977年（昭和52年）3月  
 註26 波多野皖三『芦屋石壘遺構』（『筑紫史論』第三輯）1975年（昭和50年）10月  
 註27 中村修身・川上秀秋・小方泰宏編『中ノ坊遺跡、三反田遺跡』（『北九州市文化財調査報告書』第21集）1976年（昭和51年）6月  
 註28 山手誠治編『白岩遺跡』（『北九州市文化財調査報告書』第17集）1976年（昭和51年）3月  
       北九州市教育文化事業団『発掘ニュース』7号 1978年（昭和53年）11月

### Ⅲ 第 I 地点の調査

第 I 地点は中屋敷の丘陵の北側にあり、六田川に面した丘陵先端部で標高15~25mである。発掘前はブドウ畑、荒地、一部雑木林となっている。開墾により地目境が段状になっていて、西側上方の高所は表土下直ぐに遺構が現われ下方は開墾時に埋めて整地しているため覆土が厚い。

検出された遺構は竪穴住居跡 8、貯蔵穴 4、木棺墓 1、掘立柱建物 1 以上、土壇 7 以上、土壇墓 4、地下式土壇 1、石組遺構 1 などである。(Fig. 3・4, PL. 2)

#### 1. 弥生・古墳時代の遺構と遺物

この時代の遺構として住居跡 8、貯蔵穴 4、木棺墓 1 があり、その他、多数のピットも存在すると思われるが建物として考えられるものはない。

##### (1) 竪穴住居跡 (Fig. 5~12, PL. 3~11)

住居跡は遺跡の北方に 7 基、南方に第 8 号住居跡のみ 1 基があり、いずれも東方の丘陵斜面上に位置している。

##### 第 1・2 号住居跡 (Fig. 5, PL. 3~4)

B 区にあり第 3 号住居跡と接近している。丘陵の高い方である西側は遺存状態が良く壁が検出できたが、低い方である東側は現代の開墾により破壊されて壁、床面は検出されない。地形的に高所の西方より発掘したため先ず大きい方の「コ」の字形をした壁を検出した。しかし、床面と思われる内面を掘り下げるとさらに「コ」の字形をした壁を発見する。このため、二つの「コ」の字形をした壁、周溝が検出されたが二つの住居跡が重複しているものか、住居跡内におけるベット状遺構のようなものか、また、一つの住居跡の拡張されたものか、さらに出土遺物からしても判明できず一応第 1・2 号住居跡とし、大きい方が 1 号、小さい方を 2 号とする。

1 号壁は西側で 4.7m、北側は 2.95m の長方形であり東壁方へ屈曲するようであるが、それは直線的には検出されない。周溝は「周壁溝」であり上幅 5~20cm、深さ 5cm であり南壁下の周壁溝は一番狭く板材を用いるならば板材の厚さは 2~3cm 前後と推定される。壁高は床面より 20cm でありやや斜めに立ち上る。床面は水平であるが地山面まで検出すると岩肌がゴツゴツして凸凹がある。主柱穴と思われるものはないようである。

出土遺物は北西隅近くより高坏の脚、小型丸底壺片などの土器が床面に接して出土している。



Fig. 3 中屋敷遺跡地形図 (縮尺1/1,000)

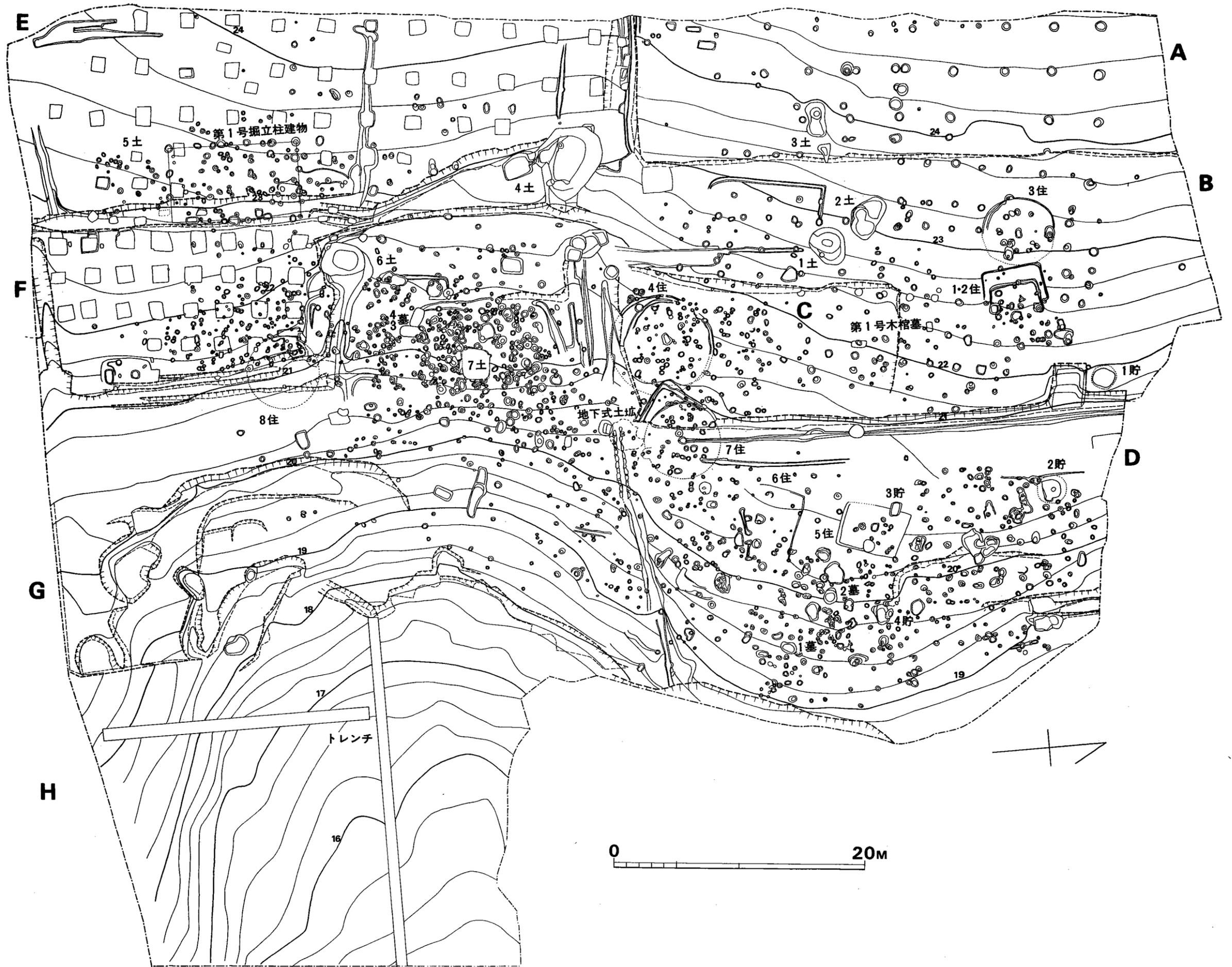


Fig. 4 中屋敷遺跡第I地点遺構全体図 (縮尺1/300)

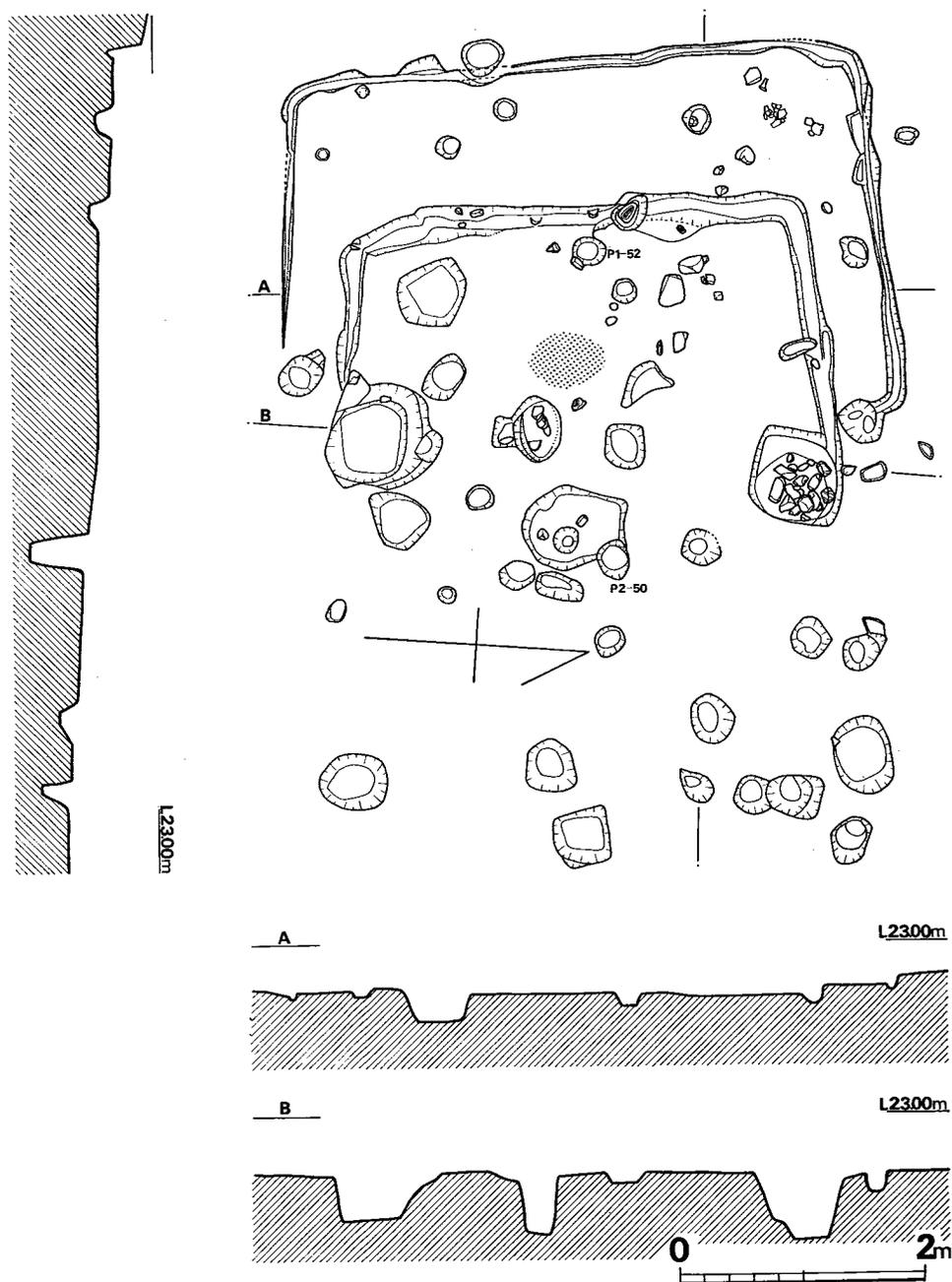


Fig. 5 中屋敷遺跡第I地点第1・2号住居跡実測図 (縮尺1/60)

2号壁は、西側3.8m、北側で2.3mまで検出できて長方形を呈す。1号壁の西側壁と2号壁の西側壁は平行であり1.1mほど離れている。また、同様に南側壁は0.5m、北側壁も0.5m離れている。各壁下には周溝がめぐり上幅10~20cm、下幅5~15cmであり、深さは10cm前後である。壁は床面より10cm前後しかなく、床面は平坦であるが地山に小石が露出しており凸凹していて平坦ではない。焼土は若干であるが検出されていて別にピットなどはなく堆積はうすい。

南壁に接して大きなピットがあり、90×90cmの隅丸で、深さは床面より40cmである。なお、北壁にも同様なピットがあるが、これはブドウ畑の穴である。主柱を考えると南壁にある大ピットを中心にあるものとする。P1とP2が主柱穴として想定される。P1の深さは52cm、P2は50cmを測る。

出土遺物は床面より若干の土師器と自然石、大ピットよりPL. 4-(1)のように土器が5点出土している。

#### 出土遺物 (Fig. 12, PL. 10)

1号壁と2号壁出土のものを含める。1・2は1号壁床面上、3~9は2号壁南側壁下の大ピット出土である。

小型壺形土器 1で、口径8.0cm、器高8.4cmを測る小型丸底の壺で、胴部は球形で口縁部は直立する。胴部内面に指オサエ痕が残る。色調は外面淡黄褐色、内面茶褐色を呈す。

高坏形土器 2は、高坏の脚部のみで坏部はない。底径11.7cm、脚高7.0cmを測る。柱状部はエンタシス気味で裾部は「ハ」の字状に開くが、屈折は丸味をもつ。坏底部径3.2cm、脚裾部径5.2cmである。内外面とも剝落が著しく調整不明。色調は茶褐色で胎土に大きな砂粒を含む。

甕形土器 4で、胴部を欠く口縁部付近のもので、口径12.5cmを測る。頸部より「く」の字状に外反し、口縁部は頸部方の器肉が厚くて口縁端部は薄く、外面は波打つものである。内面に指オサエ痕が残る。淡黄褐色を呈し、胎土は精良であり焼成も良。

小型壺形土器 5は、一番小さく口縁部を欠くが復元口径7cm、器高6.8cmを測る。一見手づくね土器の様であり歪にみえる。6は、中型で口径11.6cm、器高8.4cmを測る。口径が最大胴部より大きくこの土器もやや歪である。胴部より「く」の字状に口縁部につづき端部は丸い。内外面の剝落が最もひどい。色調は茶色である。7は、大型のものであり、口径10.4cm、器高11.5cmを測る。丸底より球形の胴部とつづき「く」の字状に口縁部に外反し、口縁端部に直線的に延びる。口縁部の器肉が薄く、口縁端部は丸く太く、口縁部の高さは低い。表面の剝落が著しい。

高坏形土器 3は、坏部のみで口径17.1cm、器高5.0cmを測る。底部より大きく外反して口縁部方にさらに大きく外反するもので、底部より外反する部分は明瞭に段を示さない。8は、脚裾端部を欠くがほぼ完形品で口径12.2cm、器高約9.4cm、底径9.9cmを測る。坏部は底部が丸底に近く、口縁部にかけて強く屈曲して外反する。外反部は内面がやや凹みを持ち、口縁端部は尖り気味である。脚部は短かく裾部にかけて柔らかく開き、裾部が高い。暗茶褐色を呈し、砂

粒を多く含んでいて焼成は良である。9は、坏部のみで口径15.5cm、器高4.8cmを測る。底部は水平に近く段をなして大きく外反し直線的に延び、口縁端部にかけて水平に近く短かく外反する。坏底部と脚部の接合方法がうかがえる。内外面ともヨコナデである。茶褐色を呈し、胎土は精良である。

大ピット出土の3～9の土器はいずれも器面の剝落が著しく悪い。

### 第3号住居跡 (Fig. 6, PL. 4)

1・2号住居跡の西方にあり径5.70mの円形であるが、地形的に低い東側の壁は検出されなかったので円形のうち検出された壁は約半分の西側のみである。円形を復元すると1・2号住居跡と重複しているようである。

南西側壁下のみが溝がみられ上幅40cm、深さ床面より5cmと浅い。壁は床面より15cmであり、床面は水平と思われやや凸凹面がある。中央の大きめのピットは東側のみは二段掘りであるが、75×45cmの隅丸長方形で深さは35cmである。覆土に炭化物と焼土が入っており炉と考えられる。柱穴は床面内に19本検出されているが支柱穴はP1～P5の5本と思われるが、さらにこのP1～P5間の円形下にはピットが数本あり、これらも加わるかも知れない。なお、北側壁に接している大きなピットはこの住居跡に伴うものである。

出土遺物は床面直上より弥生式土器片少量と自然石がある。

### 第4号住居跡 (Fig. 7, PL. 5)

C区の南側にあり、第3号住居跡の南方22m、第8号住居跡の北方25mのところりに位置していて、第3号住居跡と同じく西側半分の壁が遺存している。

円形住居跡で径7mを測る。遺存している壁下には周溝があり上幅15～40cm、下幅7～25cmで深さは床面より5cmである。床面は水平と思われやや凸凹である。中央に大ピットが二つあり共に炭、焼土塊が充填している。大ピットAは二段状であり約100×50cmの方形で、深さは45cm、Bは80×60cmの方形であり深さは35cmである。この大ピットに接近して二ヶ所の炭、焼土のかたまりがみられ、炭、焼土堆積は数cmと薄い。床面内及びその周辺には数多くのピットがあり、中世の遺物を出土するものもある。弥生式土器を出土するものは少ない。支柱穴はP1～P8の8本と想定されよう。

出土遺物は床面より弥生式土器数片のみである。

なお、住居跡外の西側に円形の溝が第4号住居跡に切り取られてある。これは住居跡の周溝とも思われるが住居跡とするとこれに対応する柱穴等が想定できそうにないので、一応ここでは住居跡から除いた。第4号住居内に炉とされるものが重複して二つあるが、これは上述の周溝を住居跡のものと考えてもその住居跡に伴うものではないようであり、拡張の可能性はある。

### 出土遺物 (Fig. 12, PL. 10)

甕形土器 10, 11とも底部片で、底面中央部が凹む上底である。10は、底径5.5cmで凹みが

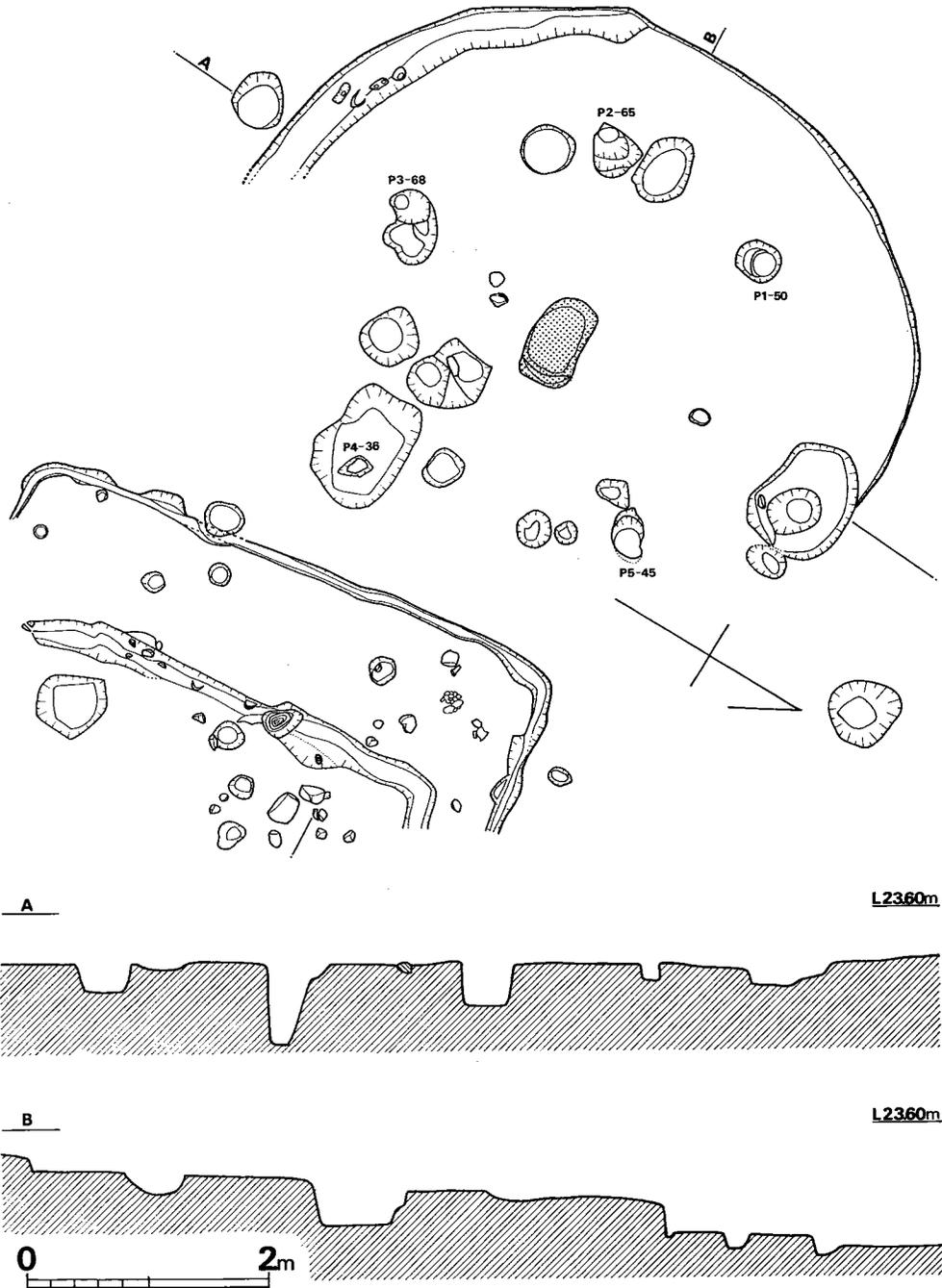


Fig. 6 中屋敷遺跡第I地点第3号住居跡実測図 (縮尺1/60)

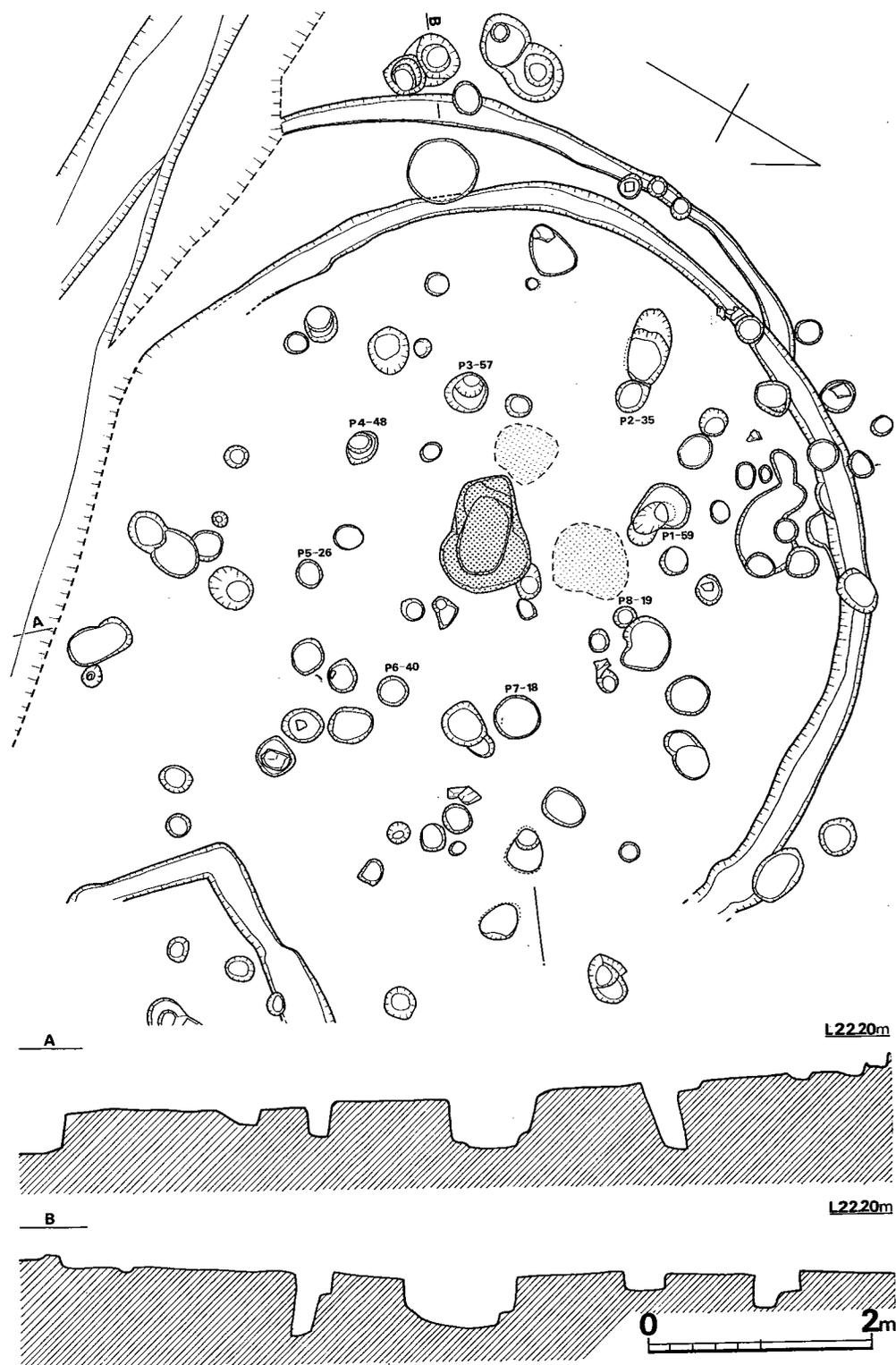


Fig. 7 中屋敷遺跡第I地点第4号住居跡実測図 (縮尺1/60)

大きく、胴部への移行は大きく外反するようである。黒褐色を呈し、全体的に粗砂粒を多く含み、焼成はやや不良のようである。11は、底径6.1cmで器肉は厚い。胴部への移行は立ち気味になる。淡灰褐色を呈し胎土は粗砂粒を含み、焼成は良である。10, 11とも外面は刷毛目, 11の内面に指オサエがみられる。

### 第5号住居跡 (Fig. 8, PL. 6)

B・C区の東方斜面にあり、第3号・第4号住居跡よりそれぞれ20m離れている第3号貯蔵穴により一部壁を破壊されているが、この住居跡は中屋敷遺跡での住居跡のうち唯一の完存しているものである。

平面プランは5.20×4mの長方形であり南北方向が長い。南側壁と西側壁の南方半分に周壁があり北側, 東側, 西側の北方半分には周壁溝がみられる。周溝は上幅15~25cm, 下幅5~10

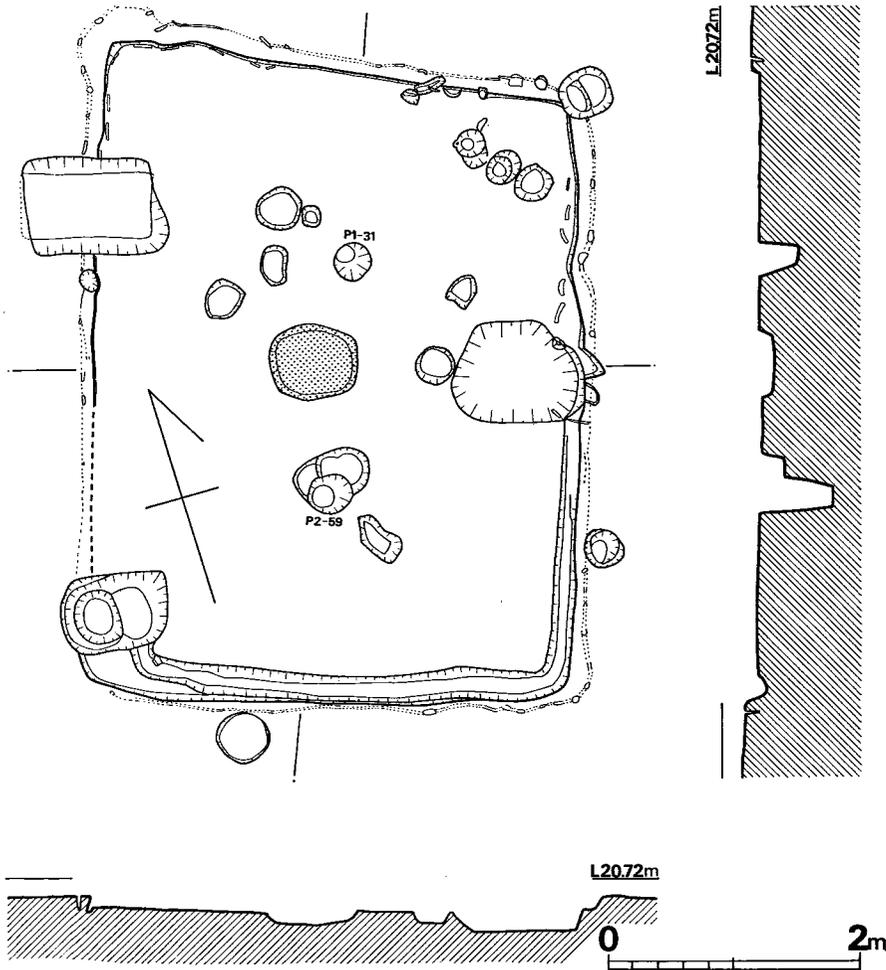


Fig. 8 中屋敷遺跡第I地点第5号住居跡実測図 (縮尺1/60)

cmで深さは床面より10cmである。周壁溝は矢板痕が明瞭にみられ、矢板は幅5～15cm、厚さ2～4cmであり、床面よりの深さは10cm程である。なお、これらは全周壁にわたっては検出できなかった。

竪立住居跡の壁外にも矢板痕が方形の全周に検出された。これは床面のものに比べてやや幅が狭く10cm前後が多い。深さは遺存地山面より10cm程である。北西隅と南東隅の対角線の隅にあたる場所は両方とも少し外にふくらみがあり、竪穴の床面、壁が直に対してこの部分は外に突き出している。隅と南西側隅の対角線には矢板の突き出し部にあたる場所にやや大きめのピットがあり、南西隅には二つあってそれはこの部分の壁が二つあるのに対応するものと思われる。

床面の中央には60×75cm、深さ10cmの楕円形をした地床炉があり、炭焼土が充填している。支柱は床面の長軸にそって炉の左右、床面の中心部に2本ある。共に家屋の中心の中心方向に掘られている。東壁下の中央部に100×80cm、深さ20cmの不整形円形をした摺鉢状のピットがある。

出土遺物は床面に、周溝内、不整形円形ピット内より弥生式土器片が出土している。

#### 出土遺物 (Fig. 12, PL. 11)

甕形土器 12は、口縁部付近の破片で口径28.0cmを測る。胴部から内傾して口頸部より強く外反して「く」の字形に延び口縁端部は跳ね上がる。口頸部には断面三角形突帯をめぐらす。外面は刷毛目調整であり、色調は淡茶褐色を呈し、胎土は細砂粒を少し含むも密であり、焼成は良好である。14は、口径32.4cmで胴部が5.2cmまで残る。胴部より内傾が弱く直立的に延び口縁部にかけて外反し、口縁端部は跳ね上がる。色調は淡茶褐色であるが部分的に赤色に変化しているところがある。胎土は少し粗い砂粒を含み焼成は良好である。15, 17は甕形土器の底部と思われる。15は、底径7.1cm、器肉は1.2cmを測る。17は、底径6.8cm、器肉0.5cmと薄い。共に外面は刷毛目の調整で、15の内面には指オサエがみられる。

壺形土器 13の1点しかなく、頸部付近である。頸部径17.8cmで頸部直下に断面三角形の突帯をめぐらす。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は粗い砂粒を若干含むも密であり、焼成は良好である。

鉢形土器 16の口縁部付近1点だけである。口径30.1cmを測り、口縁部は胴部最大径よりも小さく内傾し立ち上がる。口縁端部直下に断面台形の突帯が二条めぐる。外面及び内面は口縁端部直下まで丹塗研磨のようであり、内面は粗くヨコに刷毛目がみられる。色調は内面淡黄褐色を呈し、胎土は粗い砂粒を少し含む。

#### 第6号住居跡 (Fig. 9, PL. 7)

D区で第5号住居跡の南側3mのところにある。壁が二辺の途中しか検出できないが床面より土器が出土しており住居跡と考える。壁は北側で5.10m、西側で4.00mまで検出されるがまだ先に続くと思われる北壁と西壁は直角に連なっているので平面プランは方形とされよう。壁

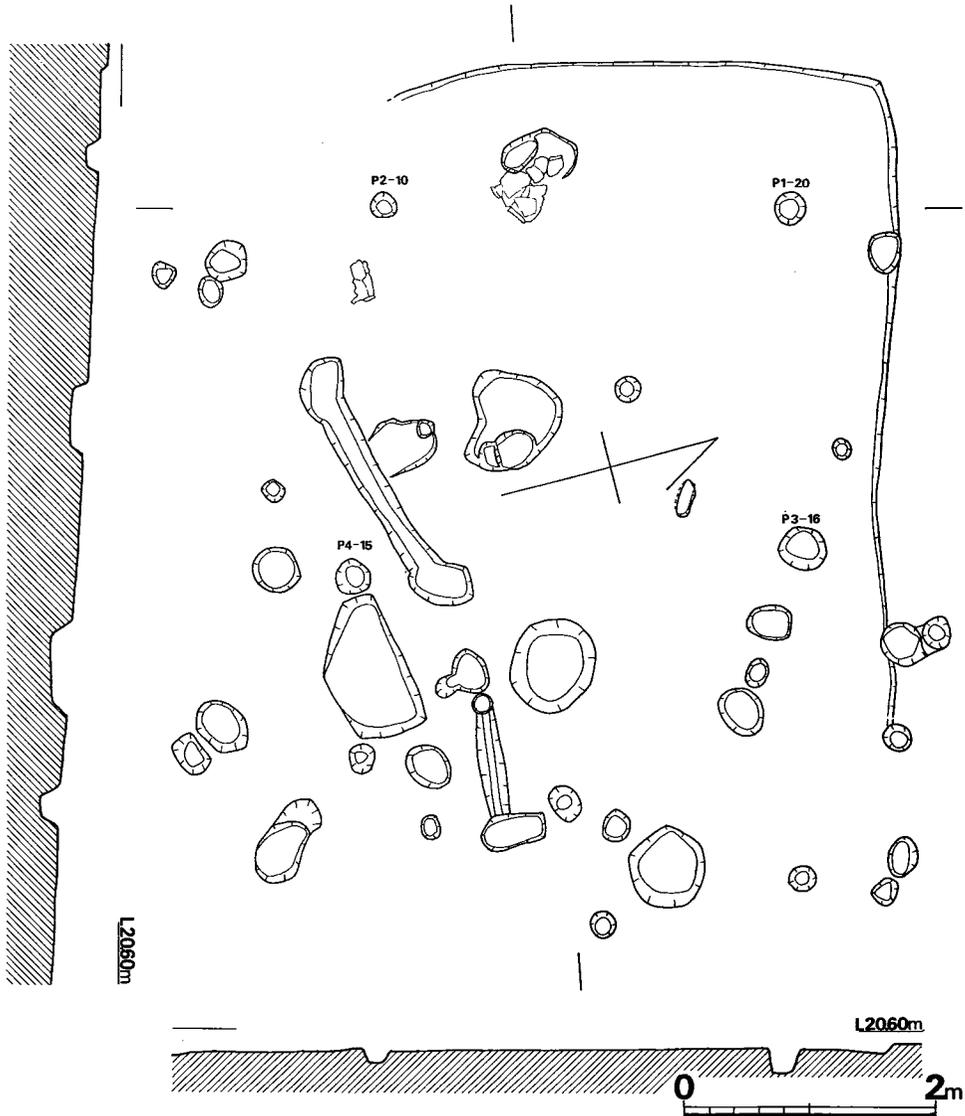


Fig. 9 中屋敷遺跡第I地点第6号住居跡実測図(縮尺1/60)

下には周溝はない。また、炭、焼土も見出せない。柱穴はP1～P4の4本柱と思われる。

出土遺物は西壁近くに二ヶ所集まって弥生式土器がある。

**出土遺物** (Fig. 12, PL. 11)

甕形土器 18で、口径25.8cm、器高30.3cm、底径9.4cmを測る。器肉の厚い底部より胴部はやや丸くふくらみ口縁部にかけて「く」の字状に屈曲する「く」の字形口縁で、口縁端部は跳ね上がる。口縁部はくさび形を呈し先端方が厚い。口径に対して最大胴部の方が大きい。外面

は剥落がはげしいが刷毛目が交差しているようである。色調は橙褐色で底部に部分的ではあるがススが付着している。胎土は大・小の砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。

#### 第7号住居跡 (Fig. 10, PL. 8)

C区の第4号住居跡の西側にあり、C区の範囲のみ遺存し、D区にかかる部分はC区から階段状になり壁、床面は見出せない。C区に検出された壁は半月形であるので径約6mの円形が復元できる。

壁下には部分的に周溝がみられ上幅15cm前後、下幅5cm前後で床面からの深さ5cmである。

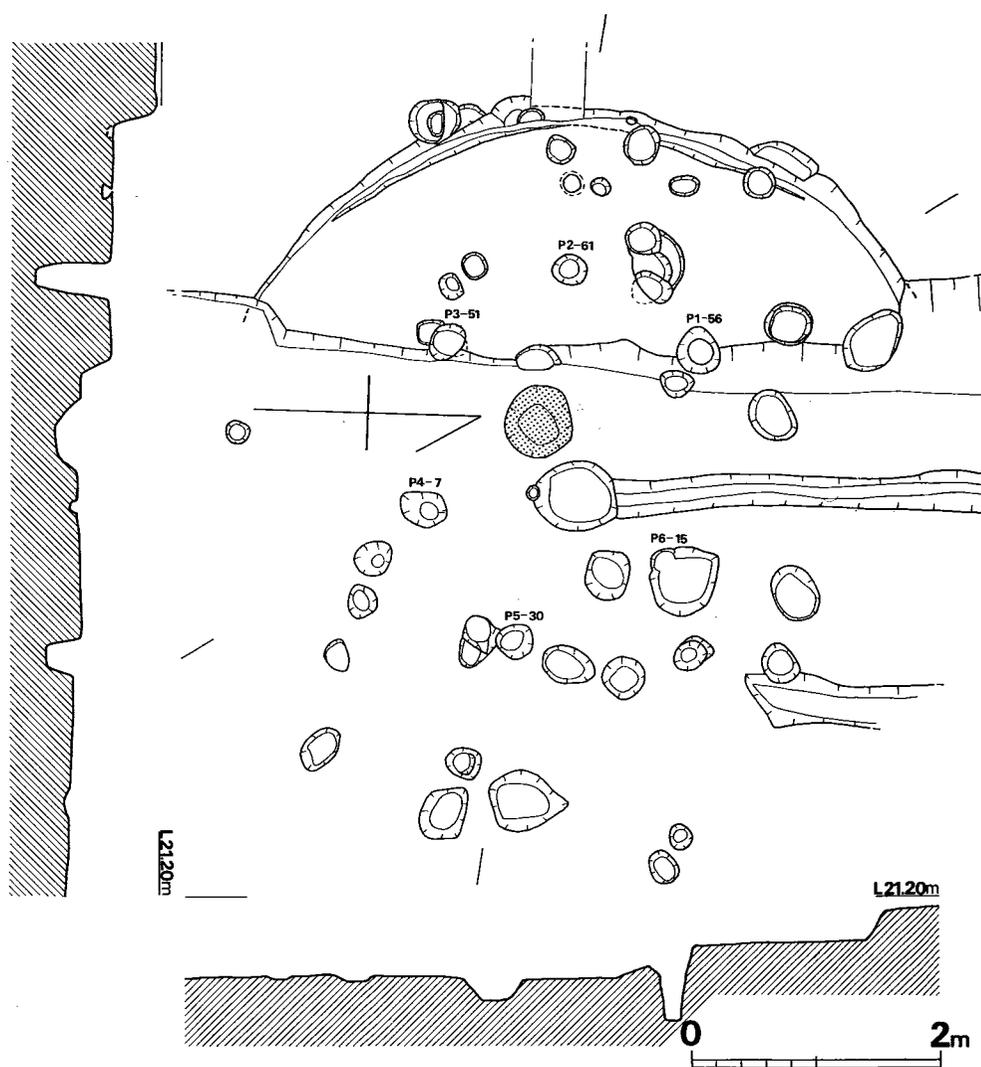


Fig. 10 中屋敷遺跡第I地点第7号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面上には焼土と PL. 8-2 のように炭化材が住居跡の中心部方向に倒れた状態で検出される。なお、壁下の矢板について注意深く観察するも炭化材は見出されない。床面は水平であり平坦で凸凹はない。D区になるが住居跡の中心部と推定できるところに炭、焼土が充填したピットがあり深さは20cmである。床面よりすると深さは45cmであり炉とされよう。柱穴はP 1～P 6の6本で、P 1～P 3は床面より検出されるが、他のD区に入る3本は炉と同じく上面は削平されている。しかし底面はC区の底面とほぼ同じレベルであり支柱とした。

出土遺物はほとんどなく若干の弥生式土器片が出土する。

#### 第8号住居跡 (Fig.11, PL. 9)

F区とG区にわたっており、第4号住居跡の南方25mである。壁が検出されたのは僅かな部分であり、ブドウ畑の基礎穴によってほとんどが破壊されている状況である。しかし壁や床面からは土器、石庖丁が出土しており住居跡とした。

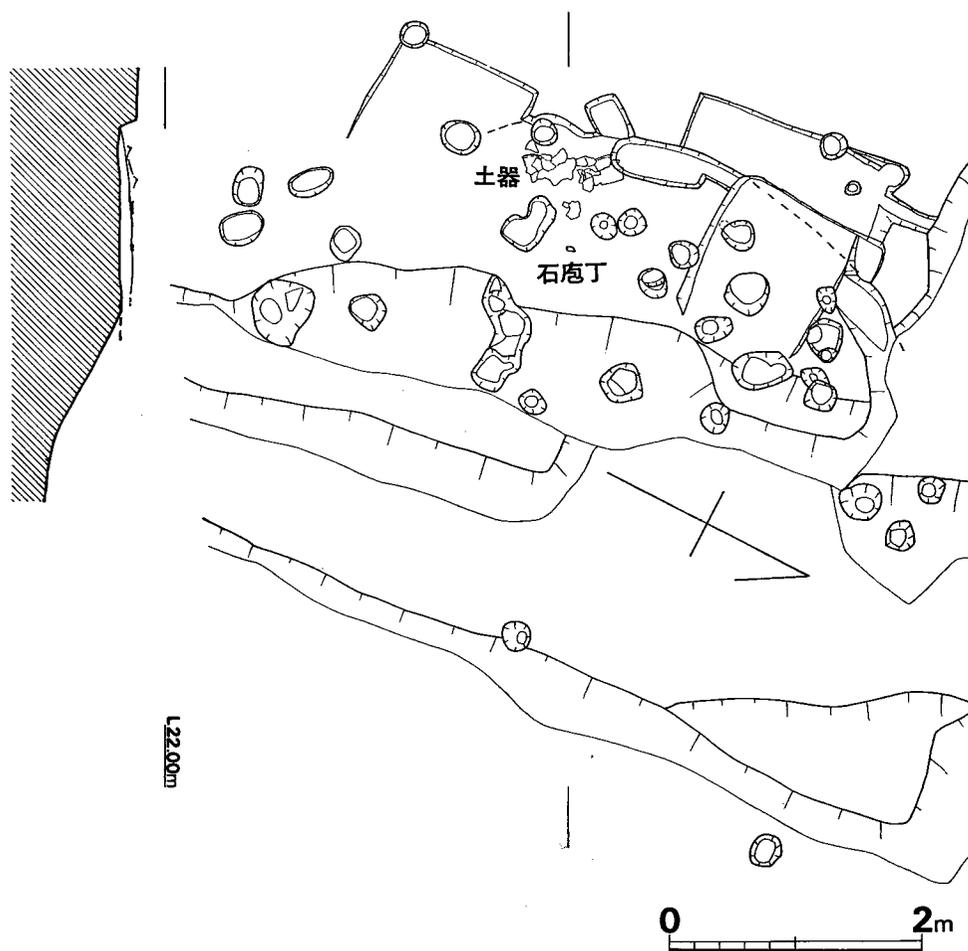


Fig. 11 中屋敷遺跡第I地点第8号住居跡実測図 (縮尺1/60)

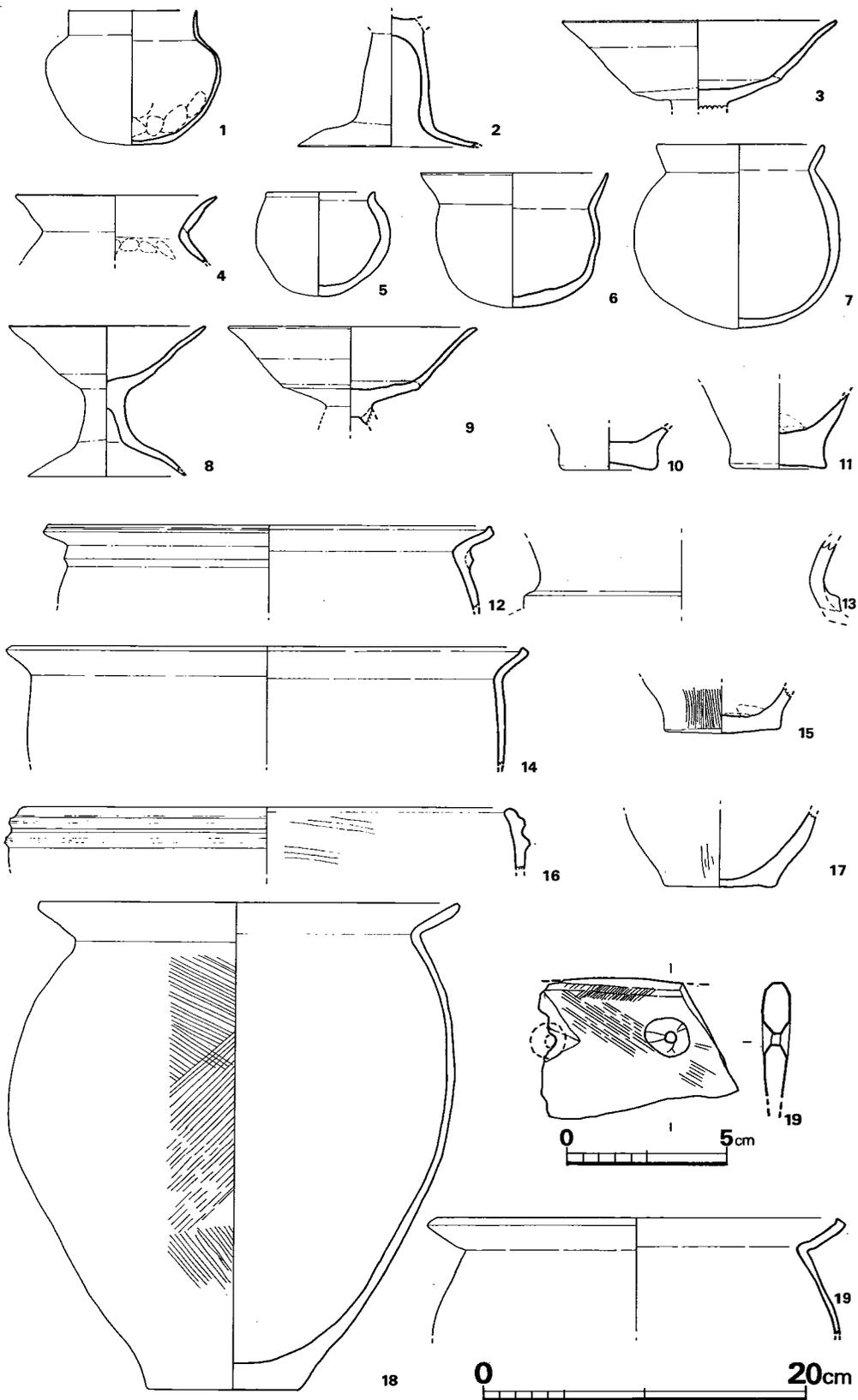


Fig. 12 中屋敷遺跡第1地点第1・2・4・5・6・8号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)  
 (1・2—1号。3~9—2号。10・11—4号。12~17—5号。18—6号。19・20—8号)

径約6mの円形と思われ、壁下には部分的に周溝が付属するようである。床面や柱穴などに関して詳細は判明しない。主柱穴は住居跡の平面プランが円形であることにより、第3号・第4号・第7号住居跡と同様に円形に6~8本があるものと思われる。

出土遺物は床面の西側寄りの壁近くに弥生式土器と石庖丁がある。

#### 出土遺物 (Fig. 12, PL. 11)

甕形土器 19は、胴部上半から口縁部にかけてのもので口径16.0cmである。最大胴部よりも径の方が大きく「く」の字形口縁であり口縁端部は跳ね上がる。口頸部より水平的に延びたものが内傾して立ち上がり、口縁部はやや内面に丸味を帯びている。色調は淡黄褐色である。

#### 石庖丁 (Fig. 12, PL. 11)

20は欠損品で、刃部を欠くが背部と二孔がみえる。外彎形形式のものと思われ、厚さ0.9cmである。孔の間隔は2.5cmで共に両方から穿孔され、孔径1.4cm、穴径0.35cmである。石材は灰色の粘板岩である。

以上、第I地点より検出された竪穴住居跡は8である。各住居跡の時期については、第1・2号よりの出土土器は古式土師器であり古墳時代初頭。第3号は円形であり出土の土器より弥生時代中期前半。第4号も同じく弥生時代中期前半。第5号は方形であり土器は跳ね上がり口縁部より弥生時代後期初頭。第6号は第5号と同じで弥生時代後期初頭。第7号は円形で土器は中期片であり、弥生時代中期。第8号は円形で土器は須玖式であり弥生時代中期後半にそれぞれ比定できよう。

Tab. 1 中屋敷遺跡第I地点住居跡一覧表

住居跡	平面形	内法 (m) たて×よこ×深さ	床面積 (m <sup>2</sup> )	施設			出土遺物	時期
				主柱穴	周溝	炉		
第1号	長方形	4.7×2.95+α×0.2	14.27+α	?	周壁溝	?	高杯・小型丸底壺	古墳・初頭
第2号	長方形	3.8×2.3+α×0.1	8.94+α	2	有	?	壺、高杯・甕	古墳・初頭
第3号	円形	径5.70×0.15	25.5	5	部分に有	有	甕	弥生・中期前半
第4号	円形	径7.0×0.10	38.465	8	有	有	甕	弥生・中期前半
第5号	長方形	5.20×4×0.1	20.8	2	周壁溝	有	甕・壺・鉢	弥生・後期初頭
第6号	長方形?	5.10+α×4.00+α×0.05	20.4	4	ナシ	?	甕	弥生・後期初頭
第7号	円形	径6.0×0.3	28.26	6	部分に有	有	甕	弥生・中期
第8号	円形	径6.0×0.15	28.26	?	部分に有	?	甕・石庖丁	弥生・中期後半

#### (2) 貯蔵穴 (Fig. 13~16, PL. 12~17)

弥生式土器の出土する竪穴遺構4を貯蔵穴とした。貯蔵穴は遺跡の北方のみでB区1, D区3であり、円形の袋状のもの2, 方形のもの2である。

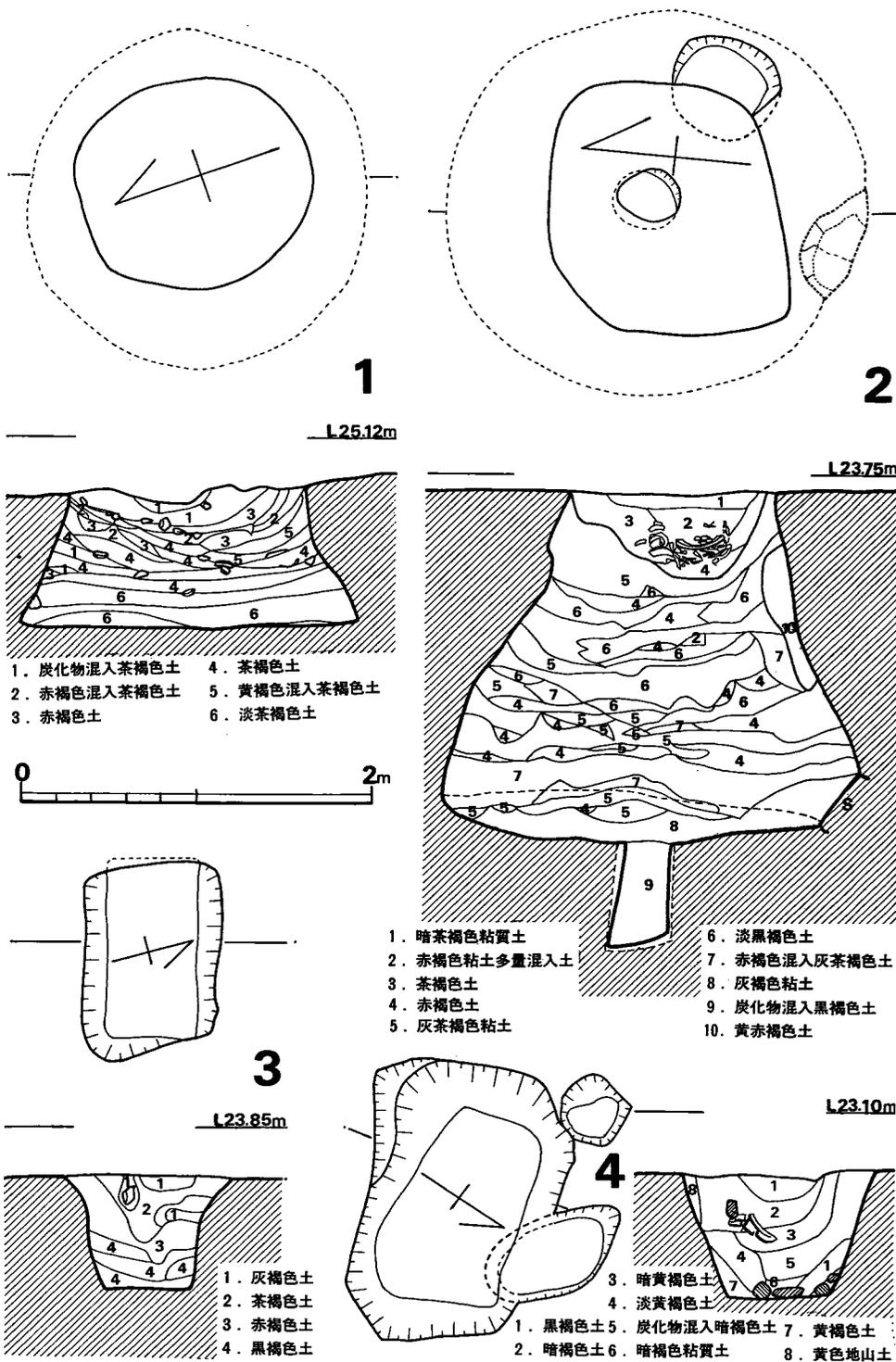


Fig. 13 中屋敷遺跡第I地点第1・2・3・4号貯藏穴実測図(縮尺1/40)

### 第1号貯蔵穴 (Fig. 13, PL. 12・13)

第3号住居跡の東方10m離れたところにあり円形の袋状竪穴である。竪穴の上部は削平されていると思われるが径1.6mの円形で、底面も円形で径2mを測る。側面形状は袋状であり深さは0.8mである。

堆積土は、下半が水平に上半がレンズ状に薄く分けられるが炭化物を含む茶褐色土、茶褐色土、茶褐色+黄褐色土、茶褐色+赤褐色土、赤褐色土の5層の互層である。

遺物は床面にはみられなく上半部のレンズ状をした堆積土内より甕形土器の底部等が出土している。

### 出土遺物 (Fig. 14, PL. 14)

甕形土器 2は、底部片で底径7.1cmを測る。上げ底であり胴部に直立的に立ち上がる。色調は外面茶褐色、内面黒褐色で炭化物が付着しているようである。

壺形土器 1で、口縁部の破片であり口径35.0cmの大型品である。外反する口縁部の内面に粘土帯を付して突起する形態の鋤形口縁で、上面はほぼ平坦である。色調は淡黄色を呈している。

### 第2号貯蔵穴 (Fig. 13)

第1号の斜面下方東側7m離れたところにあり、円形の袋状竪穴である。上部は略方形で1.3×1.5m、底面は2.3mの円形であり中心部には径40cm、深さ60cmの円形ピットがある。側面形状は袋状で、断面図に見える右底面は地山の石であり、これを取り除くことを止めてそのまま竪穴としている。深さは2mと深い。

堆積土は第1号貯蔵穴と同じく下方は水平に、上方はレンズ状となっている。

遺物は上面より3層目までがほとんどであり、土器が投棄された状態で出土していて完形品はなく破片ばかりである。

### 出土遺物 (Fig. 14・15, PL. 14・15)

甕形土器 口縁端部が跳ね上がるものと跳ね上がらないもの(8のみ)がある。3は、中型で口径22.7cmを測る。「く」の字形口縁で口縁端部は口唇状に開く。4は、大型で口径27.6cmを測る。強く外反する「く」の字形口縁で端部が太く内面は跳ね上がる。5は、大型で口径29.5cmを測る。「く」の字形口縁で器肉が薄い。口縁端部は口唇状に中央が凹む。6・7もほぼ同様のものであるが、7は、口径部直下に断面三角形の突帯が一条めぐる。8は、断面三角形突帯を有した胴部よりやや間隔をおいて口頸部に達し、強く大きく外反する。口縁部は先端部が太く丸い。これら甕形土器の外面は刷毛目調整である。色調は淡黄褐色を呈するものがほとんどで、6には外面にススが付着している。9・10は底部片であり、共に上げ底を呈する。

壺形土器 Fig. 14-11~16と、Fig. 15-1~5である。口縁部が鋤形をなすものと、朝顔形に開くものがあり、鋤形口縁には上面に円形の粘土粒浮文を付着するものと、刻目文を有する

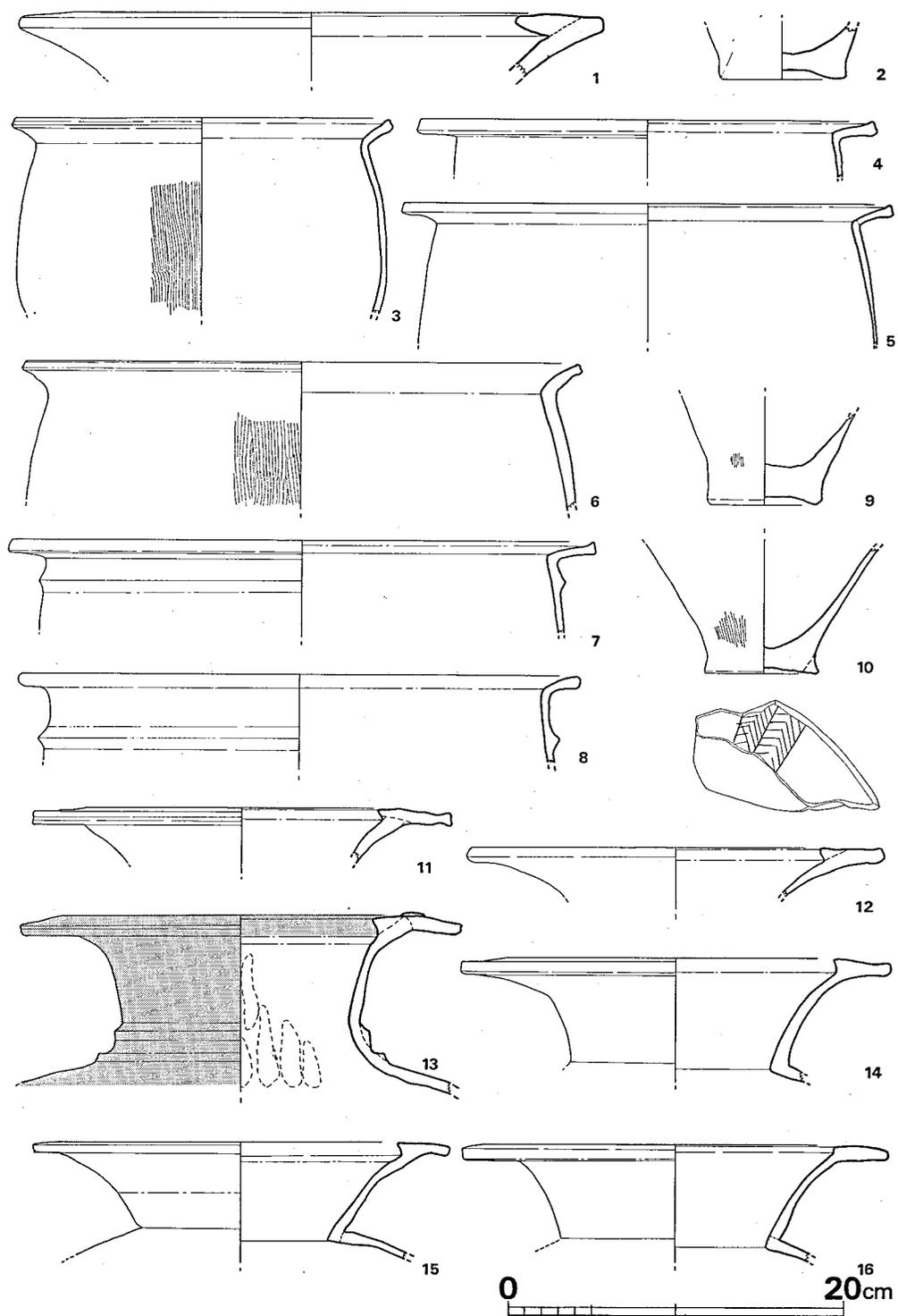


Fig. 14 中屋敷遺跡第I地点第1・2号貯蔵穴出土土器実測図(縮尺1/4)  
(1・2-1号。3~16-2号)

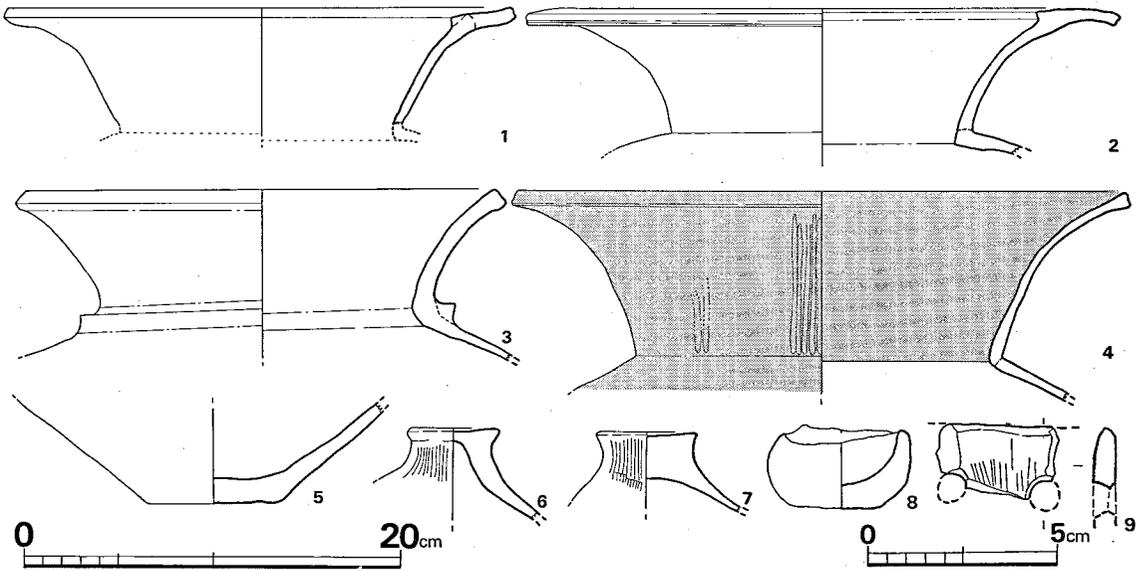


Fig. 15 中屋敷遺跡第I地点第2号貯蔵穴出土土器・石器実測図（縮尺1/4・1/2）

ものもある。口縁端部は丸味のもの、口唇状の中央が凹むものがある。

口径25.0~31.6cmであり、口縁部の高さは7cm前後で長頸になるものはないようである。鋤形口縁には口縁部が垂れ下るものと水平なものと、口縁部内面端が下るものとある。12は、口縁の平坦面に二条の綾杉文が刻まれている。13は、平坦面に円形の粘土粒浮文貼り付けが破片のため一ヶ所しか見られないが、三~四ヶ所あるものと思われる。また、頸部に二条の断面三角形の突帯がめぐり二条で口唇状となる。外面は丹塗研磨である。

Fig. 15-3・4は朝顔形口縁で、4は特に大きく開く。3には頸部に断面三角形の突帯が一条めぐり。3・4とも口縁端部は若干であるが口唇状を呈する。4は、口縁部全面が丹塗研磨され暗文が二ヶ所にみられ、5本で一つの単位となっている。Fig. 15-5は底部片である。これら壺形土器はいずれも丁寧に研磨されている。色調は茶褐色がほとんどで、一部剝落したものは淡褐色を呈している。これらは総て朝顔形に特色の、肩部が丸く大きく張る形をとると思われ、長頸壺はないものと思われる。

蓋形土器 Fig. 15-6・7で共に上部のみで下部を欠損している。6は、上部のつまみ部が摺鉢形に近く器肉が薄い。7は、つまみ部が長く、器肉が厚い。共に調整は外面刷毛目で6の内面には指オサエがみられる。色調は6が淡茶褐色、7は淡黄褐色で、胎土は共に細砂粒を含んでいる。

手づくね土器 Fig. 15-8で、口径3.2cm、器高2.2cmの超小型で手づくねのようである。

図示出来ないが、外面全面丹塗研磨の広口壺と思われるものがあり、出土した土器は図示し

た以外にもかなりの量があり図示したのは全体の1/3程度である。

#### 石庖丁 (Fig. 15, PL. 15)

9は小破片であるが、背部と二孔がうかがわれる。外彎形形式と推定される。石材は灰色の粘板岩である。

#### 第3号貯蔵穴 (Fig. 13, PL. 13)

第5号住居跡と重複しているもので、切合いでは貯蔵穴の方が新しい。第2貯蔵穴の南側10m、第4号貯蔵穴の西側7mのところである。上面は0.8×1.05mの略長方形、床面は0.5×1.0mの小型竪穴で、側面形状を見ると下方は略直立状であり、上方は上面に拡がっていて、深さ65cmと浅い。

堆積土は下方はほぼ水平に近く、上方は大きくレンズ状を呈し、炭化物はない。

遺物は若干の出土である。

#### 出土遺物 (Fig. 16, PL. 17)

甕形土器 1で、口縁端部及び胴部下位の大半を欠損する破片である。口径約18.6cmで、胴部と口縁部の境が明瞭でなく、口縁は「く」の字形になる。肩部に断面三角形の突帯が一条めぐる。甕形土器の口縁に似ているが口縁下から大きくふくらみ胴部につづくものである。

#### 第4号貯蔵穴 (Fig. 13, PL. 16)

4基の貯蔵穴の内では一番東方の丘陵斜面低位置にある。一部を歴史時代のピットにより破壊されているが、上面は略長方形で1×1.5m、底面0.7×1.1mの小型竪穴である。深さは0.7mである。側面形状は上面が拡く、下方が狭い逆「ハ」の字状である。

堆積土はレンズ状であり、炭化物混入土も見られる。

遺物は、上半部に甕の口縁部破片等がみられ底面には小石が数個ある。

#### 出土遺物 (Fig. 16, PL. 17)

甕形土器 2～6で、口径25.2～36.0cmであり、いずれも底部を欠く。口縁部は胴部より強く「く」の字形に外反し、口縁端部にかけて内面に丸味をもつものが多く皆跳ね上がり口縁である。口径が最大胴部より小さいものと大きいものがある。調整は、外面に細かいものと粗いものの刷毛目がみられ、3の内面には指オサエの痕が残る。色調は淡茶褐色が多く、2には僅かながら外面にススが付着している。

甕形土器 7は、広口の短頸壺で口径12.8cm、器高13.6cmを測る。底部は平底で、扁平な球形を呈す胴部に続き、「く」の字形に強く外反する短かい口縁部となる。口縁部は内面に丸味を帯び、端部は丸い。8は、鋤形口縁のもので口径27.6cmを測る。鋤形口縁は外方へ垂れ下り、上面に円形の粘土粒浮文を4個貼り付ける。頸部に断面三角形の突帯が一条みえている。他に、破片であるが径が小さな長頸部のものであり、胴部境に断面台形の突帯が一条めぐる。この壺は、第2号貯蔵穴の壺と違って口頸部をみると直線的であり頸部が長く、肩部は丸く張

らず、胴部は丸いが最大径が胴部の中央より下方にあって重心の重い長頸壺である。内外面とも丹塗はみられないが丁寧に研磨されていて淡茶褐色を呈す。

鉢形土器 9は、口縁部と底部の破片であるが同一個体と思われる。口径29.0cm、器高約15.7cmを測る。底部は平底で底径9.4cmを測り、胴部と続き、口縁部へ丸く大きく内反している。

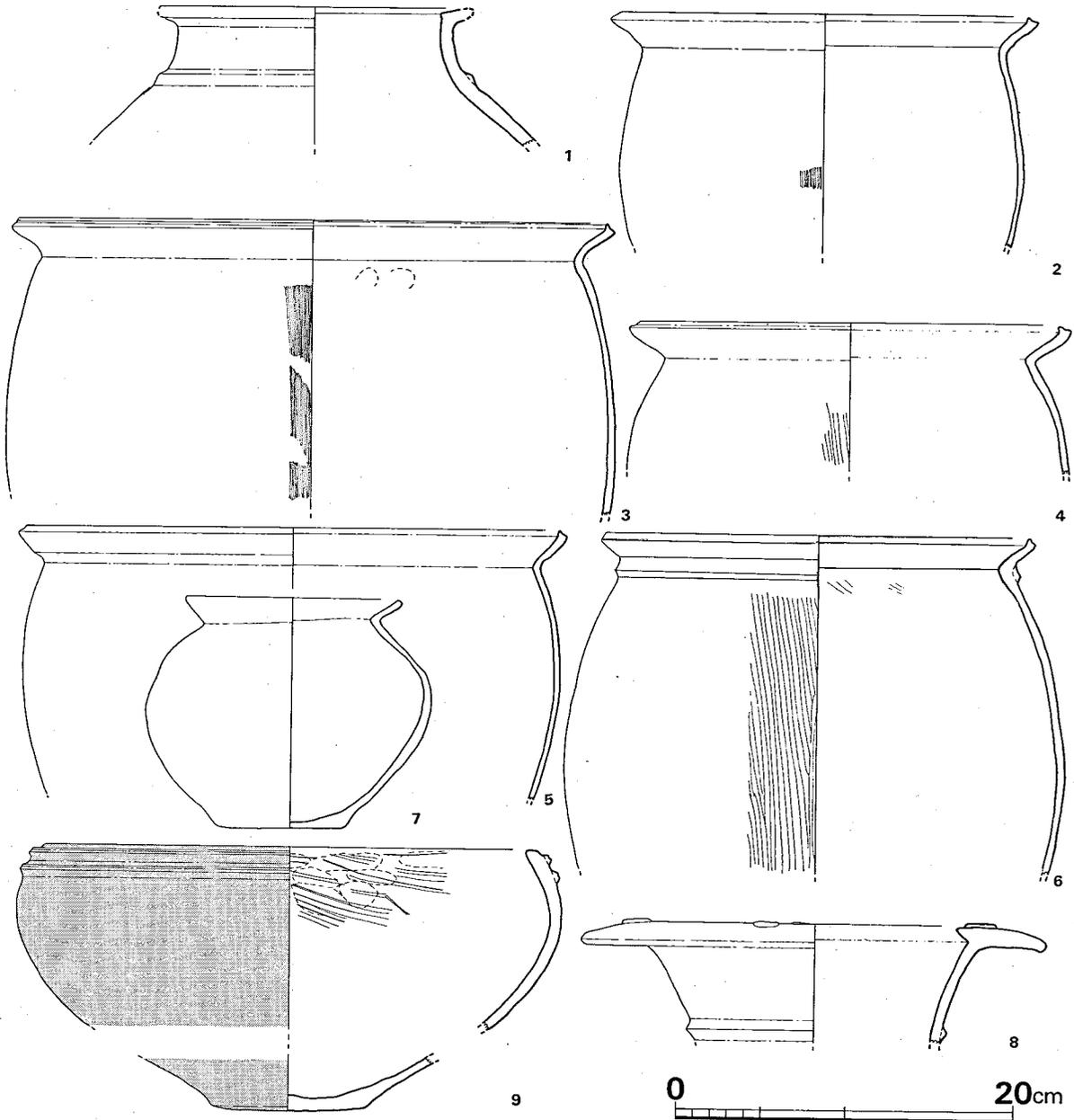


Fig. 16 中屋敷遺跡第I地点第3・4号貯蔵穴出土土器実測図 (縮尺1/4)  
(1-3号。2~9-4号)

口縁端部は平坦で直下に二条の断面口唇状をした台形の突帯がめぐる。外面の全面と内面では口縁端部の直下まで丹塗研磨であり、当遺跡出土の丹塗研磨土器としては丹の残りが最も良い。他の内面は指オサエの上に斜めの刷毛目で調整し、胎土は密であり、焼成良好のものである。これら第1号から第4号貯蔵穴を表にまとめると次のようである。

Tab. 2 中屋敷遺跡第I地点貯蔵穴一覧表

貯蔵穴	底面形態	底面径 m	面積(m <sup>2</sup> )	深さ	ピット	出土遺物	その他	時期
第1号	円形	2.0	3.14	0.8	ナシ	甕・壺		弥生・中期
第2号	円形	2.0	3.14	2.0	1	甕・壺・蓋・手づくね石庖丁	自然石	弥生・中期
第3号	長方形	0.5×1.0	0.5	0.65	ナシ	壺		弥生・後期
第4号	長方形	0.7×1.1	0.77	0.7	ナシ	甕・壺・鉢	自然石	弥生・後期

### (3) 木棺墓 (Fig. 17, PL. 18)

第1・2号住居跡の南方4mのところであり、斜面の高位置になる西側は残り良く、低位置にあたる東側は若干を残すのみで、軸は尾根稜線に対して直交しており、ほぼ東西方向である。95×65cmの長方形プランで、壁は遺存の良い西側で15cm、悪い東側では5cm程である。床面には四壁下に掘り込みがあり、これによって木棺墓と思われる。掘り込みは四壁を全周するものではない。これに側板を想定すると内法は、たて70cm、よこ45cmとなる。側板を立てるための掘り込み幅のは狭く、木板の厚さは2~3cmと推定される。底面よりの深さは2~3cmで浅い。

出土遺物はないが、床面の中央よりやや西方に自然石が2個あって、底面より若干浮いた状態である。なお、覆土中からは若干の弥生式土器小片が出土している。形態、周辺の出土遺物等吟味して一応弥生時代のもものと推定する。

### (4) その他の遺物

(Fig. 18・19, PL. 18)

第I地点の覆土・包含層から出土した弥生・古墳時代関係の遺物は弥生式土器と石器がほとんどで

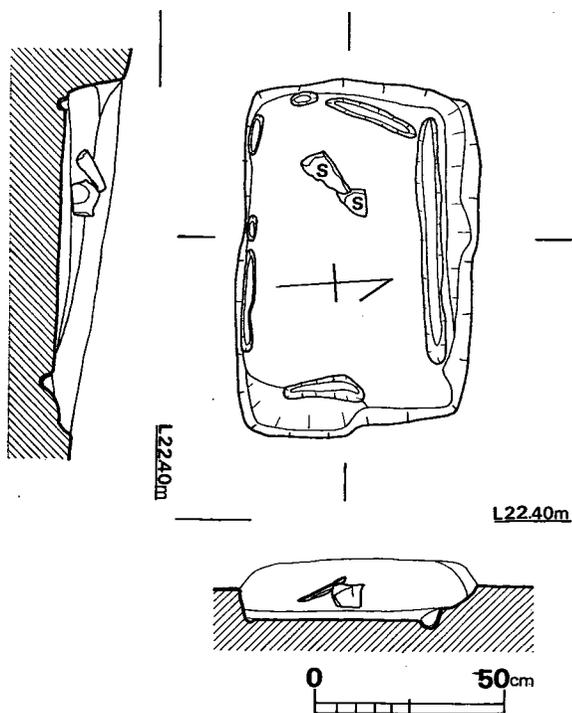


Fig. 17 中屋敷遺跡第I地点木棺墓実測図 (縮尺1/20)

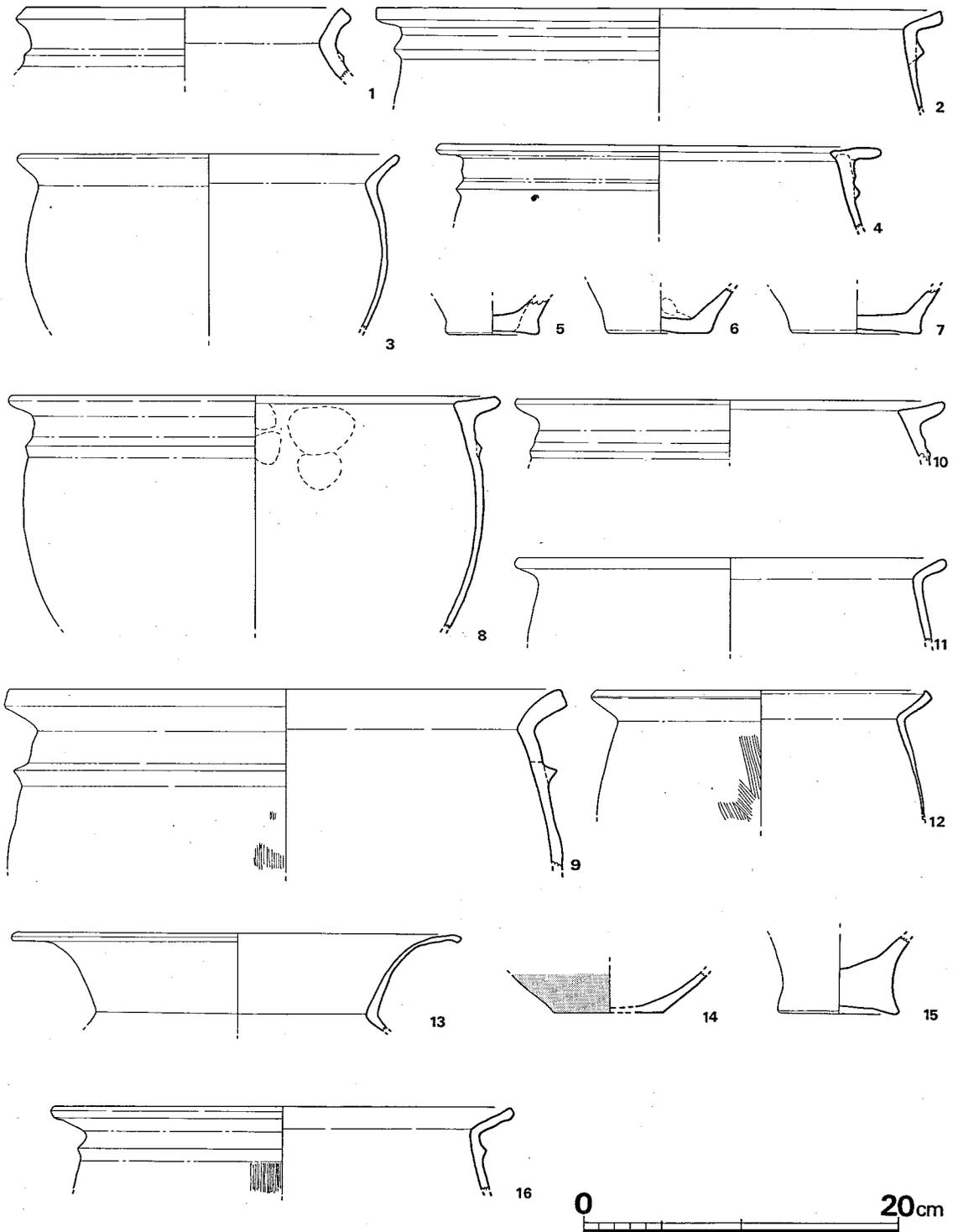


Fig. 18 中屋敷遺跡第I地点出土土器実測図 (縮尺1/4)

あり、古墳時代の遺物として小破片のため図示しなかったが須恵器片が若干ある。

弥生式土器 (Fig. 18)

1・4はB区, 2・3・5~7はC区, 8~15はD区, 16はG区出土である。

甕形土器 13・14以外は甕形土器片であり、「く」の字形口縁部と逆「L」字形口縁部(4のみ)とがあり、「く」の字形口縁のものには断面三角形の突帯が一条めぐるものもある。口縁端部は口唇形の丸味のもの、跳ね上がり口縁とがある。4は、逆「L」字形口縁で、口縁は水平であり端部は丸い。口縁直下に二条の断面三角形の突帯がめぐるといふのである。

5, 6, 7, 15は底部片で、15は、上げ底であり、器肉が厚い。色調は淡茶褐色がほとんどである。

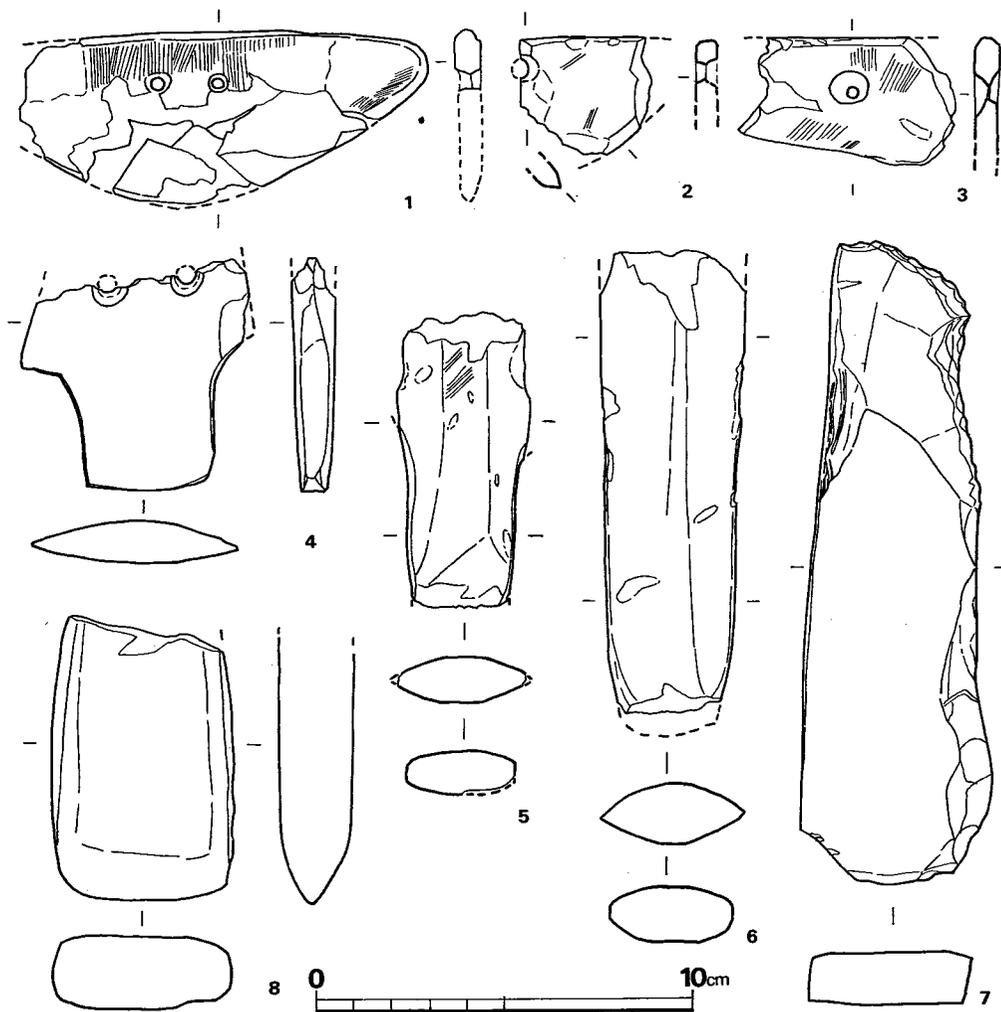


Fig. 19 中屋敷遺跡第I地点出土石器実測図 (縮尺1/2)

壺形土器 13・14で、13は、朝顔形の口縁で大きく外反し、口縁端部は垂れ下がる。図示できない程に小破片であるが、D区より鋤形口縁のものも出土している。14は、外面の全面が丹塗研磨であり壺形土器の底部とした。

#### 石 器 (Fig. 19, PL. 18)

弥生時代と思われるものは石庖丁3、石戈1、石剣2、砥石1、石斧1である。

石庖丁 1は、完形に近いものでG区のトレンチ出土。外彎形両刃形式で厚さ0.7cm、最大幅約4.7cmを測る。中央部に二孔あって両面より穿孔されている。穴の割には孔が小さい。石材は輝緑凝灰岩である。2は、G区表採資料の小破片である。外彎形両刃形式で厚さ0.6cmを測る。両面から穿孔した孔が一つみえる。石材は輝緑凝灰岩である。3は、表採資料の破片で背部と二孔がみえる。外彎形形式を思わせ、厚さ0.65cmを測る。石材は輝緑凝灰岩である。

石戈 孔より先端部の身部分と一方の関を欠いている。茎は方形に近く長さ3cm、幅3.5cm、厚さ1cmを測る。茎に比べて身は小さく関幅は約6.2cmである。刃部は尖って鋭いが鑄はつかない。二孔の間隔は1.2cmで両面から穿孔している。石材は灰色の頁石である。

石剣 5は、茎部と僅かな身の部分を残す欠損品でG区トレンチ出土。現存長7.7cmで茎の長さ4.8cm、幅2.9cm、厚さ1.1cmを測る。茎部と刃部幅はわずかに刃部が広い。身の中央に鑄はないが、これは身の基部であるためと思われ、先端部の方には中央に鑄が通じるものであろう。石材は硬質砂岩である。6は、G区トレンチの5と同じく黒色層出土品である。やはり茎部と僅かに身の部分を残しており現存長12.3cmであり、茎部と刃部はほぼ同一幅であるが、僅かに抉りをつくり区別している。茎の長さ8.0cm、幅3.6cm、厚さ1.5cmを測る。断面は中央がふくらむ楕円形状で両端は直に仕上げられている。身部の幅3.9cmで刃部は鋭く、断面は中央部に鑄はみられないが略菱形を呈す。砥石材は粘板岩である。

砥石 7は、短冊形の砥石で長さ17.3cm、幅4.8cm、厚さ1.4cmを測る。

石斧 8で、完形品ではないがほぼ全体の形はみられ両刃である。現存長7.5cm、幅4.8cm、厚さ1.9cmを測る。

## 2. 歴史時代の遺構と遺物

歴史時代の遺構として調査した全域にわたり多数のピット類が検出された。その内に掘立柱建物1, 土壇8, 土壇墓4, 地下式土壇1, 石組遺構1がある。その他にも無数に大, 小のピットがあり掘立柱建物として復元できそうな群, 大ピットも存在する。しかし, ここでは出土遺物があるもの等に限って番号を付した。

### (1) 掘立柱建物 (Fig. 4・20, PL.19)

第I地点全面に大小多数のピットを検出したが, その内建物遺構の柱列痕と思われる配置を示すものを再度調査して掘立柱建物とした。E区東側に1棟のみを建物跡としたが, 他にも柱列と思われるものが存在する。A区に検出されたピットの大部分はブドウ畑のコンクリート柱穴痕であり, それはB区の最も西側に一直線上に並んでいる柱列も同様である。E区, F区南にある約1×1m四方の方形ピットも皆ブドウ栽培のブドウ畑基礎穴である。また, 同方形ピットの周辺には支柱の柱痕も多くみられた。F区北の第7号土壇周辺には径約30cm大の円形ピットが多数ある。これらの内には根石を有するものもあり確かに建物跡のピットを示すと思われる。これらのピットからして, いくつかの建物が重複しているようで, ほぼ東西南北を軸としているようである。

#### 第1号掘立柱建物 (Fig. 20, PL.19)

E区の東側にある3間×5間の建物で桁行方向はほぼ南北である。東側のピット6本の内4本しか見られないが, これは開墾により破壊されたものである。また, ピットの深さは現状では浅いがこれも開墾によるものと思われる。長方形のプランを呈し, 桁行間10.10m, 梁間間6.0mを測る。平均の桁行間は2m, 梁間間は2mを測る。柱穴掘り方は円形の素掘りで根石を有するものと無いものがある。無いもの, また, 根石の石しか見られないものを含めて現代の開墾により取り除かれた場合が多いと思われる。ピットの径は約60cm, 深さ30cmである。

### (2) 土壇 (Fig. 21~23, PL. 20~25)

A区~G区までには不整形円形, 長方形等を呈している大きめのピット(土壇)が10数穴あるが, ここでは方形のもの, 遺物を出土したもの等に限って土壇とした。A区で1, B区で2, E区で2, F区で3である。

#### 第1号土壇 (Fig. 21, PL. 20)

B区にあり第2号土壇と近接している。不整形円形の二段掘りを呈し, 長径3.2m, 短径2.65m, 深さ0.85mを測る。断面は摺鉢状に底面中央が狭く底面は長軸75cm, 短軸50cmの長方形で, 上面との立ち上がりは緩である。

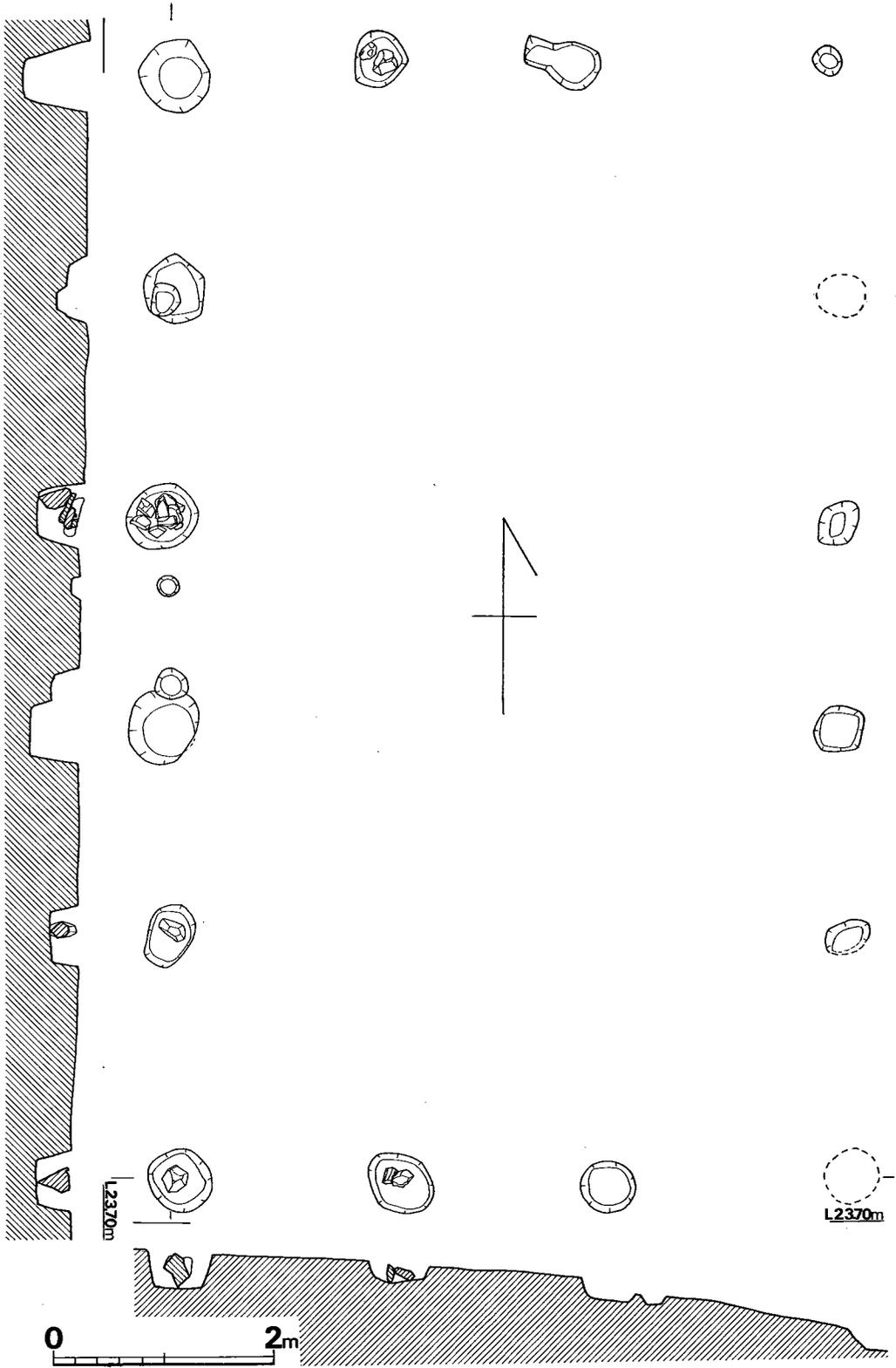


Fig. 20 中屋敷遺跡第I地点第1号掘立柱建物実測図 (縮尺1/60)

出土遺物は、土師器片と青磁片である。覆土中や床面に自然石が数個みられる。

**出土遺物 (Fig. 23, PL. 25)**

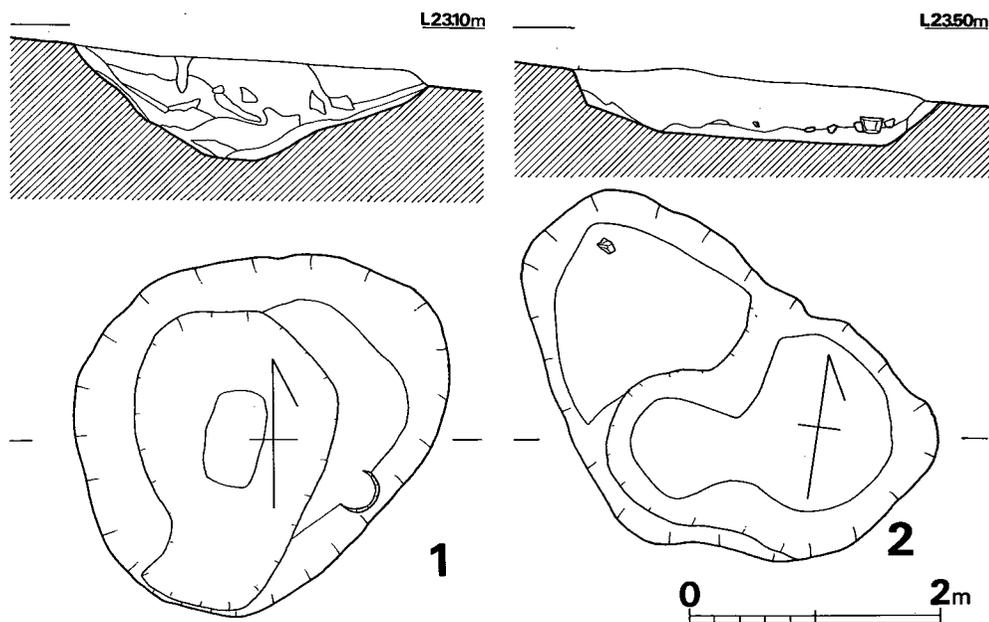
1は、青磁碗で底部を欠く小破片である。口径16.7cmを測り、胎土は灰色で、釉は緑灰色であり釉には光沢がある。2は、白磁碗の底部片である。底径は5.9cmで高台は高く付く。胎土は灰白色であり、釉は内面と外面の高台端までやや青味がかかった灰白色である。他に図示しないが白磁碗の口縁部小破片がある。

**第2号土壌 (Fig. 21, PL. 21)**

第1号土壌の北西方に近接してある。不整長方形を呈し、二段掘りの様相を示す。長軸は3.55m、短軸2.40m、深さ0.5mを測る。底面は瓢箪形になっていて、壁は上面に対して底面より緩に立ち上がる。覆土中や底面に自然石が多くみられ、それは西側と東側に分かれて二群となっている。これら自然石に混って遺物も少量出土していて土師器片、青磁片などがある。

**出土遺物 (Fig. 23, PL. 25)**

3は、瓦器質小皿片で口径8.4cm、器高1.2cmを測る。体部の内外面はヨコナデがみられ、胎土は良で灰黒色を呈している。4は、青磁皿の底部片である。底部内面に見込みがあり、胎土は灰色で、釉は底部外面以外は灰緑色を呈する。5・6は同一個体と思われる青磁碗の口縁部である。



**Fig. 21** 中屋敷遺跡第I地点第1・2号土壌実測図 (縮尺1/60)

### 第3号土壌 (Fig. 22, PL. 21)

第1・2号土壌の西側6m離れたA区にある。平面は二つの穴(西側ピットと東側ピット)が接合したような瓢箪形をしていて、長軸2.80m、短軸1.20m、深さは西側ピットで0.45m、東側ピットは0.25mであり、東側ピットの浅いのは上面が削平されているためと思われる。なお、西側ピットは二段掘りを呈しているが明瞭には段が付かない。底面も上面と同じく瓢箪形を呈していて上面への立ち上がりは緩である。

出土遺物は、土師器片、青磁片であり、覆土中、床面に自然石が多数みられる。

#### 出土遺物 (Fig. 23, PL. 25)

7は、青磁の合子小壺蓋片であり口径3.6cmを測る。花卉は大・小の二種類がある。胎土は砂粒などを含まない精良で白色であり、釉は淡い水色を呈す。8は、土師器の坏底部片で底径7.8cmであり、底部は糸切りである。

### 第4号土壌 (Fig. 4, PL. 22)

E区の北側でA区の南側に近接しているが、A区とは段が付きE区が低い。

第4号土壌は北方の大ピットと南方の小ピットが連なっている。大ピットは不整長方形で長軸5.80m、短軸5.20m、深さ1.5mであり、底面も長方形で長軸3.8m、短軸2.3mである。底面から上面への立ち上がりはやや急であり、深いのが特徴である。

小ピットは長方形で長軸2.5m、短軸1.8m、深さ0.35mである。底面も長方形で長軸1.95m、短軸1.4mであり壁は底面より上面にほぼ直に近く立ち上がる。この小ピットと大ピットが接する部分は溝状で大ピットと連なり、この溝の底面は小ピット、大ピットの底面より一段高い。

出土遺物は、小ピットからはほとんど出土せず大ピットの覆土中、底面から土師器片、火舎、青磁、煙管、近世陶磁器などが出土している。

#### 出土遺物 (Fig. 23・49, PL. 25・49)

9は、須恵質の底部片で、外面はヘラ削りによる痕が明瞭にみられ内面は沈線が1本づつ深く刻まれている。胎土は細砂を多く含み、焼成は良で、色調は外面灰褐色、内面はやや暗赤色を呈している。10は、青磁碗の底部片で見込みに花文が描かれて、内外に重円状の貫入がみられる。胎土は、灰黒色で砂粒をほとんど含まず良質で、釉は暗緑色を呈す。11・12は、青磁碗の小破片で、12は口縁部片である。胎土は灰色で、釉は明灰緑色を呈す。13は、火舎の破片と思われる瓦質である。底径は31.6cmで、脚は先端部を欠いていて、また、破片のため数は不明である。胴部の中央付近に断面台形状の突帯が一条めぐり、内面は粗い刷毛目を施す。胴部に対して底部が薄い。焼成はやや甘く、色調は外面黒色、内面淡褐色を呈す。

煙管 (Fig. 49-4, PL. 49-4) は小破片で、木芯に青銅が巻き付けてある。

### 第5号土壌 (Fig. 22, PL. 23)

第1号掘立柱建物の南側に近接してある。土壌墓とも考えられたが土壌とする。方形プラン

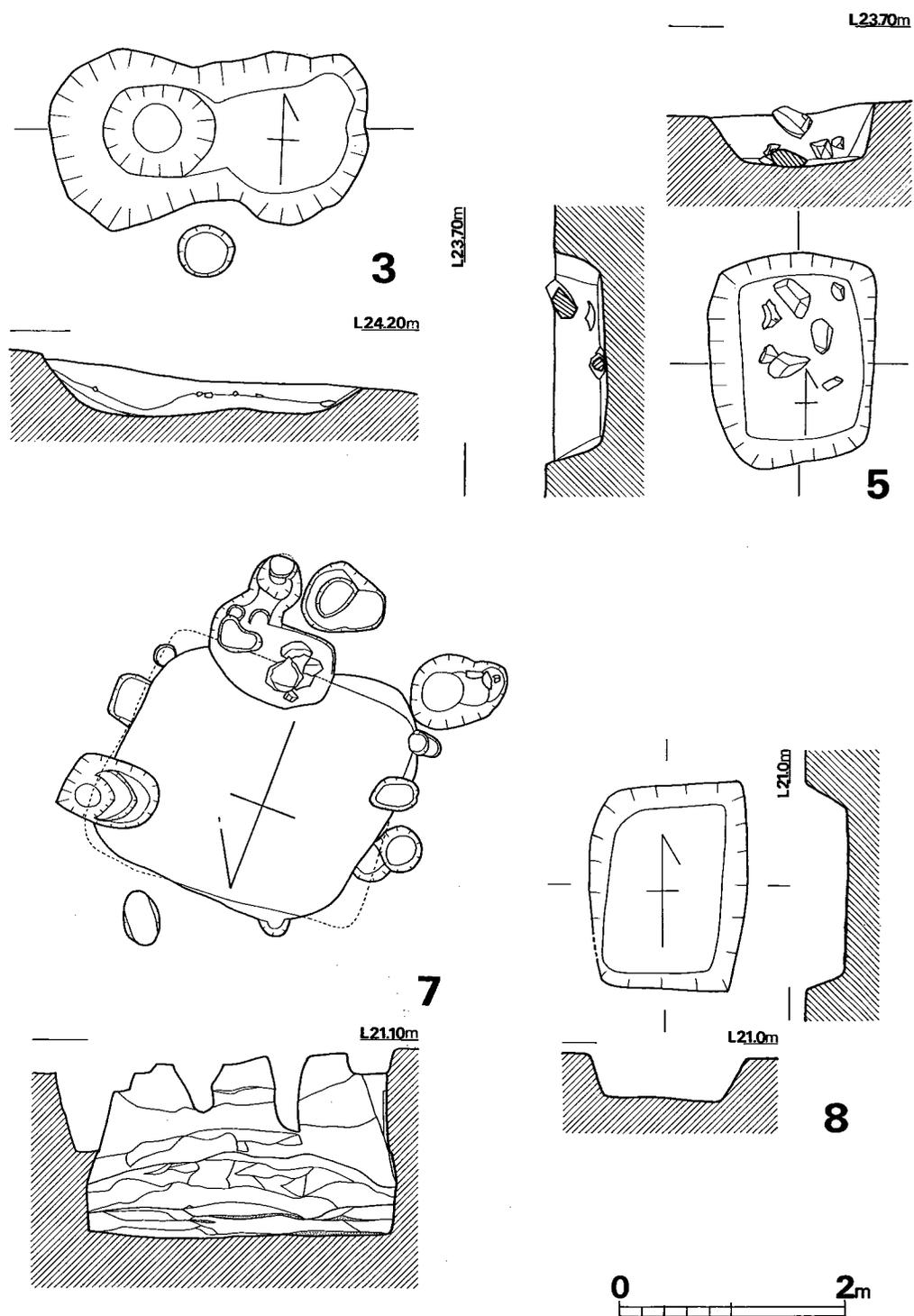


Fig. 22 中屋敷遺跡第I地点第3・5・7・8号土坑実測図（縮尺1/60）

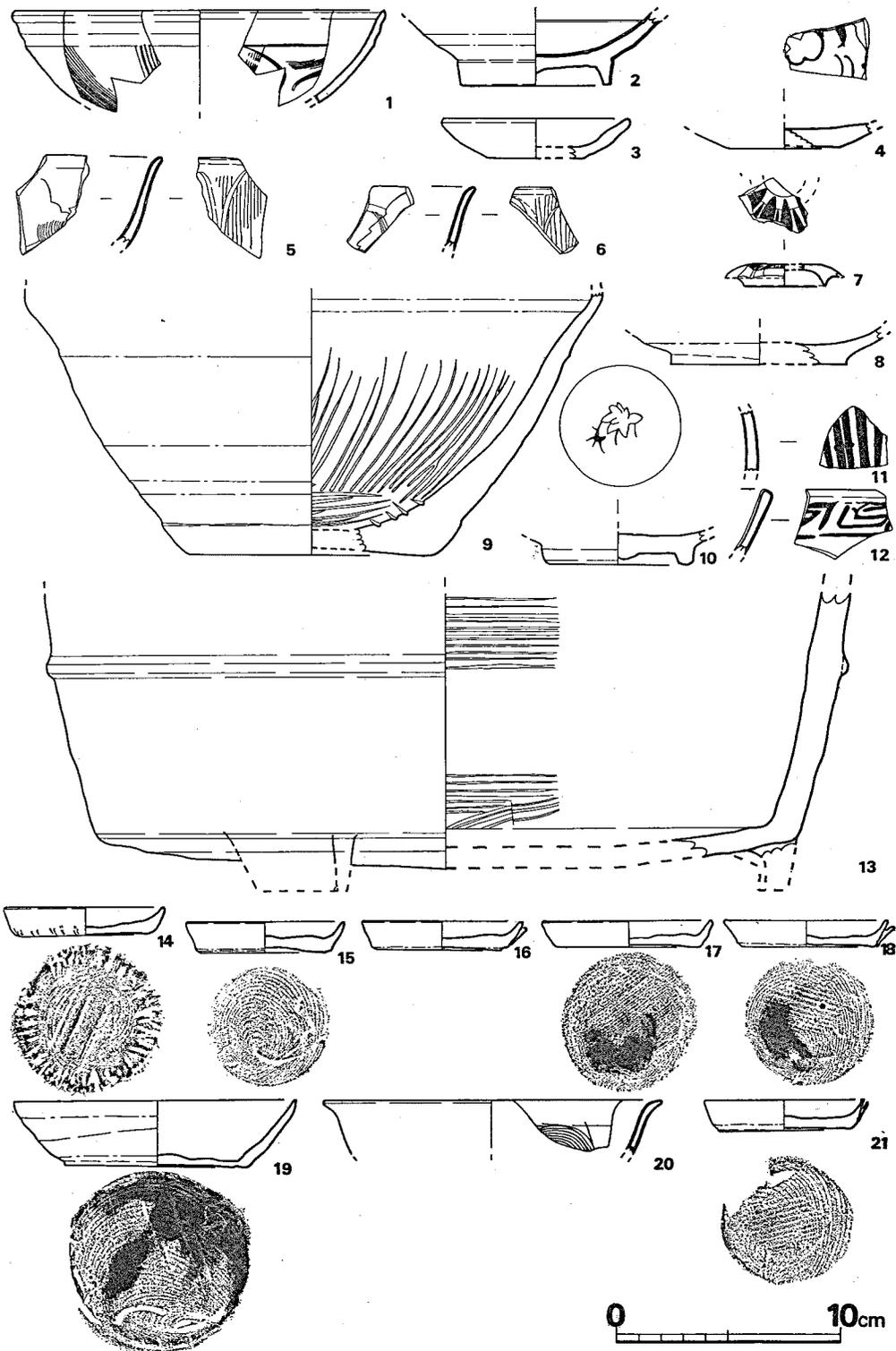


Fig. 23 中屋敷遺跡第I地点第1・2・3・4・7・8号土壙出土土器実測図(縮尺1/3)  
 (1・2—1号。3~6—2号。7・8—3号。9~13—4号。14~20—7号。21—8号)

で長軸1.86m、短軸1.46m、深さ0.45mである。底面も長方形であり東壁は急傾斜に立ち上がるが、他の三壁は東壁よりもやや緩に立ち上がっている。覆土、底面に自然石が6個みられ、それらに混って摺鉢の底部小片が1点出土している。

#### 第6号土壌 (Fig. 34, PL. 23)

F区の中央部にあり、この部分で段が付き北側が拡がっている。この段を境にして北側をF区北、南側をF区南とする。第6号土壌は丁度境にあって北・東側は低く、南・西側は高くなっている。

平面プランはほぼ長方形で長軸3.4m、短軸2.7m、深さ1.30mで第4号土壌と同じで深い。出土遺物は、ほとんどなく土師器小片であるが、覆土中や底面から自然石が多量に検出されている。

#### 第7号土壌 (Fig. 22, PL. 24)

F区北のほぼ中央にある方形の大ピットであり長軸2.4m、短軸2.2m、深さ1.65mを測る。底面も上面とほぼ同じ大きさであり、底面より上方に垂直に立ち上がる。部分的には底部の角が大きくフラスコ状に立ち上がる壁部もある。

第7号土壌は、F区北ピット群と重複しており、この土壌が古いことが判明する。

覆土は底面より水平に近く、そして中ほどでは中心部が高く凸面状に堆積しているが特徴である。底面直上にやや上位より炭化物を含む有機物混入土がある。

出土遺物は、土師器、青磁片、煙管、銅銭、(85頁) 近世陶器などがあり、藁状のものも出土している。

#### 出土遺物 (Fig. 23・49・50 PL. 25・49・50)

14~18は土師器小皿で口径7.1~7.6cm、底径5.6~6.3cm、器高1.2~1.4cmを測る。器面はヨコナデが、内底にはナデが施され底面には糸切り痕と板目がみられる。胎土は精良で、焼成は良好、色調は灰褐色を呈す。なお、16・18は少々歪む。19は土師器杯で、口径12.6cm、器高2.9cm、底径8.7cmを測る。器面はヨコナデ、内底にはナデが施され、底面には糸切り痕と板目がみられる。胎土は精良で、焼成は良好、色調は淡黄褐色を呈す。20は、青磁碗の口縁部片で口径15.0cmあり、内面に楕歯文がみられる。胎土は白味の灰色で、釉は淡緑色を呈す。

煙管は (Fig. 49-3, PL. 49-3), 先端部がラッパ状に開き、木芯に青銅を巻き付けている。

#### 第8号土壌 (Fig. 22, PL. 24)

F区北にあり、第4号と第7号土壌の中間に位置している。平面プランは長方形で長軸1.8m、短軸1.40m、深さ0.45mを測る。底面もほぼ上面と同形であり上面にはやや緩傾斜で立ち上がる。

出土遺物は土師器片があり、この土壌には自然石はみられない。

#### 出土遺物 (Fig. 23, PL. 25)

21は、土師器小皿で口径7.0cm、器高1.4cm、底径5.7cmを測る。器面はヨコナデ、内底はナ

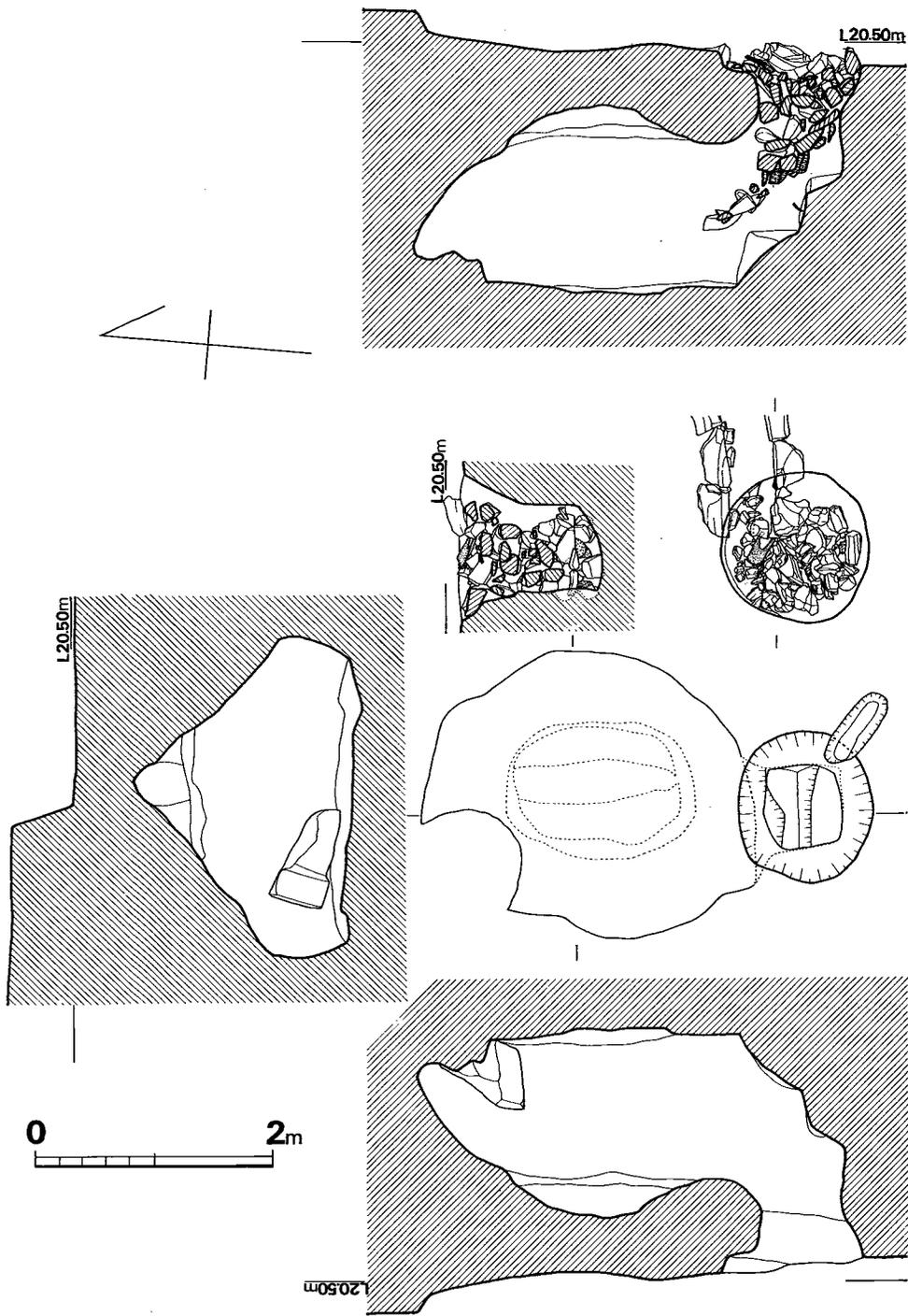


Fig. 24 中屋敷遺跡第I地点地下式土壙実測図 (縮尺1/60)

デが施され、底面には糸切り痕と板目がみられる。胎土は精良で、焼成は良好、色調は淡褐色を呈す。若干歪んでいる。

### (3) 地下式土壙 (Fig. 24, PL. 26)

C区とF区北の境にあり、入口部は石組遺構と重複している。入口部はほぼ円形であり自然石によって閉塞して、自然石は小石が多く階段部まで落ち込んでいる。入口部の上径は $1.20 \times 1.10m$ で、深さは階段部まで $1m$ 程である。階段部は二段みられ、床面方が高くほぼ45度の勾配で下る。入口部上面より土壙の床面までの深さは $2m$ である。

土壙の床面プランは隅丸長方形に近いが奥壁と左側壁の隅は自然石があって掘削を止めている。床面の長さ $2.75m$ 、最大幅 $2.45m$ で、天井までの高さは $1.85m$ である。床面は中央部が凹んでいてやや凸凹であり、奥壁は床面より直接天井部へ内傾してのびる。両側壁は外傾して丸味を持ち壁高約 $60cm$ で、天井部に内傾してゆく。天井部は山形で中央部が一番高くなっている。なお、閉塞石は二次的なものの可能性がある。

出土遺物は、入口部の閉塞石上に鉄製鍬身があるが、これは近世のものと思われる。閉塞石に混って片口があり、土壙の覆土中より土器片と下駄状の木材があるが、下駄かどうかは不明である。その他、若干の木片がある。

#### 出土遺物 (Fig. 25, PL. 30)

1は、摺鉢片でやや軟質の陶器質のようであるが部分的に瓦質の感もある。内面に6本1組の沈線があり、内底にも同心円状に沈線がみられる。胎土は粗砂をやや含み、焼成は良で、色調は外面赤暗褐色、内面灰黒色を呈す。2は、瓦質の口縁部小片で器形は不明であるが、口縁

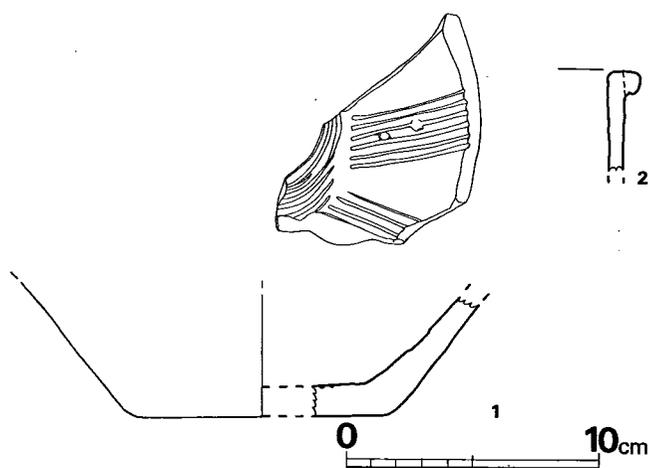


Fig. 25 中屋敷遺跡第I地点地下式土壙出土土器実測図 (縮尺1/3)

端部の外面に突帯を貼り付けている。

### (4) 土壙墓

(Fig. 26-27, PL. 27-30)

人骨片の検出されたものもあり、その他形状や出土遺物等より土壙墓としたものが4基ある。D区とF区北の二ヵ所に集中している。

#### 第1号土壙墓

(Fig. 26, PL. 27)

D区の東斜面にあり、黒褐色土の埋土と共に炭が極少量

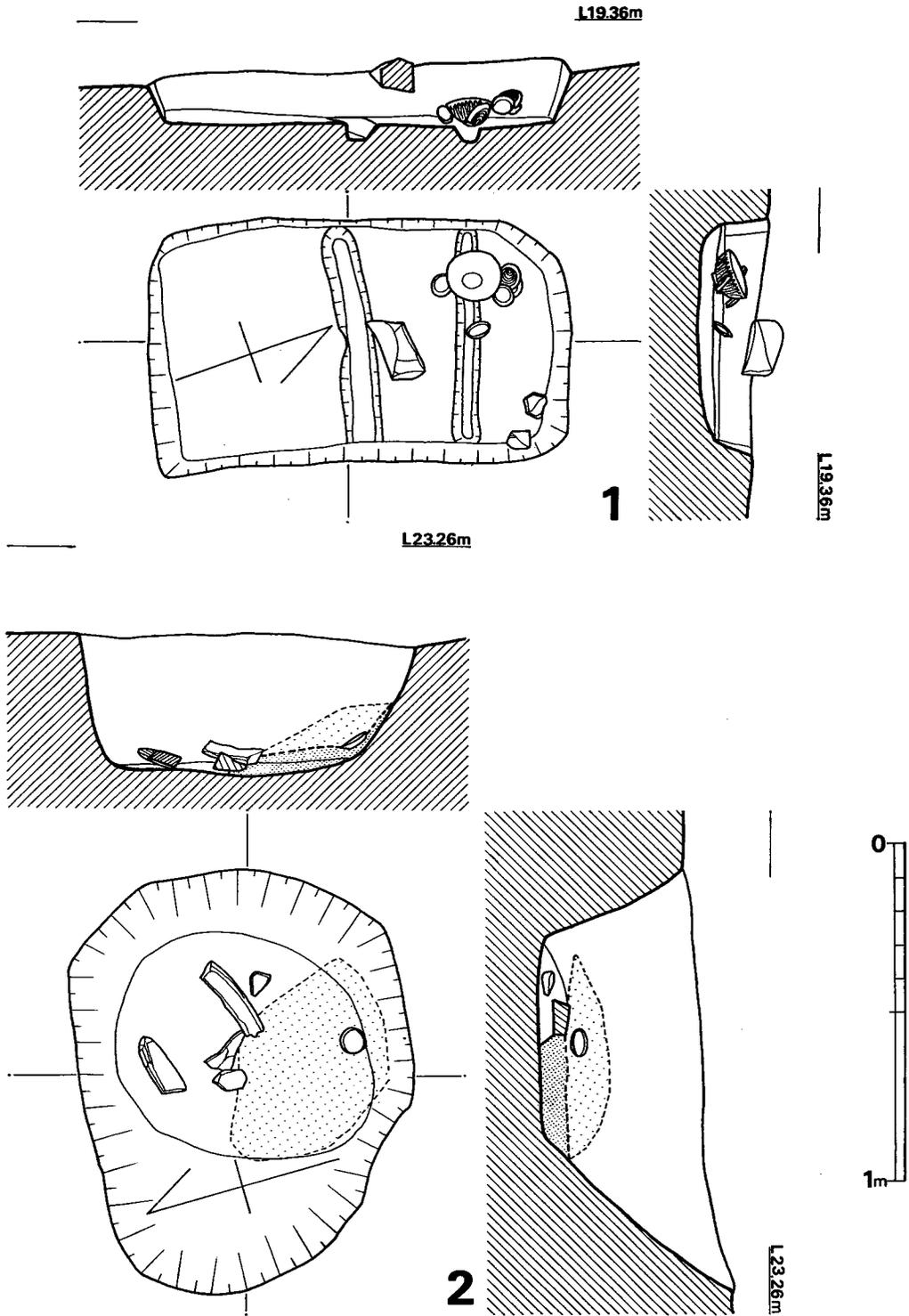


Fig. 26 中屋敷遺跡第I地点第1・2号土壙墓実測図 (縮尺1/20)

発見された。炭のみで焼土等はみられず火葬墓ではないと思われる。骨片が海綿体及び粉状にて数片認められる。平面プランは隅丸長方形であり上面の長さ125cm、幅73cm、深さは20cm、床面も上面と同形であり長さ113cm、幅63cmを測る。壁は西方のみがほぼ直であるが他の三壁は緩傾斜で立ち上がる。床面の中央部と、中央と北壁の中間点(全長の3分の1地点)に短側壁に平行に二条の溝がある。共に両長側壁間にあつて床面の短側長と同じ長さであり、幅は7~11cmであり、深さは床面より5cm程で断面は「U」字状を呈す。この溝状遺構は棺を置く時に溝内に木材を入れて木台とした痕と思われる。このことよりすると当墓は木棺墓の可能性はある。

副葬品は、北壁と東壁の隅近くに集中して床面直上より土師器小皿5と完形の青磁碗1が出土している。このことより頭位は北側と思われる。覆土中に自然石3個がみられる。

#### 出土遺物 (Fig. 27, PL. 30)

1~5は土師器小皿で、口径7.7~8.5cm、底径5.2~5.8cm、器高1.25~1.6cmを測る。器面はヨコナデが、内底にはナデが施され底面には糸切り痕がみられる。胎土は、わずかに砂粒を含むが精良で、焼成は良好で、色調は淡黄褐色と茶褐色を呈す。6は、青磁碗の完形品である。口径16.9cm、底径5.3cm、器高6.6cmを測る。外面は鑄蓮弁文、内面は無文であり、両面の口縁部に細い貫入がみられる。胎土は灰色で、釉は緑がかかった灰色を呈す。7は、白磁の八角坏で、復元口径8.5cm、器高3.6cm、高台径4.1cmを測る。ロクロ成形後胴部と口縁部を八面に、高台豊付き部を四面に削り成形している。胎土は灰色で高台脇まで施釉しており、内外に貫入がみられ、見込み部に四ヶ所の目土が残る。

#### 第2号土壙墓 (Fig. 26, PL. 28)

D区にあり第1号土壙墓の北西方4m離れたところに位置している。平面プランは不整の楕円形で、上面の長さ129cm、幅98cm。床面は内形を呈し径73cm、深さ50cm程である。壁は西方部のみが緩やかに立ち上がるが、他はほぼ直に立ち上がる。床面の南西方の約半分に炭層がみられる。他方の北東方の半分には自然石が5個不規則にある。

副葬品は炭上面に土師器小皿1が出土している。

#### 出土遺物 (Fig. 27, PL. 30)

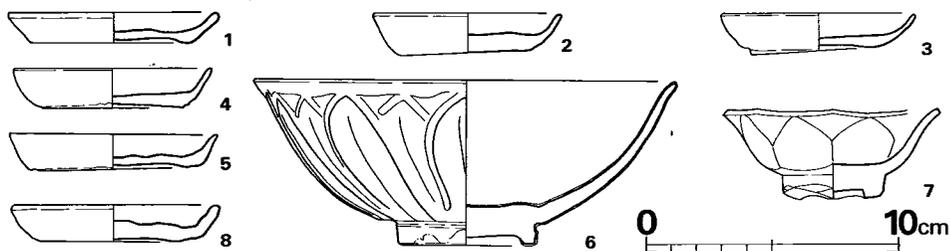


Fig. 27 中屋敷遺跡第1地点第1・2号土壙墓出土土器実測図(縮尺1/3)

8の土師器小皿である。口径8.3cm, 底径6.7cm, 器高1.5cmを測る。器面はヨコナデが施され、底面には糸切り痕がみられる。胎土は精良で、焼成は良、色調は暗茶褐色を呈す。

### 第3号土壙墓 (Fig. 28, PL. 28-29)

F区北にあって第4号土壙墓と重複しており、第3号墓が新しい。平面プランは長方形で長さ188cm, 幅80cm, 深さ30cmを測る。床面も長方形で長さ158cm, 幅48cmであり木棺墓を想定させる。壁は直ではなくかなりの緩傾斜で立ち上がる。

副葬品は北壁に沿った状態で鉄製刀子, 床面の南方に摺鉢片2が出土している。

#### 出土遺物 (PL. 29)

鉄製刀子, 摺鉢片は現地で盗難を受け行方不明であり, 調査員は恥るばかりである。

### 第4号土壙墓 (Fig. 28, PL. 28-29)

第3号土壙墓と重複していて西側にある。平面プランは長方形で上面の長さ155cm, 幅81cm, 床面の長さ136cm, 幅61cm, 深さ25cm程である。壁は四壁ともやや緩に立ち上がる。床面の西側に自然石が6個みられ, 東側には径22cmの円形ピットがあるが, この土壙墓に伴うかどうかは定かでない。副葬品はみられない。

## (5) その他の遺物

遺構以外の表土層や, 遺構検出面までの第2層である包含層内から大量の歴史時代の遺物が出土している。これらは, 場所によって若干伴出物が異なるが, 包含層が薄いために層位別に出来ず, また, 覆土そのものが現代のブドウ畑等によって攪乱されており, ここでは器種ごとに分けたいにすぎない。それには, 土師器小皿, 坏, 高台付坏, 須恵質および瓦質土器, 土鍋, 片口, 火舎, 茶釜形土器, 瓦器, 青磁, 白磁, 雑器, 緑釉, 陶器。土製品では分銅形土製品, 土鈴。石製品には滑石製品の石鍋, 砥石, 硯, 石臼。金属製品。銅銭。鋳物関係遺物がある。

### 土師器小皿 (Fig. 29, PL. 32)

1~45以外にも同様な小皿は約100個近く出土している。口径7.1~10.0cm, 底径4.8~7.8cm, 器高0.85~2.0cmを測る。器面は剝落や磨滅しているものが半数ほどあるが総じてヨコナデ, 内底にはナデが施されているものもある。底面は総て糸切り痕が, 内にはさらに板目がみられるものもある。胎土は砂粒をほとんど含まず精良なものがほとんどで, 焼成は良好なものが多い。色調は淡褐色, 茶褐色, 少量であるが黄褐色を呈している。

### 土師器坏 (Fig. 30, PL. 32)

小坏 1~4で口径9.3~11.4cm, 底径5.2~6.7cm, 器高2.2~2.5cmを測る。器面はヨコナデ, 内底にはナデが施され, 底面には糸切り痕と板目がみられる。胎土は少し砂粒を含むがほぼ精良であり, 焼成は良好, 色調は褐色, 4は暗茶褐色を呈す。全体に歪んだ土器が多く, 1は磨滅が著しい。

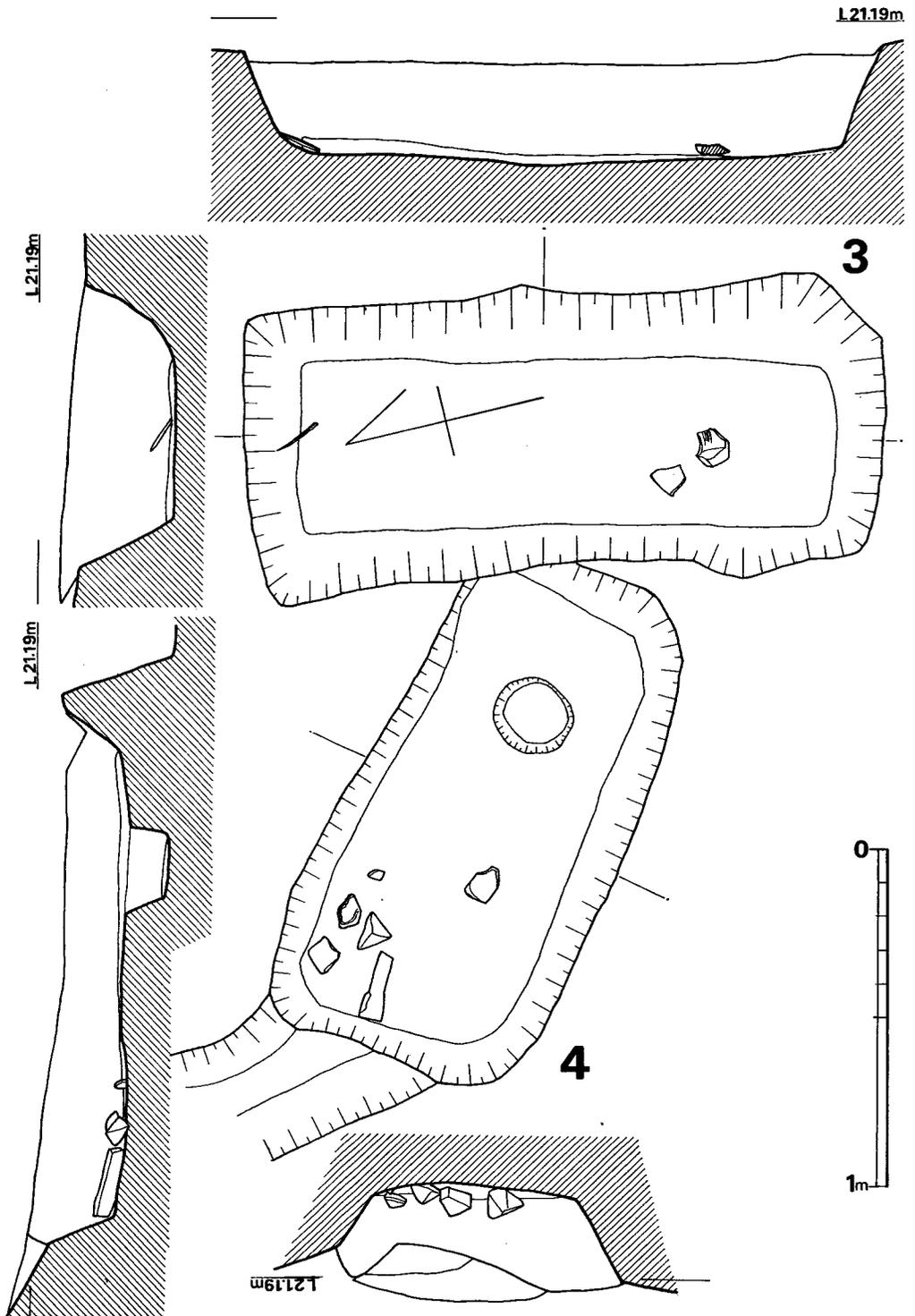


Fig. 28 中屋敷遺跡第I地点第3・4号土壌墓実測図 (縮尺1/20)

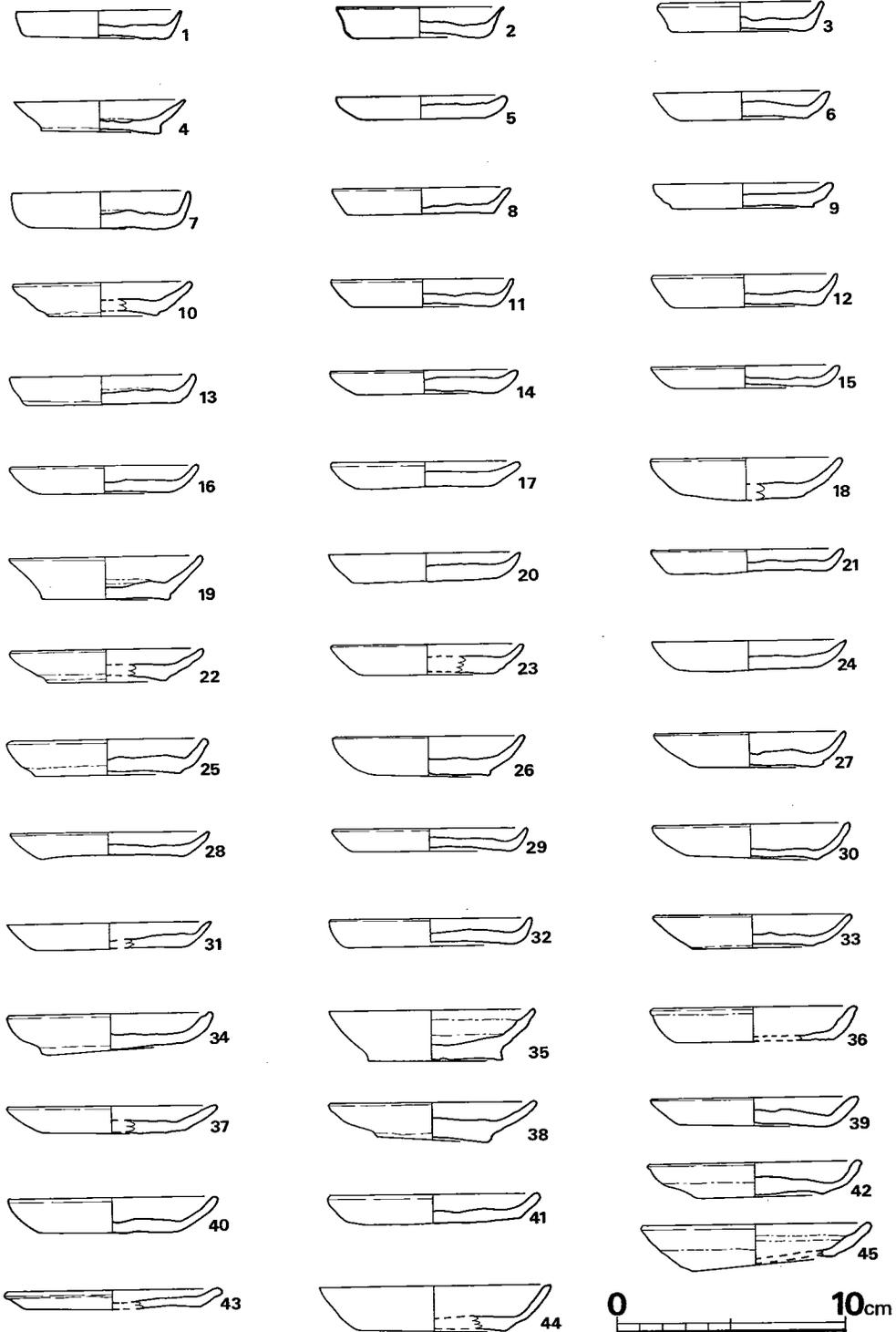


Fig. 29 中屋敷遺跡第 I 地点出土土師器実測図① (縮尺1/3)

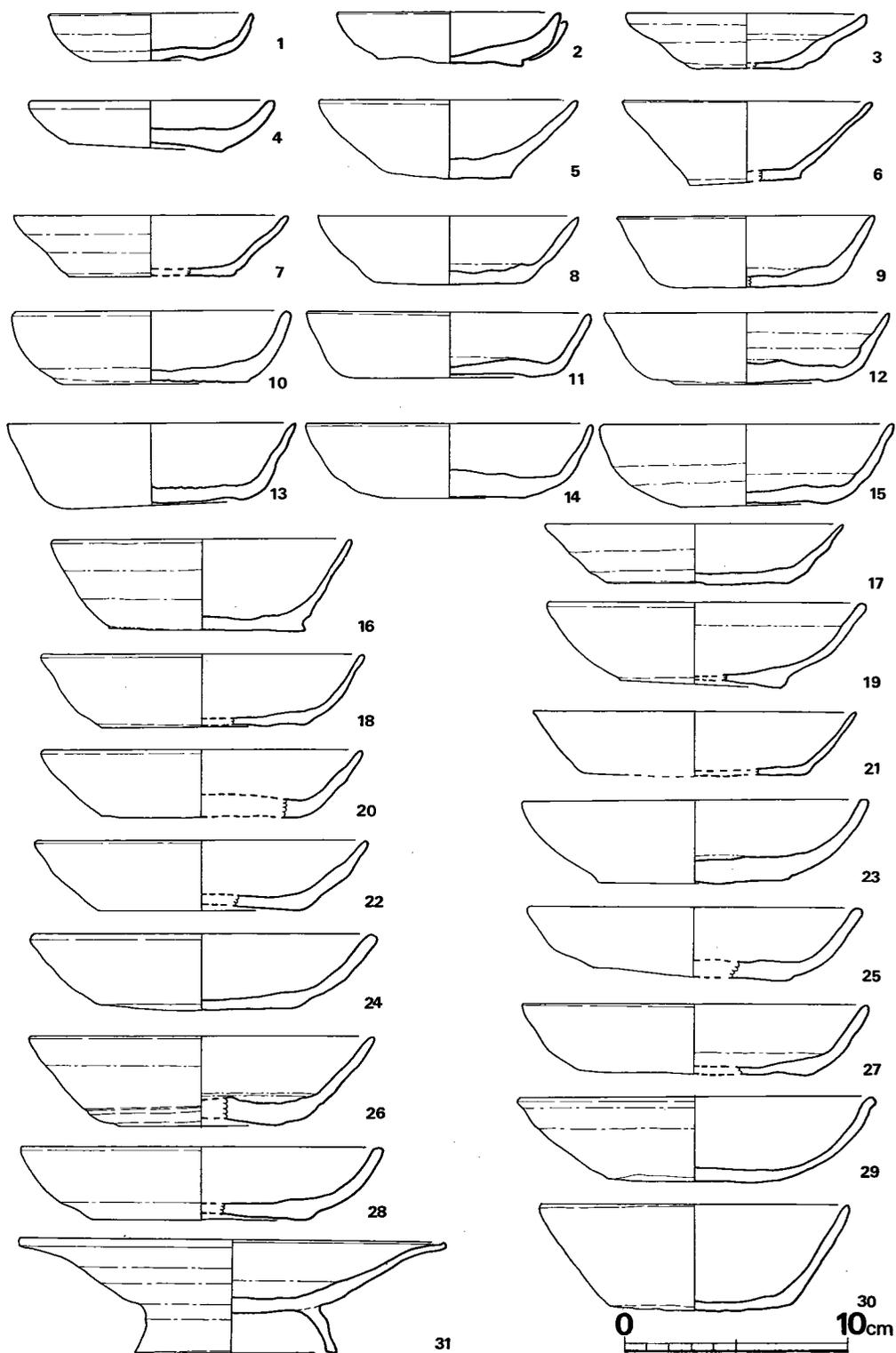


Fig. 30 中屋敷遺跡第I地点出土土師器実測図② (縮尺1/3)

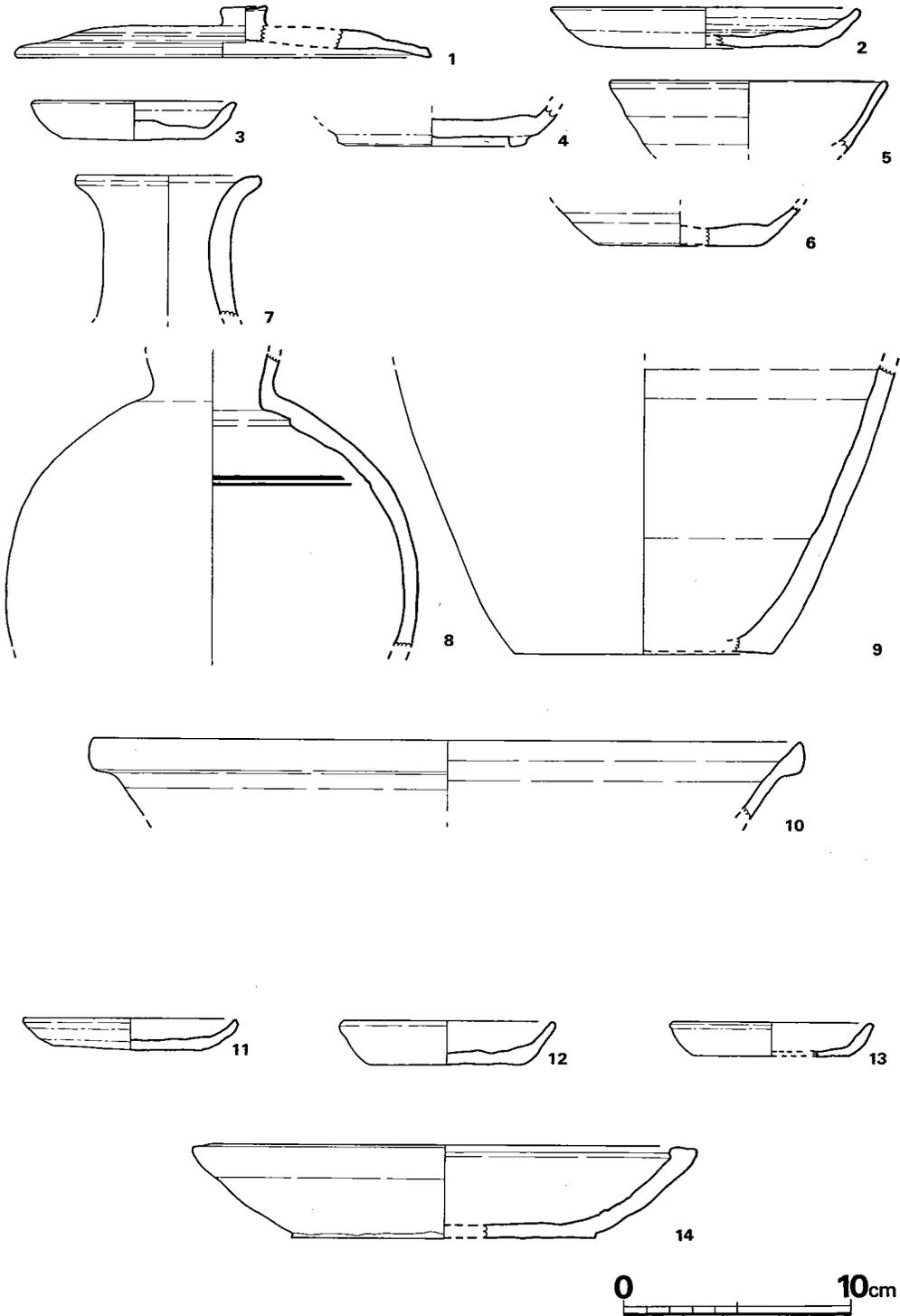


Fig. 31 中屋敷遺跡第I地点出土須恵器・瓦質土器実測図（縮尺1/3）

深杯 5・6は器高が高く口径と底径の差が著しく異なるので深杯とする。口径11.3cm, 底径5.0~5.4cm, 器高3.5~5.0cmを測る。器面はヨコナデが, 内底にはナデが施され, 底面は糸切り痕がみられる。胎土はわずかに砂粒を含むも精良で, 焼成は良, 色調は5が褐色, 6は白褐色を呈す。

杯 7~29を杯とした。口径12.3~16.2cm, 底径6.7~10.3cm, 器高2.8~4.1cmを測る。内面はヨコナデが, 内底にはナデが施されているものもある。底面には総て糸切り痕が, さらに板目のみられるものもある。胎土は少し細砂粒を含むものもあるがほとんどは精良であり, 焼成は良好と良で, 色調は茶褐色, 灰褐色。白褐色を呈するものも若干ある。

碗 30は, 口径14.0cm, 底径8.2cm, 器高4.8cmを測る。器面はヨコナデ, 内面はナデが施され, 底面にはヘラ切り痕がみられる。胎土は精良で, 焼成は良, 色調は淡褐色を呈す。

高台付杯 31は, 高台が付くもので口径19.1cm, 底径9.0cm, 器高5.1cmを測る。高台は高く端部方に「ハ」の字状に開く。器面にはヨコナデが, 内底にはナデが, 高台部分もナデが施されている。胎土は精良で, 焼成は良, 色調は淡褐色を呈す。

#### 須恵器 (Fig. 31, PL. 33)

須恵質のものが含まれているかとも思われるが, 須恵器と須恵質を明確に区別しがたく須恵器として取り扱う。

1は, 蓋でつまみが付く。口縁部径18.1cm, 器高2.3cmを測る。天井部, 体部の器高が低く, 口縁端部は先尖りに外反している。内外面はヨコナデが施されている。色調は青灰色を呈す。2は, 杯で口径14.7cm, 器高1.8cmを測る。底部はヘラ切りの後, ナデを施し, 内底面, 体部の内外面はナデである。色調は青灰色である。3は, 小型の杯で口径9.1cm, 器高1.75cmを測る。底部はヘラ切りで, 体部はヨコナデで, 内底はナデを施している。色調は灰黒色を呈し, 須恵質である。4は, 高台付杯と思われ, 高台は低く底径8.2cmを測る。色調は青灰色を呈す。5は, 杯の口縁部片で口径12.0cmを測る。体部はヨコナデが施され, 色調は灰色を呈す。6は, 杯の底部片で7.2cmを測る。色調は, 明緑灰色を呈す。7は, 長頸壺の口頸部片で, 口径8cmを測る。口縁部は大きく外反して端部は丸い。色調は白灰色を呈す。8は, 長頸壺の胴部片で, 体部は球形であり口頸部は頸部より外反し開いている。内外面ともヨコナデが施され, 色調は灰色を呈している。なお, 前記7とは同一個体ではない。9は, 壺の胴部片と思われ, 底径11.5cmを測る。色調は灰黒色を呈す。10は, 口縁部で口径31.0cmを測る。内外面ともヨコナデが施され, 色調は灰色を呈している。

#### 瓦質土器 (Fig. 31, PL. 33)

11~13は小皿で, 口径8.4~9.4cm, 器高1.5~1.9cmを測る。体部はヨコナデ, 底面は糸切り

痕がみられる。胎土は精良であり、焼成は良で、色調は灰黒褐色を呈している。14は、大型の坏で、口縁端部は内側に丸く突き出して太くなっている。内面体部はヨコ方向の刷毛目が施され、外面体部は指先による成形痕の上にヨコナデがみられるが器面の凸凹が著しい。底部には板目がみられるようである。色調は体部が黒灰色、底部外面は黒色を呈している。

#### 土 鍋 (Fig. 32, PL. 33)

1～3とも底部を欠く口縁部破片である。1は、体部から大きく外反して口縁部はやや丸味を持って内反していて、口径43.5cmである。口縁はヨコナデ、体部内面は刷毛目を施している。体部外面には指先による成形痕を残す。胎土は砂粒を含み、焼成は良、色調は内面褐色、外面灰色を呈す。2は、体部から口縁部にかけての口頸部が一度内彎して大きく口縁部に外反し、口縁端部はやや跳ね上がり口径33.5cmである。内外面剝落が著しく不明な点が多いが口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は刷毛目を施している。体面外面は上半が指先による成形痕が残り、凸凹がはげしくみえる。下半は刷毛目のようである。胎土は砂粒をやや多く含むも密であり、焼成は良好、色調は内面の口縁部橙灰色、体部は暗褐色、外面は暗褐色でほぼ一面にスガが付着している。3は、体部から口縁部にかけて大きく外反するが、口縁部は短く体部より器肉が薄く、口径31cmを測る。口縁部はヨコと斜めのナデで、体部内面は細かく密に刷毛目を施している。体部外面は指先による成形痕の上にやや雑に刷毛目が部分的にみられる。胎土は精良で、焼成は良好、色調は内面が淡黄褐色、外面はそれにスガが付着していて黒褐色を呈している。この他、土鍋の破片は約10個体分出土している。

#### 片 口 (Fig. 32, PL. 33)

4～7で、いずれも破片であり、片口部のあるものは7のみである。4は口径24.6cmで器肉も薄くやや小型のものと思われる。体部内面に斜め方向に刷毛目、その上にたて方向に5本1組の沈線がみられる。体部外面には指先による成形痕を残す。胎土は砂粒を含むも密であり、焼成は良で、色調は白灰色を呈し、瓦器質である。5は、口径26.0cmで器肉が厚く口縁端部は太く丸味をもつ。体部内面の上位は刷毛目を施し中位もやや雑な刷毛目のようであるが、磨滅が著しく詳細は不明である。体部外面は口縁部直下まで刷毛目がみられるが、その下位は指先による成形痕を残す。しかし外面も磨滅が著しく詳細は不明。胎土は砂粒を少し含む精良であり、焼成は良で、色調は白灰色を呈し、瓦器質。6は、口径26.1cmで口縁端部は直線的である。体部内面にはヨコ・斜方向の刷毛目が施され、タテ方向に6本1組の沈線がみられる。口縁端部の平坦面にも刷毛目がみられ、体部外面は指先による成形痕の上にヨコ方向の刷毛目が口縁部直下にあり、その下位には部分的に短いタテ方向の刷毛目が施されている。胎土には砂粒を若干含むも密であり焼成は良好で、色調は淡褐色を呈している。7は、底部まであって、

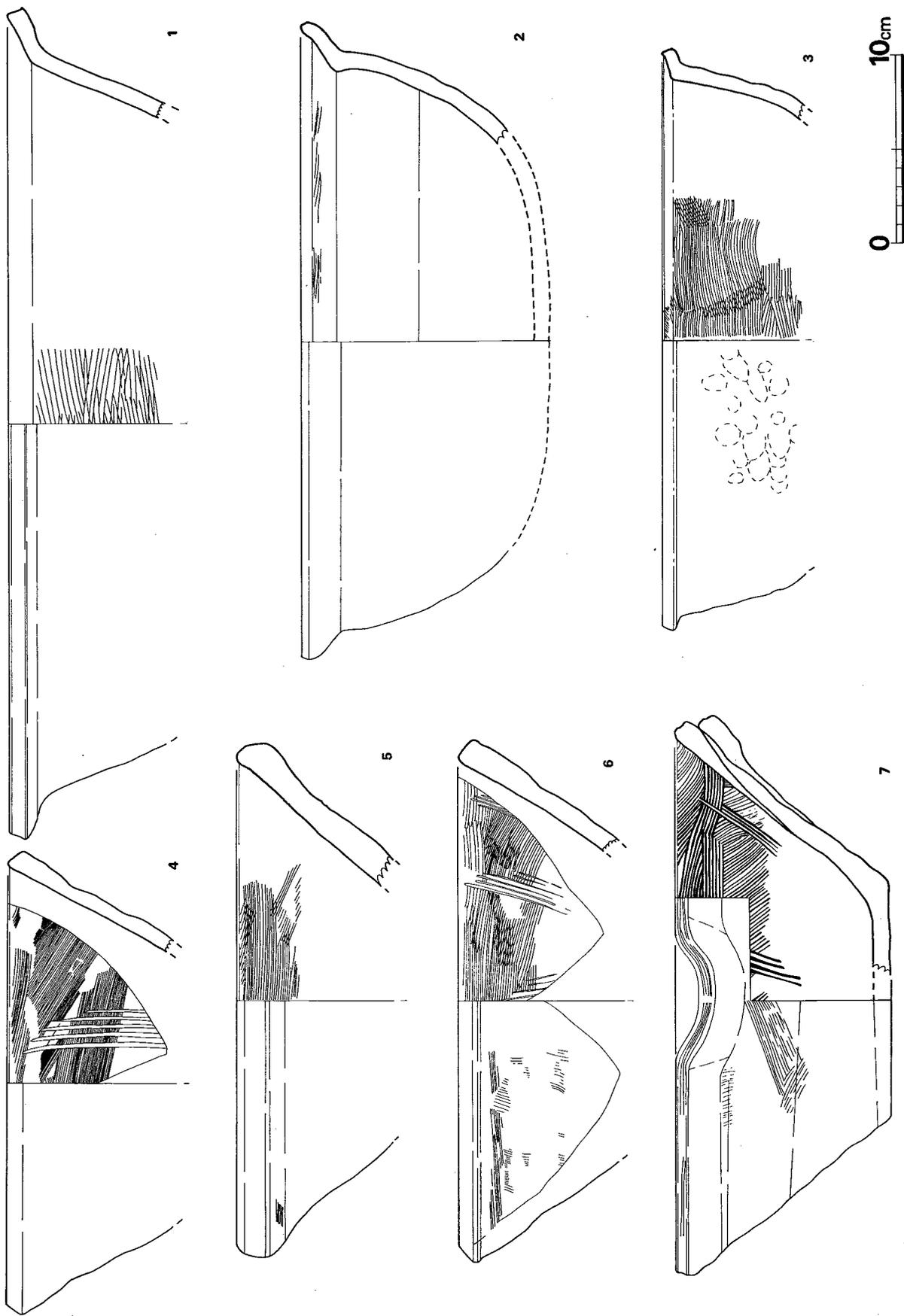


Fig. 32 中屋敷遺跡第 I 地点出土土鍋・片口実測図 (縮尺1/3)

また、片口部もみられる。口径28.5cm、器高11.5cmを測り、口縁端部に沈線がめぐる。体部内面には口縁端部下より、斜め一ヨコ斜め方向の刷毛目が施され、タテ方向に4本1組の沈線が九ヶ所にみられる。外面体部は口縁部にヨコ方向の刷毛目、それより下位の体部には指先による成形痕がみられその上に部分的に雑な斜め方向に刷毛目を施している。胎土は砂粒をほとんど含まず密であり、焼成は良、良調は内面明灰色、外面は黒色と灰色を呈し、瓦器質である。

この他、片口は約10個体分の出土をみる。

### 火 舎 (Fig. 33, PL. 33)

1～4で、共に口縁部片である。1は、口径33.6cmで、口縁部は器肉が厚く、外面には二条の

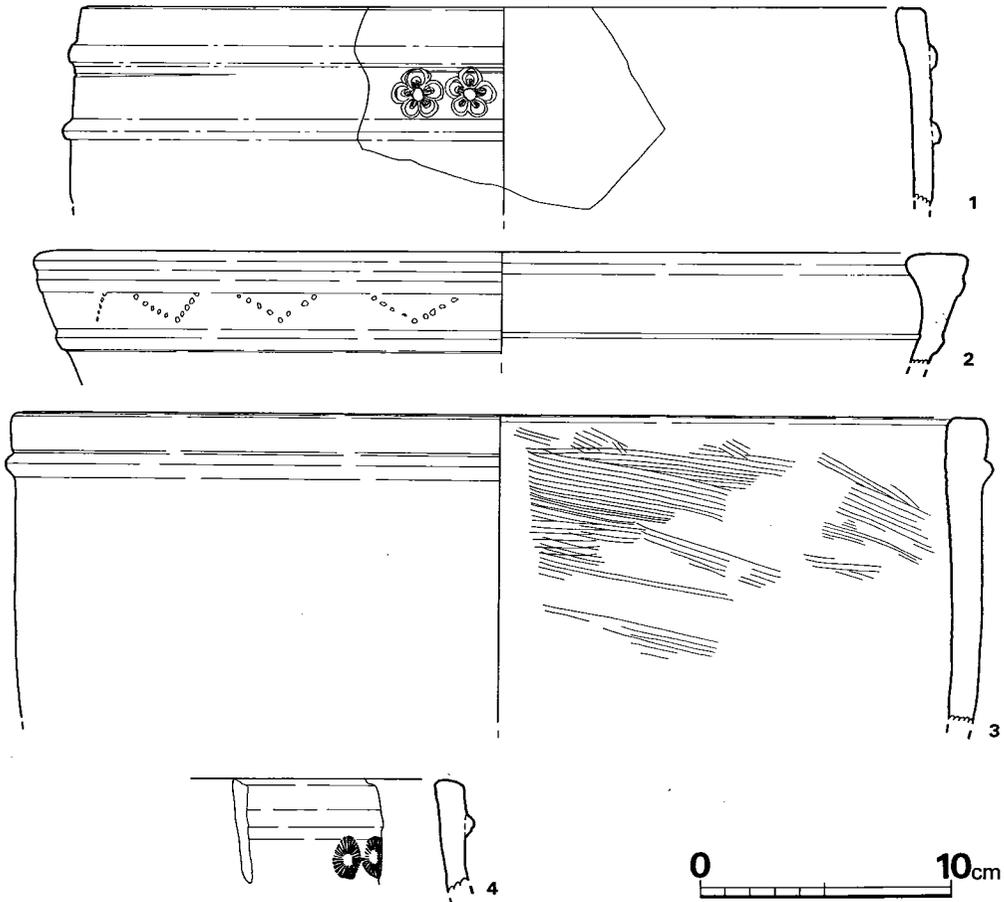


Fig. 33 中屋敷遺跡第I地点出土火舎実測図 (縮尺1/3)

突帯がめぐり、この二条の間に梅花文が付く。体部内面は粗いヨコ方向の刷毛目のようであり、口縁部内面から外面にかけてはヨコナデである。胎土は、わずかに細かい砂粒を含むも精良で、焼成は良で、色調は内面が淡灰黒色で外面は灰白色を呈し、瓦質である。2は、口径37.0cmで、口縁端部が極端に太く内側に丸く張り出している。外面の口縁端部下に二条の突帯がめぐり、この突帯間に円形の刺突文があって「V」字状を呈し、この「V」字状が1組となり何組かで全周するものと思われる。器面は内外ともヨコナデが施されており、胎土は精良で、焼成は良、色調は灰褐色を呈し、土師質である。3は、口径38.5cmで体部の下位より口縁端部にかけて器肉が厚くなっていて、外面の口縁端部に一条の突帯がめぐり、体部内面は斜め方向のナデが施され、外面は剝落が著しく不明である。色調は内芯が黒色で、内外面の表面は白灰色を呈し、瓦質である。4は、小破片であり、口径は復元できない。外面の口縁端部下に一条の突帯がめぐっているのが見え、その下位に菊花文がある。色調は内芯が白灰色、表面は黒灰色を呈し、瓦質である。他に底部片と思われるのが1片ある。

#### 茶釜形土器 (PL. 33)

PL. 33-(2)は、小破片のため図示しないが茶釜形土器と思われる口縁部破片である。直立する口縁部から胴部は丸くつづき、口頸下1.5cmで有孔耳がついている。胴部内面はヨコ方向の刷毛目、口縁部内外面はヨコナデである。胎土は精良、色調は灰黒色を呈している。

#### 瓦 器 (Fig. 34, PL. 33)

1～9は、口径14.8～17.8cm、底径3.4～7.5cm、器高5.5cm前後を測る。内面は研磨されているものがほとんどで、外面はヨコナデが施されているものが多いが5・7は研磨されている。底部外面をみると9は糸切り痕があり、その上から高台が付けられている。その他は剝落、磨滅が著しく不明瞭である。胎土は精良なものが多く、焼成は良、色調は内面が白灰色、灰黒色で、外面が灰色、黒灰色を呈するものがほとんどである。10は、底部片であるが底内外面に極めて細い鋭利なもので「×」字状に沈線を刻んでいる。

#### 磁 器 (Fig. 35～44, PL. 34～43)

第I地点の遺構に伴わない磁器は多量に出土している。できるだけ図化を試みたが総てを図示できなかった。

青磁、白磁とに分類し、さらに器形で分ける。磁器は量が多いため詳細にわたって記述しないことにする。

#### 青 磁 (Fig. 35～40, PL. 34～40)

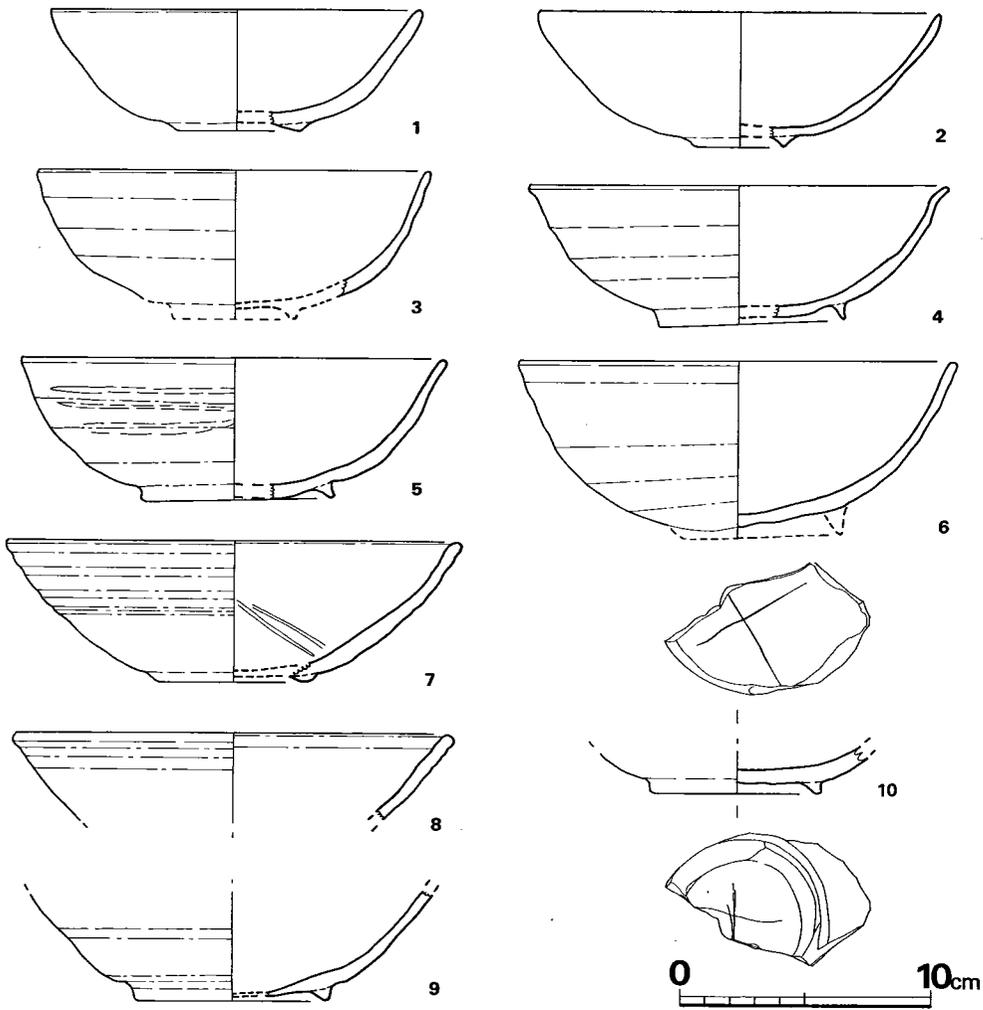


Fig. 34 中屋敷遺跡第I地点出土瓦器実測図 (縮尺1/3)

1-A類 (Fig. 35・36, PL. 34・35)

青磁碗で、外面に蓮弁が削り出されるか、描かれたもので、内面は無文で見込みに草花文がつくものもある。これには蓮弁をヘラによる沈線によって描かれたものを1-A-a類とし、蓮弁を削り出した鑄蓮弁のものを1-A-b類とする。

1-A-a類 (Fig. 36, PL. 34)

1は、蓮弁のみを描き鑄はみられない。胎土は灰色で、釉は黒味をおびたような深緑色である。内外面にやや粗い貫入がみられる。2は、底部片で鑄は不明瞭であるがかすかにみられる。胎土は灰白色で、釉は灰緑色である。

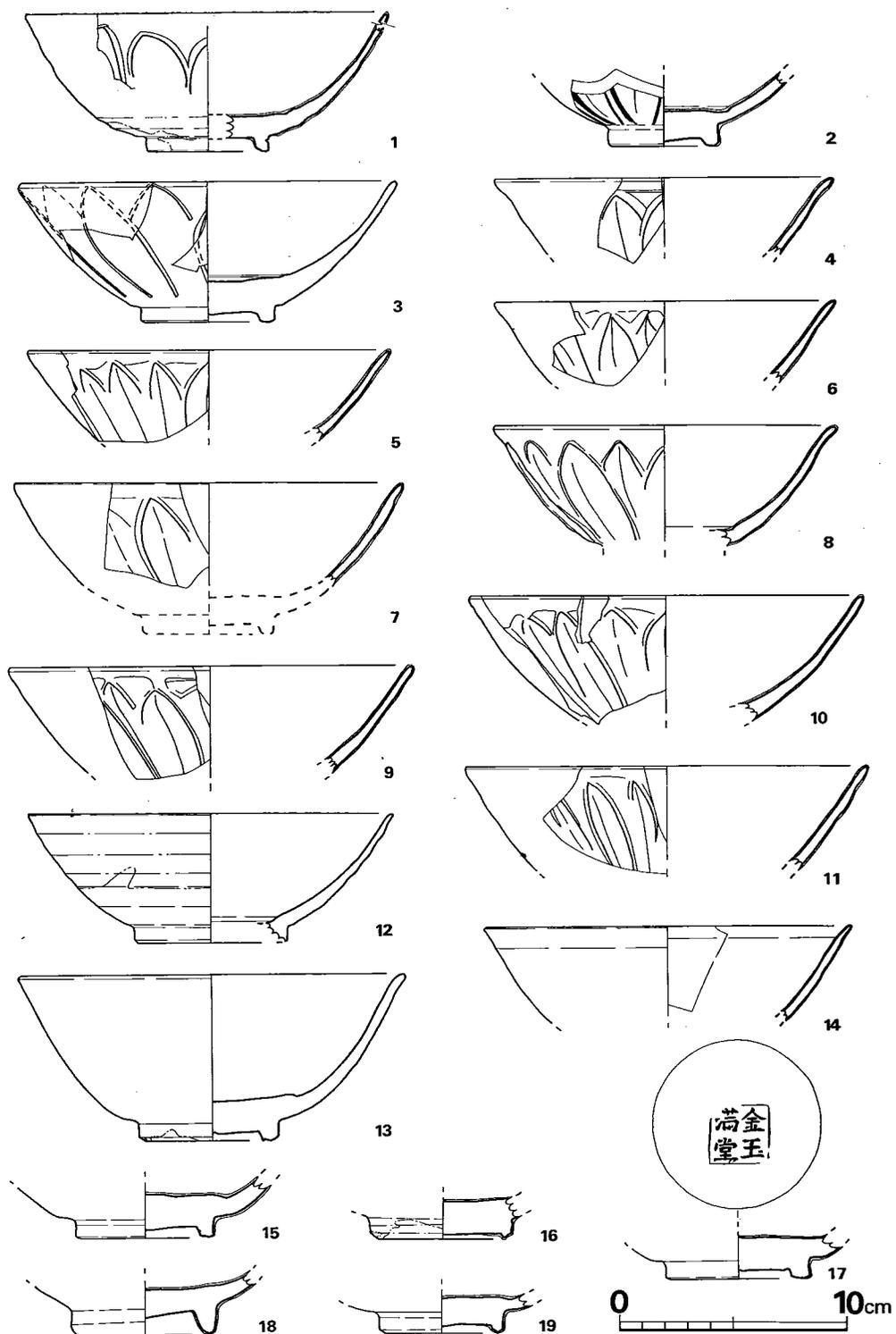


Fig. 35 中屋敷遺跡第 I 地点出土青磁実測図① (縮尺1/3)

## 1-A-b類 (Fig. 35・36, PL. 34・35)

3は、鎬蓮弁が合計15みられる。胎土は砂粒をあまり含まず良好で淡灰色、釉は暗淡黄緑色であり、底面の一部を欠き全面にかかる。内外面とも小さなタテ方向の貫入がみられる。4は、小破片で胎土は灰白色、釉はやや濃いうぐいす色である。5は、口径15.9cmを測り、胎土は灰白色で、釉は緑がかった青色である。気泡が若干ある。6の胎土は灰白色で、釉はやや暗いうぐいす色である。気泡がある。7の胎土は灰白色で、釉はやや緑がかった水色である。8は、口径15.2cmを測り、胎土は灰白色で、釉は部分的に緑がかった淡茶褐色で、まだらになっている。9の胎土は淡茶褐色で、釉は緑がかった淡茶褐色である。両面に細い貫入があり、焼成は甘い。10は、口径19.4cmを測り、胎土は淡茶褐色で、釉は緑がかった淡茶褐色である。両面に細い貫入があり、焼成は甘い。11は、やや細身の鎬蓮弁文で、胎土は灰白色、釉はやや青味がかった水色である。若干気泡がある。Fig. 36-1は、口径15.5cmで、胎土は灰色であまり砂粒を含まず良好で、釉は淡青緑色で底部の一部を除いて全体にかかる。見込みにはかすかにみえる花文が描かれている。

## 1-B類 (Fig. 35・36, PL. 34・35)

青磁碗で、内外面無文のもので、見込みに文様や文字の印文がみられるものである。

12は、口径16.0cmを測り、胎土は灰白色、釉はわずかに緑がかった褐色である。内面に細い貫入がある。13は、ほぼ完形品で、胎土は暗灰色で、釉はやや厚くかかった部分は暗淡青緑色、薄くかかった部分は暗淡黄緑色で、底面の一部を除き全面にかかる。内外面とも細い貫入があり、内底には圈線状の沈線がある。14は、小破片のため詳細は不明であるが、胎土は灰色で、釉は緑がかった褐色である。15~19は、1-A、1-B類の底部と思われる。17の見込みには「金玉満堂」の印文が押されている。Fig. 36-2は、見込みに花文がわずかに見え、胎土は少し暗い白色で砂粒をあまり含まず良好で、釉は淡い薄く均等にかかる。内外面とも重円状の貫入がある。高台のつくりはやや雑であり、畳付けの幅が整っていない。3は、鎬蓮弁文がかすかにみえるようであるが明瞭でないため一応この類とする。見込みに草花文が刻まれていて、胎土は灰色で良好、釉はやや青味をおびた淡緑色である。高台は削り出しで端部を斜めに落して低く、畳付けの一部が露胎となる。4は、器肉の厚い底部片で、見込みに花文がみられ、胎土は淡灰色で良好、釉はわずかに青味をおびた淡い緑色でやや薄めにかかる。内面に細かな貫入、外面にはたて方向の小さな貫入がある。5は、高台がスマートで高い底部片で、胎土は淡灰色で良好、釉は淡緑色で畳付けまでかかっている。内外とも比較的大きめの貫入がみられる。6は、3と同じく外面に鎬蓮弁文がかすかにみられるようであるが明瞭でないためこの類にする。見込みに双魚文のような文様が刻まれて、胎土は暗白色で良好、釉は淡い緑色で厚くかかっておりそのため畳付けが丸味をもつようである。底部には中心のみに釉がかかっている。7は、底部が厚く、高台が高い底部片で、見込みに花文がみられる。胎土は暗白色

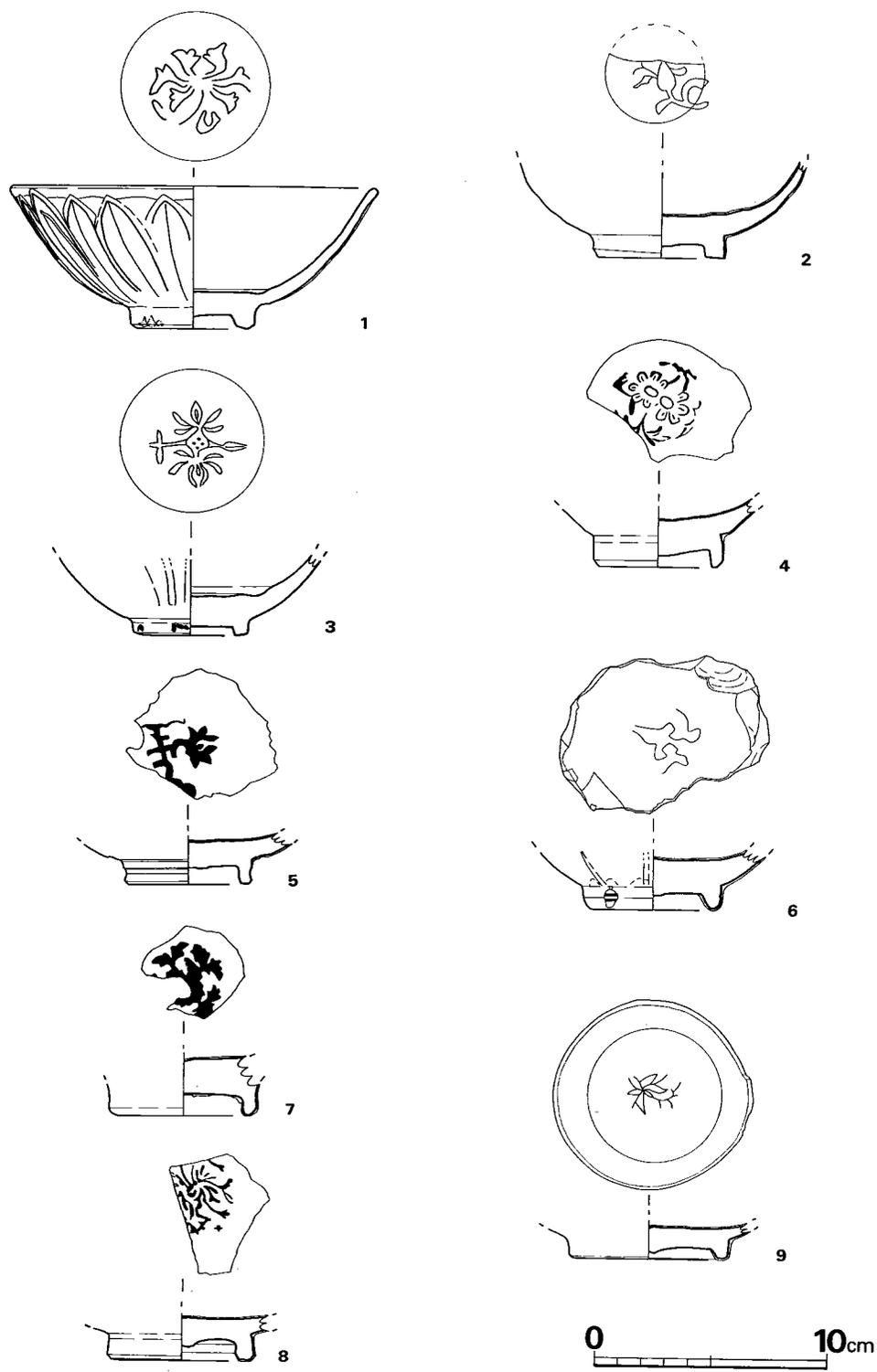


Fig. 36 中屋敷遺跡第 I 地点出土青磁実測図② (縮尺1/3)

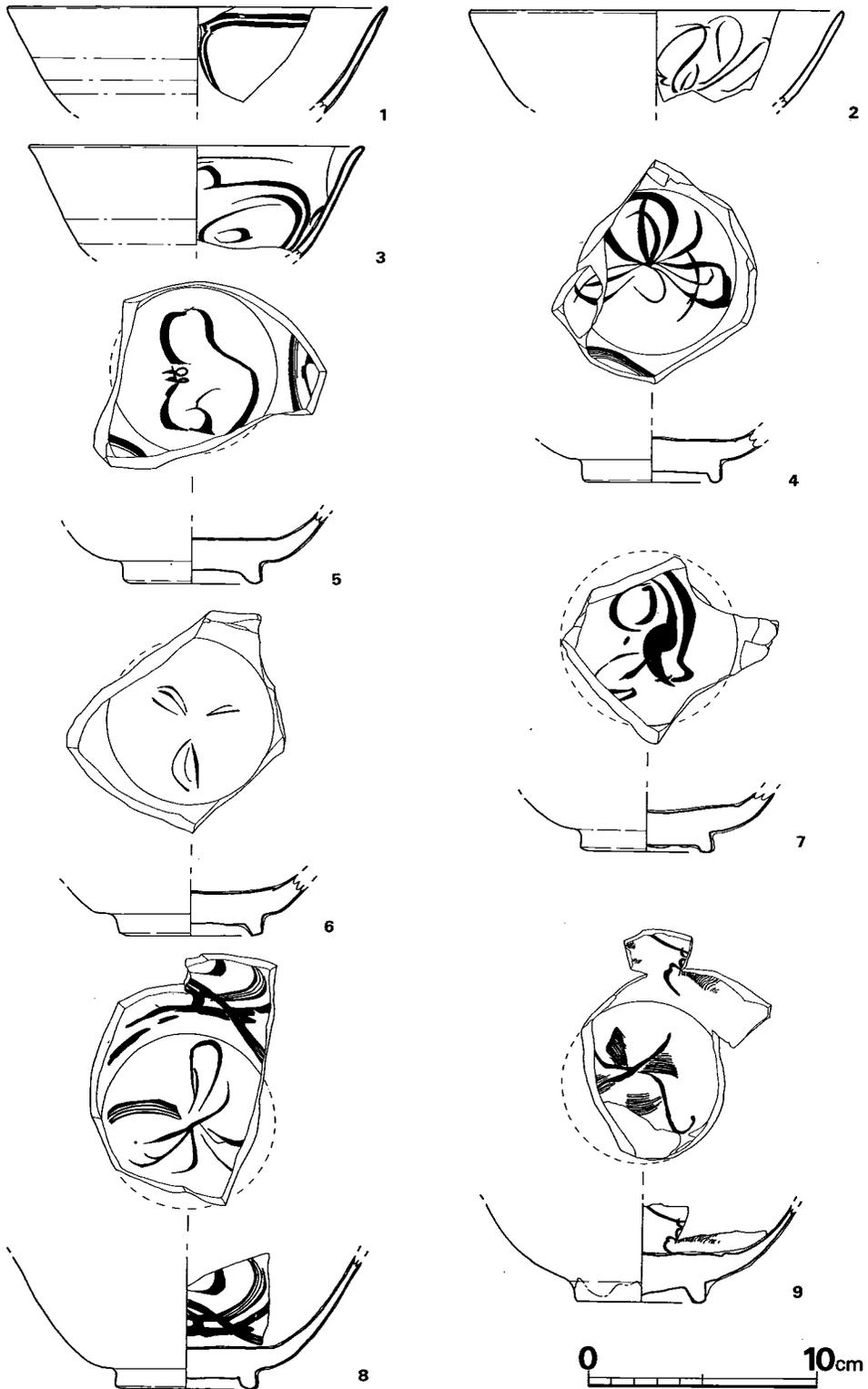


Fig. 37 中屋敷遺跡第 I 地点出土青磁実測図③ (縮尺1/3)

で良好、釉は緑色でやや厚めにかかる。8は、見込みに花のような文様がみられ、胎土は淡灰白色、釉は緑色で薄くかかる。内外面に小さな貫入がみられる。9は、見込みに花文と沈線がみられ、胎土は灰黒色で良好、釉は暗緑色でやや厚めに均等にかかり、底面にもかかっている。

#### 1-C類 (Fig. 37, PL. 36)

青磁碗で、外面は無文で、内面は沈線で区切られた区間に飛雲状文が描かれたもので、見込みにワラビ状の草花文が描かれたものも多い。

1は、口縁部の小片で内面に沈線がみられるが小破片のため沈線間に文様が知れない。胎土は灰色で、釉はわずかに緑がかった灰色である。

#### 1-D類 (Fig. 37, PL. 36)

青磁碗で、外面は無文で内面にヘラで蓮の花文が描かれ、見込みに花文やワラビ状の草花文が描かれたものが多い。

Fig. 37-2は、内面に比較的細い花文が描かれている。胎土は灰色で、釉は深緑色であり、ややかかりが悪いようである。3は、胎土が灰色で、釉はやや緑がかった灰色である。外面の口縁部近くに貫入がある。4は、見込みに草花文が描かれている底部片で、胎土は灰色で、釉は黄緑色である。全面に貫入と気泡がみられる。5は、胎土が灰白色で、釉は淡い緑がかった水色である。内面はかなりスレている。6は、胎土が灰色で、釉は黄緑色で底部にも若干かかっている。全面に貫入と気泡がみられ、高台内に焼成の跡が残っている。7は、見込みに比較的複雑な花草文が描かれている。胎土は灰白色で、釉は淡い緑がかった水色である。内面に貫入がみられる。8は、胎土が灰色で、釉は緑灰色である。

#### 1-E類 (Fig. 37, PL. 36)

青磁碗で、外面は無文で内面に細かい楕歯文やヘラ描き文が描かれたもので、見込みに同様な文様が描かれたものである。

9は、底部が非常に厚いもので、胎土は淡灰褐色でかなり粗であり、釉は深緑色で、斑点がある。全面に貫入と気泡がみられる。

#### 1-F類 (Fig. 38, PL. 37)

青磁碗で、外面に蓮弁文があり、その下に楕歯による条線が入られている。内面にはヘラと楕歯による文様が描かれている。見込みにヘラによる沈線が描かれているものである。

6は、外面にヘラ描きの蓮弁文と体部の口縁部より下に楕歯文がみられ、見込みにヘラがきによる文様が描かれている。胎土は暗灰色で良好、釉は暗淡青緑色であり、底面の内側にはとんどかかっている以外は全面に薄くかかる。外面の一部に横位の貫入がみられる。8・9・10は同一個体のもので同様のものと思われる。

#### 1-G類 (Fig. 39, PL. 38)

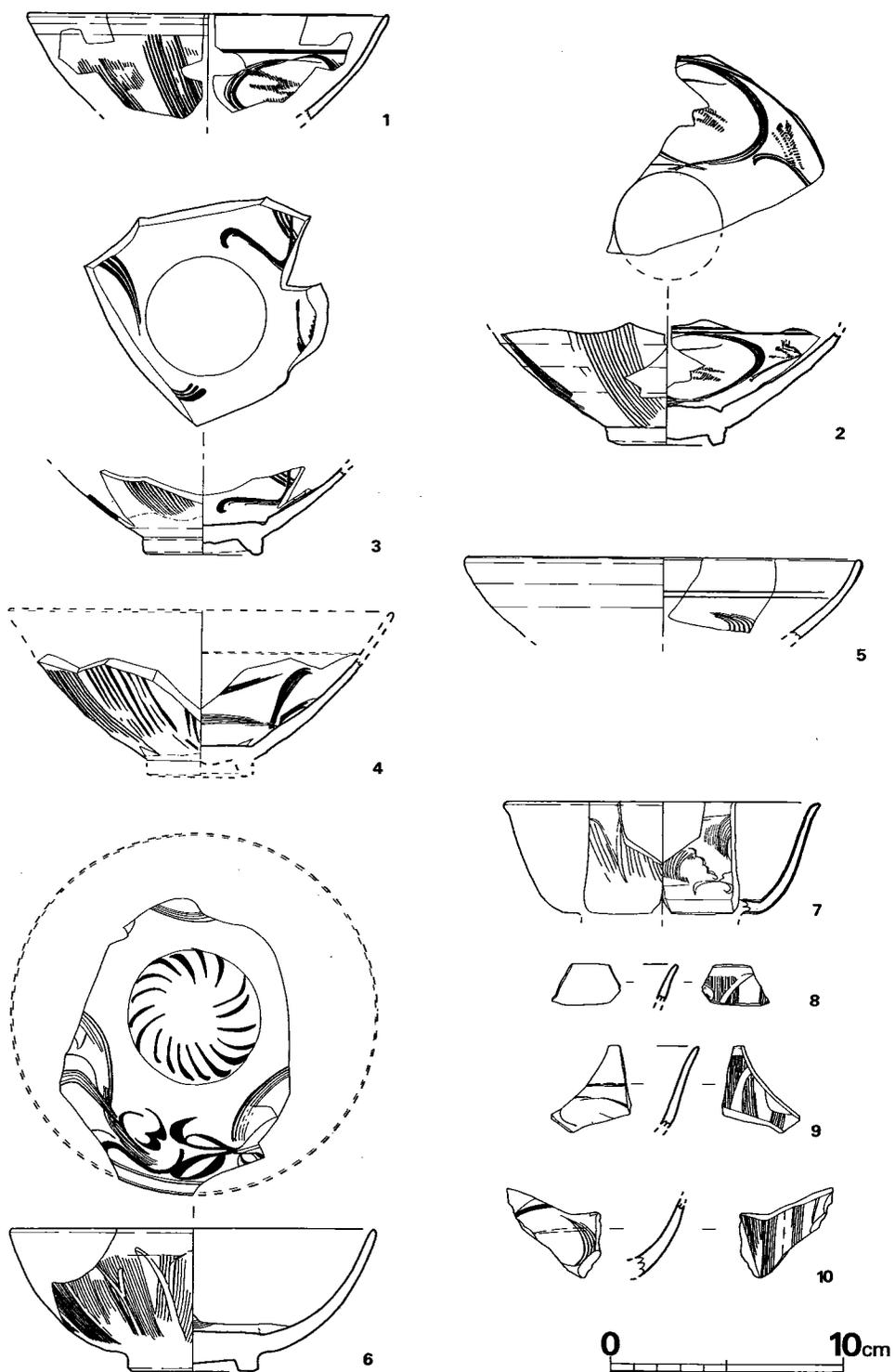


Fig. 38 中屋敷遺跡第I地点出土青磁実測図④ (縮尺1/3)

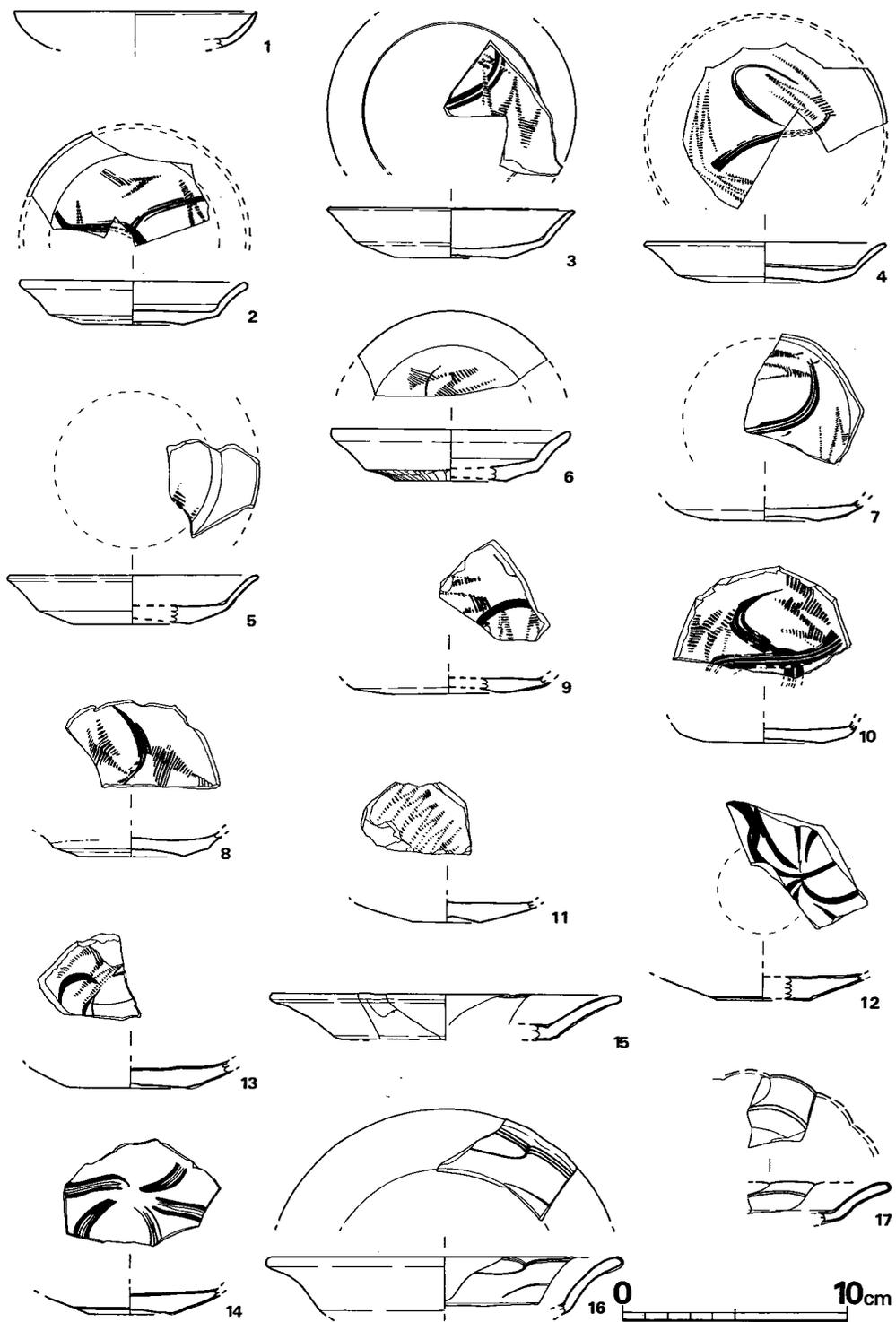


Fig. 39 中屋敷遺跡第 I 地点出土青磁実測図⑤ (縮尺1/3)

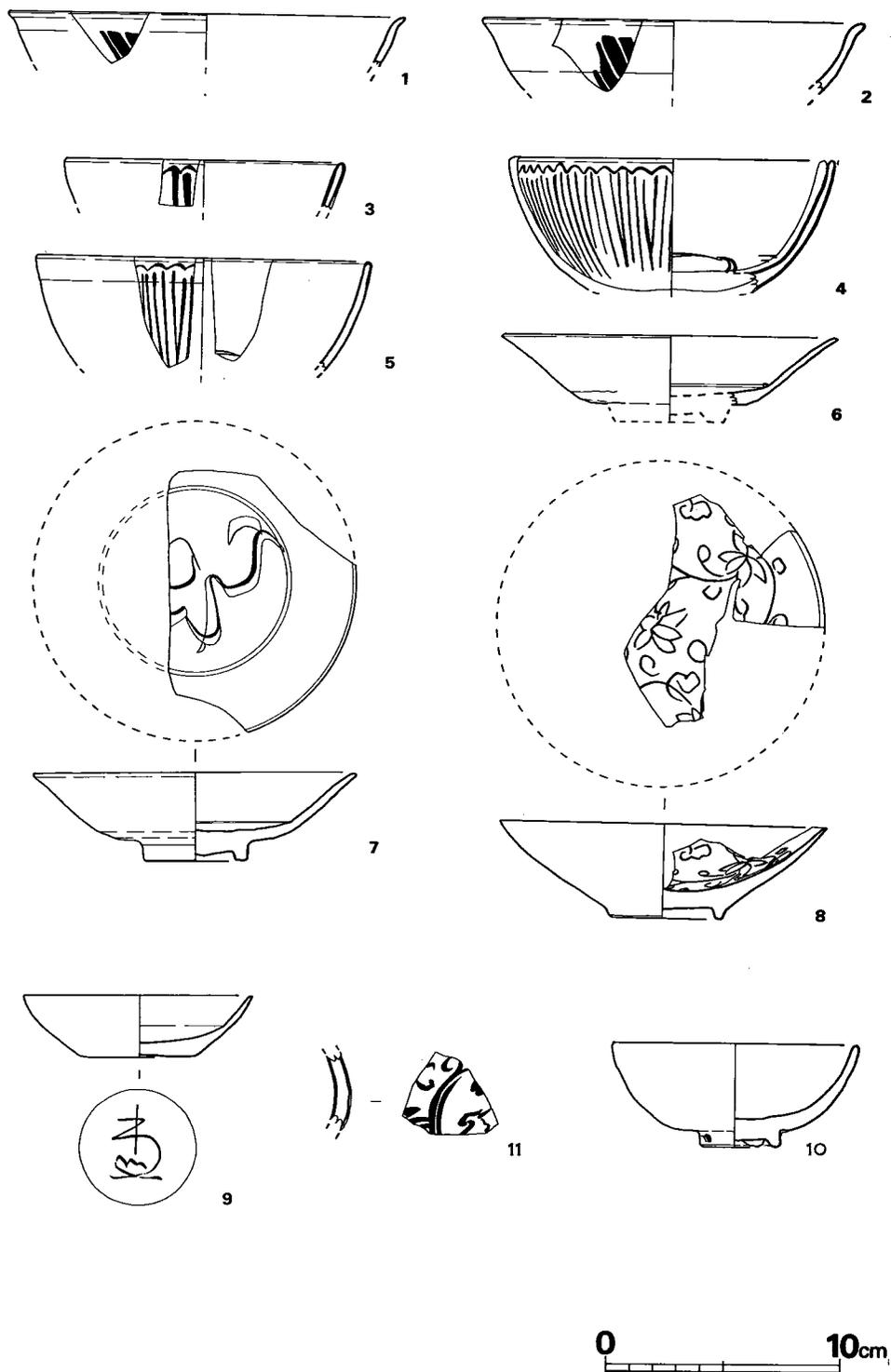


Fig. 40 中屋敷遺跡第 I 地点出土青磁実測図⑥ (縮尺1/3)

青磁皿である。

1は、小破片であり詳細は不明であるが皿と思われる。胎土は淡灰白色で、釉はうすい緑色であり薄くかかる。

### 2-A類 (Fig. 38, PL. 37)

青磁碗で、珠光青磁と云われるものである。外面に櫛歯文、内面に櫛歯文とヘラ描きの沈線が描かれているものである。

1は、外面に櫛歯文、内面には口縁部下方に沈線が一条めぐり、その沈線より下位に櫛歯文とヘラ描きの沈線文がみられる。胎土は灰色で、釉は暗緑灰色である。2は、1とはほぼ同様であるが内面に二条の沈線がめぐる。胎土は灰色で、釉は暗緑灰色である。内面に貫入があり、焼成はやや悪いようである。3は、胎土が淡黄色で、釉は少し緑がかった淡褐色である。内外面に貫入がみられる。4は、内面には櫛歯文だけがみられる。胎土は灰白色で、釉は緑灰色である。5は、口縁部の小破片で内面に二条の沈線と櫛歯文がみられる。胎土は灰色で、釉は緑灰色である。内外面に貫入がみられる。これらは体部の外面下部は露胎のものが多い。

### 2-B類 (Fig. 40, PL. 39)

青磁碗で、外面にヘラ描きによる太い沈線が口縁部下よりみられるもので、内面は無文である。器形は口縁部がやや外反するのが特徴である。

1は、口縁部がやや外反して端部は丸く細く尖る。胎土は白灰色で、釉は灰味をおびた緑色である。2は、口縁部が大きく外反する。胎土は白灰色で、釉は淡灰緑色である。

### 2-C類 (Fig. 39, PL. 38)

2-A・B類と同じく珠光青磁と呼ばれている同安窯系の皿で、内面に櫛歯文とヘラ描き文様が描かれているものである。

2は、胎土が灰色で、釉は淡い青緑色で薄くかかり、口縁部は剥がれていてやや凸凹している。3は、胎土が灰色で、釉は水色がかった灰色である。4は、胎土が淡灰白色で、釉は淡い緑色でやや厚めにかかる。内面に小さな貫入がみられる。5は、胎土が灰色で、釉は淡緑灰色である。6は、胎土が暗灰白色で砂粒を少し含むも良好で、釉は青緑色であり薄くかかる。外面の口縁下に沈線をめぐらせていて釉が溜っている。7は、胎土が灰色で、釉は緑灰色である。8は、胎土がやや暗い白色で、釉は淡青緑色であり薄くかかる。9は、胎土が灰色で、釉は緑灰色である。内面に貫入がみられる。10は、胎土が灰色で、釉は淡青緑色であり、薄くかかる部分と厚くかかった部分がある。内外面とも貫入がみられる。11は、櫛歯文のみが描かれている。胎土は淡灰白色で良好、釉は淡緑色で薄くかかる。内面に貫入がみられる。12は、ヘラ描き文様のみがみられる。胎土は灰色で、釉は深緑色である。13は、胎土がわずかに青味がかった淡灰色で、釉は淡緑色で底部の端部に溜り脹んでいる。内外とも貫入がみられる。14

は、ヘラ描き文のみがみられる。胎土は淡褐色で、釉は緑色である。底部に径3mm弱の焼成台の跡がある。これらの底部は総てヘラ削りで、釉はみられない。

#### 4-A類 (Fig. 40, PL. 39)

明系の青磁碗であり、外面に蓮弁文様の沈線があり、内面には弧状の刻線文が描かれている。器形は口径が小さく器台が高く深いのが特徴である。

3～5は、いずれも蓮弁文が退化したようで蓮弁になっておらず形だけを蓮弁に似せて、山形と沈線とが蓮弁を呈していないものである。3は、胎土が白灰色で、釉は緑灰色、4は、胎土が淡灰白色で、釉は淡暗緑色である。内外面にわずかに貫入がみられる。5は、胎土が灰色で、釉は暗緑色である。

#### 4-B類 (Fig. 39, PL. 38)

明系の青磁皿であり、口縁端部に輪花がある皿で、外面は無文で内面に沈線がみられる。いずれも口縁部の小破片で底部は不明である。

15は、小破片で口縁端部の内面下に沈線がある。胎土は灰色、釉は青灰色である。16は、胎土が灰色で、釉は灰色をおびた緑である。17は、胎土が灰色、釉は緑灰色である。外面に貫入がみられる。

#### 5類 (Fig. 40, PL. 39)

青磁の高台付皿で、外面は無文であり、内面と見込みにヘラによる文様が描かれている。器形的には小皿に比べて体部が長いのが特徴である。

6は、底部は欠いて、内外面は無文であるが見込みに文様が描かれていると思われる。胎土は灰色で、釉は暗淡緑色である。7は、見込みにヘラ描き文様があり、胎土は灰白色で良好、釉はやや黄色味をおびた暗緑色である。6・7は高台と底部の一部を除く全面に釉がかかっている。

#### 6類 (Fig. 40, PL. 39)

11で、高麗青磁といわれるものであり、象眼が施されている。小破片である。

#### 7類 (Fig. 40, PL. 39)

その他の青磁で、年代的に新しいものと思われる。

8は、器高の低い碗で、内面のほぼ全面にわたって花文がみられる。胎土は灰白色で、釉は

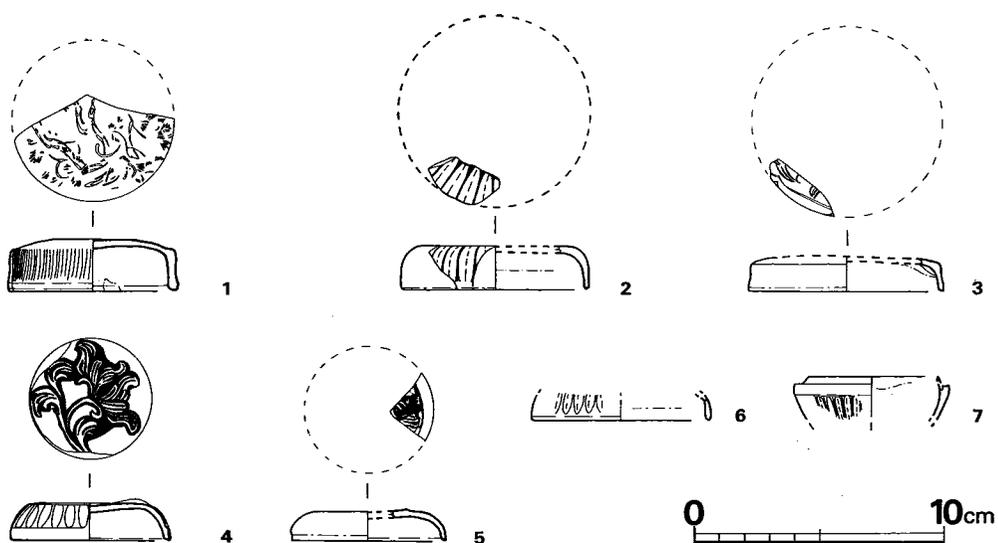


Fig. 41 中屋敷遺跡第I地点出土合子実測図（縮尺1/3）

暗淡緑色であり、畳付け以外の全面にかかっている。9は、小型の碗で、胎土は淡白褐色で、釉は淡褐色で底部を除く全面にかかる。底部に墨書がある。10は、無文であり高台と碗部との中心がずれている。胎土は灰白色で、釉は暗淡緑色で、畳付けを除く全面にかかり体部と高台の境に溜っている。

#### 合子 (Fig. 41, PL. 40)

合子には蓋が多く、身は1個のみである。蓋と身に分類する。

#### 1類 (Fig. 41, PL. 40)

合子の蓋で、天井部に型押しされた花文があり体部に蓮弁文がみられるものである。

1は、胎土が灰褐色で、釉は褐色味のある緑色であり、内面は天井部だけにかかっている。内外面に貫入がみられる。2は、胎土が白色で、釉は青灰白色であり、内面の体部下半にはかかっている。内外面に貫入がみられる。3は、天井部端が輪花状となっている。胎土は淡灰褐色で、釉は薄く、縁がかった白色であり、内面は天井部だけにかかっている。4は、胎土が灰白色で、釉は明るい水色であり、口唇部の釉はかき取られている。5は、胎土が灰白色で、釉は淡緑色味のある灰白色であり内面は天井部だけに施釉されている。6は、胎土が白色で、釉は青緑がかった白色であり、内面の体部にはかからず露胎となっている。

#### 2類 (Fig. 41, PL. 40)

7で、口唇部と底部を欠損するもので、胎土は灰色で、釉は深い緑灰色である。内外に貫入がみられる。

### 白磁 (Fig. 42~44, PL. 40~43)

#### 1-A類 (Fig. 42, PL. 40)

白磁の碗で、口縁端部が横に張り出て、口唇部は平坦で先端部は先尖りとなる。高台は高く口縁内面と見込みに沈線が入るものもある。内・外面無文のものをAとし、内面に楕歯文が描かれているものをBとする。

1は、見込みに沈線がめぐり、胎土は淡褐色で、釉はわずかに黄色がかった淡褐色である。両面に細い貫入がある。やや焼成が悪い。2・3は、内面上部に沈線がめぐり、2は、胎土が灰色で、釉は淡緑灰色である。3は、胎土が灰白色で、釉は灰色である。4は、無文で胎土は灰白色で、釉も灰白色であり口縁内面に釉ダレがみえる。5は、胎土が灰白色で、釉は灰色である。

#### 1-b類 (Fig. 42, PL. 41)

6は、内面上部に沈線がめぐりその下位に楕歯文が描かれている。胎土は灰白色で、釉は白灰色である。7は、内面上部と見込みに沈線がめぐり、その間に楕歯文が描かれている。胎土は白色で、釉は淡緑灰白色であり口縁内面に釉ダレがある。8~15は、1類の底部と思われ、11・12・13は特に高台が高い。

#### 2類 (Fig. 43, PL. 41)

白磁の碗で、口縁部は薄くなりながらやや外反し、先端部は先尖りであり、口縁内面と見込みに沈線がないものである。なお、この類は高台が高く、内面にヘラと楕歯で文様が描かれているものもある。

1は、内面上部に沈線がめぐり、胎土は灰白色で、釉はわずかに緑がかった灰白色である。全面にかすかな気泡がある。2は、内面中部に沈線がめぐり、胎土は灰白色で、釉はわずかに青緑がかった灰白色である。3は、内面下部に沈線がめぐり、胎土は灰白色で、釉はかすかに緑がかった灰白色である。4は、沈線はみられず、胎土は灰白色で、釉は淡緑灰色である。外面にやや粗い貫入がある。

#### 3類 (Fig. 43, PL. 42)

白磁の碗で、口縁部が折り曲げられた玉縁となり、高台は特に低く、見込みに沈線がめぐっている。玉縁には折り曲げが長く垂れ下るものと、短かくて丸味のままのものがある。

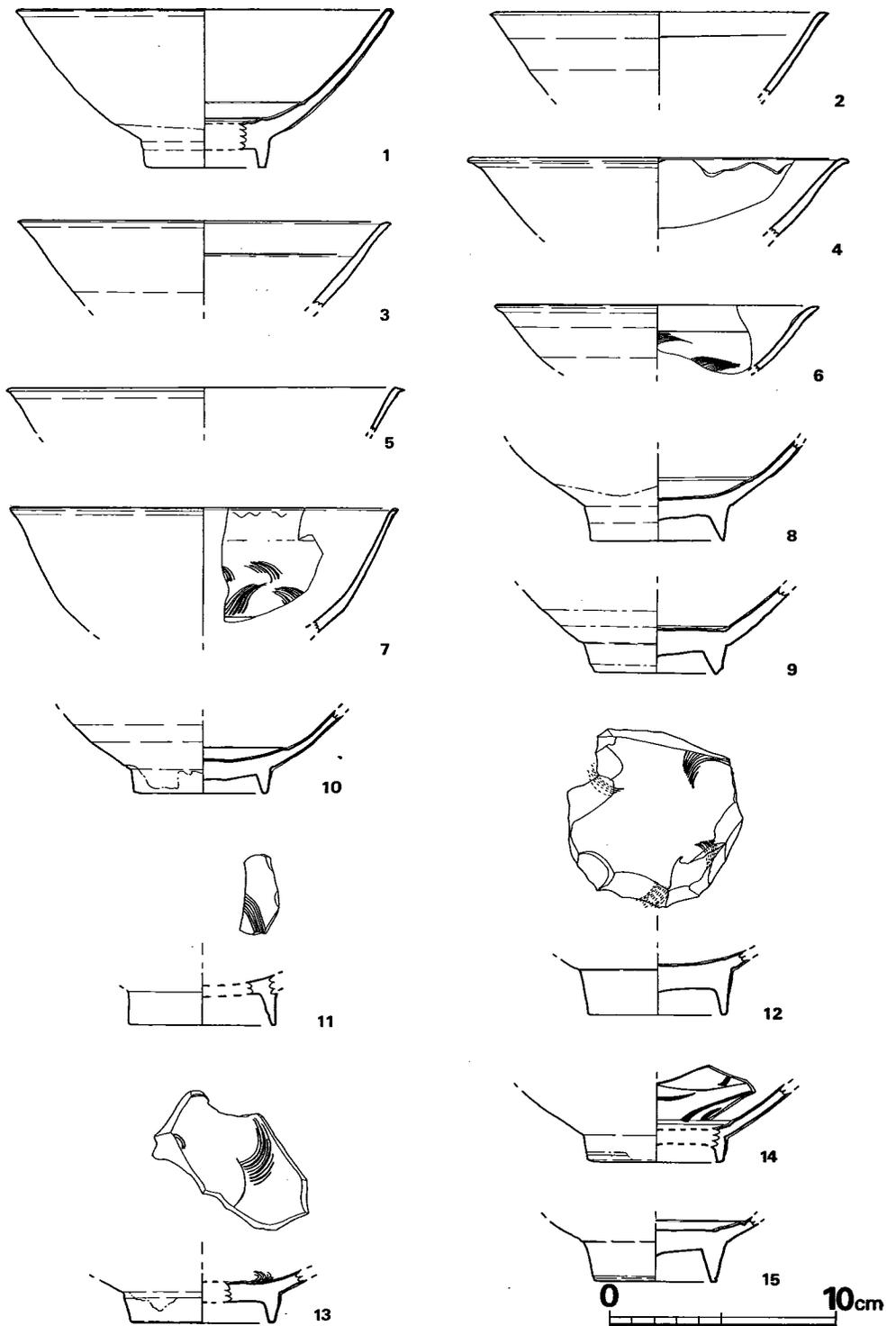


Fig. 42 中屋敷遺跡第I地点出土白磁実測図① (縮尺1/3)

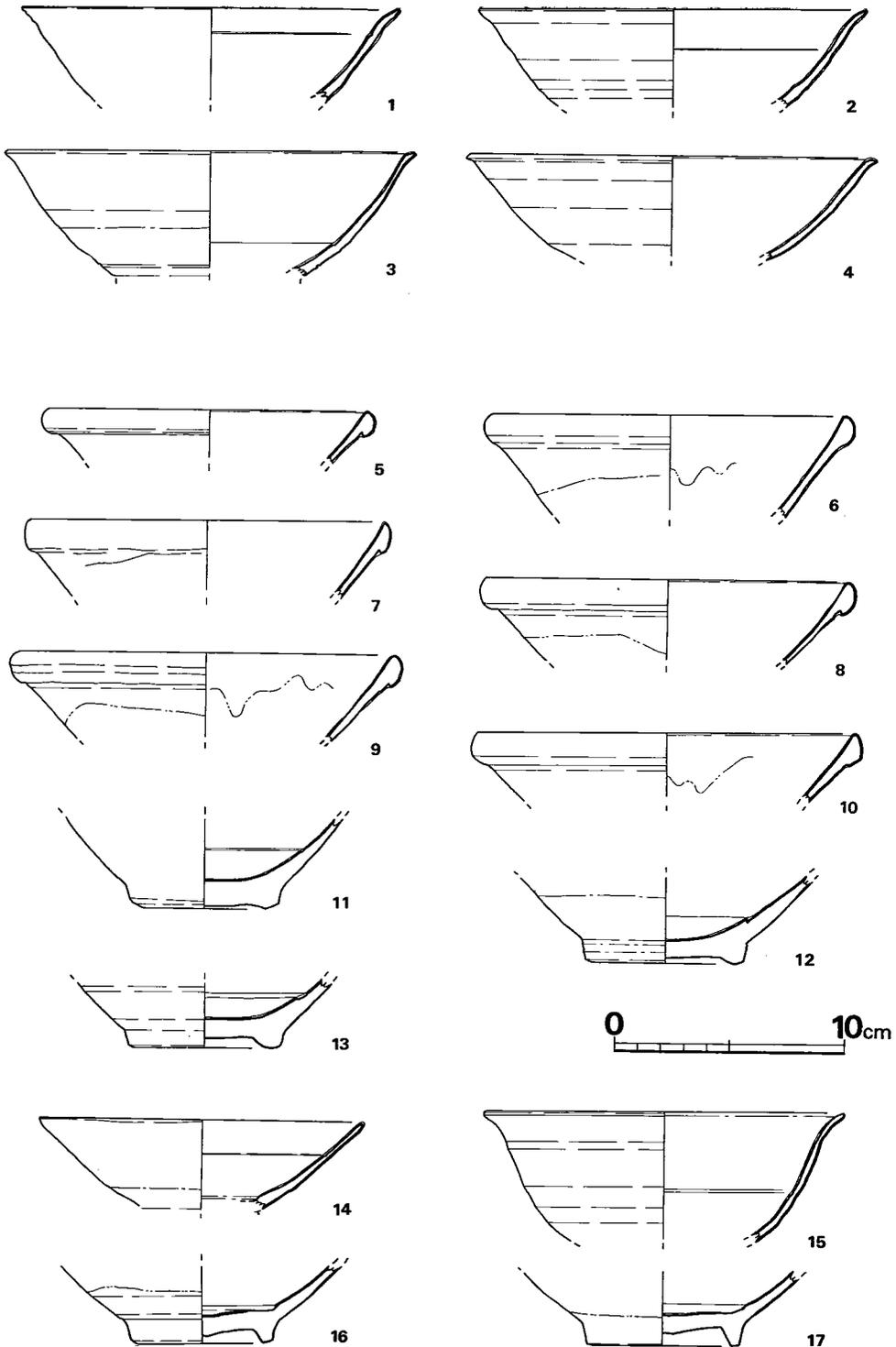


Fig. 43 中屋敷遺跡第I地点出土白磁実測図② (縮尺1/3)

5は、胎土が灰白色で、釉は暗灰白色である。6は、胎土が淡褐色で、釉は淡白褐色であり内面に釉ダレがみえる。内外面に貫入がある。7は、胎土が灰白色で、釉はわずかに緑がかった灰褐色である。8は、胎土が灰白色で、釉はやや水色がかった灰白色である。9は、8と同様に内面に釉ダレがみえる。10は、胎土が灰白色で、釉は暗灰白色である。内面に釉ダレがみえる。11~13は底部片で、見込みに沈線がめぐり、高台は低い。

#### 4-A類 (Fig. 43, PL. 42)

白磁の碗で、口縁部は直線的で端部は先尖りとなる。口縁内面に沈線があり、見込みには環状に釉をかき取った跡がみられ、高台は低いものである。碗を4-A類、皿を4-B類とする。

14は、底部を欠くが内面中位に沈線がめぐり、見込みに釉をかき取った跡がみられる。胎土は白色で、釉はわずかに青緑がかった灰白色である。16・17はこの4-A類の底部と思われる。

#### 4-B類 (Fig. 44, PL. 42)

7は、見込みに環状に釉をかき取った跡があり、高台は付くが高くない。胎土は淡灰色で、釉は明緑灰色である。

#### 5-A類 (Fig. 43, PL. 42)

白磁の碗で、口縁端部の釉をかき取ったいわゆる口禿である。

15のみで、底部を欠くものであり、胎土は白色で、釉はやや緑がかった灰色である。

#### 5-B類

5-A類と同様の皿である。器高が低いものを5-B-a類とし、高いものを5-B-b類とする。

#### 5-B-a類 (Fig. 44, PL. 43)

2のみで、胎土は灰白色であり、釉はやや青味がかった乳白色である。

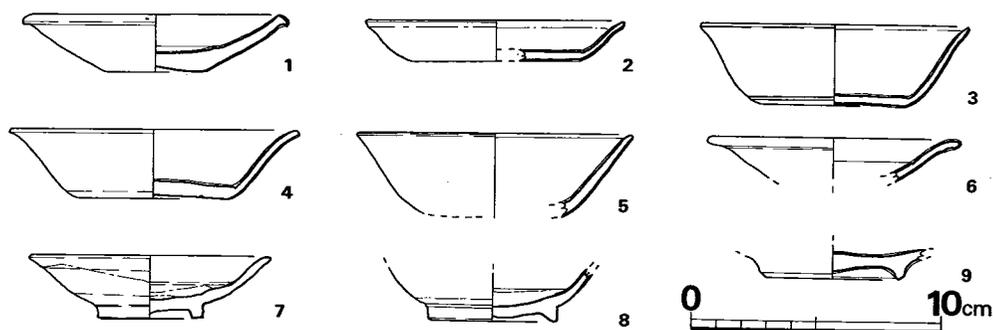


Fig. 44 中屋敷遺跡第I地点出土白磁実測図③ (縮尺1/3)

## 5-B-b類 (Fig. 44, PL. 43)

3は、胎土が白色で、釉は淡い水色がかった白灰色である。4は、胎土が白色で、釉は淡い水色がかった白灰色である。口禿部は淡茶色がかった。5は、胎土は白色で、釉は淡い水色がかった白灰色である。

## 6類 (Fig. 44, PL. 43)

白磁の皿で、見込みに沈線がめぐり、底部以外に施釉のものである。器形は口縁端部が大きく外反して先端部がさらに折り曲る。

1は、胎土が灰白色で、釉はやや緑がかった灰白色である。6は、胎土が白色で、釉はやや水色がかった灰白色である。

## 7類 (PL. 43)

白磁の水注で、破片のため図示できない。口縁部、注口片などである。胎土は白灰色で、釉は白色である。

## 雑器

青磁、白磁以外の大塚製陶器類が若干ながら出土している。中世から近世までの陶磁器類が多量に出土しているため厳密な区別ができかねる。ここでは黄釉盤のみを図示したが、他にいわゆる褐釉陶器などがあるようである。

## 盤 (Fig. 45, PL. 43)

黄釉鉄絵花文盤の底部片である。底部1片と底部の端部が2片出土している。Fig. 45はこれらの内同一個体を図上復元したものである。見込み部に鉄砂によって宝珠形の花弁と茎、葉が筆釉されている。胎土は灰白色、淡褐色で精良であり、釉は褐色を呈している。

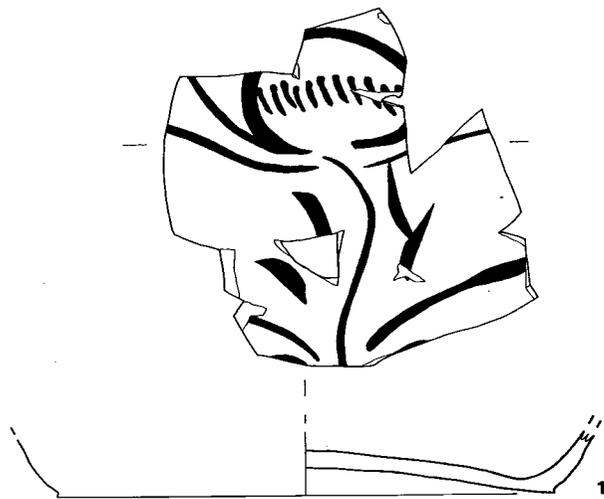


Fig. 45 中屋敷遺跡第I地点出土雑器実測図 (縮尺1/3)

## 近世陶磁器

中屋敷遺跡出土の近世陶磁器は、表土剥ぎの時点で出土したものが多く、ほとんど破片で総数約1,800点ほどである。その多くは第Ⅰ地点から出土し、第Ⅱ地点からはあまり出土していない。その内磁器物は約800点で、その多くは「くらわんか茶碗」と呼ばれる食器類で、有田・波佐見・三川内系のものがほとんどである。

陶器は唐津系・高取系ともに約500点で、唐津物は武雄唐津系の小物雑器が多く、高取系は内ヶ磯窯系の大物雑器が多い。その他に備前物が若干と産地の分からない播鉢が数点ある。  
註(1)

### 高取系陶器

#### 宅間窯 (Fig. 46-1, PL. 44-15)

藁灰釉大皿で、高台内高0.5cm、底部厚さ2.4cm、復元底径11.8cmである。高台内高が低く、器肉が厚くて宅間窯の特長がよくでていいる。見込み部には藁灰釉を掛けているが風化して砂粒状になっている。他にも飴釉の上に藁灰釉を掛けた徳利片や小皿など雑器類の破片が約20点みられた。

#### 内ヶ磯窯 (Fig. 46-2・3, PL. 44-1~14・47-1)

PL. 44-1・2は、飴釉大皿で、2は高台高約1cm、底部厚さ1.6cmである。3~6は藁灰釉大皿で、4は高台高1.5cm、底部厚さ0.8cmである。見込み部に窯積時の目土跡がみられる。藁灰釉が風化して砂粒状になり剥落している。7・8・11は藁灰釉の小皿。9は飴釉碗。10は藁灰釉片口、口縁の反り部がなまこ色に焼き上がっている。12は藁灰釉によるイッチン掛け小皿。13は飴釉甕口縁部、窯積時の貝目跡が付いている。一般に上野・高取系窯ではシジミ貝が使用されている。14 (Fig. 46-2) は藁灰釉の縁なぶりを呈した小皿で、器高3.6cm、口径12.4cm、高台径4.6cm。見込み部に目土跡が3ヵ所についている。藁灰釉が風化して石膏状になっている。PL. 47-3, (Fig. 46-3) は播鉢。見込み部に8条の楕目をもつ工具によってほぼ全面に条溝をつけている。他にも甕、徳利、壺、大鉢、大皿など大物雑器の破片がみられる。

#### 白旗山窯 (Fig. 46-5, PL. 44-17)

鉄釉の上に藁灰釉を流し掛けした碗で、高台高0.5cm、底部厚さ0.6cm、胎土はきめが細かく薄手の作りである。他には、全くみられなかった。

### 上野系陶器

#### 釜ノ口窯 (Fig. 46-4, PL. 44-16)

土灰釉の大皿で、高台高2cm、底部厚さ1.0cm、高台径8.5cm。高台が高くバチ高台である。内ヶ磯窯の高台は、一般に低く安定しているのに対し、釜ノ口窯の高台は高く（バチ高台）外にややひろがっている。  
註(5)

### 唐津系陶器

#### 武雄系唐津窯 (Fig. 46-6・7, PL. 45-1~13)

1 (Fig. 46-6) は土灰釉小鉢, 器高4.7cm, 復元口径11.6cm。体部内面中位に2本沈線を呈している。釉色は灰緑色で見込み部に蛇の目状に掻き取られている以外は全面に施釉されている。2 (Fig. 46-7) は土灰釉小皿, 器高3.2cm, 復元口径13.6cm。体部はやや内彎気味に

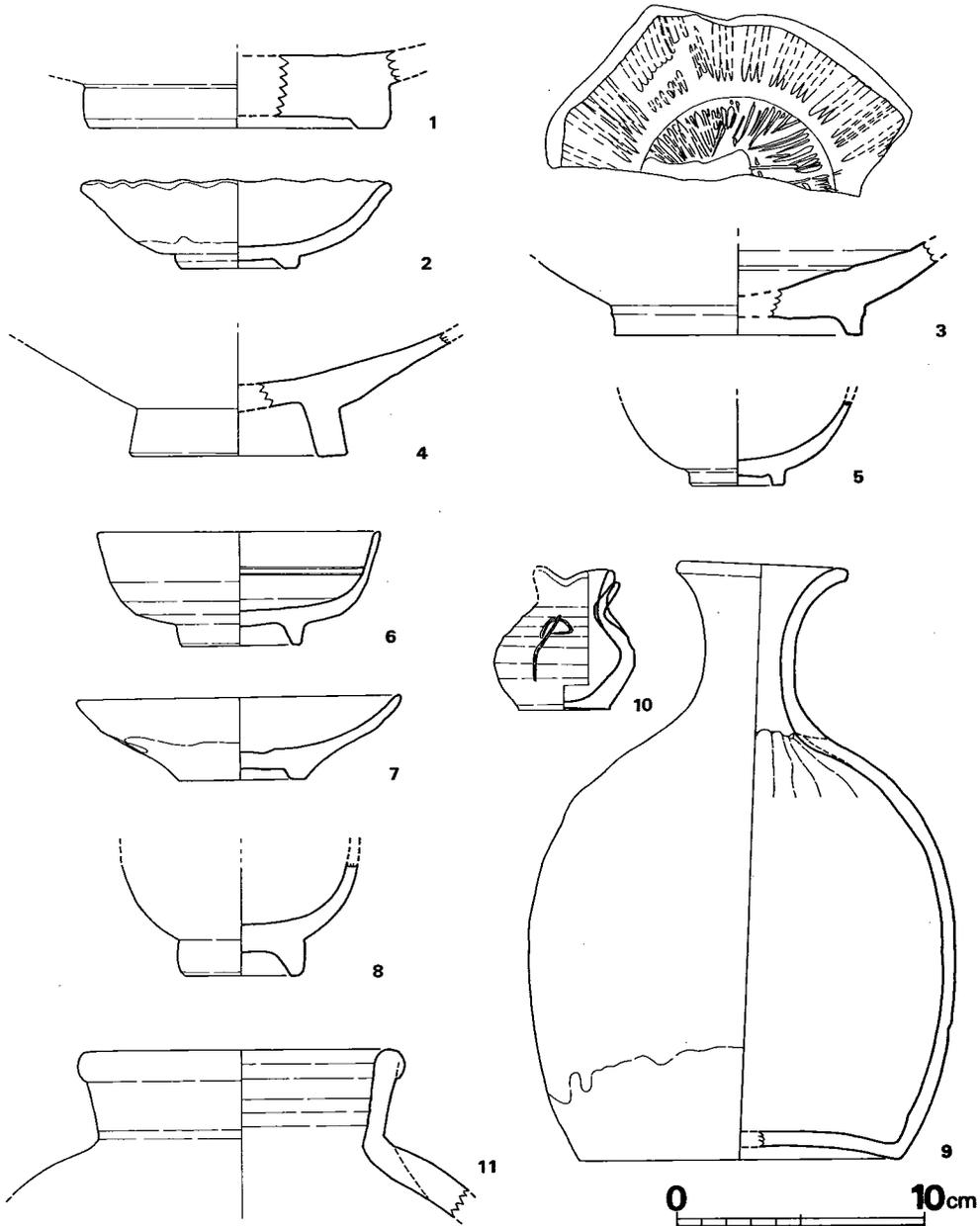


Fig. 46 中屋敷遺跡第I地点出土陶器実測図① (縮尺1/3)

大きく開く。高台は糸切りした後高台内だけ削り出している（碁笥底高台）。釉色は暗緑色で外体部下半には施釉されていない。見込み部と畳付きに重ね焼きの目跡がある。3・4は、土灰釉小皿で見込み部に蛇の目割きがある。3は淡茶白色、4は暗緑色を呈する。5は刷毛目碗で内面は見込み部中心から口縁部にかけて筆状のもので渦巻状に白土がひかされている。外面は刷毛状のものでほぼ直線的に白土が塗られている。胎土に鉄分が多く下地は茶褐色である。第7号土壙内出土である。6は飴釉大皿で、高台高2cm、底部厚さ1cmで見込み部に木葉状と■状の印花を押している。目土跡が3ヶ所残っている。7は土灰釉盃で器高3.8cm、復元口径8.6cm、内彎気味の丸味を持つ体部で、青味をおびた緑色の釉がほぼ全面に薄く施釉されている。釉が特に薄い内面口縁部と外面体部は赤茶色の胎土がみられる。底部は糸切りで窯積時の目土が1ヶ所付着したままである。8～11は土灰釉小皿・小鉢で、釉色はほぼ青味のある灰色である。見込みには目土の跡がついている。8～10は外面体部下半には施釉していないが、11は全面に施釉している。同様な破片が13点出土している。12・13は二彩松文大皿で白土を化粧掛けした上に鉄の茶色で枝幹を、銅の緑色で松葉を描いている。

#### その他 (Fig. 46-8, PL. 46-1～7)

1は器高6.7cm、復元口径10cm、平底で体部の立ち上がりは内彎気味で直線的に立ち上がる。釉色は青味のある白色を呈し、畳付きを除いてはほぼ全面に薄く施釉されている。胎土はきめ細かな漉した白土を用いている。2・4・5の釉色は淡いクリーム色で1と同種の胎土・器形である。3は灰釉片口で復元口径16cm。釉色は淡いクリーム色で薄く施釉されている。内外面に貫入がみられる。6は灰釉燈火皿で、器高5.5cm、油皿口径5.2cm、受け皿口径7.6cm。胎土はきめ細かい鉄分の多い土で、その上に白土を化粧掛けし透明性の灰釉を薄く掛けている。粉引手と呼ばれるものであろうか。7 (Fig. 46-9)は、飴釉舟徳利で、器高2.8cm、口径6.8cm、底径12.8cm。底部は上げ底で、胴部はタタキによって円筒形に成形後、上部をせばめて粘土を巻き上げロクロによって頸部から口縁を作っている。飴釉を口縁より腰あたりまで施釉している。内面は口縁より頸際まで飴釉を掛け、胴部には飴釉の薄い釉を内掛けしている。生掛けのためなのか、表面は火ぶくれが多い。胎土はきめ細かく鉄分は少ない。第7号土壙内出土。

#### 備前系陶器 (Fig. 46-10・11・47-2・4, PL. 46-8～11, 47-5)

9 (Fig. 46-11)は甕の口縁部で、口縁端を折り返して玉縁としている。10 (Fig. 46-10)は片口小壺で、器高5.7cm、焼締めで全体的に赤褐色を呈し、焼成は良いが胴部中位から頸部にかけて半面だけ灰を被って白くなっている。胴部はロクロ目が顕著で、片口直下に手のヘラ記号が書かれている。底部は糸切りとなっている。11 (Fig. 47-4)は挿鉢で、復元口径27.2cm、口縁端が上方に立ち上がり、口縁上面は角張っている。口縁内面に沈線風に横ナデシ、その付近から7本の櫛目条溝を放射状につけている。色調は内外面とも黒褐色を呈す。胎土に砂

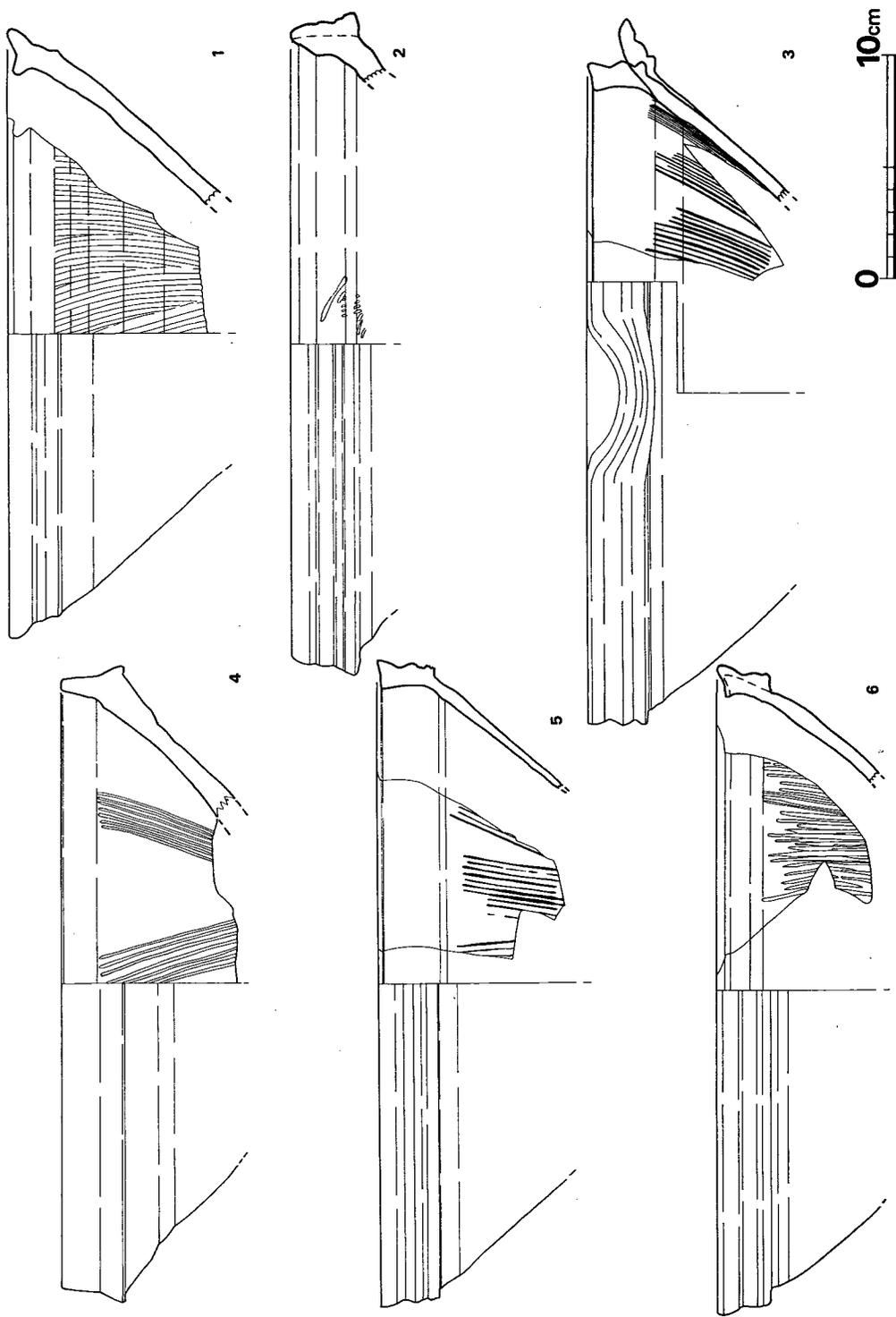


Fig. 47 中屋敷遺跡第 I 地点出土陶器実測図② (縮尺1/3)

粒を含み、焼成も良好である。PL. 47-5 (Fig. 47-2) は播鉢で、口縁部は上方に立ち上がり、口縁上面は丸味をもっている。口縁外面には2条の沈線がめぐらされており、内面は1条横ナデしている。櫛目条溝は格子目状に交叉させたものであろう。色調は赤茶色を呈す。<sup>註(6)</sup>

**播鉢** (Fig. 47-1・3・5・6, PL. 47-1~4・6)

2 (Fig. 47-5) は復元口径29cm, 口縁部外面は貼り付けてあり1本の沈線を入れている。口縁の上面に内傾ぎみの面取りをし、その部分を少しへこませている。体部内面に櫛目条溝が全面に入れられている。色調は赤褐色で砂粒を含む。3 (Fig. 47-5) は復元口径29cm, 口縁部外面は貼り付けてあり、口縁部の上面は内傾ぎみに面取りしている。口縁部内は「く」の字形で体部内面に10条の櫛目条溝が放射状にある。色調は茶褐色を呈する。6 (Fig. 47-3) は片口部が残存する。4 (Fig. 47-1) は復元口径27.5cm, 口縁部外面に2条の沈線がある。口縁部内面は貼り付けによって反り状のものをつくっている。色調は暗茶色を呈する。

**磁器** (PL. 47-7~13)

7は染付盃で器高4.0cm, 口径6.8cm。8は染付網目文碗で器高8.0cm, 復元口径8.0cm, 高台径5.6cm。9は染付菊花文碗で器高5.8cm, 復元口径9.3cm, 高台高1.5cm, 高台径5.0cmで見込みに「ハ」の字の染付銘が入っている。内面には立ち上がり口縁に1本の線が描かれている。外面は菊を日輪形に半分上下に連続させた文様を描いている。10は色絵染付唐草文碗、呉須によって唐草文を描いた上に赤と黄色の絵具で唐草風のものを上絵付しているが生焼けで不鮮明である。11は染付小皿で見込み部に「元」の字が書かれている。12は染付草文碗。13は型物盃で器高2.0cm, 口径6.3cmでタコ唐草文が描かれている。

本遺跡出土の陶磁器の年代について若干触れてみたい。高取系窯については「高取歴代記録」という文献があり、文禄年間から天明の頃までの高取家代々の事績や高取窯の推移が書かれている。ただどのような史家によって何時に家伝書として記録されたかという問題点がある。<sup>註(7)</sup>それによると開窯期間は宅間窯(1606~1614年)・内ヶ磯窯(1614~1624年)・白旗山窯(1630~1665年)である。本遺跡では内ヶ磯窯の資料が多く、僅かに宅間窯の資料もみられる。

唐津系は、ほぼ江戸初期に始まり江戸中期頃のものまでみられる。備前焼については間壁忠彦・葎子両氏によって編年されている。<sup>註(8)</sup>それによると本遺跡で出土した資料はIVB~V期に及ぶもので、ほぼ室町中頃から桃山期に至るものと思われる。

磁器物は、江戸前期の初期伊万里と呼ばれるものから「くらわんか茶碗」と呼ばれる江戸後期に至るものまでみられる。

註(1) 便宜上近世陶器で扱ったが、ここで取り上げたものは中世のものである。

註(2) 藁灰で作った不透明な白釉。陶器について陶芸家高鶴淳・添田和信両氏から多大の御教示・御協力をいただいた。

註(3) 「牛乳に空色を溶かしたような美しい青色」日本陶磁器協会「上野古窯調査報告」1955年。

- 註(4) 竹筒の上下に小さな穴をあけ、節と節の間に糊葉を入れ筒を握って親指で上の穴をあけたりしめたりしながら竹筒を動かし施釉する流し掛けの一種。高鶴元「上野・高取」日本のやきもの15。  
 註(5) 永竹威「上野高取」陶磁大系15, 1975年。  
 註(6) 間壁忠彦「備前の古窯と出土品」『世界陶磁全集』4, 1977年, 間壁氏編年による桃山様式の播鉢に相当するものであろう。  
 註(7) 5と同じ。  
 註(8) 間壁忠彦・間壁葎子「備前焼の研究ノート(1)―備前焼の成立」倉敷考古館集報・第1号1966年, 間壁忠彦・間壁葎子「備前焼研究ノート(2)―中世備前焼の推移―」倉敷考古館集報・第2号1966年。

### 土製品 (Fig. 48, PL. 48)

分銅形土製品1と土鈴2がある程度で出土品は少ない。

#### 分銅形土製品 (Fig. 48, PL. 48)

完形品ではなく用途不明であるが、分銅形とした。上部が欠損しているが残存高3.9cmで、下部径3.2cm, 上部径1.6cmの円錐形を呈す。下部より3cm程のところにくびれ部があり凹線状にくぼんでいる。なお、下部の内面はわずかに上げ底状となっている。手づくねのようで器面全体に指先による成形痕がみられ、くびれ部も指先で押え込んでいる様子が明らかである。胎土は細砂粒をかなり含んでいて、焼成は良であり、色調は黄茶褐色を呈す。なお、重量は32.2gを量る。

#### 土鈴 (Fig. 48, PL. 48)

Fig. 48-2・3の2点で共に上半部の破片である。2は大型で最大径2.9cmを測る。最大径下に部分的に凹線がめぐる。手づくりであり指先による成形痕がみえる。色調は灰黒色を呈している。3は小型で最大径2.2cmを測る。2と同じように凹線がめぐる。手づくりであり指先による成形痕がみえる。色調は明褐色を呈している。

### 石製品 (Fig. 48, PL. 48・49)

石製品には滑石製品が多く、他に砥石が数個と硯1点、石臼の破片と思われるものが1点出土している。なお、黒耀石の剝片が5点みられる。

#### 滑石製品

滑石製品には石鍋、有孔円盤、皿状品、匙状品、方形板がある。

#### 石鍋 (PL. 49)

I区より9点出土しているが、口縁部、底部のいずれも小破片であり図示しない。1~4は口縁部、5~7は鏝部片、8・9は底部片である。6はこぶ状把手であり、他は鏝付である。鏝部には2のように大きいものと、4の小さいものの二種類があり断面は台形状を呈している。いずれのものも体部外面は工具痕が明瞭にみられ、内面は丁寧な仕上げである。1・5・8・9にはススが付着している。

#### 有孔円盤 (Fig. 48-3, PL. 48)

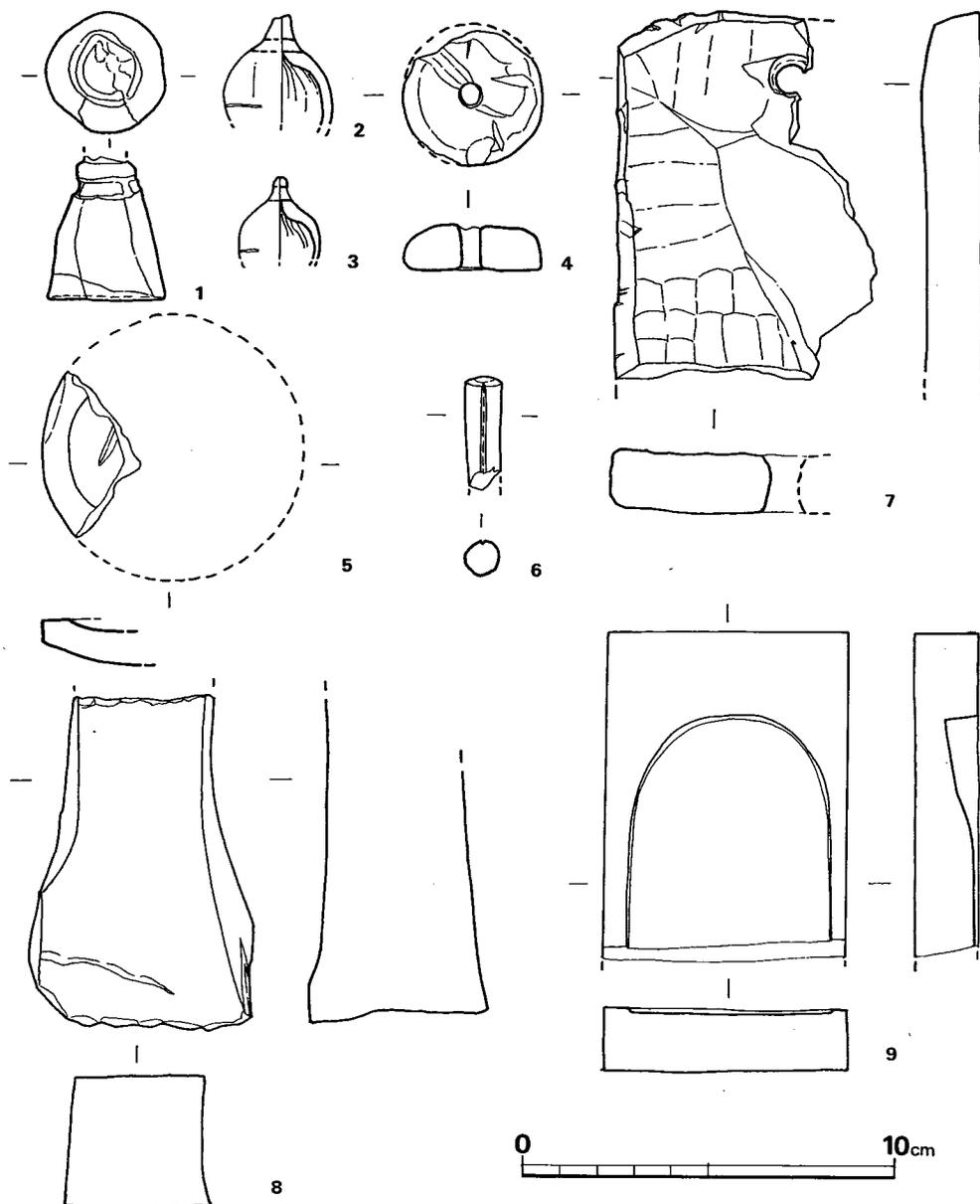


Fig. 48 中屋敷遺跡第I地点出土土製品・石製品実測図（縮尺1/2）

紡錘車状のもので中央に一孔があり，断面は台形状をなす。最大径3.7cm，厚さ1.3cm，孔径0.55cmを測る。器面全体に凸凹面が多くみられ丁寧な仕上げではない。あるいは一部欠損しているとするならば途中で製作を中止したものかも知れない。重さ25.1gを量る。

皿状品 (Fig. 48-5, PL. 48)

欠損品であるが円形の縁があって中央部は皿状に凹んでいる。径約3.5cm, 厚さ1.3cmを測る。縁上面と皿状部は丁寧に研磨されていて他の外面は粗く削った工具痕がみられる。重さ13.6gを量る。

匙状品 (Fig. 48-6, PL. 48)

匙の柄部と推定して匙状品とする。円形の破片で径0.9cmを測る。「V」字状の鋭い切り込み線が1本走っている。器面全体は丁寧な研磨仕上げが施されている。

方形板 (Fig. 48-7, PL. 48)

方形の板で1孔がみられる。角は隅丸となり、横断面の上端は隅丸となっている。孔径1cm, 厚さ1.6cmを測る。器面には比較的丁寧な削り痕がみられる。

砥石 (Fig. 48-8, PL. 48)

砥石は4点出土しているがいずれも欠損品である。8は、4面共に使用したようであり、淡灰褐色砂岩製である。

硯 (Fig. 48-9, PL. 48)

方形の欠損品である。短径6.5cm, 長径8.8cm以上, 厚さ1.7cmを測り、陸部は逆「U」字形で手元より傾斜をもちつつ海部に至る。上面は丁寧な仕上げであるが、裏面は部分的に原石面が残る。小豆色輝緑凝灰岩製である。

金属製品 (Fig. 49, PL. 49)

金属製品として銀の玉と留金状製品, 煙管がF区に集中して出土している。

豆板銀 (Fig. 49-1, PL. 49)

断面が扁平のもので径1cm, 厚さ0.3cmを測る。江戸時代中期の貨銭である。

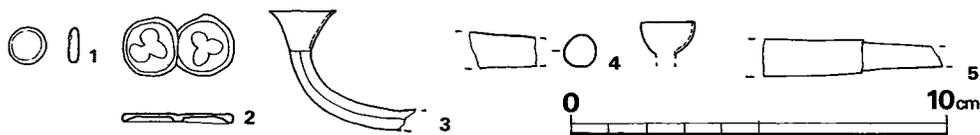


Fig. 49 中屋敷遺跡第I地点出土金属製品実測図 (縮尺1/2)

留金状製品 (Fig. 49-2, PL. 49)

円形のボタン状の円盤が2個接合しているもので、表面には花状の模様が見られ、内面の中央にほぞ状の突起がある。材質は青銅製品と思われる。

煙管 (Fig. 49-5, PL. 49)

先端部と中部の破片であり、先端部は半球状に開いている。外面は銅板を巻き合せている。本芯は腐っていて不明である。

銅銭 (Fig. 50, PL. 50)

Tab. 3 中屋敷遺跡第 I 地点出土銅銭一覽表

挿図	図版	銭貨名	出土地点	初 鑄 年	8		嘉祐通宝	I-D区 黑色土	宋 仁宗 1056
1		開元通宝	不 明	唐 高祖 621	9		熙寧元宝	7 号 土 抔	宋 神宗 1068
2		開元通宝	I-D区 黑色土	唐 高祖 621	10		元豐通宝	I-F区 pit 中	宋 神宗 1078
3		祥符元宝	I-F区 pit 中	宋 真宗 1008	11		元祐通宝	I-G区 表土中	宋 哲宗 1086
4		祥符元宝	I-F区 pit 中	宋 真宗 1008	12		元祐通宝	I-F区表土中	宋 哲宗 1086
5		天禧通宝	I-G区 表土中	宋 真宗 1017	13		紹聖元宝	I-D区 黑色土	宋 哲宗 1098
6		皇宝通宝	I-D区 黑色土	宋 仁宗 1039	14		崇寧通宝	I-D 黑色土	宋 徽宗 1102
7		皇宝通宝	7 号 土 抔	宗 仁宗 1039	15		寛永通宝	表 採	

17枚の銅銭が出土し、判読可能なものは15枚で2枚は判読できず11種類である。銭種別では開元通宝、皇宝通宝、元祐通宝が各2枚で他は1枚ずつの出土である。唐の開元通宝、和銭の寛永通宝を除いては北宋銭である。初鑄年代をみると開元通宝の621年から寛永通宝の1636年までであるが宋銭の11世紀に集中する。

17枚のうち、遺構から出土したものは7の皇宝通宝、9の熙寧通宝が第7号土壇から出土しているだけである。

鑄物関係遺物 (Fig. 51, PL. 50)

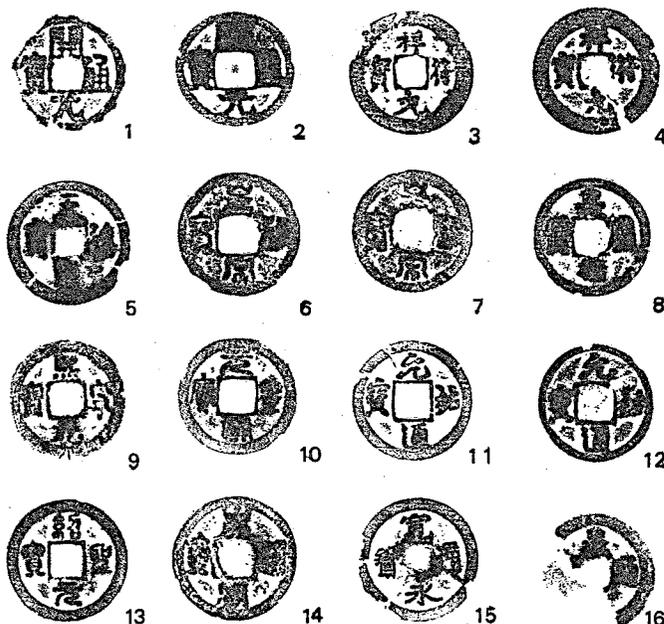


Fig. 50 中屋敷遺跡第 I 地点出土銅銭拓影 (縮尺1/1)

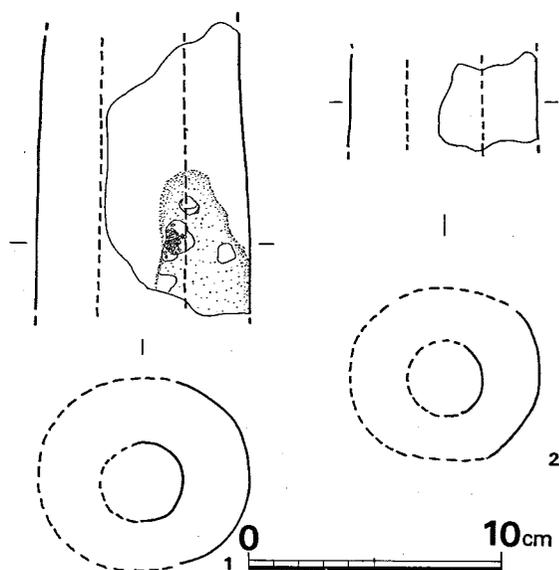


Fig. 51 中屋敷遺跡第I地点出土鑄物関係遺物実測図（縮尺1/3）

鞆羽口が3点出土している。ともに小破片であるが、1は径約8.5cm、孔径3.1cmを測る。表面は斜め方向に刷毛目を施している、部分的であるが多量の銹滓が付着している。胎土は小砂粒子を若干含むも精良であり、色調は孔面が黄褐色であり外面になるにつけて二次加熱を受けていて黒灰色に変化している。また、表面はレンガ状に硬くなっている。2は小破片である。

## Ⅳ 第Ⅱ地点の調査

第Ⅱ地点は第Ⅰ地点の南西側80m離れてあり、剣岳から六田川に突き出た舌状台地の基部にあたる南斜面に位置している。眼下には小さな谷が入り込んでいてその谷の最奥部にあたる。第Ⅰ地点に比べてかなりの急斜面であり、調査前は既に開墾により大きく段が付いた段々畑となっているため遺構は存在しないものとして考えていたが、遺構の掘削時に大がかりな整地を行なっているようであり、斜面地を平坦地に行っている。(Fig. 52~54, PL. 51~53)

### 1. 弥生時代の遺構と遺物

この時代の遺構としてB区の最南端部より竪穴住居跡1のみがある。

#### (1) 竪穴住居跡 (Fig. 55, PL. 53)

B区の最南端部にあるが南側は後世の削平によって段落ちとなって消滅しており、北側に全体の1/3程度が遺存している。

平面プランは円形で径約3.50m、壁下には周溝があり上幅14~40cm、下幅10~25cm、深さは床面より10cmを測る。壁はやや緩に立ち上がり、床面はほぼ水平であり平坦である。ピットが周溝に沿って約50cm間隔で4本検出され、床面中央部にも1本ある。周溝側にある4本の深さは10~14cmである。

出土遺物は弥生式土器小片が若干出土したにすぎない。床面上や周溝内より小さな自然石が7個検出される。

### 2. 歴史時代の遺構と遺物

第Ⅱ地点の遺構はほとんどが歴史時代のものであり全域に多数の大・小ピットを検出する。それらの内掘立柱建物1、土壇16、土壇墓2、溝1を重要遺構として取り扱う。この他にも多数の大・小ピットがあり建物として復元できないので省く。

#### (1) 掘立柱建物 (Fig. 56, PL. 52)

A区の中央部に根石を有する掘立柱建物1を確認し、B区でも中央付近に掘立柱建物を想定するものようである。

#### 第1号掘立柱建物 (Fig. 56, PL. 52)

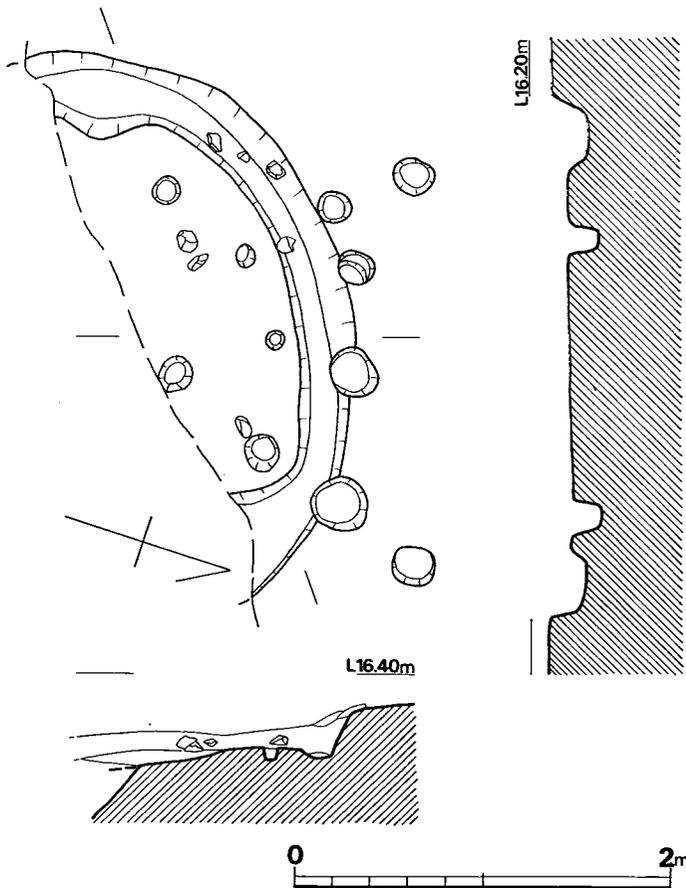


Fig. 55 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号住居跡実測図 (縮尺1/40)

3間×5間の建物で桁行方向はほぼ東西である。長方形プランで桁行間10.10m, 梁間間6.40m, 平均の桁行間は2m, 梁間間は2.10mを測る。柱穴は円形の素掘りで根石を有するものがほとんどで、二段掘りで根石を置かないものが1穴ある。根石は小さめの自然石で、数多く用いているのが特徴である。柱穴掘り方には土を固く締めつけてその上に根石を平坦に置いている。ピットの径は30~80cm, 深さは30cm前後である。

なお、掘立柱建物の北側と東側に建物を取り巻くように段落ちがあり、この段落ちはこの建物と関連あるものと推定される。

## (2) 土 壌 (Fig. 57~68, PL. 54~64)

A・B区に円形, 不整形円形, 長方形等を呈す大きめのピット(土壌)が20数穴あるが、主に遺物を出土したものを土壌として取り扱う。A区にて14, B区にて2である。

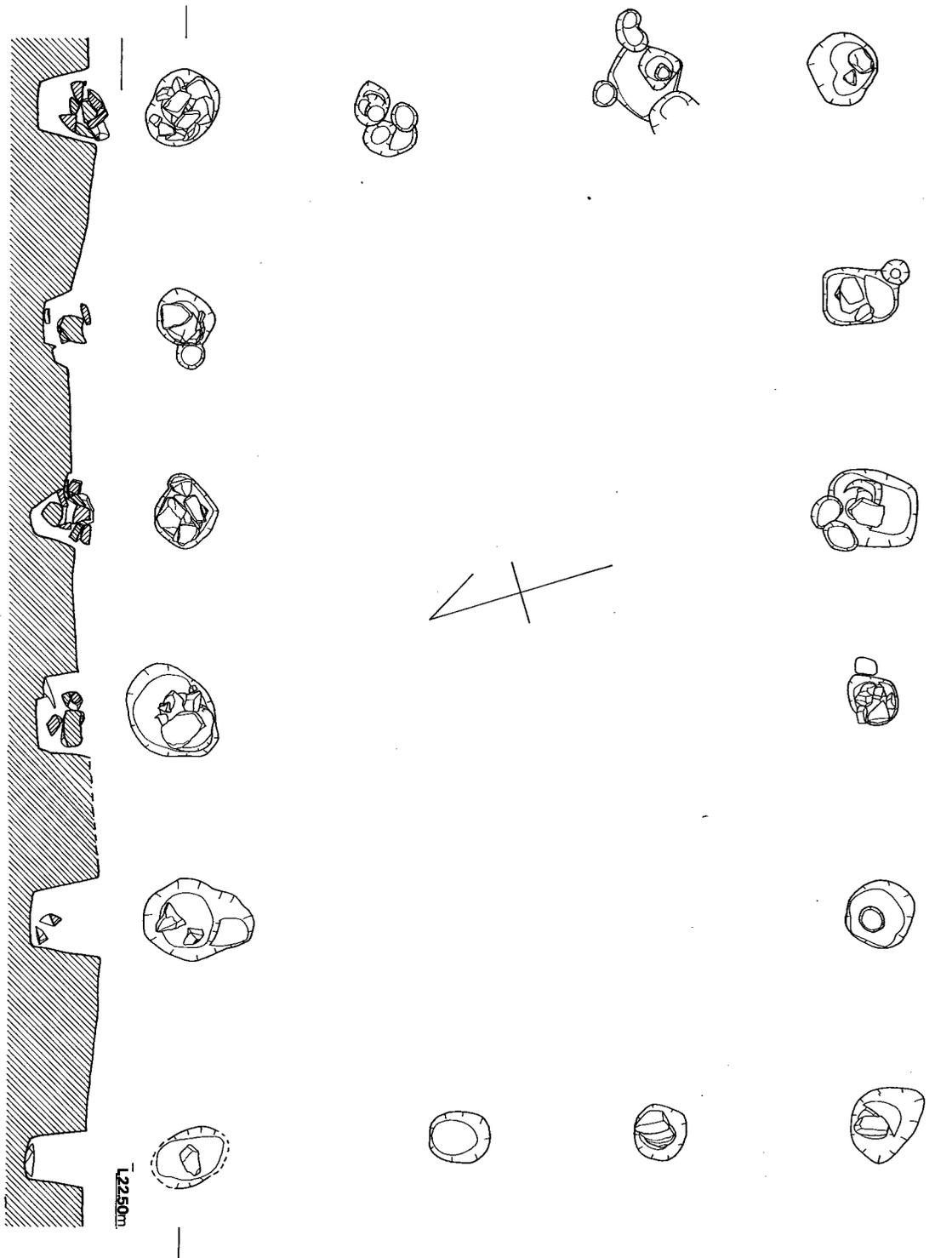


Fig. 56 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号掘立柱建物実測図 (縮尺1/60)

### 第1号土壙 (Fig. 57, PL. 54)

A区の東側にあり第1号掘立柱建物の柱穴と重複していて土壙の方が古い。

平面プランは長方形で長軸2.15m, 短軸1.80m, 深さ0.50mである。底面は長軸0.15m, 短軸1.05mであり, やや丸味をもっていて, 壁はかなりの緩角度で立ち上がる。底面に径0.15mの円形ピットがある。

出土遺物は, 覆土中や底面上よりかなりの量が出土しており, 土師器皿が多く, 他に土師器坏, 土鍋, 片口, 陶器, 青磁, 石鍋がある。底面よりは自然石が数個検出される。

#### 出土遺物 (Fig. 58, PL. 55)

1~15は, 土師器小皿で口径6.8~9.1cm, 底径5.2~7.9cm, 器高0.8~1.55cmを測る。器面は体部ヨコナデ, 内底にはナデが施されている。底面は剝落の著しいものもあるが総て糸切り痕があり, 10には板目がみられる。胎土は精良か良で, 焼成は良のものが多い。色調は茶褐色, 淡黄褐色を呈するものが多い。16~20は, 土師器坏で口径11.7~13.7cm, 底径6.6~9.5cm, 器高2.5~3.7cmを測る。器面は体部ヨコナデ, 内底にはナデが施されている。底面には糸切り痕がみられる。胎土は砂粒を若干含むも精良なものも多く, 焼成は良, 色調は茶褐色を呈するものが多い。21は, 小型の土鍋で口径19.3cm, 底径11.5cm, 器高8.6cmを測る。底部より外反して立ち上がり, 口縁部は直立する。口縁部下に鏝部があり, 幅, 厚さともに小さい。体部内面はヨコ方向の刷毛目が施され, 外面は雑に部分的であるがナデがみられる。胎土は精良であり, 焼成は良で, 色調は淡茶褐色を呈す。図示しないが PL. 55-24 は片口片であり, 内面はヨコ方向の刷毛目, 外面はタテ方向の短い刷毛目が施されている。35は, 瓦器質の甕口縁部片, 26・27・28は陶器の口縁部片である。29は, 石鍋の口縁部片で鏝部がある。内面は丁寧な研磨仕上げであり, 外面は工具痕が認められ削られている。Fig. 58-22は, 青磁皿の底部片で見込みに楕歯文が描かれている。胎土は灰白色で, 釉は明緑灰色である。内外面に貫入がある。

### 第2号土壙 (Fig. 57, PL. 55)

第1号土壙の北側1mで, 第1号掘立柱建物の梁間間下にある。なお, この第2号土壙の北方にも土壙が3穴みられるが出土遺物がないので省いた。

平面プランは不整形円で上径80cm, 底面径65cm, 深さ15cm程で比較的小さく浅い土壙であり, いくつかの小ピットと重複している。底面は凹地状であり壁は緩に立ち上がる。

出土遺物は, ほとんどなく土師器小片と青磁片である。

#### 出土遺物 (Fig. 58, PL. 55)

23は, 青磁碗の底部片で底径5.7cmを測る。外面に楕歯文が内面には楕歯文とヘラ描き文様が描かれている。胎土は淡灰色でやや粗く, 釉は淡緑灰色で外面の体部中位まで施釉されていて下位より高台にかけては露胎となっている。

### 第3号土壙 (Fig. 59, PL. 54)

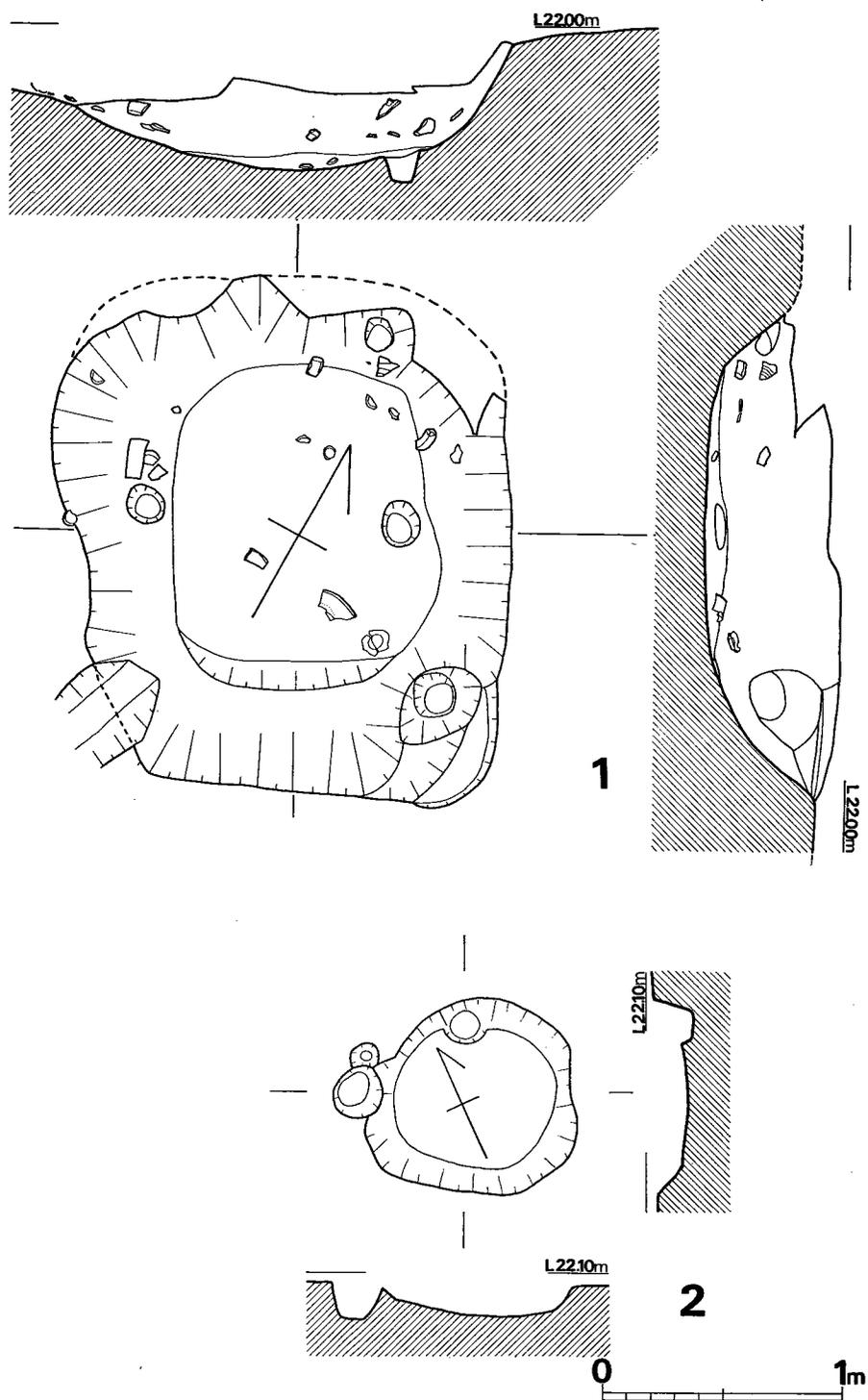


Fig. 57 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1・2号土壌実測図(縮尺1/30)

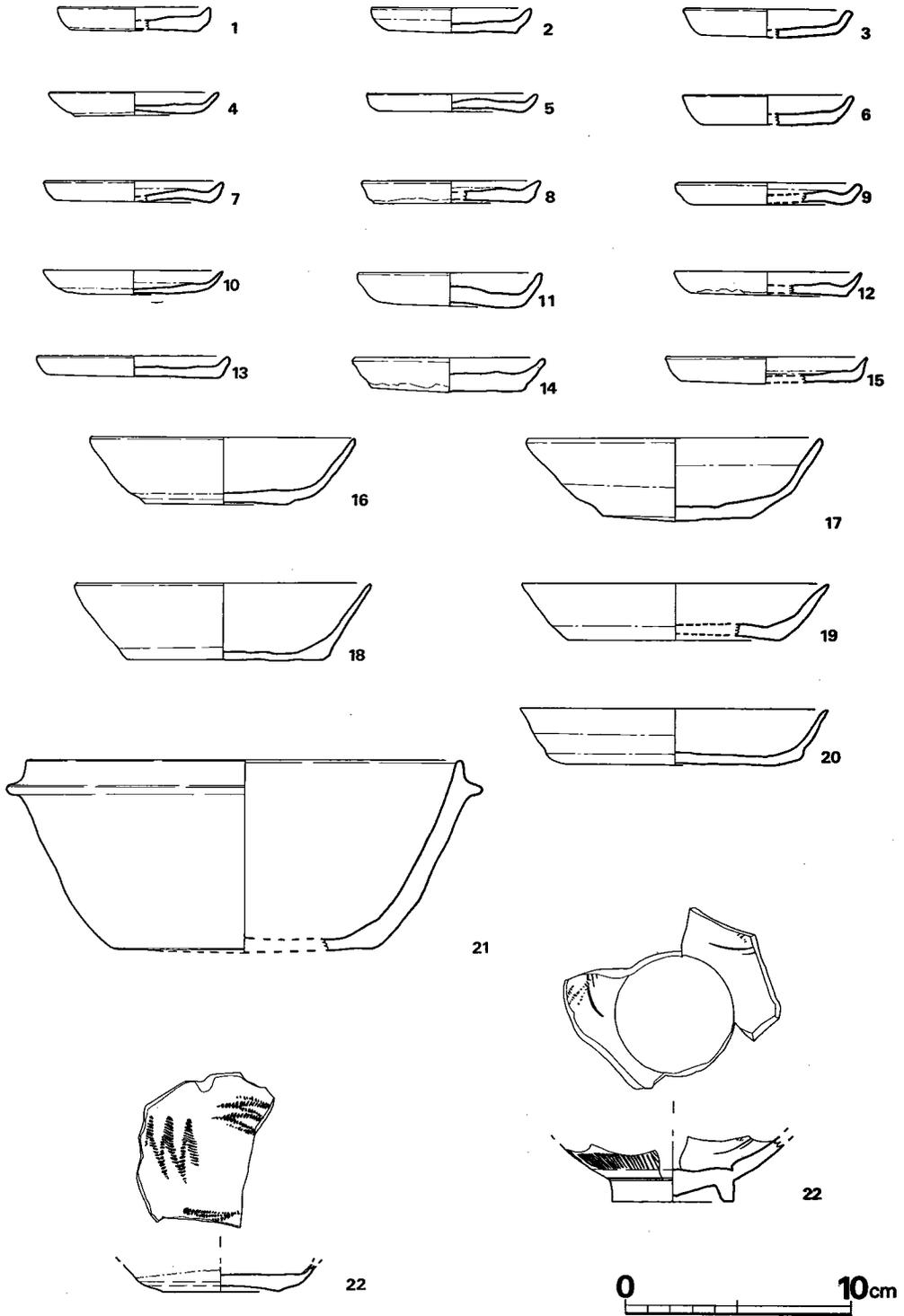


Fig. 58 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1・2号土坑出土土器実測図(縮尺1/3)  
 (1~15-1号。16~23-2号)

A区の東方にあり、第1号土壌の北東2.3m離れてあり第1号掘立柱建物に伴うと推定される段落ちを切り込んで掘削されている。

平面プランは不整円形で上径約1.20m、底面径1m、深さ0.5mを測る。底面は凹地状であり断面は摺鉢状を呈している。なお、土壌の南側に幅20cm、深さ15cmの溝が付属しているが、溝は2m程南方で切れていて不明である。

出土遺物はなく、底面に自然石が2個みられるのみである。

#### 第4号土壌 (Fig. 59, PL. 56)

A区の南方にあって第5号土壌と第6号土壌の中間地点に位置している。

平面プランは方形で上面長さ100cm前後、底面長さ75cm、深さ35cmを測る。底面は丸味をもって平坦ではなく、壁は緩に立ち上がる。いくつもの小ピットと重複している。

出土遺物は、土師器坏、瓦器碗、砥石が底面上より検出される。出土遺物が底面より集って出土しており当初土壌墓かとも考えたが、人骨や炭、焼土などがみられなく土壌としたものである。

#### 出土遺物 (Fig. 62, PL. 59)

1～3は、土師器坏で口径13.5～15.6cm、底径8.9～10.5cm、器高2.7～3.0cmを測る。器面体部はヨコナデが、内底はナデが施されている。底部には糸切り痕がみられる。胎土は細い砂粒を少し含みやや粗であり、焼成は良で、色調は淡褐色、淡黄褐色を呈している。4は、瓦器碗の底部片で、底径6.1cmを測る。器面は全面にわりかなり磨滅しており不明瞭であるが内面は研磨されているようである。胎土は精良であり、焼成も良、色調は外面が赤味を帯びる灰白色、内面が灰白色を呈している。5は、青磁碗で口径16.8cm、底径5.3cm、器高6.4cmを測る。体部外面は蓮弁文が削り出され内面は無文で見込みに花文がある。胎土は灰白色で、釉は暗緑色を呈している。高台内に焼成台の跡が残っている。

6は、砥石で4面が使用されている。

#### 第5号土壌 (Fig. 59, PL. 56)

A区の南方端部にあり、さらに南側はB区へと大きく段落ちとなっている。

平面プランは不整長方形で長軸110cm、短軸75cm、深さ10cmを測り、上面が削平されていると思われ非常に浅い。底面はほぼ平坦で南側にやや傾斜していて、壁はやや急に立ち上がる。底面に小ピットが1穴あるが前後関係は不明である。

出土遺物は底面上より土師器坏小片のみであり、自然石が4個みられる。

#### 出土遺物

図示できないが、土師器坏の底部で糸切り痕がみられる。

#### 第6号土壌 (Fig. 60, PL. 57)

A区のほぼ中央部に位置し、第1号掘立柱建物の柱穴を重複しており、切り合い関係は土壌

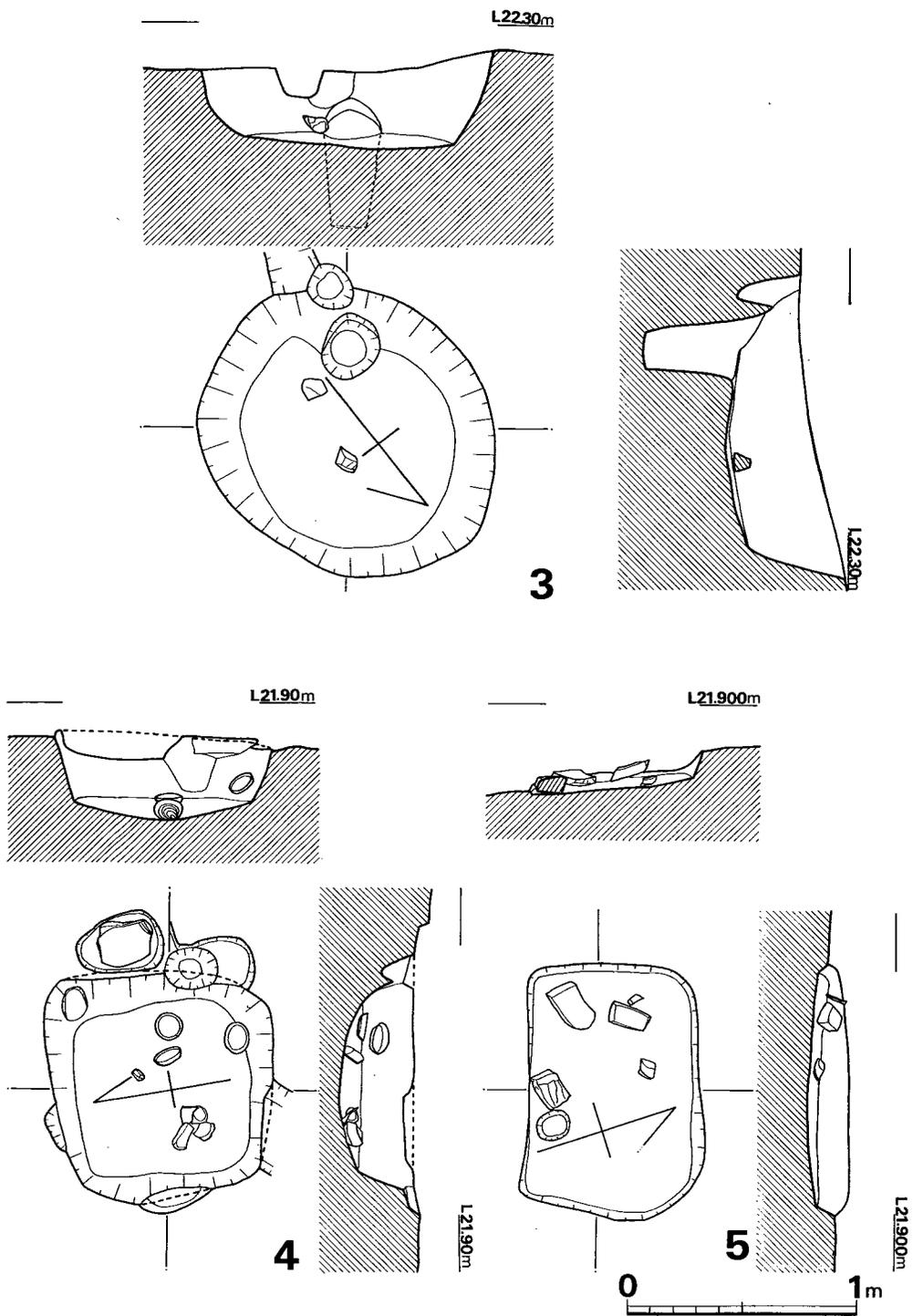


Fig. 59 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第3・4・5号土壌実測図（縮尺1/30）

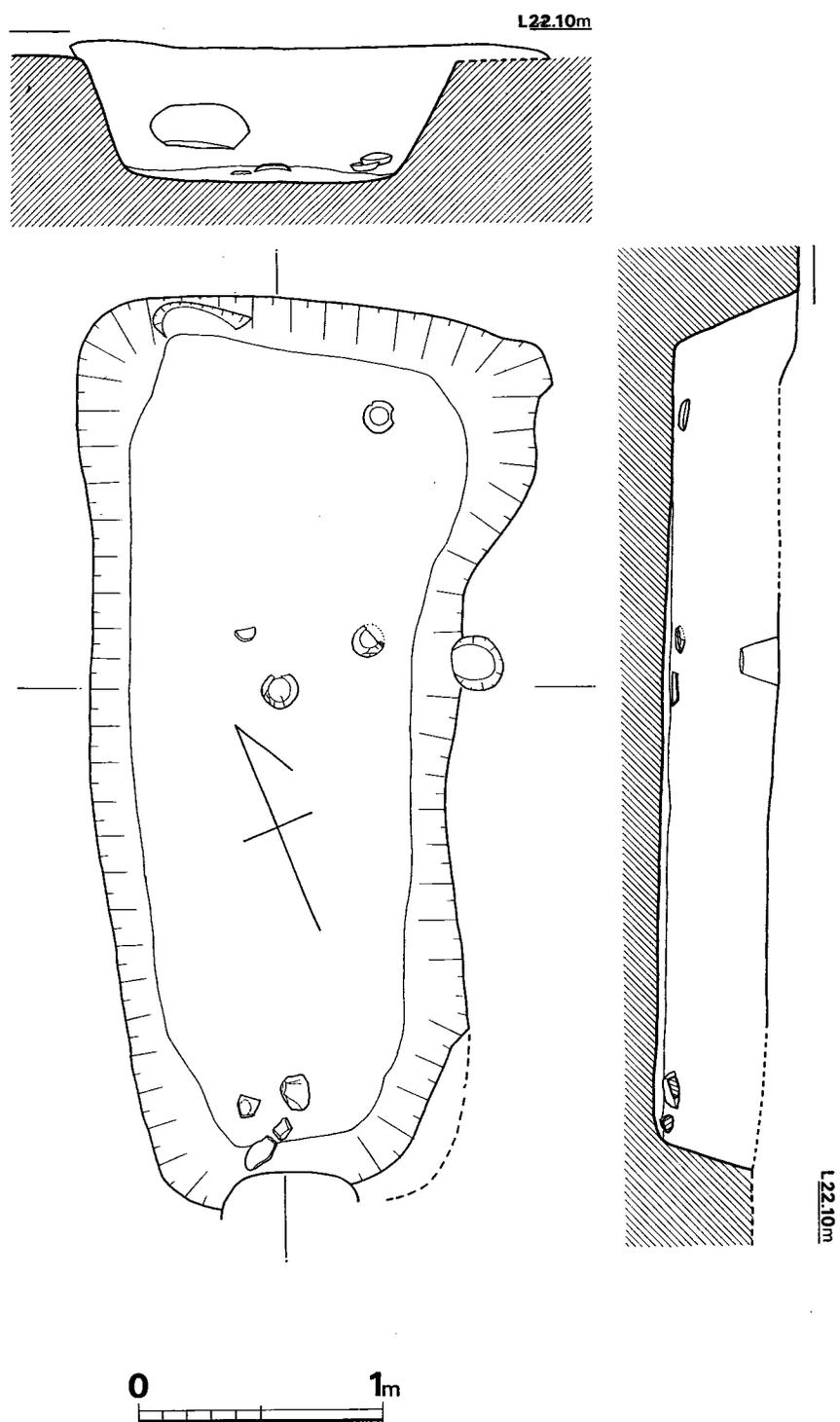


Fig. 60 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第6号土坑実測図（縮尺1/30）

の方が古い。

平面プランは大型の不整長方形で長軸3.60m、短軸1.40~1.90m、深さ0.5mを測る。大きくて深いのが特徴である。底面は平坦であるが、南側の丘陵斜面下位方が低くなっていて約10cmの高低差がある。なお、Fig. 53のようにこの土壌の東隅より溝があって東方向へさらに第1号土壌と重複し南側に曲っているが、第6号土壌との前後関係は確認出来なかった。

出土遺物は、覆土中や底面上に土師器小皿・坏が出土している。土壌南側の底面には自然石が4個みられる。

#### 出土遺物 (Fig. 62, PL. 59)

7は、土師器小皿で口径6.7cm、底径5.4cm、器高1.0cmを測る。調整は器面の剝落が著しく不明であるが、底面は糸切り痕がわずかにみられる。胎土はやや密であり、焼成は良好、色調は淡茶褐色を呈している。8~10は、土師器坏で口径12.5~13.4cm、底径8.0~8.2cm、器高2.7cmを測る。体部はヨコナデ、内底にはナデが施されている。底面は磨滅がひどく、不明瞭ではあるが3点とも糸切り痕がうかがえる。胎土は精良で、焼成は良、色調は淡灰褐色、9のみ茶褐色を呈している。

#### 第7号土壌 (Fig. 61, PL. 58)

A区の南側先端部にあり、第8号土壌の南側に比較的大きな土壌と一直線上に4個並んでいる土壌の最南端に位置している。

平面プランは不整長方形で後述する第11号土壌と同じ形をしている。長軸は1.25m、短軸は1.13mであるが、南側壁が直線的に対し、対面の北側壁は山状をなして中央が丸くなっている。底面も上面とほぼ同形を呈し、長軸83cm、短軸72cm、深さは40cmを測る。底面は水平で平坦であり、壁は大きく傾き摺鉢状に上面が広い。

出土遺物は、覆土中より土師器坏、青磁碗、白磁皿があり、自然石2個がみられる。

#### 出土遺物 (Fig. 62, PL. 59)

11・13は、土師器坏で口径12.3~12.5cm、底径7.4~7.6cm、器高2.9cmを測る。器面の剝落が著しい底面は糸切り痕がみられる。胎土はやや密で、焼成は良、色調は11が茶褐色、13は淡黄褐色を呈している。12は、青磁碗の口縁部で、復元口径16.1cmを測る。外面は鎬蓮弁文がつくり出されている。胎土は灰色で、釉はやや暗い青緑色を呈し厚くかかっている。14は、白磁皿で口径10.0cm、底径6.2cm、器高1.8cmを測る。口縁端部はやや外へ張り出し釉をかき取った、いわゆる口禿げのものである。胎土は灰白色、釉は少し青味がかかった白色で、器面全体にかかっている。

#### 第8号土壌 (Fig. 61, PL. 58)

A区の北西側にあつて第3号土壌と同じく段落ちと重なっていて、また、西側に第9号土壌と並んでいる。

平面プランは不整円形で東側が丸く、西側は先尖り気味である。東西方向1.50m、南北方向1.35m、深さ0.45mを測る。底面は水平で平坦であり、壁は緩傾斜で立ち上がる。

出土遺物は、覆土中より土師器小片と、青磁碗、皿がある。また、自然石3個もみられる。

出土遺物 (Fig. 62, PL. 59)

15は、青磁碗の底部片で底径3.5cmを測り、体部外面に鎬蓮弁文が削り出されている。胎土は灰白色で、釉は底部まで全面にかかっている淡灰緑色を呈す。16は、青磁皿で口径10.4cm、底径4.6cm、器高1.86cmを測る。上げ底より体部にかけて鋭く屈折し、口縁端部は丸い。見込みに楕歯文とヘラによる花文が描かれている。胎土は灰白色で、釉は明緑灰色を呈す。17は、青磁皿で全体無文であり口縁端部は丸く太い。胎土は灰色で、釉は灰緑色を呈し、底部にはかかっていない。

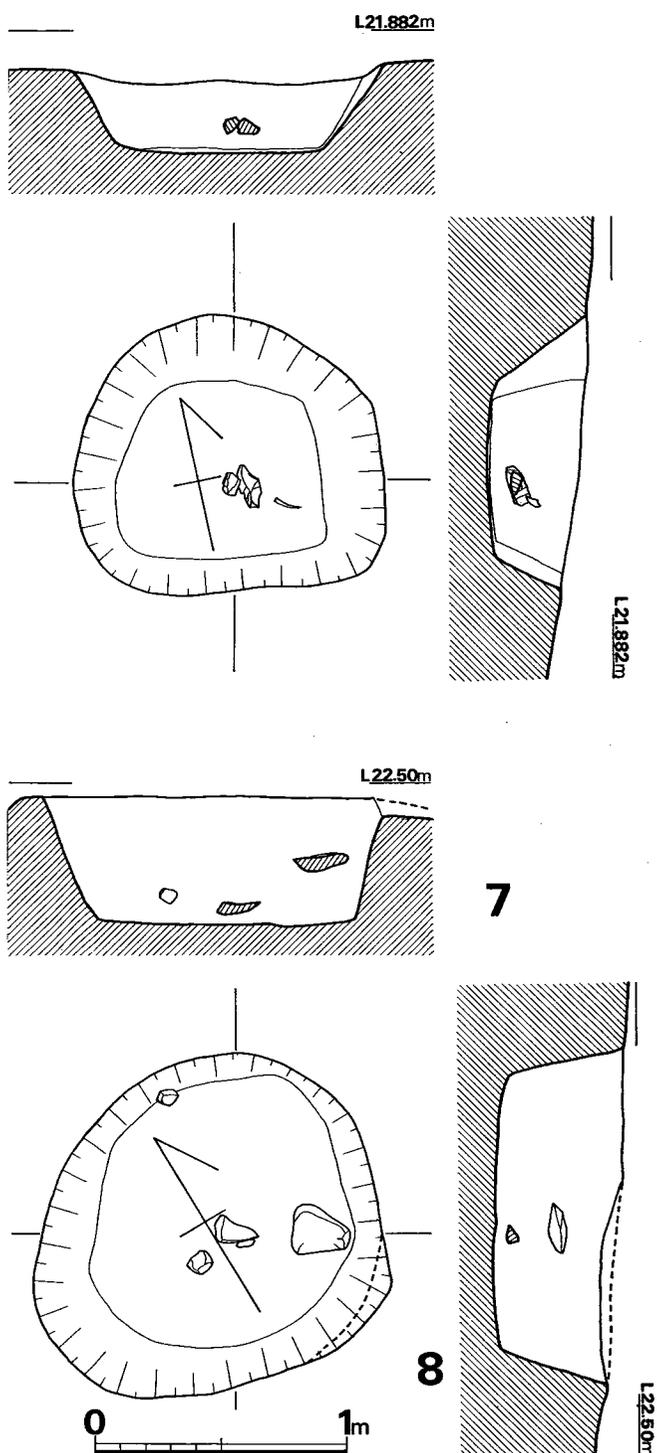


Fig. 61 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第7・8号土坑実測図 (縮尺1/30)

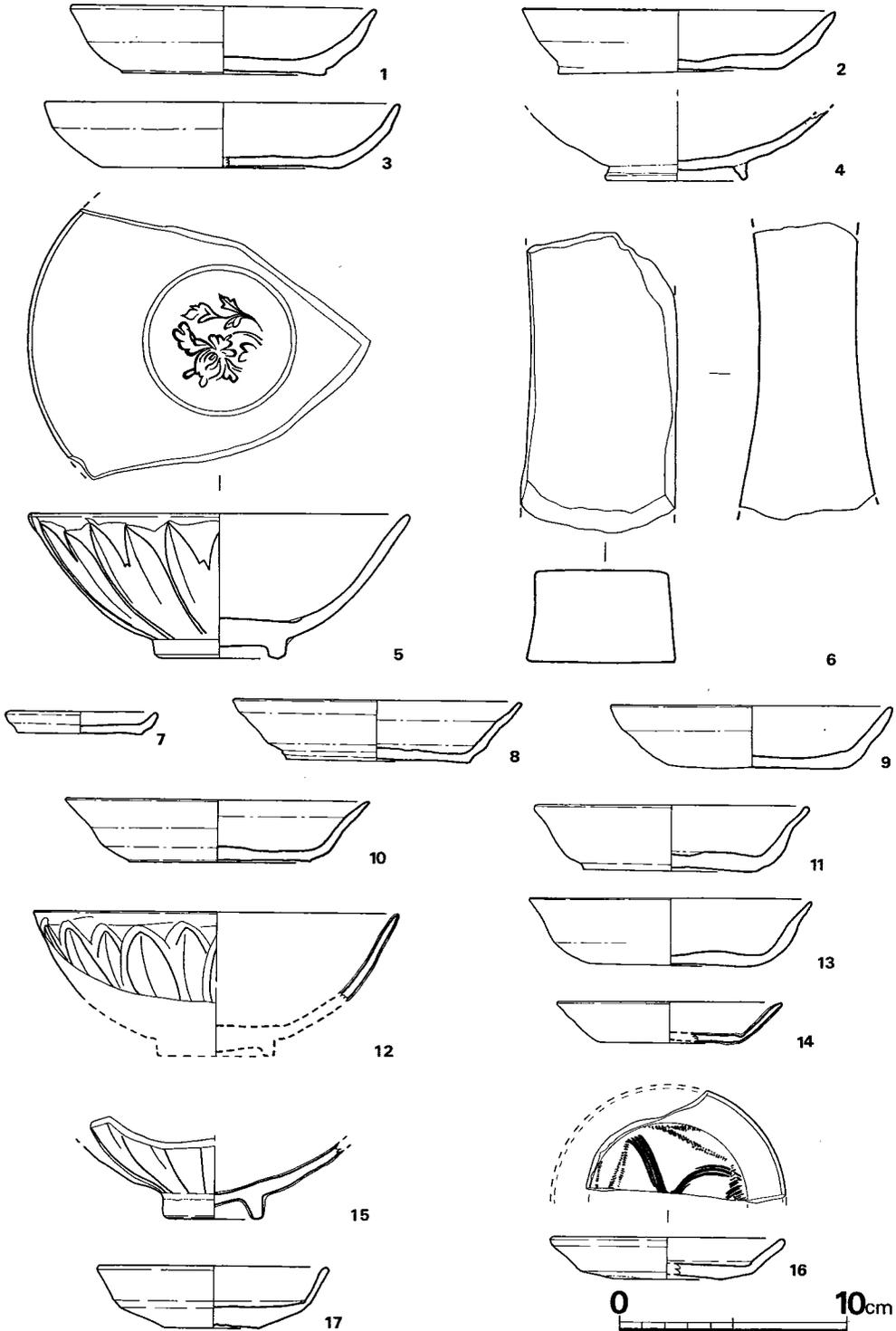


Fig. 62 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第4・6・7・8号土壙出土土器・石器実測図 (縮尺1/3)  
 (1~6-4号。7~10-6号。11~14-7号。15~17-8号)

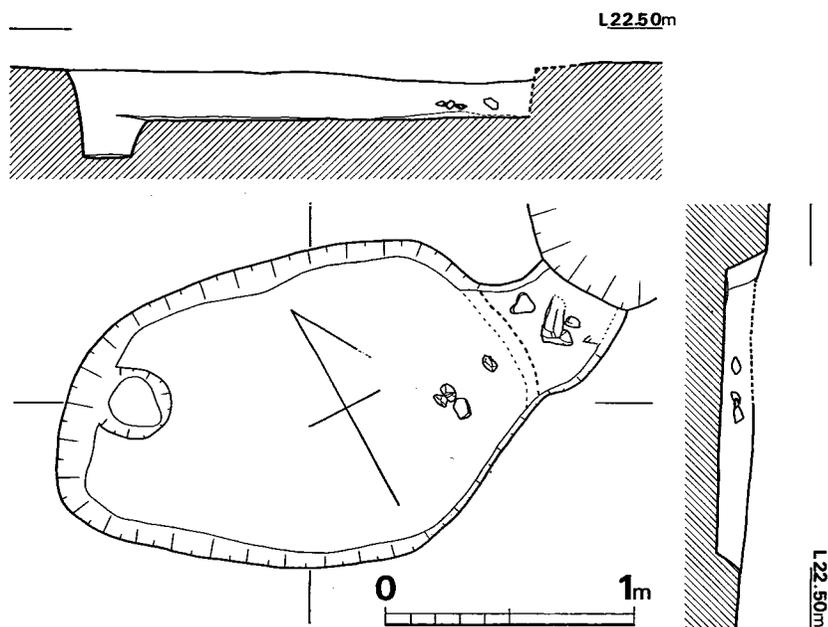


Fig. 63 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第9号土壌実測図（縮尺1/30）

**第9号土壌** (Fig. 63, PL. 60)

A区の北西側にあつて第8号土壌の西側に接するように位置している。

平面プランは不整の長方形、または不整の楕円形とも云うべき形状を呈している。長軸1.90m、短軸1.25m、深さ0.20mで浅い。底面は平坦であるが、丘陵斜面の低い方側である南側にやや傾斜している。

出土遺物はなく、底面上に自然石4個がみられるだけである。

**第10号土壌** (Fig. 53)

第10号土壌は、第9号土壌の南側2.2mにある径85cmの円形のもので、出土遺物がなく、ここでは省いた。

**第11号土壌** (Fig. 64, PL. 60・61)

A区の最北端部にあり、この先の北側はかなりの急な崖面となつており、A区の遺構掘削時には大規模な整地がうかがえる。なお、このA区の北側にあたる丘陵斜面より高所部である丘陵頂部に狭い平坦地があり、ここにも遺構の存在を想定し、検出に努めたが、既に近代に削平を受けており何も検出されなかった。

平面プランは隅丸長方形で、北壁のみ二段掘りであり、長辺2.80m、短辺2.50m、深さ1.05mを測り、非常に大型で深い。底面は隅丸長方形で長軸2.03m、短軸1.25mを測る。北側の壁

は底面より 50cm で段が付き、平坦面が 35cm と続く。底面は凹地状で平坦ではなく凸凹している。壁は摺鉢状に上面方が広く立ち上がる。

出土遺物は、覆土中より土師器小片と片口があり、底面の西側に集中して自然石が重なり合ってみられる。

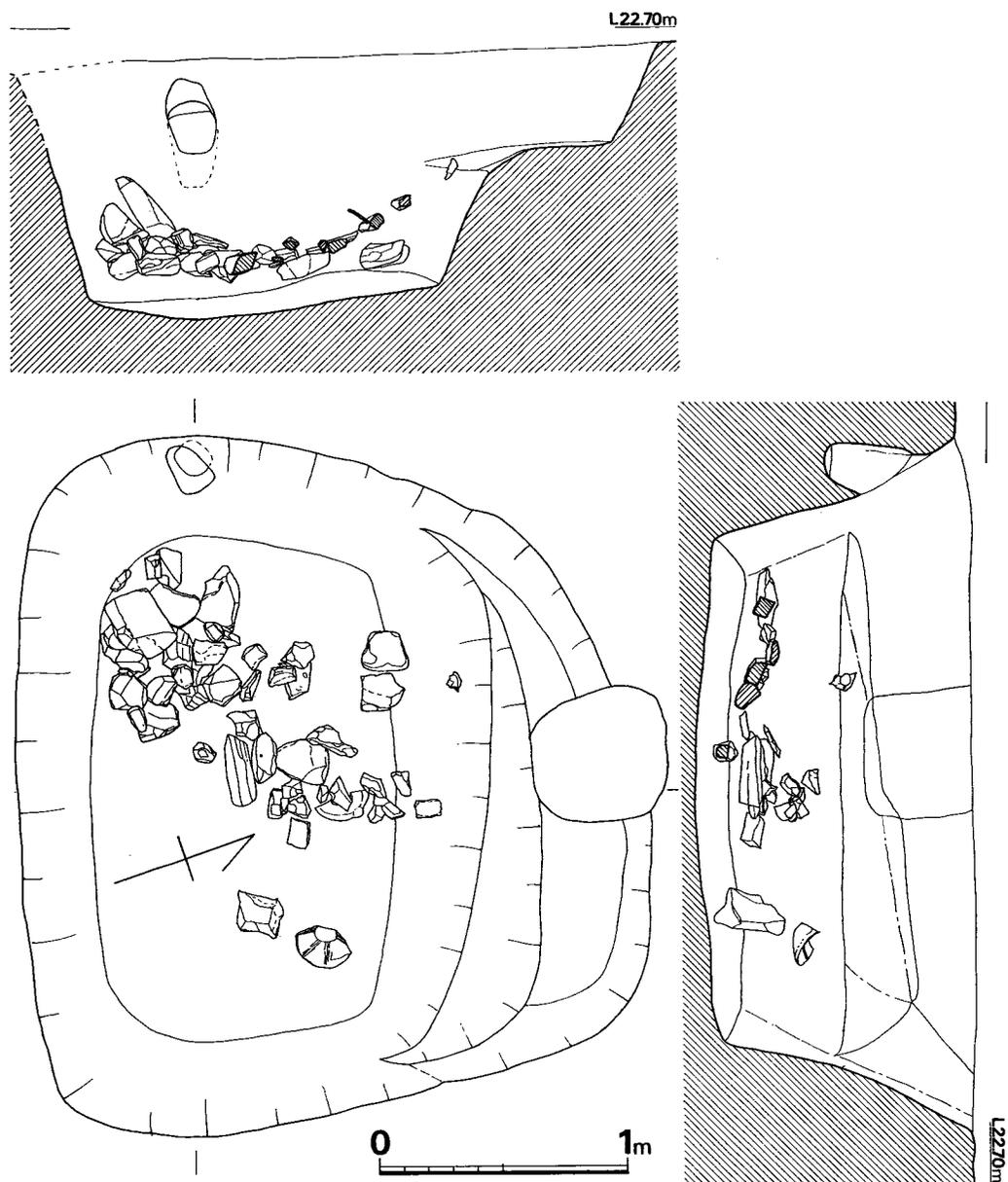


Fig. 64 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第11号土坑実測図 (縮尺1/30)

**出土遺物 (Fig. 67, PL. 65)**

1は、片口片で口径24.0cm、底径9.6cm、器高9.5cmを測る。全体的にやや歪んでいる。体部内面はヨコ方向の刷毛目の上に5本1組の沈線がみられる。外面は部分的に雑なタテ方向の短いナデが施されている。胎土は大きめの砂粒を含んでいてやや粗であり、焼成は不良、色調は淡褐色を呈す。

**第12号土壌 (Fig. 65, PL. 61)**

A区の第1号掘立柱建物に伴なうと思われる段落ちの北側直ぐのところ position している。

平面プランは隅丸長方形で長さ173cm、幅73cm、深さ33cmを測る。壁はほぼ直で、底面は123cm、幅52cmで、凹地状となっている。土壌上面の形状からして当初土壌墓と考えられたがお墓の可能性は弱い。底面上より土師器小皿が1点出土し、底面には4個の自然石がみられる。

**出土遺物 (Fig. 67, PL. 65)**

2は、土師器小皿で口径8.7cm、底径6.4cm、器高1.3cmを測る。体部はヨコナデが施され、底面は糸切り痕がみえる。胎土は密であり、焼成は良、色調は茶褐色を呈す。

**第13・14号土壌 (Fig. 65, PL. 62)**

A区の西側にあり、第13号は溝と、第14号はいくつかの小ピットと重複している。

第13号土壌は隅丸長方形で長さ130cm、幅65cm、深さ30cmで、出土遺物は覆土最上位に青磁皿があるのみである。

第14号土壌は不整形長方形で長軸1.80m、短軸1.25m、深さ0.15mを測る。出土遺物はなく、南側壁下に大きめの自然石3個がみられる。なお、第14号土壌の北側3mに正方形の落ち込みがあるが、これはブドウ畑に關係する穴である。

**出土遺物 (Fig. 67, PL. 65)**

3は、青磁皿で高台が付き、底径3.9cmを測る。見込みに雲・唐草状の文様がみられる。胎土は白色で、釉は淡く水色がかった白色を呈している。

**第15号土壌 (Fig. 66, PL. 63)**

B区の中央よりやや東側にあつて第II地点の東側半分はA区からの段落ちより4~5mほど平坦面があり、そこより緩斜面となつて各遺構が存在する平坦地となっている。緩斜面下と平坦地の境には断面「U」字状の溝があつて西側は斜面低所方向の南側に直に曲つて続いている。第15号土壌はこの溝に北側が一部重複していて溝より新しい。

平面プランは楕円形で長辺2.35m、短辺1.54m、底面は二段となつていて北側半分50cm、南側が深く90cmを測り、南側底面は65×65cmの方形を呈している。

出土遺物は、上方から流れ落ち込んだような状態で土師器小皿、坏、瓦器塊、石鍋、磨製石斧などが出土している。底面には自然石が3個みられる。

**出土遺物 (Fig. 67・68, PL. 65・66)**

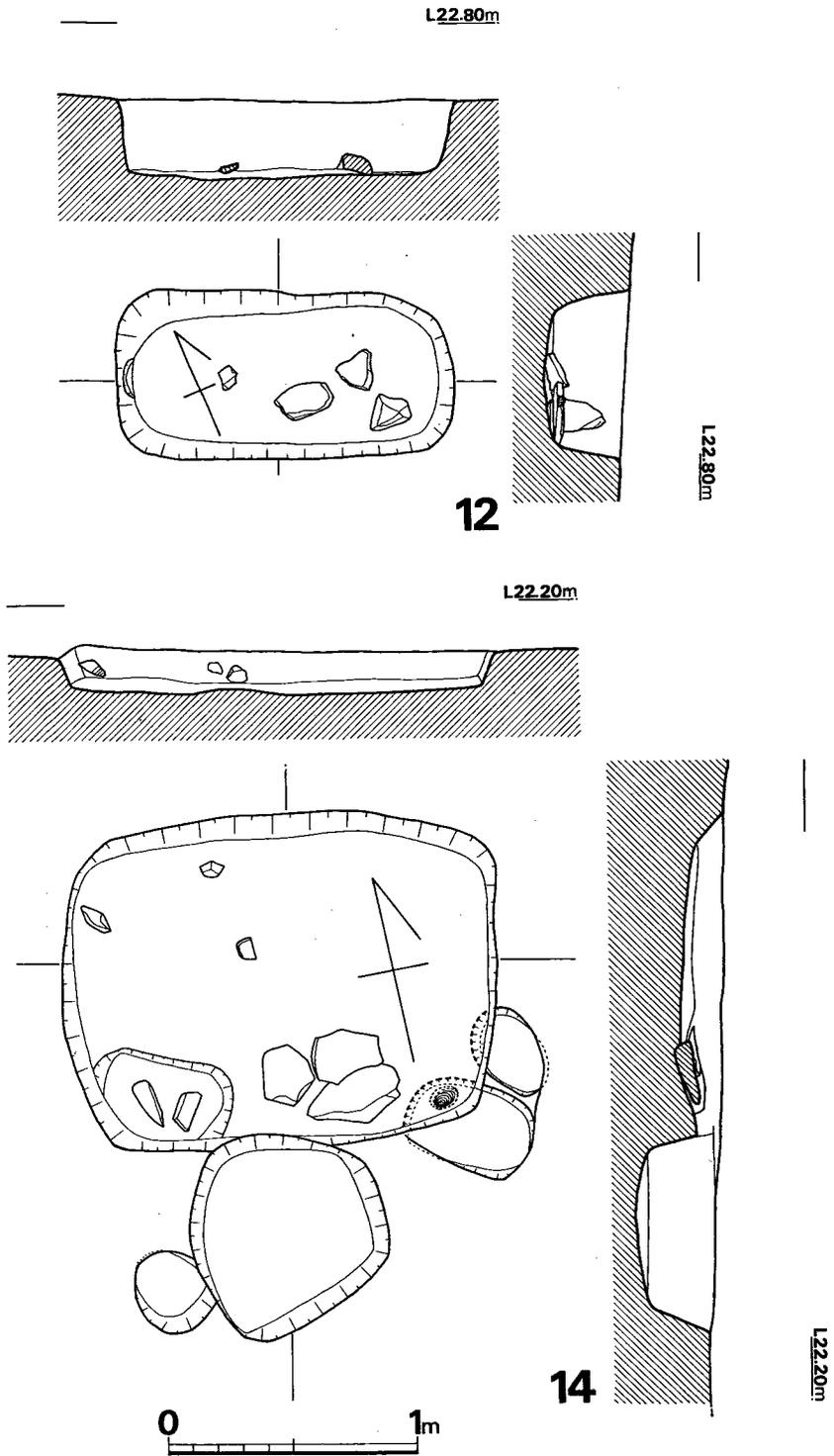


Fig. 65 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第12・14号土坑実測図 (縮尺1/30)

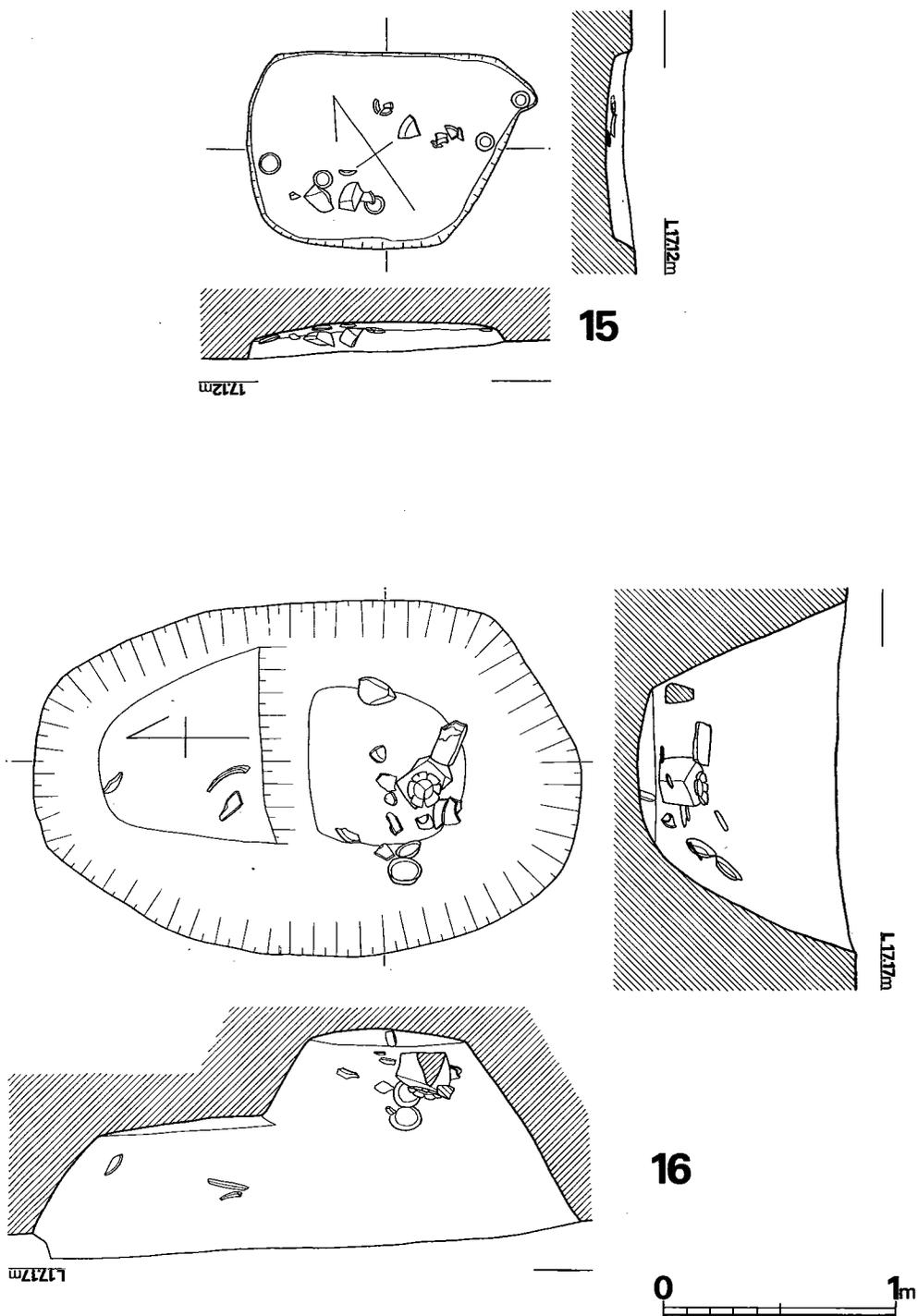


Fig. 66 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第15・16号土坑実測図（縮尺1/30）

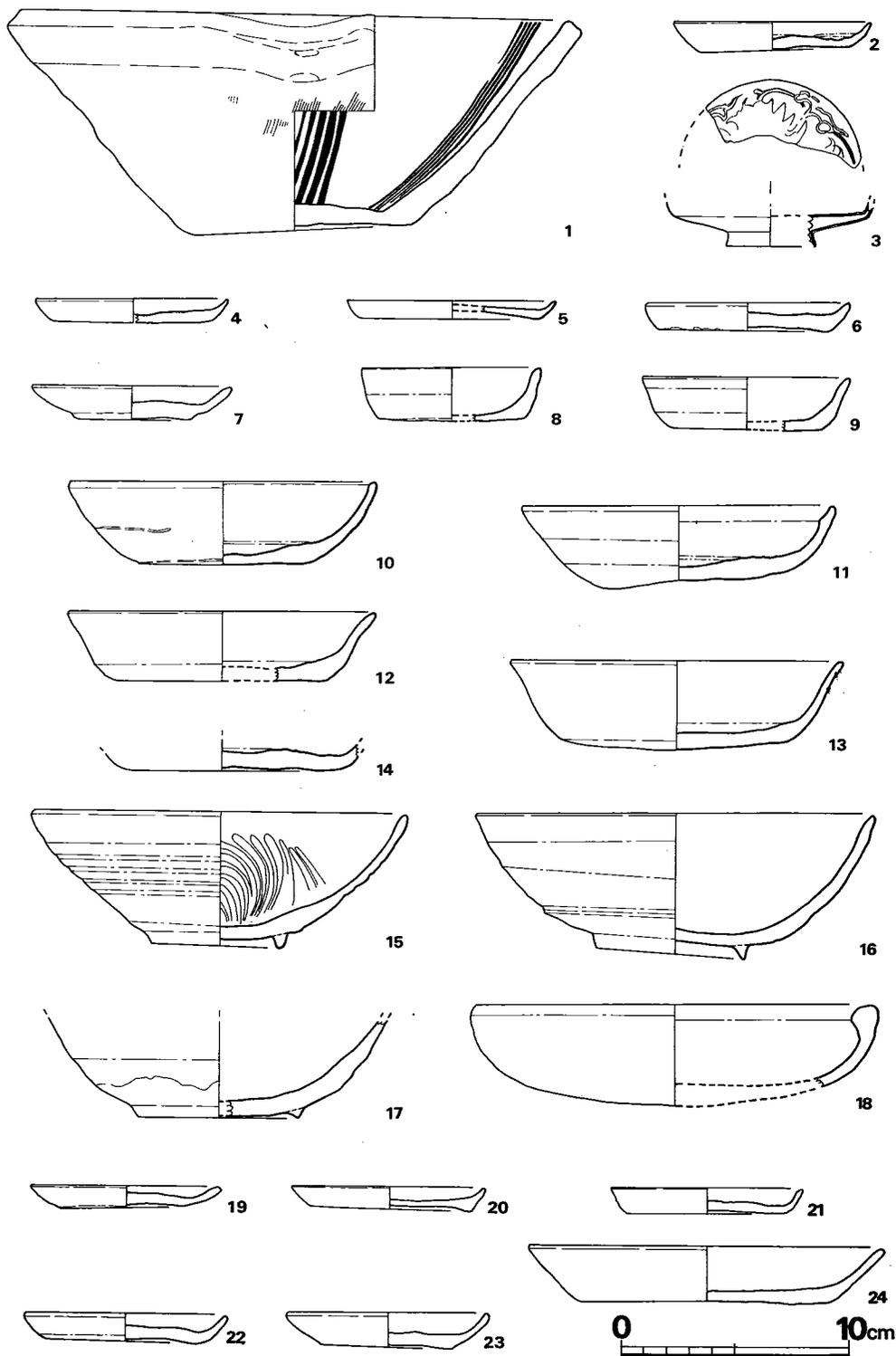


Fig. 67 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第11・12・13・15・16号土壇出土土器実測図 (縮尺1/3)  
 (1—11号。2—12号。3—13号。4~18—15号。19~24—16号)

4～7は、土師器小皿で口径8.5～9.2cm、底径5.1～8.0cm、器高は0.8～1.55cmを測る。調整は体部ヨコナデで、内底はナデが施されており、底部は糸切り痕がみられる。胎土は精良であり、焼成は良好、色調は淡茶褐色を呈している。8・9は、小型品であるが器高が高いので小皿とは分ける。口径8.0～9.3cm、底径6.5cm、器高2.3cmを測る。体部はヨコナデが、内面にはナデが施され、底面は糸切りで、8には板目がみられる。胎土は精良であり、焼成は良、色調は11が暗褐色、12が茶褐色を呈している。10～14は、土師器坏で口径13.6～14.8cm、底径7.8～10.0cm、器高3.1～3.95cmを測る。10・11は口縁部が太く特徴的である。体部はヨコナデが、内底にはナデが施されていて、底部は糸切り痕があり、13はその上に板目がみられる。胎土はわずかに砂粒を含むものがあるが精良であり、焼成は良、色調は淡灰褐色、10が淡黄褐色、12が茶褐色を呈している。15～17は、瓦器坏で口径16.6～17.8cm、底径5.9～7.2cm、器高5.9～6.2cmを測る。内面はヘラによる研磨、外面は15がナデの後に粗くヘラ磨き、16・17はナデが施されている。底面は糸切り底でその上に高台を貼り付けていて、16には板目がみられる。胎土は精良で、焼成は良、色調は15・17が体部上半は灰黒色でその他の器面は灰白色。16は内面淡灰白色、外面は灰黒色を呈している。18は埴ではあるが、口縁部が肥大して内側に大きく内反して口縁端部は太い。口径18.0cm、器高は推定で4.5cmを測る。土師質の焼成に器面を黒色研磨をしているようである。胎土は密であり、焼成は良、色調は灰黒色を呈し光沢があ

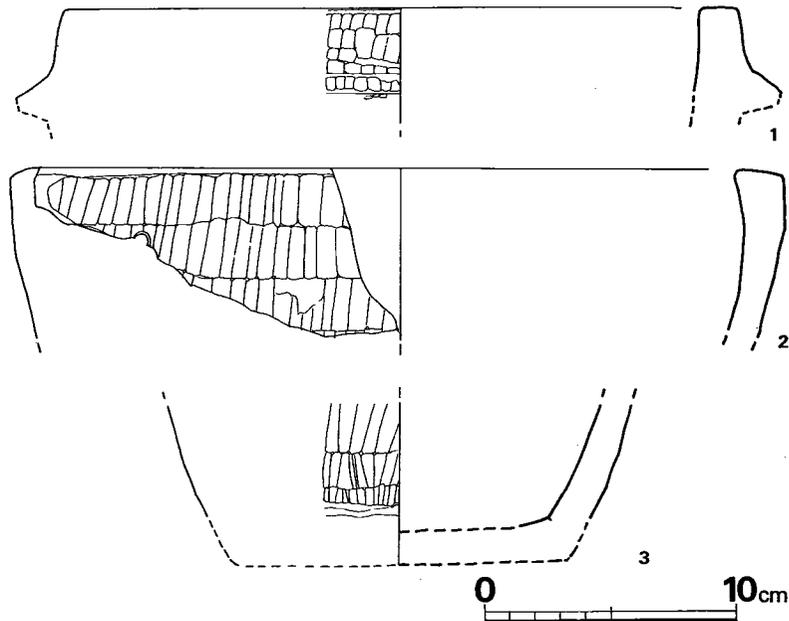


Fig. 68 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第15号土坑出土石鍋実測図（縮尺1/3）

る。

Fig. 68 は石鍋である。1 は、鏝付きの口縁部で口径 26.7cm を測る。外面は工具痕が細かくみられ、内面は丁寧な仕上げである。2 は、鏝が付かずコブ状のものが付くものと思われる。口縁部になるにつれて器肉が肥大している。外面には比較的長くった工具痕があり、内面は削丁寧に研磨されている。3 は底部片である。この他、PL. 66-4・5 のように 2 点の鏝部が出土している。これらは共に、器面の表面にススが付着している。

#### 第16号土壌 (Fig. 66, PL. 64)

B区にあり、第15号土壌の東側1.6m離れてあり、段落ち下の溝と重複している。

平面プランは不整の長方形で長さ111cm、幅85cm、深さ13cmを測る。北側壁が長く、南側壁は短い。底面はやや凹地状になっている。覆土は焼土、炭化物を多量に含んでいて他の土壌とは異なっており、あるいは土壌墓の可能性もある。

出土遺物は、底面より土師器小皿、坏で、自然石が2個みられる。

#### 出土遺物 (Fig. 67, PL. 66)

19~23は、土師器小皿で口径8.4~9.0cm、底径5.4~7.1cm、器高1.0~1.5cmを測る。体部はヨコナデが、内底にはナデが施されていて、底面は糸切り痕がみられる。胎土は精良で、焼成は良、色調は20が赤茶褐色、他は茶褐色を呈している。24は、土師器坏で口径15.8cm、底径11.0cm、器高2.4cmを測る。体部はヨコナデで、内底はナデが施されている。底面は糸切り底である。胎土は精良で、焼成は良、色調は淡茶褐色を呈する。

### (3) 土壌(木棺)墓 (Fig. 69~71, PL. 67~70)

A区とB区より各1が検出される。他に土壌墓と考えられないものもないが副葬品等よりして一応省いた。

#### 第1号土壌墓 (Fig. 69, PL. 67-68)

A区の中央部付近やや北側の第1号掘立柱建物の桁行間下にある。土壌墓の方が古い。

平面プランは隅丸長方形で上面の長さ143cm、幅65cm、底面の長さ128cm、幅48cm、深さ43cmを測る。この第1号墓は土壌内に木棺を納めたらしく底面より錆びた鉄釘が両木口部と中央部に出土している。木棺の上を自然石が覆っていた様で覆土中から多く検出されている。土壌の底面は水平で平坦であり、壁は木口側はほぼ直に立ち上がるが、長側壁方はやや緩になっている。

副葬品は北側木口部と西側長側壁の隅に、自然石の下敷になって青磁碗があり、覆土中でも北側方に白磁皿小破片が出土している。

#### 出土遺物 (Fig. 71, PL. 70)

1は、白磁皿で口径12.0cmを測る。口縁端部は体部より大きく外反して尖る。胎土は灰色

で、釉は灰色であり、口縁部をかきとっていで、口禿である。2は、青磁碗で口径16.6cm、底径5.95cm、器高7.25cmを測る。体部内外面無文で、見込みに「金玉満堂」の印文がある。胎土は灰色で、釉は高台外面までオリーブ色を呈す。内外に貫入がみられる。

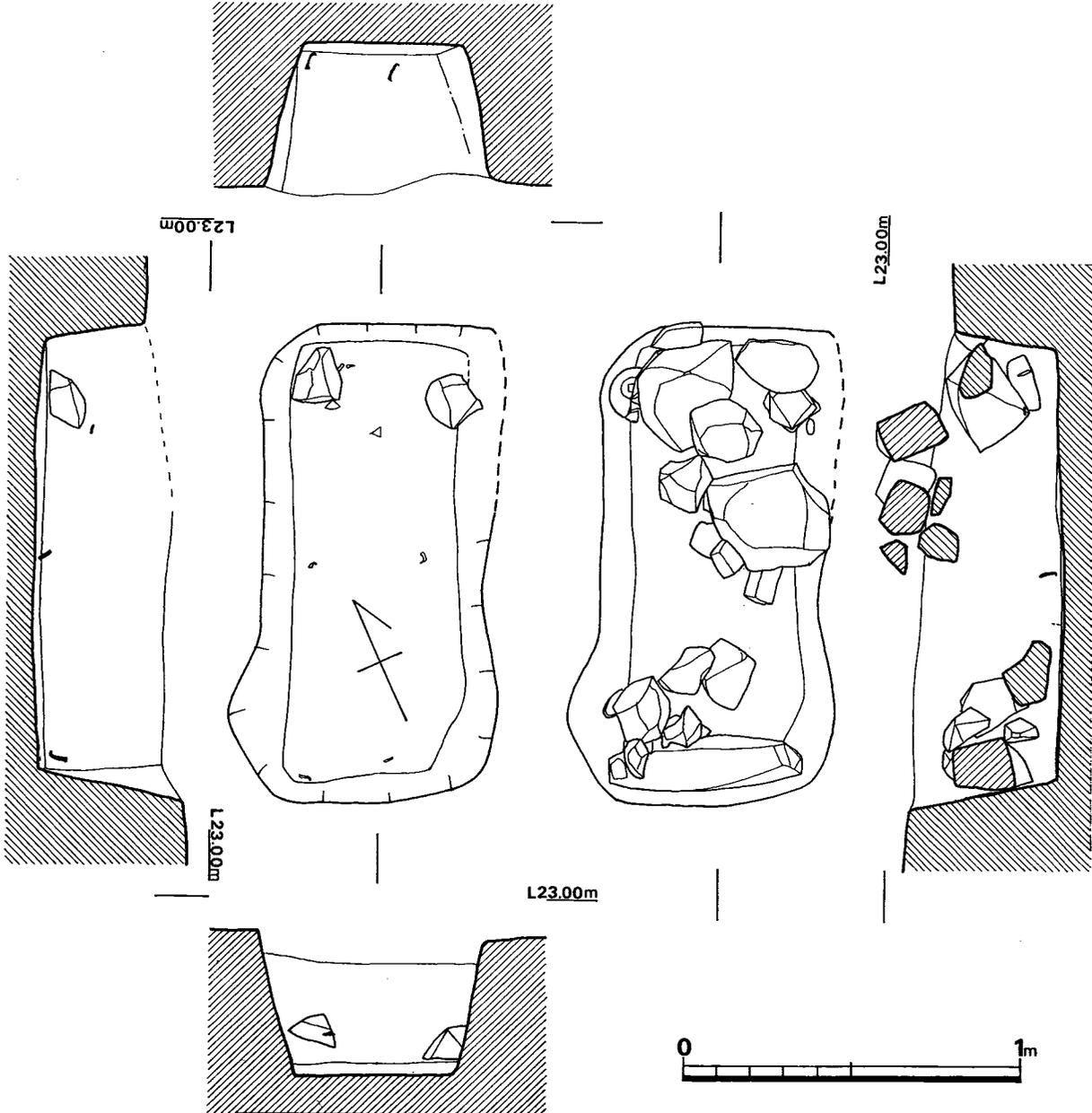


Fig. 69 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号土墳墓実測図(縮尺1/20)

### 第2号土墳墓 (Fig. 70, PL. 69)

B区の西側にあり丘陵斜面に直交するようにある。人骨の足部が遺存していて、頭部は略西方向である。

平面プランは隅丸長方形で頭部はより丸い。上面の長さ2m、幅0.72m、底面の長さ1.72m、幅0.5m、深さ0.3mを測る。遺存する人骨は両足部で伸展葬である。なお、木棺による埋葬を想定しその痕跡を調査するも何も確証が得られない。

副葬品は、顔、首、肩の左側部分に土師器小皿と白磁碗、右腹部上に鉄刀が先部を足方向に向けて出土している。また、不明の石製品が覆土上面より出土しており一応副葬品と考える。

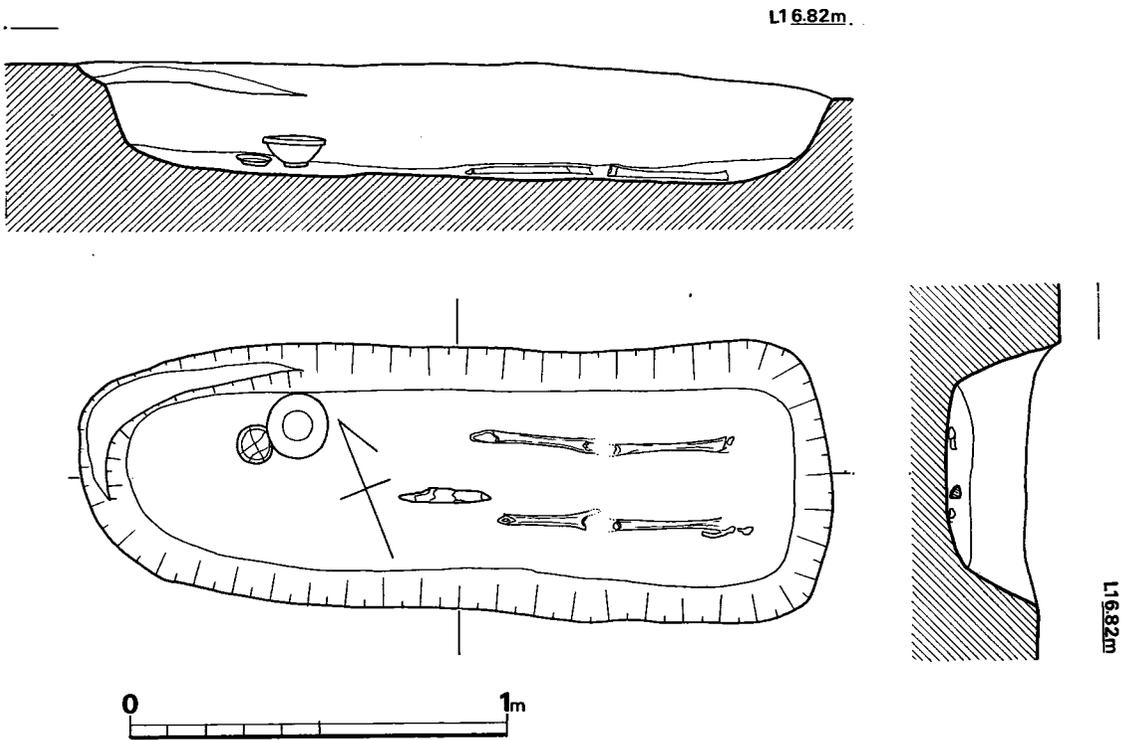


Fig. 70 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第2号土墳墓実測図 (縮尺1/20)

### 出土遺物 (Fig. 71, PL. 70)

3は、土師器小皿で口径8.8cm、底径7.0cm、器高1.2cmを測る。体部はヨコナデが施されていて、底部は糸切り痕がみえる。胎土はわずかに砂粒を含むが精良で、焼成は良、色調は淡黄褐色を呈している。4は、白磁碗で口径17.8cm、底径5.96cm、器高7.0cmを測る。口縁部は玉縁で垂れ下らない。胎土は灰褐色で、釉は緑白灰色する。

5は、滑石製の円盤状製品であり中央に鈕が付くようである。表面は凸レンズ状になり工具

痕が細かく残る。鈕は欠損した部分から想定できて中央に孔があったようで凹んでいる。この面をよくみるとススが二ヶ所に付着していて石鍋を再加工したようである。

6は、鉄刀で現存長さ34.8cmを測る。

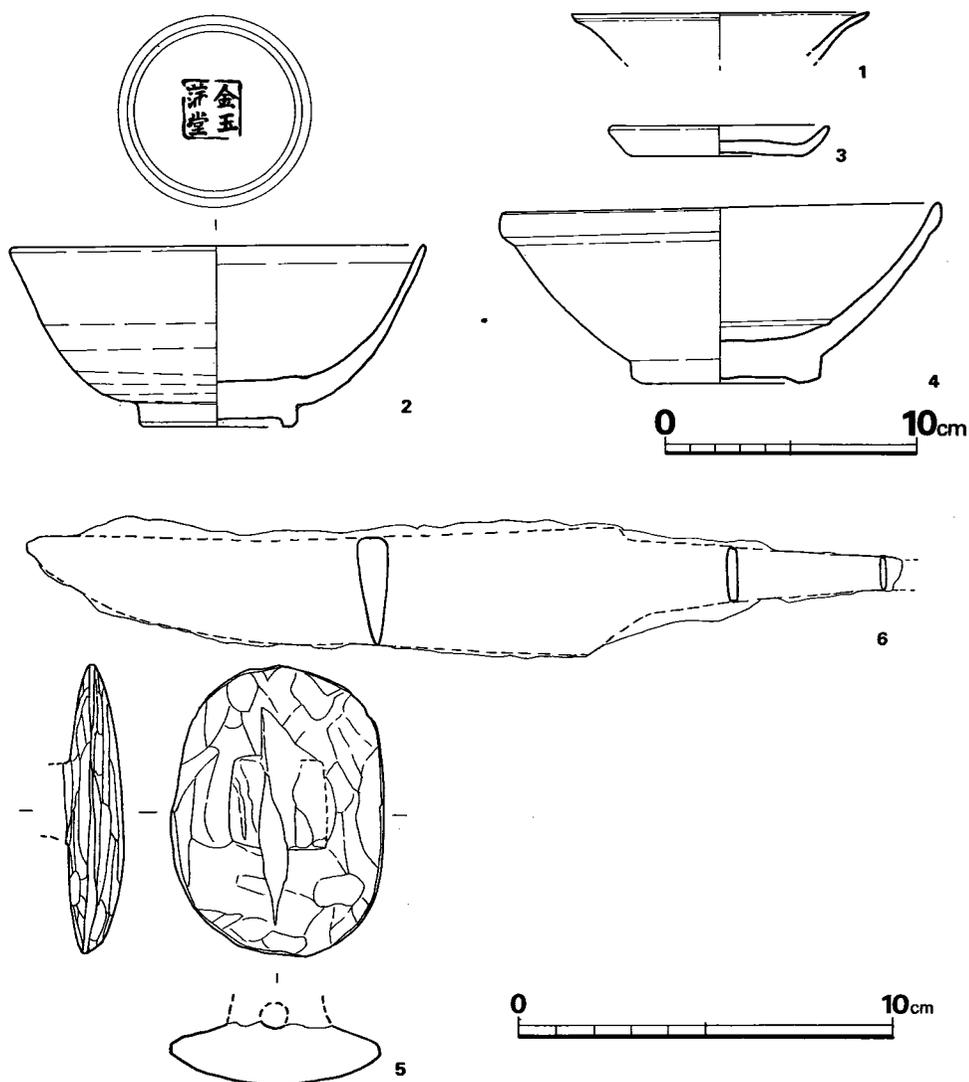


Fig. 71 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1・2号土墳墓出土土器・鉄器・石器実測図（縮尺1/3）

#### （4） その他の遺物

遺構に伴う遺物以外に、第Ⅱ地点でも表土層や遺構検出面上の覆土層内から多量の歴史時

代の遺物が出土している。土師器、須恵質土器、内黒土器、土鍋、片口、瓦器、青磁、白磁、雑器、陶器、瓦。土製品では土錘。石製品には滑石製品の石鍋、匙、鈕付円板があり、他に砥石、硯がある。

#### 土師器小皿 (Fig. 72, PL. 72)

1～48以外にも小皿は約50個体分出土している。1は、極小皿で口径5.8cm、底径4.0cm、器高1.2cmを測る。体部はヨコナデが施されていて、底部は糸切り痕がかすかにみられるようであるが詳細は不明。胎土はわずかに砂粒を含むも密であり、焼成は良で、色調は淡褐色を呈している。2～48は、口径7.1～10.2cm、底径5.0～7.8cm、器高1.0～1.7cmを測る。磨滅や剝落が著しいものが多いが体部はヨコナデが、内底にはナデが施されていて、底面は糸切り痕がみられ、さらに板目がついているものもある。胎土は精良なものが多く、わずかに砂粒を含むものも若干ある。焼成は良が多く、色調は茶褐色系を呈している。

#### 高台付小皿 (Fig. 72, PL. 70)

49で、小皿に高台が付いている。口径11.2cm、底径6.5cm、器高2.95cmで坏部は1.75cmを測る。体部はヨコナデが、内底にはナデが施されている。底部は剝落が著しく不明、なお、底部の中心に径0.3cmの穿孔がみられる。胎土は精良で焼成は良、色調は茶褐色を呈している。

#### 土師器坏 (Fig. 73, PL. 70)

図示しないものが約30個体ほどある。

小坏 1で、口径9.2cm、底径4.7cm、器高2.8cmを測る。器面の剝落が著しく調整は不明である。胎土は砂粒を含みやや粗であり、焼成は良で、色調は内面が淡灰褐色で外面が淡灰黒色を呈している。

坏 2～20で、口径11.7～15.8cm、底径7.5～12.2cm、器高2.4～3.8cmを測る。3・6は特に深く、4・11などは器肉が厚い。器面は剝落や磨滅が著しいものもあるが、体部はヨコナデで、内底にはナデが施されている。底面には糸切り痕がみられ、11や13などには板目がついている。胎土は精良なものほとんどで、焼成は良で、色調は黄褐色系と茶褐色系を呈している。

#### 高台付碗 (Fig. 73, PL. 70)

21～23で、坏部の底部は丸底と平底とがある。21は、口径13.3cm、底径6.2cm、器高4.6cmを測る。体部はヨコナデが施されていて、底面は不明。胎土はわずかに砂粒を含み密で、焼成は良、色調は淡黄褐色を呈している。21は高台が低く、22・23は高く外開きしている。23の底面に糸切り痕がみられる。

#### 須恵質土器 (Fig. 74, PL. 71)

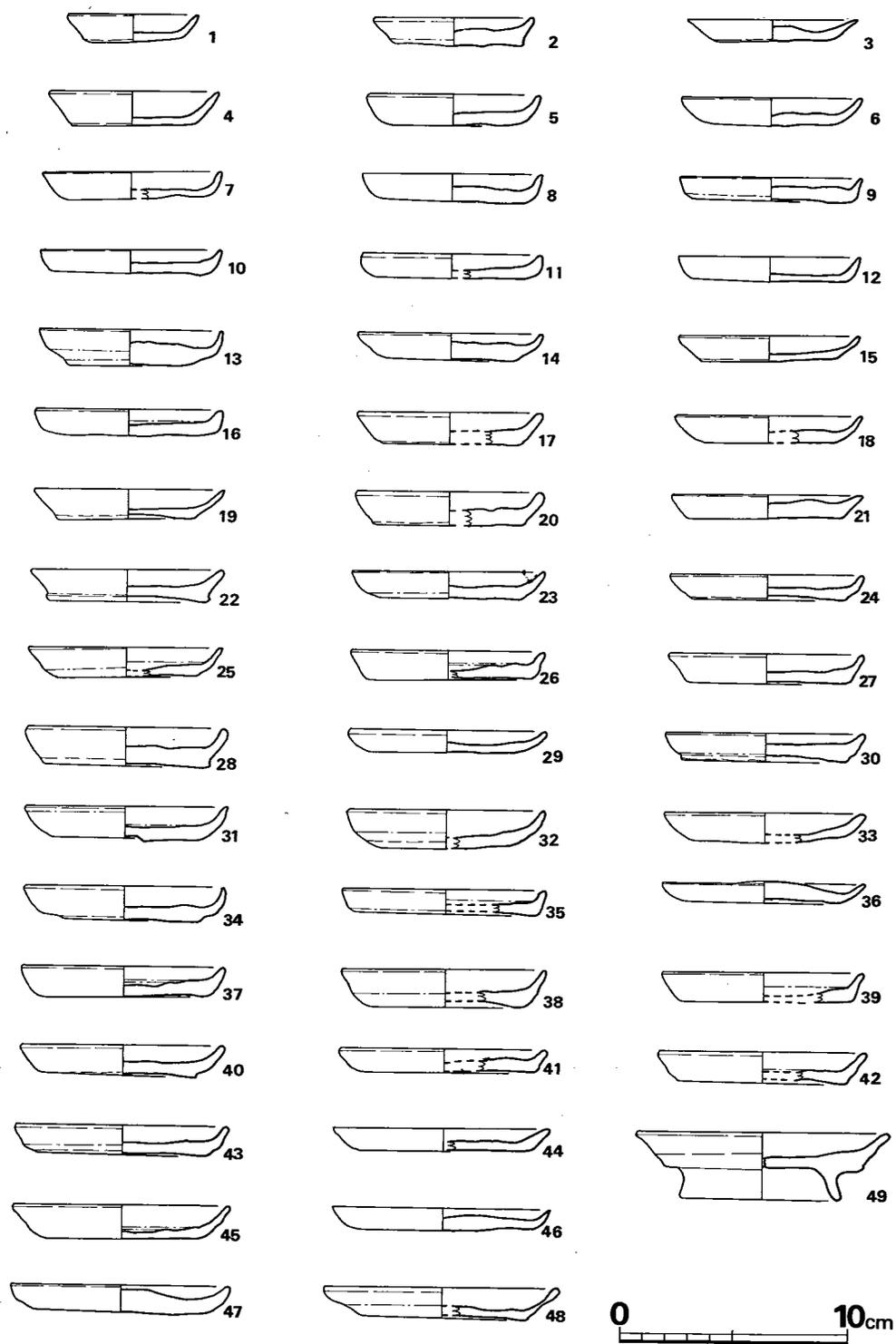


Fig. 72 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土土師器実測図④ (縮尺1/3)

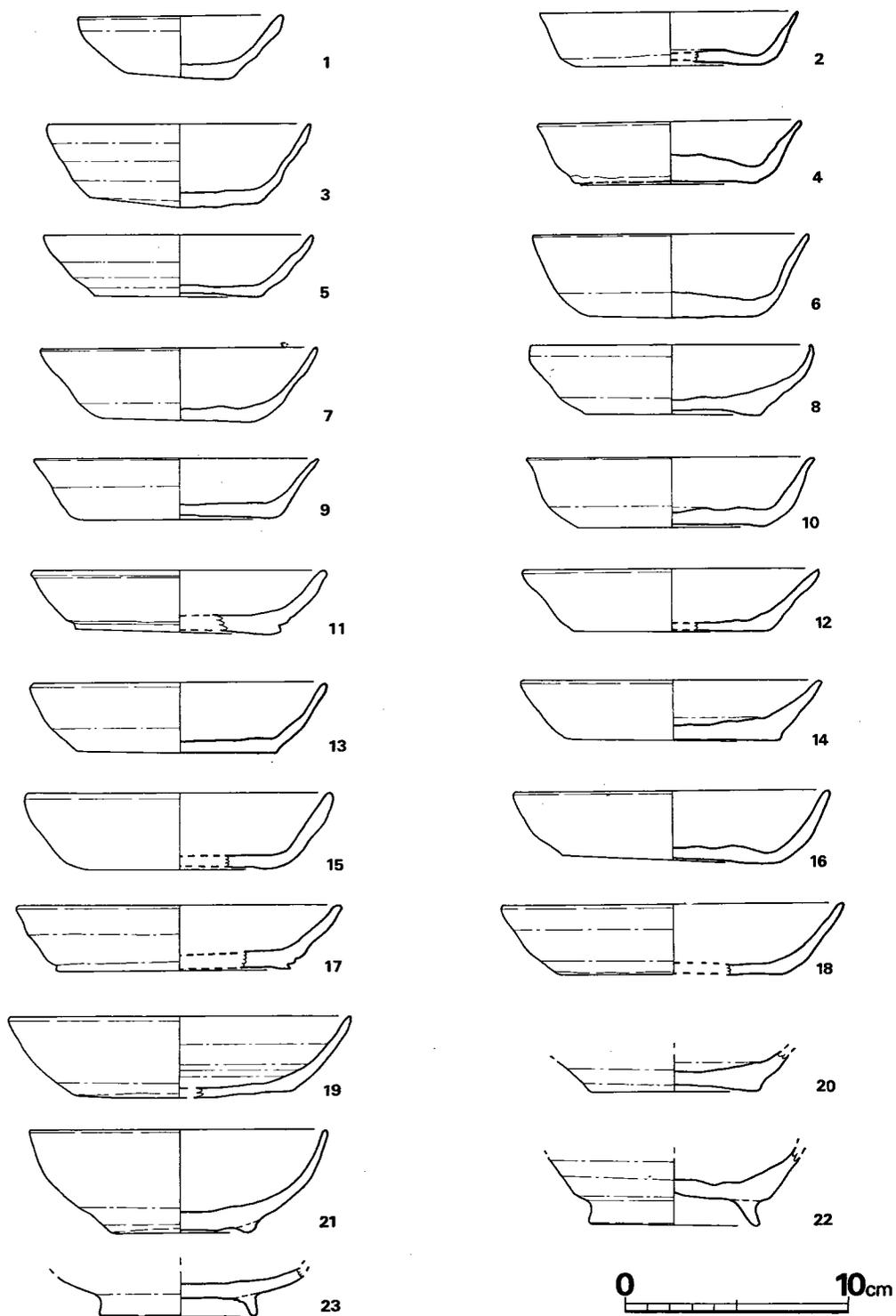


Fig. 73 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土土師器実測図② (縮尺1/3)

1は、坏で口径10.2cm、器高3.3cmを測る。底部は丸く口縁部はほぼ直立している。口縁部内面から外面の体部境までヨコナデで内底はナデ、底面は粗いヘラ削りが施されている。胎土は細砂粒を少し含んでいるが密であり、焼成は良、色調は灰黒色を呈している。2は、甕の底部片と思われ、底径8.9cmを測る。色調は灰黒色を呈している。3は、鉢で色調は灰色を呈している。他に須恵器と思われるものを合わせて約10個体分あり甕の破片が多い。

#### 内黒土器 (Fig. 74)

4は、壺の底部片で、内底はヘラ研磨が施されている。胎土は密で、焼成は良、色調は内面灰黒色、外面淡茶褐色を呈している。5は、内面に研磨、外面はヨコナデが施され、底面は糸切り痕がみられる。色調は内面黒褐色、外面は淡白褐色を呈している。6は5と同様である。

#### 土鍋 (Fig. 74, PL. 71)

7のみを图示したが他に小破片の口縁部、体部、底部片が約15個体分出土している。

7は、口径35.1cmを測る。口縁部は直線的で体部より大きく外反する。内面にはかすかにヨコ方向に刷毛目がみえ、外面には指先による成形痕が残り、やや凸凹面がある。胎土は砂粒を多く含みやや粗であり、焼成はやや悪く、色調は内面が淡灰褐色で、外面は暗灰褐色でありあるが口縁部までススが付着していて黒色を呈する部分が多い。

他の破片をみると、ほぼ同様であるが口縁部が長いものと短いものの二種類があり直線的に延びている。1個のみ外面に鏝がめぐるものがある。外面にススが付着しているものが多い。

#### 片口 (Fig. 74, PL. 71)

图示した3点以外に約8個体の口縁部、底部片がある。

8は、口径8.0cm、底径12.8cm、器高11.2cmを測る。体部内面にヨコ、斜め方向の刷毛目、その上に5本1組の沈線がタテ方向にみられ、摺鉢となっている。口縁部はヨコナデが施されている。体部外面には指先による成形痕を残し、部分的にナデがみられる。色調は灰色を呈していて須恵質である。9は、内面に沈線がみられなく瓦器質である。10は、器肉が厚く、他は8と同様で土師質である。他のものをみると土師質と瓦器質のものが多い。

#### 瓦器 (Fig. 75, PL. 71)

壺 1~18で、口径16.1~17.2cm、底径5.6~7.6cm、器高5.2~6.6cmを測る。内面はヘラ研磨されていて丁寧な仕上げであり、特に14は暗文状となっている。外面はヨコ方向のヘラ研磨とヨコナデが施されたものがある。底面は3・17・18に糸切り痕と板目がみられる。胎土は精良なものが多く、焼成は良好、色調は灰黒色、灰白色を呈しているものがほとんどである。15

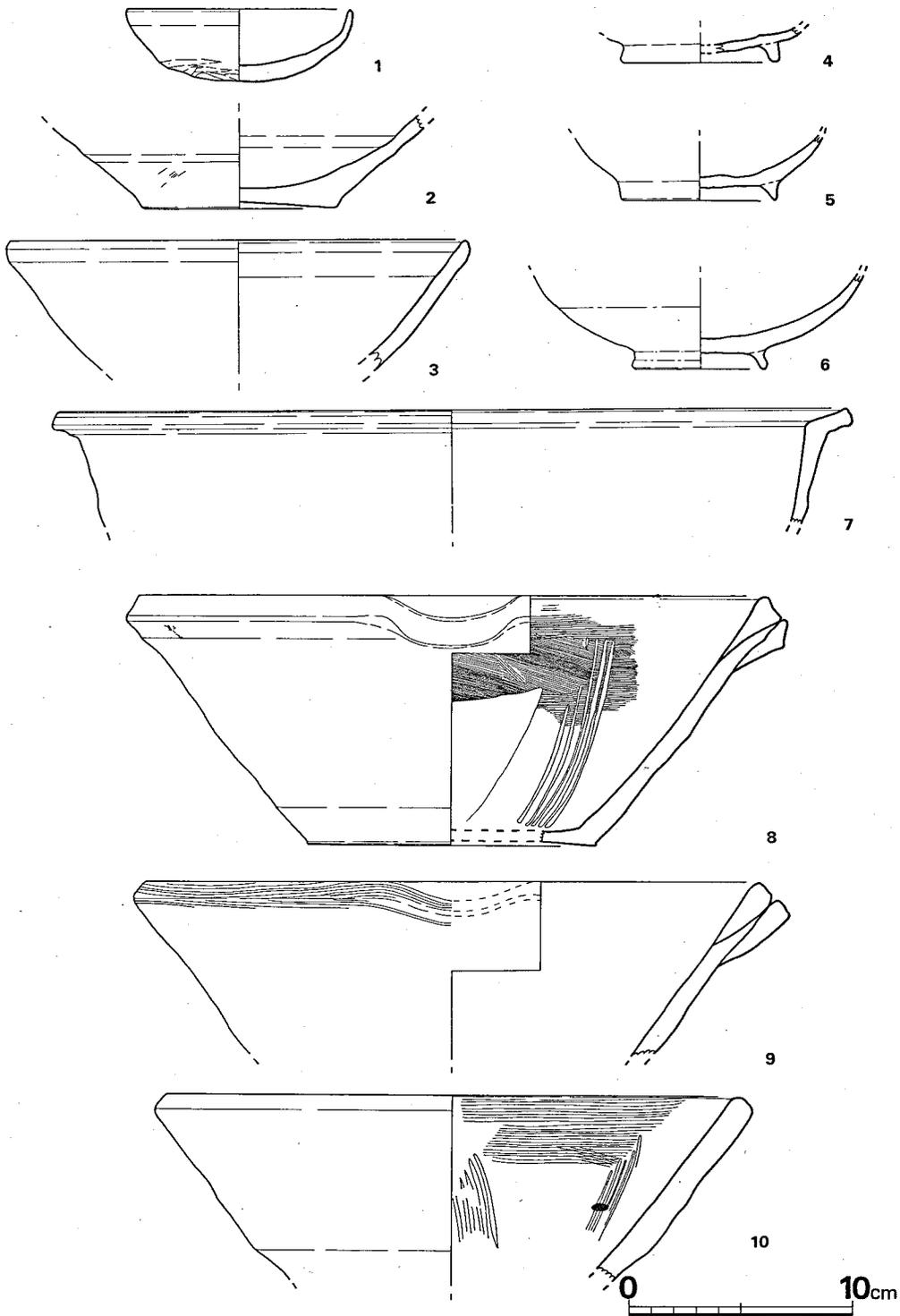


Fig. 74 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土須恵質土器・内黒土器・土鍋・片口実測図（縮尺1/3）

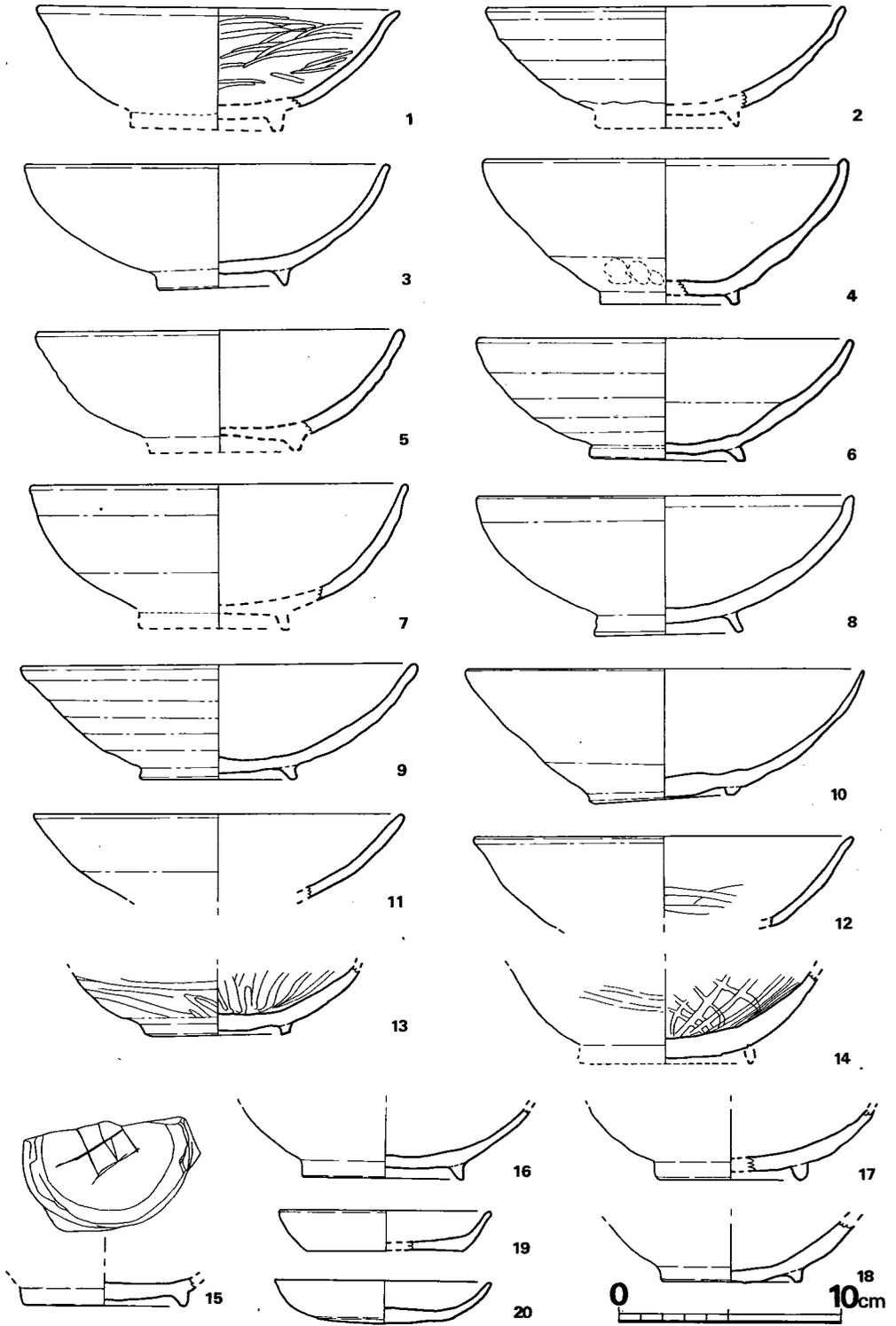


Fig. 75 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土瓦器実測図(縮尺1/3)

の底部片には底面にやや鋭い工具による刻文があり「由」字状をなしている。

坏 19・20で、口径9.5cmと9.8cm、底径6.8cmと6.5cm、器高1.8cmと2.0cmを測る。内面はヘラ研磨、体部外面はヨコナデが施されている。底面は19が平底で糸切り痕がみられ、20は丸底で指先による成形痕のオサエがみられる。共に胎土は精良で、焼成は良、色調は灰黒色を呈している。

## 磁器

第Ⅰ地点と同じように遺構に伴わない磁器が多量に出土している。

分類は第Ⅰ地点の「磁器」と同様である。

### 青磁 (Fig. 76~81, PL. 72~77)

#### I-A-b類 (Fig. 76, PL. 72)

1は、蓮弁文の削り出しはやや不明瞭であるが、胎土は灰白色、釉はやや緑がかった青色である。内面に粗い貫入がある。2・3は、胎土が灰白色で、釉はやや暗いうぐいす色である。器面に気泡がみられる。4は、口縁部から底部までみられ、胎土は淡褐色で、釉はやや黄色がかったうぐいす色である。両面に細い貫入がある。5は、胎土が灰白色で、釉は水色である。両面に粗い貫入がある。6は、胎土が灰色で、釉はやや緑がかった水色である。内面にやや細かい、外面に粗い貫入がみられる。7は、見込みに草花文がみられる。胎土は灰白色で、釉は緑灰色である。内外面に貫入がある。

#### 1-B類 (Fig. 76, PL. 72)

8は、見込みに「金玉満堂」の印文が押されている。胎土は灰色がかった水色で、釉は灰色である。9は、全面無文で、胎土は灰色で、釉は緑がかった灰色である。高台内に径3mm程の焼成台の跡が付いている。

#### 1-C類 (Fig. 76・77, PL. 72・73)

10は、口縁部が輪花状になるもので、胎土は灰白色で、釉はやや水色がかった灰緑色である。11は、胎土が灰色、釉は淡い緑色である。全面に貫入、気泡がある。12は、胎土が灰色で、釉は緑がかった灰白色である。Fig. 77-1は、底部から口縁部までみられ、胎土は灰色で、釉は緑がかった灰色であり底面にも一部かかっている。高台内に焼成台の跡がみられる。

#### 1-D類 (Fig. 77, PL. 73)

2は、胎土が淡灰褐色で、釉は黄緑色である。内外面に粗い貫入と気泡がある。3は、胎土が灰色で、釉は緑色、外面の口縁部は釉ダレがみえ淡青色を呈している。4は、胎土が灰色で、釉は緑がかった灰色である。内外面に気泡がある。5は、胎土が灰色で、釉はわずかに緑がかった灰色である。口縁端部がややスレている。6は、底部片で、胎土は灰色で、釉は緑色であ

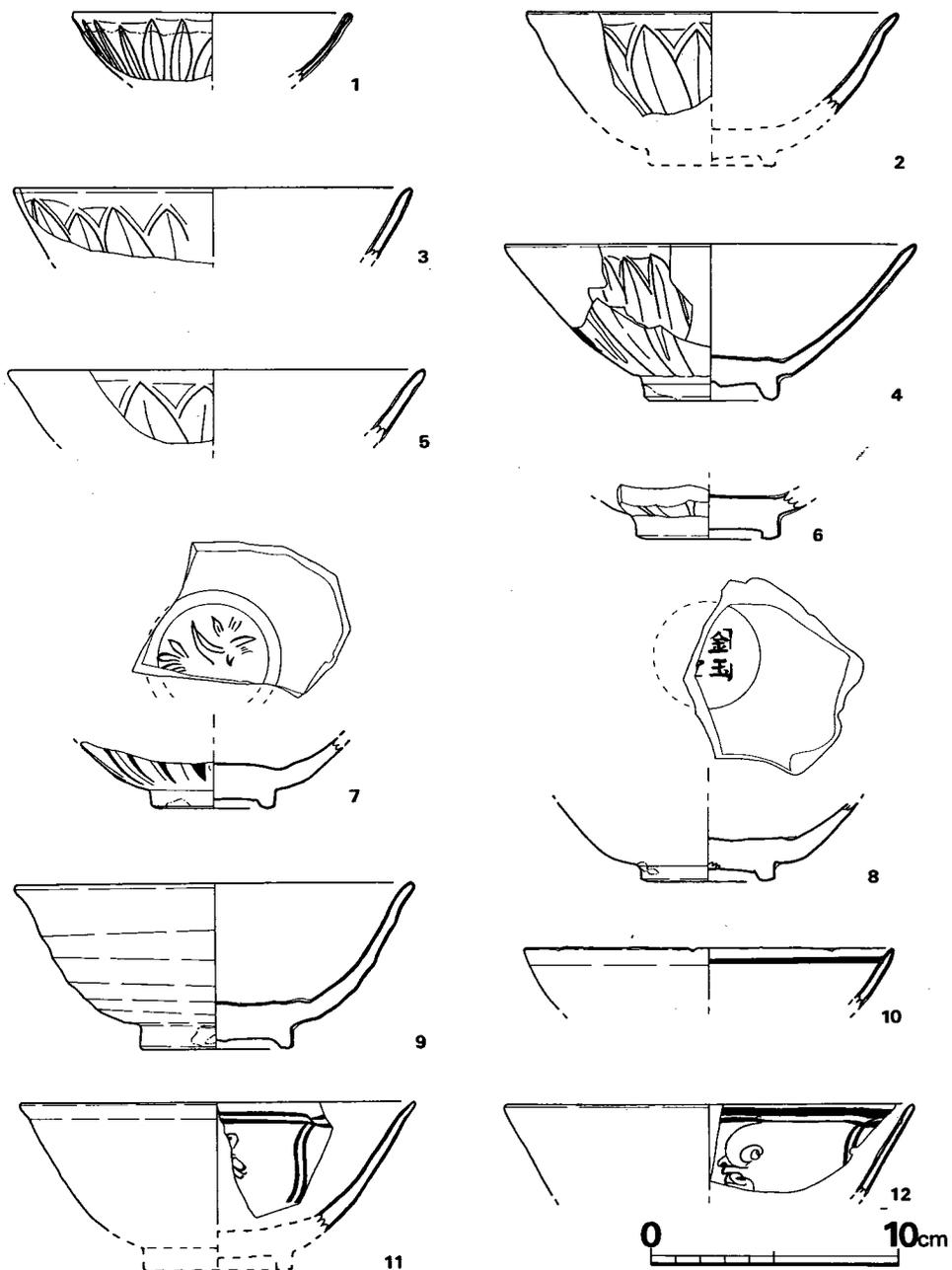


Fig. 76 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁実測図① (縮尺1/3)

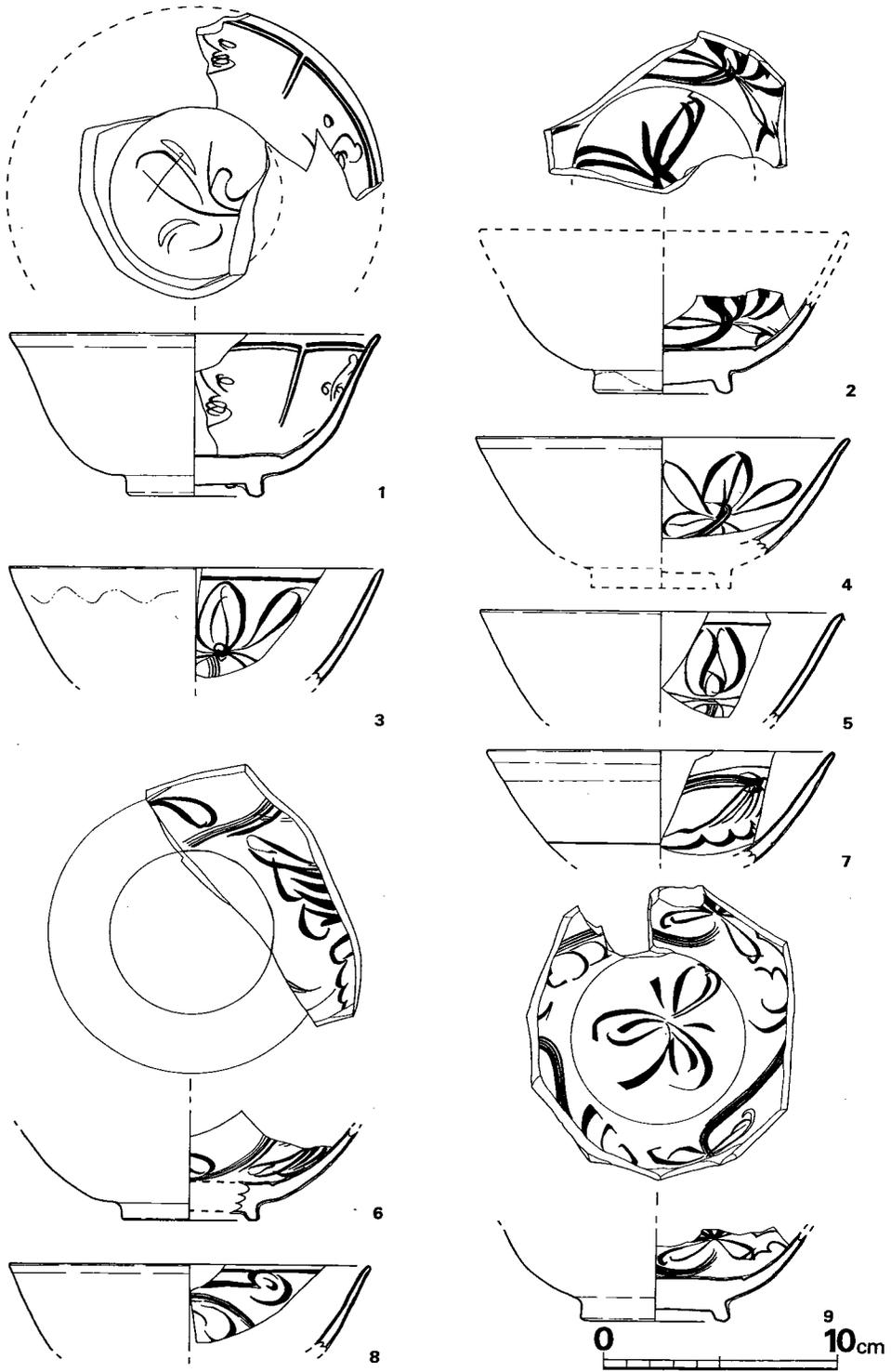


Fig. 77 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁実測図② (縮尺1/3)

り底部全面にかかっている。7は、胎土が灰色で、釉は青味がかった灰白色である。外面に貫入と気泡がある。8は、胎土が淡灰色で、釉はうぐいす色である。内外面に気泡がある。9は、底部片で高台は外反する。胎土は灰色で、釉は黄緑色であり底部にも一部施釉されている。内外面にわずかに気泡がある。

#### 2-A類 (Fig. 78・79, PL. 74・75)

1は、内面の口縁部下に沈圈線があり外面は口縁部下部のみに櫛歯文がみられる。胎土は灰色で、釉は緑灰色であり、外面下部は露胎となる。内外面に貫入がある。2は、内面に沈圈線があり、胎土は淡褐色で、釉は淡緑褐色で高台まで施釉されている。内外面に貫入がみられ全体に焼成は甘いようである。3は、胎土が暗灰色で粗い石英粒を含んでおり、釉は暗緑色である。内外面に貫入がみられる。4は、口縁部の小片であり、胎土は灰色、釉は緑灰色である。5は、底部片であり、胎土は灰褐色で、釉は緑灰色で外面下部には施釉されていない。6・7は、胎土が灰色で、釉は緑灰色である。Fig. 79-1は、胎土が灰色であり、釉は淡いオリーブ色である。2は、胎土が灰色で、釉は白色である。焼成が甘い。3は、胎土が灰色で、釉はオリーブ色である。1・2・3はいずれも外面下部には施釉されていない。4は、胎土が灰色で、釉は灰オリーブ色である。

#### 2-B類 (Fig. 79, PL. 75)

第I地点の2-B類は口縁部の小破片であるため内面の様子が明らかでなかったが、第II地点出土のものにはヘラ描き文様と櫛歯文がみられる。

5は、内面に櫛歯文が描かれていて、胎土が灰色で、釉は緑灰色である。6は、口縁部片で内面にヘラ描き文があり、胎土は灰色で、釉はオリーブ色である。7・8・9は、口縁部が急に外反して丸く太い。ともに胎土は灰色で、釉は暗緑灰色である。

#### 2-C類 (Fig. 80・81, PL. 76)

1～6は、見込みにヘラ描き文様のみがみられるものであり、7～15は、櫛歯とヘラによる文様が描かれている。Fig. 81-2～6は無文のものである。

1は、胎土が灰色で、釉はやや緑がかった灰色である。2は、胎土が灰褐色で、釉は灰色がかった淡褐色である。内外面に貫入がある。3は、胎土が灰色で、釉はやや緑がかった灰色であり底部の釉はかき取られている。4は、胎土が灰白色で、釉は緑がかった灰色である。5は、胎土が灰白色で、釉は灰色である。6は、胎土が灰色で、釉はうす緑色で底部は暗褐色である。内外面に貫入がある。7は、胎土が灰白色で、釉は灰緑色であり、底部は施釉の後かき取りである。8は、胎土が灰白色で、釉は緑灰色で底部の釉はかき取られている。内外面に貫入がある。9は、胎土が淡黄色で、釉は淡い黄色で底部の釉はかき取られている。内外面に小さな貫入がある。10は、胎土が灰色で、釉は緑灰色である。内外面と貫入がある。11は、胎土が灰白色で、釉は淡黄緑灰色である。内面に少し貫入がある。12は、やや大型品で、胎土は淡黄

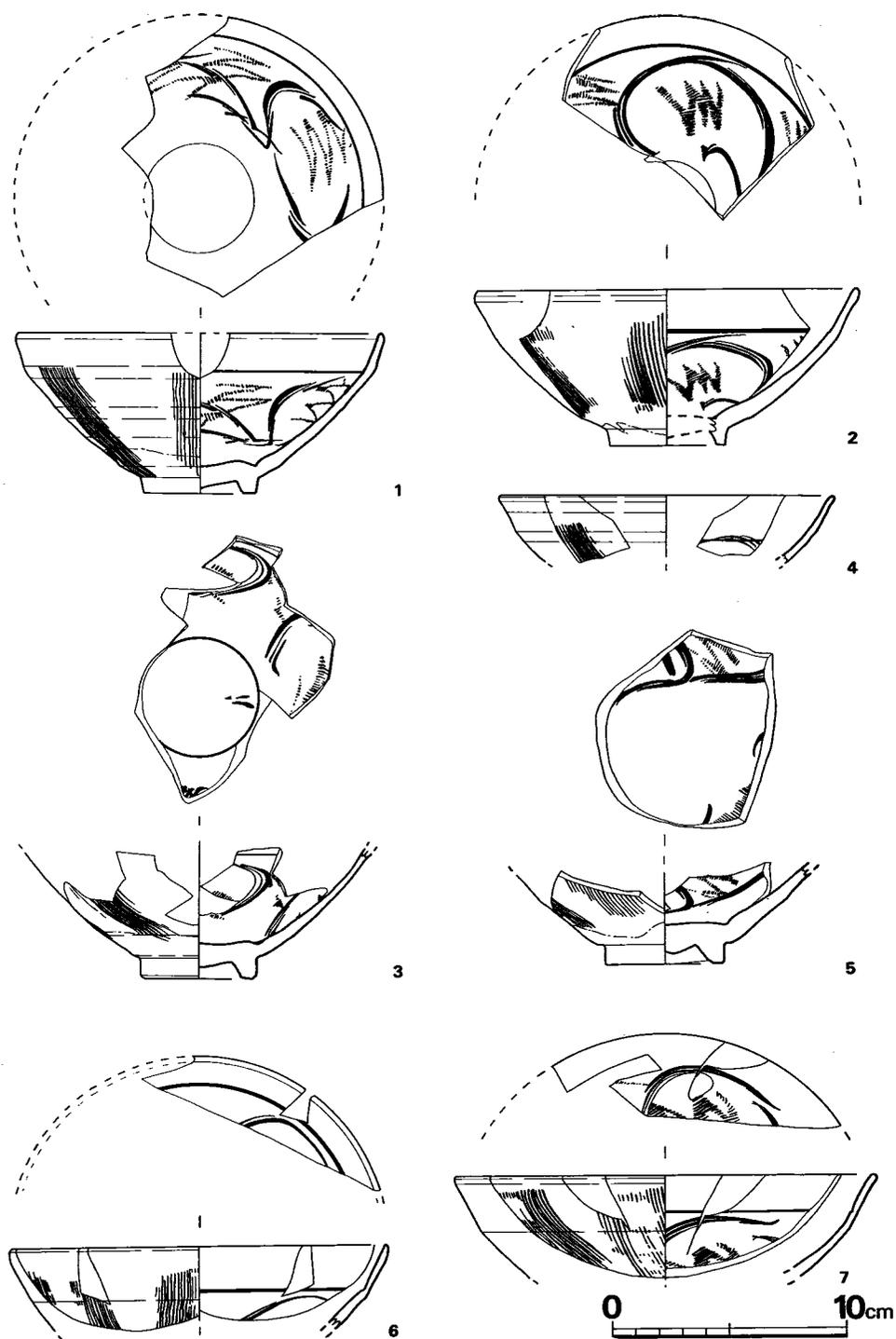


Fig. 78 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁実測図③ (縮尺1/3)

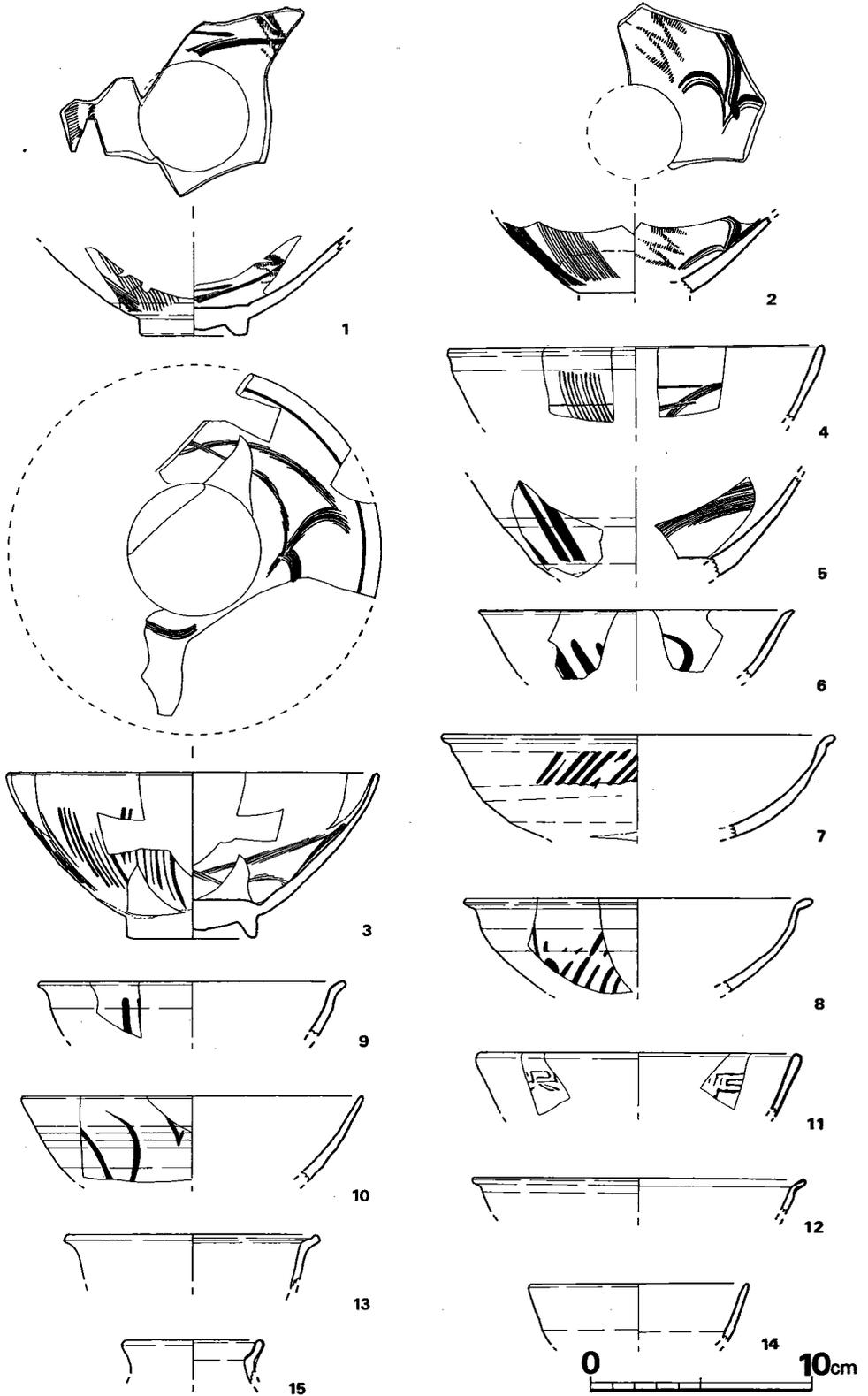


Fig. 79 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁実測図④ (縮尺1/3)

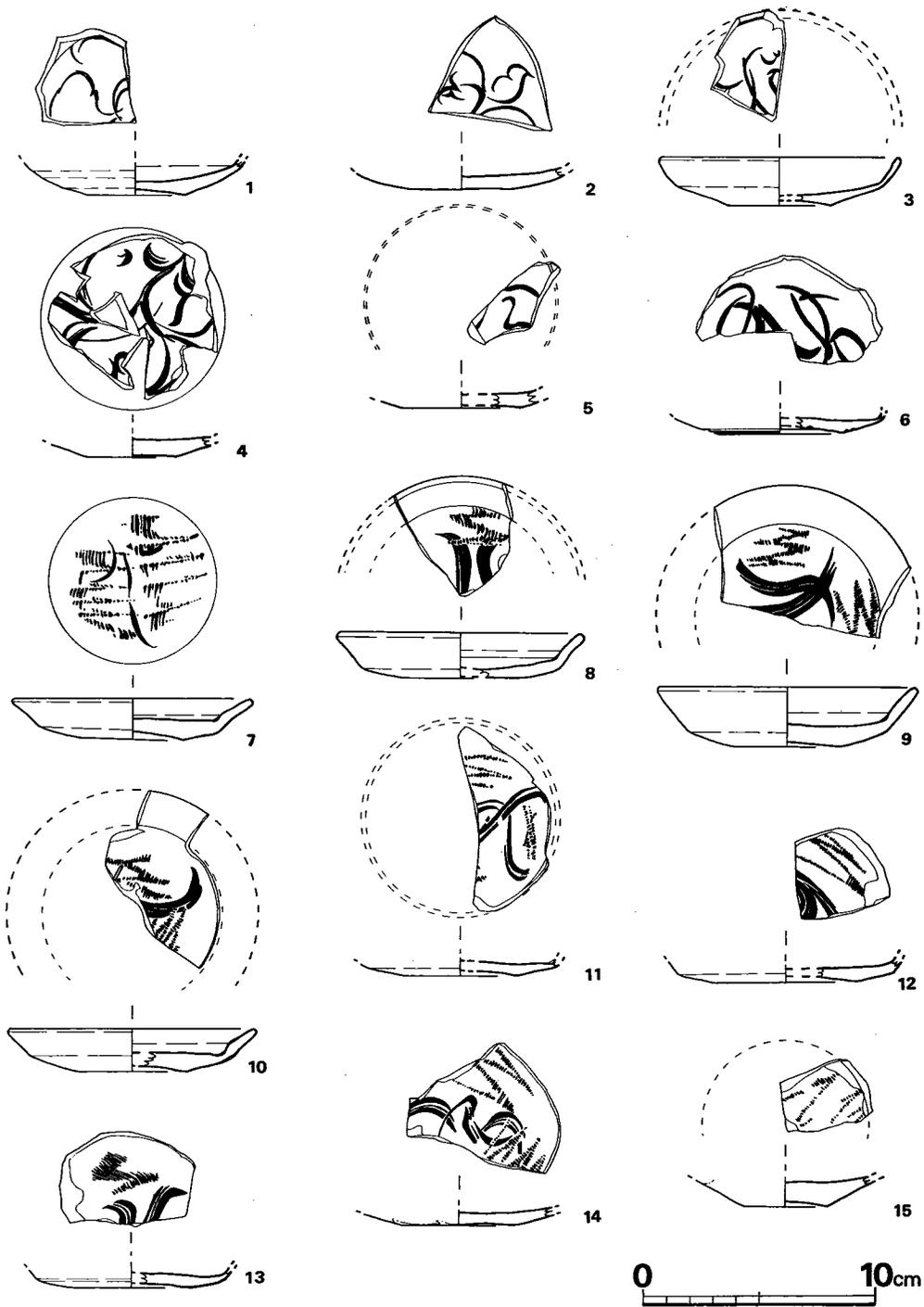


Fig. 80 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁実測図⑤ (縮尺1/3)

色、釉は明緑灰色であり底部はかき取られている。13は、胎土が灰色で、釉は明緑灰色である。14は、胎土が淡茶色で、釉は緑灰色である。内外面に貫入がみられる。15は、櫛歯文だけかもしれないが、胎土は灰白色で、釉は緑灰色である。Fig. 81-1～6 はいずれも底部を欠くが、無文の皿と思われる。1は、胎土が灰褐色で、釉は黄色がかった緑灰色である。内外面に貫入がある。2は、胎土が灰色で、釉は水色がかった灰色である。3は、胎土が灰色で、釉は緑灰色である。4は、胎土が灰色で、釉は灰色である。5は、小破片であり、胎土は灰色で、釉は緑がかった灰色である。内外面に貫入がある。6も、小破片であり、胎土は灰色で、釉は深緑灰色であり特に光沢がある。

### 3類

第I地点では出土していないもので、龍泉窯系と云れているものである。皿のみの出土であり碗はみられない。皿で外面に蓮弁文が削り出されているものを3-A類とし、外面は無文で内面に蓮弁文が削り出されているものを3-B類とする。器形は高台は薄く、底部は平底で体部にかけて丸くのび、口縁部が大きく水平に外反し、口縁端部がさらに直立して先尖りするものが特徴である。釉は厚くかかり光沢がある。

#### 3-A類 (Fig. 81, PL. 77)

7は、口縁部が短かく、跳ね上りも少ないもので、胎土は淡褐色で、釉は透明な青色である。

#### 3-B類 (Fig. 81, PL. 77)

8は、口縁部が長く、端部は丸く直立する。胎土は灰色で、釉はうぐいす色で全体に厚くかかっている。9は、口縁部がやや短かい。胎土は灰白色で、釉は水色がかった灰色で厚く施釉されている。

#### 4-A類 (Fig. 79, PL. 75)

10は、外面に蓮弁文の退化した沈線があり、内面は無文である。胎土は灰色で、釉は褐色味のある緑灰色である。

### 6類 (PL. 77)

小破片のため図示しないが、高麗青磁の破片が6片出土している。

1～3は、同一個体片で、壺かと思われる。4を含めた他の2片は、口縁部が大きく内側に折り曲って垂れ下るもので広口壺と思われる。これらはともに象眼されている。

### 7類 (Fig. 79, PL. 75)

11は、内外面に雷文状の文様がある。胎土は灰色で、釉はオリーブ色に近い緑色で全体に厚くかかっている。12は、口縁部の小破片である。13は、口径11.8cmであり小碗と思われる。14は、口径10.0cmである。15は、壺あるいは水注の口縁部とも思われるが小破片のため詳細は不明である。以上これらのものはやや時代の新しいものと思われ、朝鮮系のものも含まれている

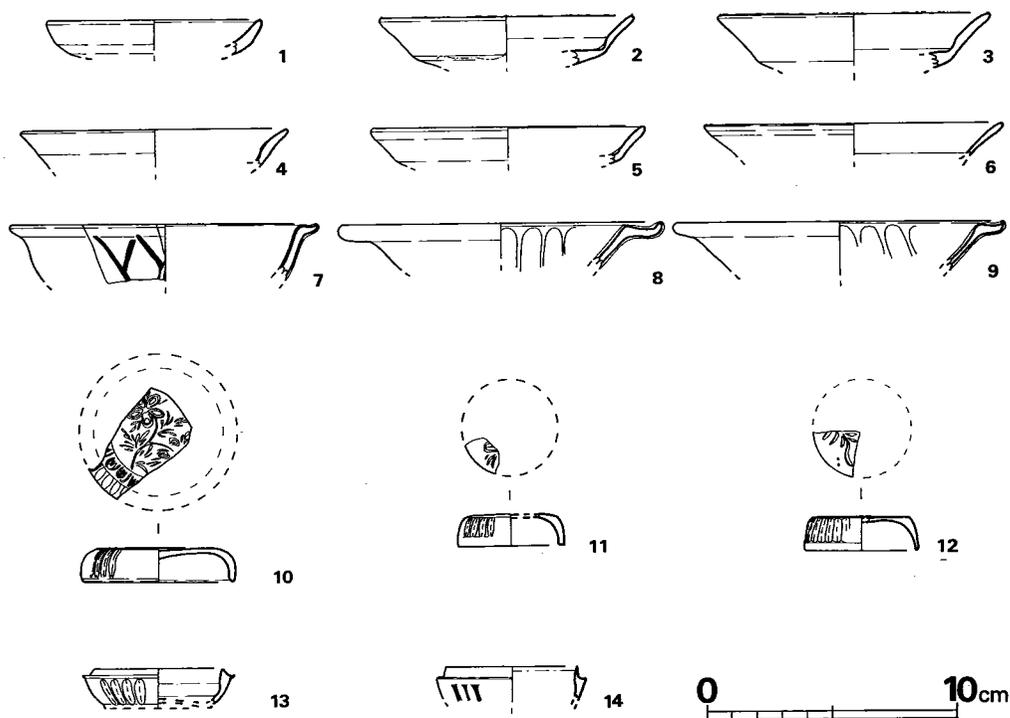


Fig. 81 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁・合子実測図（縮尺1/3）

と思われる。

合子 (Fig. 81, PL. 97)

合子には蓋が3点と身が2点出土している。

1類 (Fig. 81, PL. 77)

10は、天井部に型押しの花文があり、胎土は白色で、釉は淡い水色がかった灰白色で内面は天井部のみ施釉されている。11は、やや小型品で、胎土は白色、釉は淡く水色がかった白色で内面は天井部のみにかかっている。12は、胎土が褐色味のある灰色で、釉は淡灰色であり内面は天井部のみ施釉されていて他は露胎となる。

2類 (Fig. 81, PL. 77)

13は、身受けのかえりは細く口縁先端部が太い。胎土は白色で、釉は淡い水色である。14は、かえりが太く、口縁先端部は細く尖る。胎土は灰白色で、釉は緑青がかった灰色である。

白磁 (Fig. 82~84, PL. 78~80)

1-A類 (Fig. 82, PL. 78)

1は、底部から口縁部までみられ、内面に二条の沈線がめぐる。胎土は灰色でやや粗、釉は灰白色で外面の口縁部に釉ダレがある。2～10は、口縁部破片である。2は、胎土が白灰色で、釉は淡い水色がかった白灰色である。外面に気泡がみられる。3は、口唇部が大きく外反していて、胎土は灰色であり長石がかなり混っている。釉はやや緑がかった灰色である。器面全体がややざらつき黒斑状になっている。4は、口唇部が太い。胎土は灰白色で、釉は緑がかった灰白色である。外面口縁部に釉ダレがみえる。6は、胎土が白灰色で、釉は淡い水色がかった白灰色である。7は、胎土が白灰色で、釉はわずかに緑がかった白灰色である。8は、胎土が白灰色で、釉は白灰色である。11～14・15は、底部片であり、高台は高い。高台の部分まで施釉されているものと、体部のみの施釉とがある。

#### 1-B類 (Fig. 82, PL. 78)

9・10は、口唇部が輪花となっている。9は、輪花の切り込みはヘラによりやや粗い。胎土は灰白色であり、釉は灰色である。10は、胎土が灰色、釉も灰色である。15は、底部片で高台はやや低い。胎土が灰白色で、釉は灰色である。内外面に細かい貫入がある。

#### 3類 (Fig. 83, PL. 79)

1～7は口縁部片で、18・19は底部片である。

1は、胎土が白色で、釉はやや青味がかった灰白色である。2は、胎土が灰白色で、釉は灰色である。3は、胎土が淡茶褐色で、釉は乳灰白色である。内外面に細かい貫入があり焼成はやや甘い。4は、胎土が灰白色で、釉はやや青味がかった灰白色で外面口縁部に釉ダレがある。5は、胎土が灰白色で、釉はわずかに緑がかった灰白色で外面の口縁部に釉ダレがある。6は、胎土が灰白色で、釉はやや緑がかった灰白色である。7は、胎土が灰白色で、釉は白色である。8は、胎土、釉ともに灰白色で内底には気泡がある。9は、胎土が灰白色で、釉はわずかに緑がかった灰白色である。ともに高台は低い。

#### 4-A類 (Fig. 83, PL. 79)

10は、口縁部で、11・12は底部片である。

10は、内面に沈線がめぐる。胎土が白灰色、釉は灰白色である。11は、見込みの釉を強くかき取っている。胎土が灰白色で、釉はやや青味がかった灰白色である。12は、胎土が淡茶褐色で、釉は乳灰白色である。内外面に粗い貫入があり焼成は甘い。

#### 4-B類 (Fig. 83, PL. 79)

第I地点では出土していないが白磁の皿である。口縁部はやや外反するが張り出しにはならない。見込みに環状に釉をかき取った跡がみられ、底部には低い高台が付く。

15は、全形がみられるもので、胎土が灰白色で、釉は少し緑がかった灰白色である。見込みの釉かき取りは正円形でなく、かなり強く歪になっている。16は、胎土が灰白色で、釉はやや青味がかった灰白色である。17は、胎土が灰白色で、釉は灰色である。

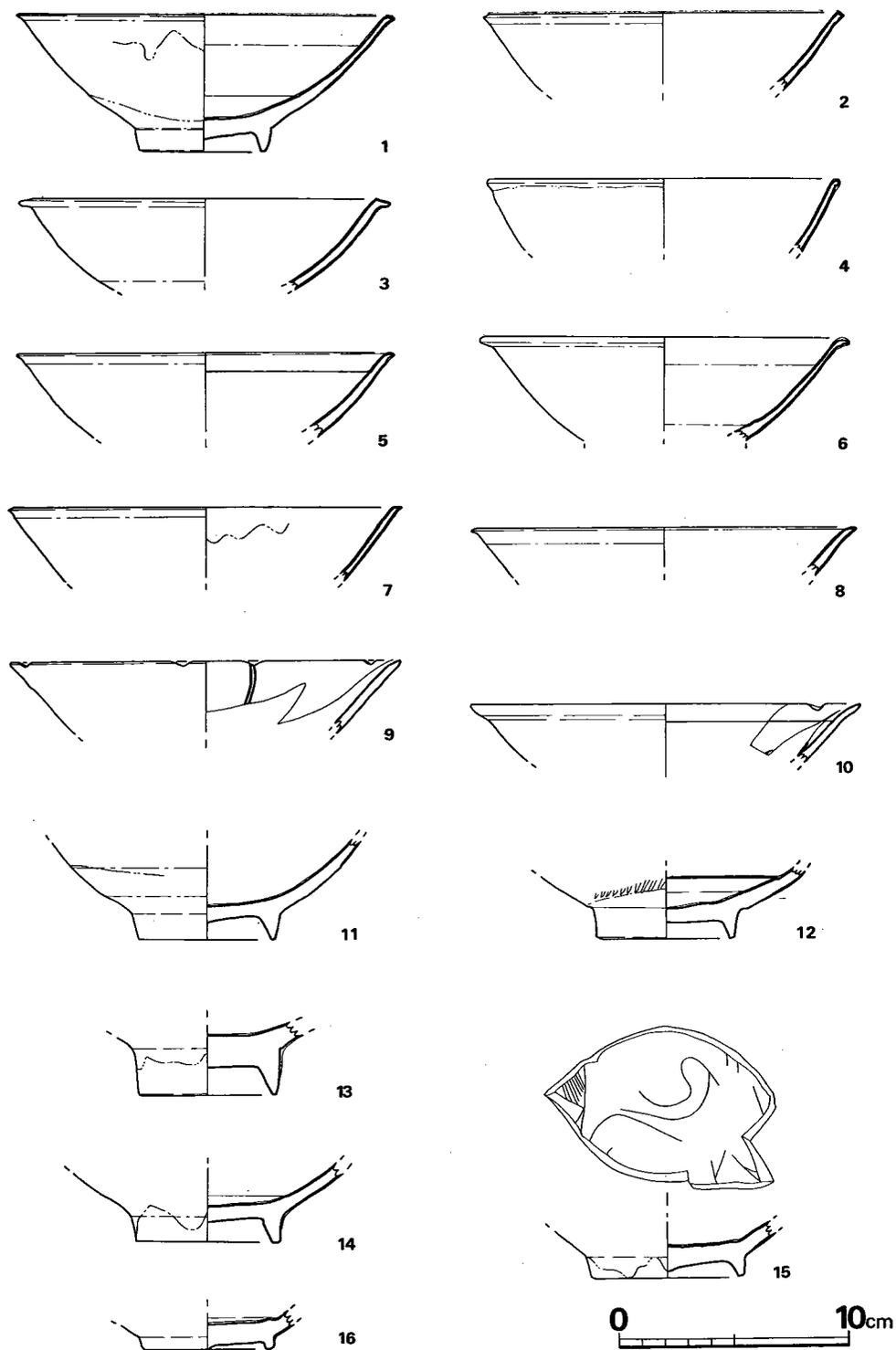


Fig. 82 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土白磁実測図① (縮尺1/3)

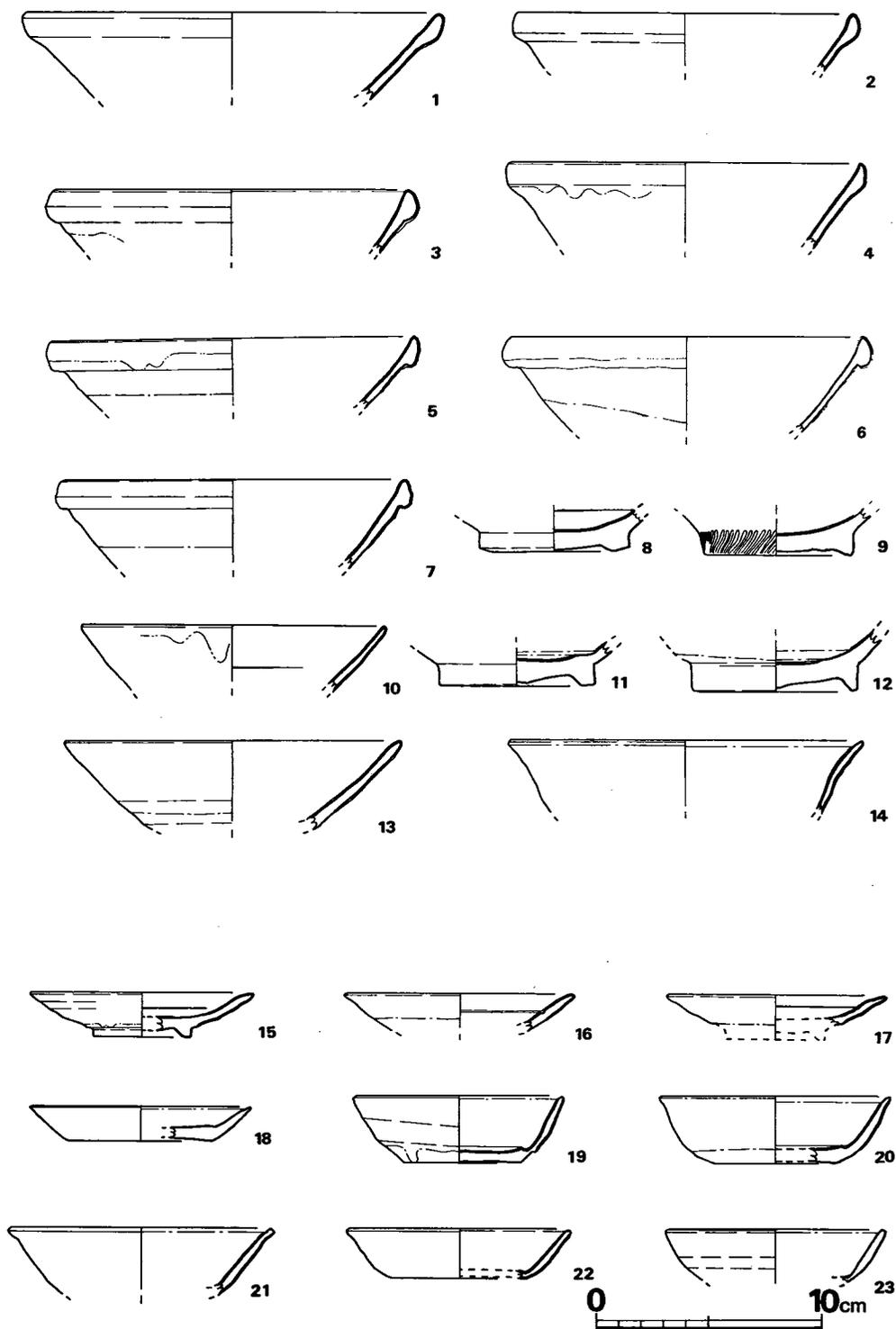


Fig. 83 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土白磁実測図② (縮尺1/3)

## 5-A類 (Fig. 83, PL. 79)

14で、口縁部をかき取った口禿である。胎土は灰白色で、釉は灰色である。

## 5-B-a類 (Fig. 83, PL. 79)

18のみで器高が低いものである。胎土は、白色で、釉は水色がかった淡い灰色で口禿部以外全面に施釉されている。

## 5-B-b類 (Fig. 83, PL. 79)

19は、胎土が白色で、釉はわずかに青味がかった灰白色で底部には施釉されていない。内外面に細かい貫入がある。20は、胎土が白色で、釉は少し青味がかった灰白色で底部には施釉されていない。21は、胎土の白色で、釉はやや茶色がかった灰白色である。22は、胎土が灰白色で、釉は少し青味がかった灰白色で底部にも施釉されているようである。23は、胎土が灰白色で、釉は灰色である。

## 7類 (Fig. 84, PL. 80)

白磁の四耳壺である。1で、底部を欠いている。口径10.8cm、最大胴部16.7cmを測る。耳は四個で肩部に付いていて、口縁部は折り曲げ玉縁となる。胎土は灰白色で、釉はやや水色がかった灰白色で全面に施釉されている。

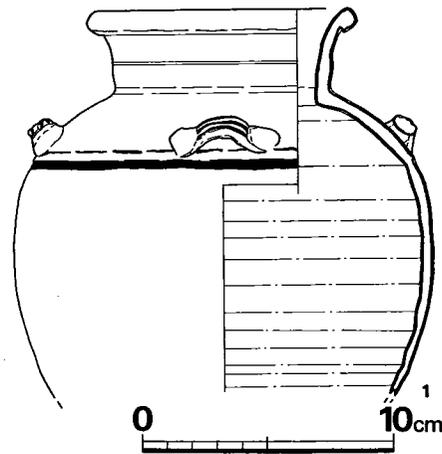


Fig. 84 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土白磁実測図③ (縮尺1/3)

## 雑器 (Fig. 85, PL. 80)

第Ⅱ地点は第Ⅰ地点に比べて雑器の出土は少なく数点をみるだけである。

Fig. 85-1は、長胴壺の底部片である。胎土は明灰褐色で、釉は灰色ないし灰緑色である。外面に暗緑色の釉ダレが二ヶ所みられる。なお、底面の高台内に墨書されているが破片のため明確でない。

## 近世陶磁器 (Fig. 85, PL. 80)

第Ⅱ地点より出土した近世陶磁器は、第Ⅰ地点に比べ極めて少なく10数点を数えるのみである。

Fig. 85-2は、青磁碗の口縁部破片で、外面に墨によって「?花?」と書かれている。胎土は白灰色で、釉は緑色をおびた灰色である。3は、摺鉢の底部片で高台径9.5cmを測る。内面に11本の櫛目条溝を底部の中心部付近を除く全面に施し、内面底部に1点鉛釉が落ちている。

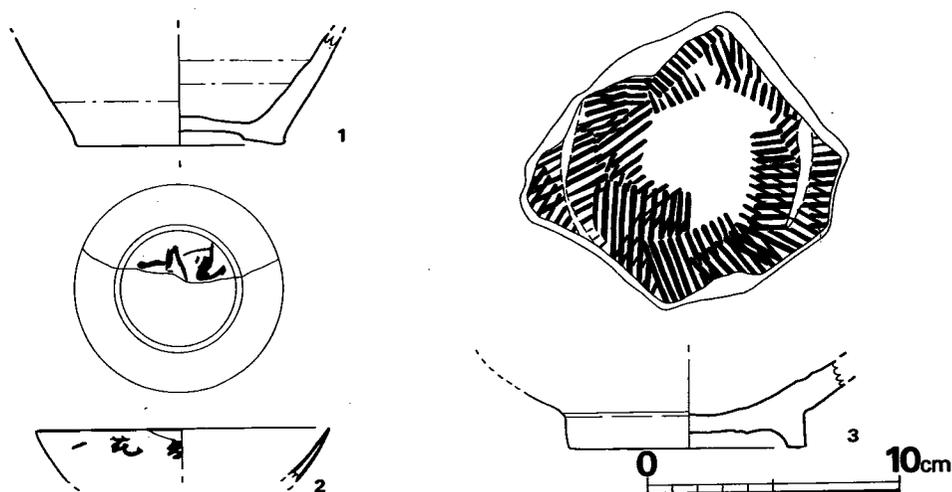


Fig. 85 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土陶器実測図（縮尺1/3）

色調は、鉄分の多い土で焼き締めているため部分的に赤茶色であるがほぼ灰色を呈する。胎土には砂粒を含む。高取系内ヶ磯窯のものであろう。

#### 瓦 (PL. 81)

瓦は2点のみの出土である。

7は、丸瓦の破片で、内面には布目がみられる。半裁品のようなものである。8も、丸瓦の破片である。

#### 土製品 (Fig. 86, PL. 81)

第Ⅱ地点より出土した土製品はB区からの土錘と土鼎の脚片である。

土錘 1で、長さ8.25cm、最大径1.9cm、孔径0.5cmを測る。ほぼ完形品であるが両先端部が若干欠損している。中位に最大径があるもので両先端が細くなっている。胎土は砂粒をあまり含まず精良で、焼成は良好、色調は半分は黄灰色、半分は灰黒色を呈す。

#### 脚片 (PL. 81)

○、○は土鼎の脚片と思われるもので、いずれも脚の中途品である。

#### 石製品 (Fig. 86, PL. 81・82)

石製品には第Ⅰ地点と同じく滑石製品が多く、他に砥石・硯・石斧と黒耀石の剝片が1点あ

る。

滑石製品 (Fig. 86, PL. 81・82)

滑石製品は石鍋, 匙, 鈕付円板がある。

石鍋 8 個体分出土している。7 は, 体部破片で鏝付きである。体部外面には工具痕が整然とみられ, 内面は丁寧な研磨仕上げである。外面にはススが付着している。他のものをみると PL. 82-8 は鏝付き, 9~12 は鏝部がみられない。12 には円形の孔がみられる。14・15 は底部片であり, 外面にススが付着している。

匙 2 で, 受部の半分を欠損しているが全長約 7.6cm, 柄部 3.2cm, 受部の厚さ 1.8cm を測

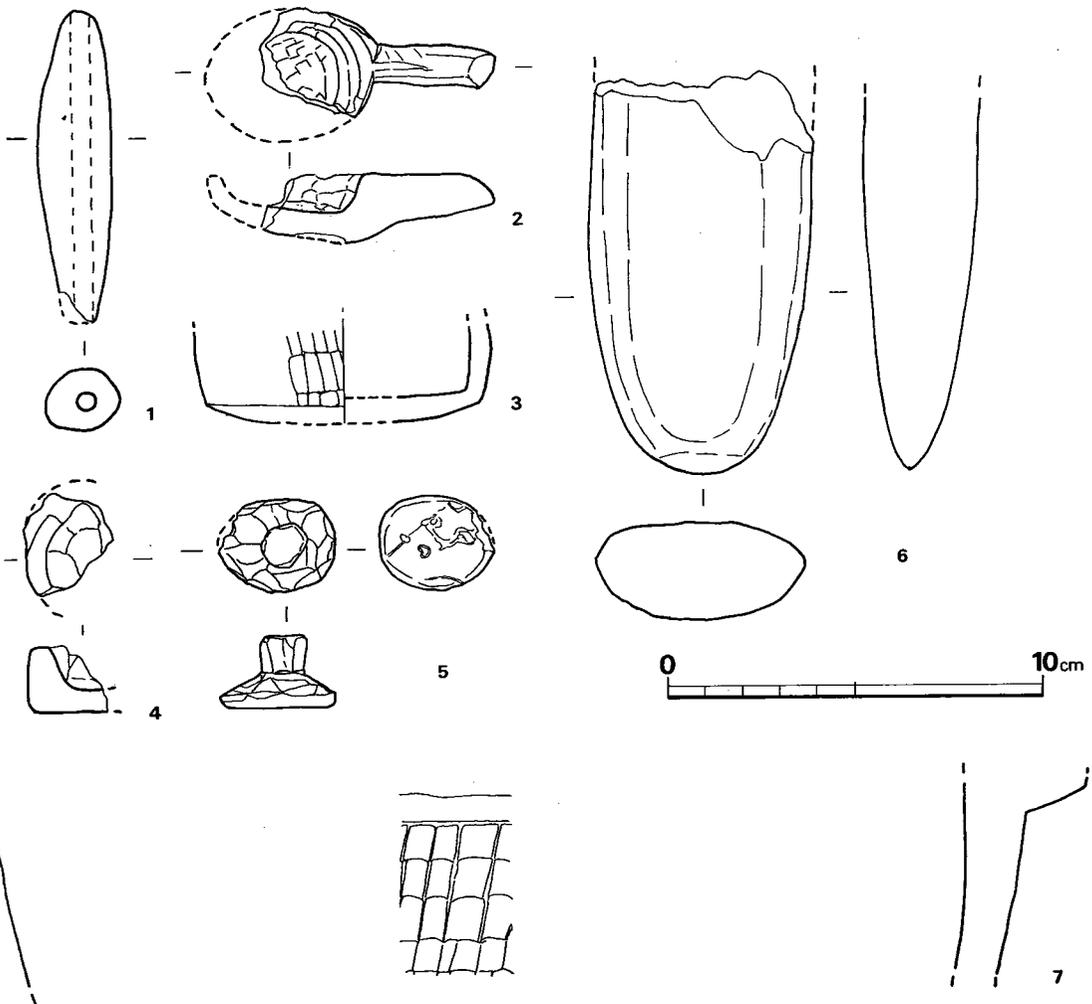


Fig. 86 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土土製品・石製品実測図 (縮尺1/2)

る。柄部はほぼ円形に丁寧に研磨して仕上げている。受部の内面は丁寧であるが底面は雑である。

3は、破片のため用途不明である。何かの蓋か、または皿状の容器片のようでもある。器面はともに丁寧に削り、研磨されている。4は、小さな皿状容器片であり、内外面とも雑で、あるいは未完成品とも思われる。

鈕付円板 5は、円板に鈕が付いている。円板は正円形ではなく楕円形に近く、断面は凸状でなく平坦で沈線が2本みられる。最後まで研磨がなされず途中で終わって前記の沈線はそのためと思われる。背面には細かい削りの工具痕がみられる。鈕部は円形に削ったままで研磨されていないので工具痕が明瞭に見える。鈕部のみススが付着している。重さ11.2gを量る。

不明品 PL. 81-10と11は破片のため用途不明である。10は、両面が研磨されており、先端部は刃部のようにになっている。11は、皿状容器のようである。

#### 磨製石器 (Fig. 86, PL. 81-(2))

B区の第15号土壌の深い穴の方より出土した破片である。片面には原石部分が残っていて全面磨製ではないが、刃部は鋭い。材質は蛇紋岩である。

#### 硯 (PL. 81-(2))

小破片であるが陸部がみられ、第I地点出土の硯と同様なものであり硯とした。材質は小豆色輝緑凝灰岩である。

中屋敷遺跡より出土した歴史時代の土器類について概観すると土師器小皿、坏類と青磁、白磁の磁器類が多く出土している。

土師器小皿、坏は一点を除いて他は糸切り底であり、太宰府御笠川南条坊遺跡の分類に対比<sup>註(1)</sup>してみるとⅡ類にあたる。小皿はⅡ類でもⅡ-2類、Ⅱ類-3類、Ⅱ-4類、Ⅱ-5類が多く、坏はⅡ-2類、Ⅱ-3類、Ⅱ-4類が多い。このことより年代は12世紀後半～13世紀の間と推定できよう。

青磁は1類がR類、2類がU類、3類がT類、4類がV類、5類がV類、6類がZ類、合子はY類である。これらの青磁の年代は12世紀後半～13世紀のものが最も多いようで、中屋敷遺跡ではその後の青磁類も出土しており、15世紀代のものも若干含まれているようである。

白磁では1類がE類、2類がF類、3類がH類、4類碗がG類、4類皿がL類、5類がO類、6類がK類？、7類がQ類にあたる。これら白磁の年代は12世紀～13世紀のものであろう。

以上、中屋敷遺跡出土の土師器類、青磁、白磁類は13世紀前後のものが圧倒的に多く出土していることが知られる。

さらに陶器類と、近世陶磁器類をみると81頁のように15世紀を中心とする類と17世紀を中心

とするものがあるようである。

これらよりして中屋敷遺跡の歴史時代をみると、鎌倉時代の13世紀を中心とした時期と室町時代の15世紀を中心とした時期、さらに江戸時代の17世紀を中心とした時期の三期がみられるようである。

註1 前川威洋他『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』(第8集・下) 1978年(昭和53年)10月  
なお、歴史時代の土師器・陶磁器類については、九州歴史資料館技師森田勉氏より多くの助言を頂いた。

## V おわりに

中屋敷遺跡の第Ⅰ地点・第Ⅱ地点より検出された遺構は、弥生・古墳時代では竪穴住居跡9, 貯蔵穴4, 木棺墓1, 歴史時代では掘立柱建物2以上, 土壇24, 地下式土壇1, 土壇(木棺墓)6などである。以下これらのまとめとしたい。

### 1. 弥生・古墳時代

竪穴住居跡が第Ⅰ地点より8, 第Ⅱ地点より1の計9, 他に第Ⅰ地点より貯蔵穴が4, 木棺墓が1検出されている。

#### A 住居跡・貯蔵穴

住居跡は年代・形態などにより3種類がみられる。

**A類** 円形住居跡 弥生時代中期～後期初頭 (I-3・4・7・8, II-1)

**B類** 方形住居跡 弥生時代後期初頭 (I-5・6)

**C類** 方形住居跡 古墳時代初頭 (I-1・2)

である。

貯蔵穴は

**I類** 円形袋状竪穴 弥生時代中期 (1・2)

**II類** 小型長方形竪穴 弥生時代中期～後期 (3・4)

の2種類である。

A類の弥生時代中期の円形住居跡は遠賀川中・下流域でも最近いくつか検出されている。遠賀川中・下流域では前期の遺跡については沖積地を主にいくつか発見されていて、中期初頭より、前期に比べて遺跡が丘陵地帯にまで進出して急激に増加していることがうかがえる。

中期の集落をみると円形住居跡と貯蔵穴が検出された遺跡が多く、糖塚遺跡(遠賀郡岡垣町)<sup>註(II-6)</sup>、柳ヶ谷東区遺跡(鞍手郡宮田町)<sup>註(II-22)</sup>、原第二地点遺跡(北九州市八幡西区)<sup>註(II-17)</sup>、香月遺跡(北九州市八幡西区)<sup>註(II-20)</sup>などがあり、円形住居跡は高木遺跡(中期後半)<sup>註(II-2)</sup>、辻田遺跡(中期前半)<sup>註(II-18)</sup>、門田遺跡

(中期前半)、汐井掛遺跡(後期?)などがある。

方形住居跡は向山遺跡(後期)<sup>註(II-23)</sup>、感田上原遺跡(中期後半～後期)<sup>註(II-1)</sup>、門田遺跡(中期前半)<sup>註(II-14)</sup>、小原遺跡(後期前半)<sup>註(II-19)</sup>、茶白山遺跡(後期終末)<sup>註(II-25)</sup>、柳ヶ谷西区遺跡(後期後半)<sup>註(II-22)</sup>、都地原遺跡(後中期葉)<sup>註(II-24)</sup>がある。

中期は円形住居跡が主であり径7m前後で中心部に炬があり支柱穴は6～8本で円形となるものが一般的である。中屋敷遺跡の住居跡もこの好例である。これらの円形住居跡は拡張され

ている場合があり、中屋敷遺跡でもI-4号が考えられる。I-4号を拡張と考えるならば南側を拡張しており、炉はつくり変えているが支柱穴は元のままの位置であろう。

第8号住居跡は円形で、後期初頭の土器が床面より石庖丁が出土している。この時期の円形住居跡は2本柱か4本柱のものが多くいようであるが、第8号住居跡は全体の¼程しか遺存していないので詳細は不明である。

方形住居跡にはベット状遺構を伴うものが多く、時的には後期後半が多い。中屋敷遺跡の方形住居跡は後期初頭のものであり、ベット状遺構はみられない。第5号住居跡のプラン・柱穴・炉・壁下のピット・出土土器も同時期の宗像郡福岡町久保長崎遺跡第1号住居跡、第2号住居跡と同一であるが、久保長崎第2号住居跡にはベット状遺構が伴っている。これらよりして中屋敷遺跡の弥生時代後期初頭の第4号住居跡は、中期の円形住居跡と後期後半のベット状遺構を伴う方形住居跡との間の後期初頭のものと言えよう。

なお、この第4号住居跡と、古墳時代になるが第1号住居跡よりの壁には「周壁溝」がみられ、溝内には「羽目板」痕が明瞭に検出される。周溝壁については既に中間研志「向山遺跡の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XII—)1977年(昭和22年)3月でも論考されており、ここでは省くが第4号住居跡の場合は住居外周堤の羽目板も検出された。それによると周堤の土留め板である羽目板も周壁溝の羽目板と同様で幅10~15cm、厚さ2~3cmである。住居内の壁側にある羽目板と周堤の外側にある羽目板の幅(周堤の幅)は15cm前後である。さらに住居外周堤の羽目板は方形住居跡の四隅の内、三隅にてコブ状に突き出しており、この部分には屋根構造を考える場合の主垂木を棟木にわたした根本部分であろう。これによると東壁下中央にある凹地のピットは出入口部とされよう。

古墳時代の第1・2号住居跡については一応2基の住居跡と考えて1・2と番号を付したが、第1・2号住居跡とした各床面からは同時期の土師器が出土しており、第2号住居跡の拡張とも考えられる。第1号住居跡とした第2号住居跡より一段高い「コ」の字形のものを第2号住居跡に伴うベット状遺構と考えた方がより妥当のようである。

貯蔵穴は円形に向山遺跡(中期中)、京場山遺跡(前期後半)、感田上原遺跡(前期末~中期中)、猪の久保遺跡(前期末)、保木原遺跡(中期中前半)、馬場山遺跡(中期中)、原第一地点遺跡(中期中前半)などがあり、方形のものに小原遺跡(中期末以前)がある。なお、都地原遺跡2号住居跡の床面には長方形を呈する後期中葉の貯蔵穴が検出されており、少なくともこの時期までは竪穴の貯蔵穴が続いていると思われる。

中屋敷遺跡の貯蔵穴は円形袋状2、小型方形2の計4で、これらは若干時期が異なっているようである。第2号貯蔵穴より出土した土器の内、大多数は最上層に投棄された状態であり、既にその時には貯蔵の役目はしていないものである。

遠賀川中・下流域の貯蔵穴は前期については明確ではないが、中期初頭から後半にかけて圧

倒的に円形袋状竪穴であり、これには床面に1～4本のピットを有するものが多い。中屋敷遺跡の場合群集してなく、おそらく中期の円形住居跡群に円・方形袋状が同一時期のものとして伴うと推定される。

## B 弥生時代の遺物

第I地点出土の弥生時代の遺物として住居跡と貯蔵穴より多くの土器と、若干であるが石器が出土している。ここでは特に石器を取り上げてみたい。

石器には石庖丁5、石戈1、石剣2、砥石1、石斧1であり、遺構に伴うものとしては第8号住居跡と第2号貯蔵穴より石庖丁2が出土している。

### 石器の材質について

石庖丁の完形品は1点もなく皆破片となっている。型態は総て外彎形両刃形式と思われる。材質は輝緑凝灰岩製3と凝灰岩質粘板岩2であり、いわゆる「立岩遺跡産」といわれる輝緑凝灰岩製のものが多い。石剣は2本とも茎部の破片で、石戈も基部の破片であり共に材質は凝灰岩質粘板岩である。

砥石はやや小形品で、材質は凝灰岩質粘板岩である。

中屋敷遺跡の弥生時代石器の内注目されるのは輝緑凝灰岩製の石庖丁3点である。遠賀川中流域の犬鳴川流域における石庖丁の材質について記したことがあるが、再度下流域を含めて石庖丁、石剣、石戈についてみてみたい。<sup>註(II-21)</sup>

石庖丁等は弥生時代の代表的な石器であり、遠賀川中・下流域においても数多く出土している。特に遠賀川上流域である飯塚市立岩遺跡群内で、約北西6kmの地点にある笠置山一帯に産している輝緑凝灰岩を石材とした石庖丁を含めた石器製作が前期末より開始されていて、この立岩産石庖丁が遠く東は北九州市から大分県宇佐地方、南は日田盆地、筑後地方、西は佐賀平野、及び糸島地方の立岩遺跡を中心に半径40～50kmの範囲内に分布している。<sup>註(3)</sup>

当、遠賀川中・下流域は立岩遺跡の下流域であり、当然この分布範囲に包括されている地帯である。しかし、石庖丁全部が立岩産であるわけではなく、各地域には在地産の石庖丁があって立岩産石庖丁と共出している。また各地域によって立岩産石庖丁の出土率が異なっており種々論じられているところである。<sup>註(3)</sup>

さて、遠賀川中・下流域における石庖丁をみると、立岩産輝緑凝灰岩製のものが出土率よりすると非常に少ないことが上げられる。

立岩・下ノ方遺跡を中心とする石器製作地の発見後、遠賀川中・下流域以外の各地域にて弥生時代中期における大規模な石庖丁製作地の発見はないようで、遠賀川中・下流域では直方市感田上原遺跡以後、いくつかの製作地と考えられる遺跡の発見・発掘が行なわれている。<sup>註(4)</sup>

遠賀川中・下流域における石器製作遺跡として遠賀川右岸に直方市感田上原遺跡、北九州市八幡西区の原遺跡、同原遺跡第二地点、同馬場山遺跡、同香月遺跡、同辻田遺跡、同門田遺跡<sup>註(II-14)</sup>、<sup>註(II-17)</sup>、<sup>註(II-17)</sup>、<sup>註(II-16)</sup>、<sup>註(II-20)</sup>、<sup>註(II-19)</sup>

がある。これらの遺跡は最上流である感田上原遺跡と最下流にあたる香月遺跡とではその距離僅か4kmの間にある。これらの各遺跡の石器材質をみると主に門田遺跡は細粒砂岩、他は粘板岩、珪質頁岩であり、これらの石材は各遺跡の東方に聳える金剛山麓に露出している第三紀層の脇野層群内のもので、古くは森貞次郎氏により注目されていたが、前記の各遺跡が調査されるにおよび再度確認されている。

遠賀川の左岸で、一支流にあたる犬鳴川流域でも最近石庖丁の製作地と思わせるものが発見されている。鞍手郡宮田町薬師丸遺跡より表採資料ではあるが、輝緑凝灰岩の未完成品3点<sup>註(II-21)</sup>が出土している。これらは製作工程の打裂・琢磨の過程を示しており製作をうかがわせている。なお、鞍手郡若宮町茶臼山遺跡よりも輝緑凝灰石の未完成品1点が出土している。犬鳴川流域<sup>註(II-25)</sup>には千石川の笠置山三の谷以外にも如来田、龍徳に輝緑凝灰岩の露出がみられるが、材料が一番容易に採集できるのは千石川三の谷の川原であり、笠置山の可能性が強いと推定される。

遠賀川右岸の金剛山麓に位置する各遺跡の石器製作を概観すると感田上原遺跡では粘板岩、頁岩、閃緑岩、砂岩等を原材料に石庖丁・石剣・石戈・扁平磨製石鎌・石斧・石ノミ等がすくなくとも中期初頭から製作が開始されていて、特に石庖丁の未完成品は100点をこえている。製作遺構は貯蔵穴を利用した竪穴である。なお、この遺跡より出土した輝緑凝灰岩製の石器は完成品の石庖丁1点のみが表採されたにすぎない。

原遺跡、原遺跡第二地点では粘板岩、頁岩、砂岩、玢岩等を用いて石庖丁・石剣・石戈・石鎌・扁平磨製石鎌・扶入石斧などが小竪穴内で製作されており、前期末より開始されている。

馬場山遺跡では粘板岩、細粒砂岩を用いて石庖丁・石剣・石戈・石鎌・石斧等が小規模ながら製作されていたようで、時期は中期初頭である。

辻田遺跡では主に硬質頁岩を用いて石庖丁・石斧・石鎌・石剣・石戈を製作しており、ここでは住居跡床面から多くの未完成品と砥石が出土しており、住居跡にて製作を行なっていることが明らかにされた。時期は中期前半のようである。

門田遺跡では細粒砂岩を素材として扁平磨製石鎌・石庖丁・石戈・石剣等が製作されていて、特に第5号住居跡内では扁平磨製石鎌の未完成品が多く出土していて注目される。時期は中期前半である。

香月遺跡は珪質頁岩を素材として石庖丁・石鎌・石戈・石剣等が製作されたようであり、時期は前期末からのようである。

これら金剛山周辺の各遺跡で製作されたと思われる同材質の石器が遠賀川中・下流にて多くみられる。

ちなみに輝緑凝灰岩製の石器は数える程しかなく圧倒的に粘板岩・頁岩・砂岩製のものが多。このことは金剛山の石材を用いて製作している遠賀川右岸の丘陵上に位置する諸遺跡では、感田上原遺跡と原遺跡より石庖丁各1点があるのみぐらいで、沖積地の川床などの遺跡で

は直方市・中間市内の遺跡に若干みられる。中屋敷遺跡の位置する西川流域では中屋敷遺跡のみのようである。犬鳴川流域にはほぼ半々の割合で出土している。このようにみると中屋敷遺跡の輝緑凝灰岩製の石庖丁が3点あることは特異である。

石剣、石戈をみると輝緑凝灰岩製のものは1点もないようで粘板岩・頁岩によるものであり、立岩産のものは搬入されていないようである。

中屋敷遺跡より石戈が1点出土しているが、石戈については下条信行氏の論考があり、中屋敷遺跡出土のものは下条氏のB I a式にあたるようである。<sup>註(5)</sup>

遠賀川中・下流域の石戈出土遺跡は犬鳴川流域で鞍手郡宮田町芹田遺跡、同磯光遺跡があり、若宮町東禅寺遺跡でも出土したようである。他に未完成品であるが石戈と思われるものにも<sup>註(7)</sup>若宮町小金原遺跡のものがある。直方市内では泉の山遺跡、猪の久保遺跡、後口遺跡、鴨生田遺跡があり、他に未製品を出土した感田上原遺跡がある。北九州市八幡西区の香月地区では原<sup>註(II-22)</sup>遺跡(2点)、馬場山遺跡(4点)があり、未完成品を出土した遺跡に門田遺跡、原遺跡、辻田遺跡、馬場山遺跡、香月遺跡があり、これらの遺跡では石戈を製作している。<sup>註(6)</sup>

下流域では遠賀郡水巻町伊佐座遺跡、同郡岡垣町吉木遺跡にて出土している。<sup>註(5)</sup>

中屋敷遺跡のある西川流域では高木遺跡、古江遺跡、未完成品の出土した向山遺跡がある。<sup>註(II-4)</sup>

遠賀川中・下流域の石戈出土遺跡及び製作遺跡は上流の嘉穂平野を除いて全国的にみて圧倒的に多くみられる。特に馬場山遺跡における土墳墓に副葬されている完形品の石戈は優品であり注目されるものである。石戈については下条氏等により詳論されており、中屋敷遺跡から出土している石戈は第I地区のB区の小ピット内出土であり、第3号住居跡と第1号木棺墓の付近であるが、時期は中期としていいようである。それでも遠賀川中・下流域では数少ない石器であり、中屋敷遺跡より出土していることは中屋敷遺跡の弥生時代を考える上で重要である。<sup>註(8)</sup>

石剣は2本とも柄部方の破片で鉄剣型である。2本ともG区出土品であるが中期の所産と考えられる。

石剣・石戈は感田上原遺跡、原遺跡、辻田遺跡、門田遺跡などで石庖丁と同じく各遺跡の集落内での需要をこえて製作されていたようであり、当然石庖丁と同じく他の集落への搬出を考えなければならないものであろう。

以上、遠賀川中・下流域の石器製作遺跡をみだが、中屋敷遺跡では石器製作は行なわれていないので、当然他の遺跡よりの搬入が考えられる。輝緑凝灰岩製の石庖丁は立岩遺跡にその源を求めるのが妥当であろう。凝灰岩質粘板岩製の石庖丁、石剣は筆者のみたところでは石材は感田上原遺跡のものに酷似している。Fig. 18-5の石剣は細粒砂岩の可能性が強く、門田遺跡との関連性が考慮される。石戈は硅質頁岩に近いもので、やはり金剛山麓の遺跡製作のものと思われる。石器類をみてきたが弥生時代の中屋敷遺跡の集落は住居跡、貯蔵穴の型態、遺物では土器、石器など合せて遠賀川流域に点在する前期遺跡が沖積地や、[沖積地に近い好所に選

地しているのに対し、中期になると急激に遠賀川の本流域より各支流を望む各流域の低丘陵上や、さらに丘陵奥部にまで遺跡が増加しているが、その事情を示す好例の典型的な遺跡であり、遠賀川中・下流域文化圏に包括される集落といえよう。

なお、遠賀川中・下流域の弥生時代石器出土遺跡地名表を作成したが紙面の都合上割愛した。

- 註1 松岡史編「久保長崎遺跡」『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1973年（昭和48年）3月。  
 註2 都出比呂志「竪穴式住居の周堤と壁体」『考古学研究』第86号 1975年（昭和50年）10月。  
 註3 立岩遺跡に関するものは主に次のものを参考とした。  
 中山平次郎「飯塚市立岩焼ノ正の石廂丁製造址」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書』第9輯 1934年（昭和9年）3月。  
 中山平次郎「石廂丁製造所址」『考古学』第5巻第5号 1934年（昭和9年）5月。  
 下条信行「遺物とその考察、石器」『立岩遺跡』1977年（昭和52年）4月。  
 註4 前期の石廂丁製作地を取り扱ったものには下条信行「未製石器よりみた弥生時代前期の生産体制」『九州考古学の諸問題』1975年（昭和50年）3月がある。  
 註5 下条信行「石戈論」『史淵』第113輯 1976年（昭和51年）3月。  
 註6 高橋健自『銅銚銅剣の研究』1925年（大正14年）11月。  
 註7 鞍手教育研究所編『鞍手郡郷土史』1965年（昭和40年）6月。  
 註8 児島隆人「遠賀川流域における青銅器文化」『考古学』第11巻第11号 1940年（昭和15年）11月。  
 註9 門田遺跡の遺構、遺物については梅崎恵司氏より、種々ご教示を受けた。又、原遺跡、馬場山遺跡等の石器も拝見させて頂いた。

## 2. 歴 史 時 代

中屋敷遺跡では弥生・古墳時代の遺構、遺物に比べて歴史時代のものの方が多く検出されている。

### A 掘立柱建物

第Ⅰ地点、第Ⅱ地点にて各1棟の建物を確認したが、第Ⅰ地点のF区北には明らかに建物が復元できるようであり、第Ⅰ地点では何棟かの建物が存在していたものであろう。

第Ⅰ地点第1号掘立柱建物は3間×5間のもので柱穴内に根石がある。付近に他の施設はないようである。F区北の地域には根石を有する柱穴や、石のない柱穴が無数に存在する。基本的には第1号掘立柱建物と同様で南北方向に桁行を示しているようである。第7号土壌の周囲に掘立柱建物を想定すると南側には「段落ち」があり、北側に溝状の遺構が4本東西に走り、さらに西側に行くと石組遺構があり排水の施設と思われる。

他に建物を想定するならばF区南と、さらにD区にも考えられる。

F区北の掘立柱建物の時期については柱穴内や、周辺包含層より近世陶磁器が多く出土しており、それらは江戸時代でも17世紀のものがほとんどのものであり、江戸時代か。

第Ⅱ地点第1号掘立柱建物は3間×5間のものであり、根石を用いている。第Ⅱ地点ではA区の西区とB区にも建物は想定できそうである。第1号建物は土壌や土壌墓よりも新しいが、第Ⅰ地点に比べて近世陶磁器はほとんど出土してなく、掘立柱建物の時期については柱穴内や

周辺の遺物よりして土壙や土壙墓とほぼ同時期のものと思われる。

## B 土 壙

第Ⅰ地点では8, 第Ⅱ地点で16の計24を土壙として取り上げた。各土壙の平面プランは多種におよぶが, 大別して長方形, 方形, 円形, 不整円形, 楕円形などがあり, 径または一辺が1 mくらいから大きいもので3 m近いものもある。土壙の深さはいずれも上面が削平されているとは思われるが, 現状で30cmから深いもので1 mをこえるものがある。土壙の壁面は, 摺鉢状に, 底面中央部が狭く上面に開くものと, ほぼ直に近く立ち上がるものがある。

土壙内よりの出土遺物は覆土中より発見されたものが土師器・青磁・白磁・陶器類がほとんどであり若干石器や金属製品などがみられる。なお, 土壙床面と覆土中に自然石が多くみられるのが特徴のようである。土器類の示すところによると大別して三時期に分けられるようである。

I期 鎌倉時代(12世紀後半~13世紀) I-1・2・3・8, II-2・4・6・7・8・11・12・15・16

II期 室町時代中頃(15世紀) I-5, II-1・13

III期 江戸時代(17世紀) I-4・7

不明 I-6, II-3・5・9・10・14

である。

## C 地下式土壙について

中屋敷遺跡第Ⅰ地点D区, F区の境に地下式土壙が1基検出された。この遺構は地上の表面に出入口があり, 円形を呈した竪坑となって地下に続いて, さらに階段が二段になり横方向に長楕円形の主室となっているものである。

この種と同じような構造をしたものは, 南九州地方に見られる「地下式横穴」「地下式古墳」と呼ばれている墳墓と, 関東地方に多く発見されている「地下式壙」, 「地下式土壙」, 「地下式土倉」等と呼ばれている遺構等がある。

宮崎県, 鹿児島県の南九州地方に見られるものを除いたこの種遺構は, 近年福岡県内でも数例発掘調査されており, 横山邦継氏によって大分県, 熊本県, 福岡県内の類似遺構の集成がなされ論考されている。ここでは福岡県<sup>(8)</sup>のみの資料をして中屋敷遺跡のこの種遺構の性格について考えてみたい。

福岡県内におけるこの種遺構の発見例は Tab. 4 の通りである。

### 分布状況

福岡県内でも北部に点在しており, 筑前の福岡地方では糸島平野の糸島郡前原町, 福岡平野では福岡市博多区と筑紫野市。粕屋地方では粕屋郡粕屋町である。筑前でも東部の賀遠川流域では上流に嘉穂郡の二ヶ所, 下流では直方市と鞍手町に中屋敷遺跡を含めて四ヶ所ある。豊前では筑前に近いが, 北九州市八幡西区の本城地区と, 東方にあたる豊前市である。

### 構造

入口部から地下に続く竪穴部と、竪穴部から横方向に続く主室部があり、竪穴部と主室部の間に羨道ともいうべき通路部が付属するものもある。また、竪坑部に階段が付くものもある。

竪坑の入口部は方形と円形とがあり、竪穴は円形が多いようである。竪穴が垂直に下る岩崎遺跡や諸岡遺跡と、斜めに下る藤郷遺跡や堀立遺跡がある。階段の付帯するものに二塚遺跡、谷吉遺跡、中屋敷遺跡とがある。階段は付帯しないものの方が多いようである。

羨道部があるものは諸岡遺跡で、他はそれほど明瞭でなく区別がつきにくい。竪穴より直接主室となる大分八幡宮後方遺跡や藤郷遺跡があり、階段の付くものは階段より直接主室へ続くようである。

主室部は平面形をみると隅丸長方形が多いようであるが多種である。主室に排水溝やその他の施設が見られるものに諸岡遺跡、岩崎遺跡、弥勒堂遺跡がある。なお、内には床面に敷石の見られるものもあるようである。

閉塞方法を見ると、入口部のみに閉塞するものと、岩崎遺跡や弥勒堂遺跡のように主室部前面に閉塞をするものがあって両方の場合もあるようである。

### 出土遺物

南九州地方以外にこの種の遺構が発見された場合は、南九州地方に古墳時代の墳墓としての「地下式横穴」や「地下式古墳」として、ままたり扱われ気味のようであるが、出土遺物は古墳時代のもので歴史時代のものであるようであり、出土遺物は、この遺構の年代、性格を察する上で重要なものであるのでやや詳細にみてみよう。

二塚遺跡は「主体部（主室部）の奥壁中央部に骨片と墓室を閉塞した際、土石と共に埋められたと思われる須恵器、土師器片がある。」

諸岡遺跡では、土師器小皿、石鍋、瓦類が出土していて「直接共伴する遺物が判然としないが、第1・2・3・6号の埋土中より土師質皿の出土があった。これらの土器は、ほぼ12世紀後半から13世紀に置かれており、遺構の造営もまたこの時期に行なわれた可能性をもっている」とされ、まとめの項では「平安～鎌倉時代に小竪穴が営まれ、それと略同時代とみられる地下式横穴が、今回調査したものを含め7基しられた。」とある。

谷吉遺跡の場合は出土遺物の記載がないため全く不明である。

大分宮後方遺跡は群をなしているようであるが、内1基より糸切り底の土師器が出土したようである。

岩崎遺跡は5基の群集がみられ、その内2基が調査されている。出土遺物はすでに取り上げられていてどの遺構に伴うかは判明しないが、鉄鏃、鉄鎌、須恵器があり「従来この地方の数多い横穴の中で、これまで全く正確な資料をもたなかった、特殊な構造をもつ横穴として、南九州に多い地下式横穴、または地下式土壙に類するものである」とされており、古墳時代の地

下式横穴墓と考えられているようである。

貝島家別邸1号では、主室（主室部）の奥壁に近いところに2点の銀環が出土しているようであり、2号よりの出土遺物はない。

弥勒堂遺跡では、人骨が三体分と、鉄刀、くつわ、須恵器の壺と瓶が検出されている。

堀立遺跡では、平皿埴と鏡、753-2番地のものより玄室内の剥落せる砂礫中より石臼1点が出土している。

以上、出土遺物を見てみると、明らかに古墳時代に属するものと、歴史時代に比定される二種がある。古墳時代のものとして二塚遺跡、岩崎遺跡、弥勒堂遺跡であり、貝島家別邸遺跡もこの時期のものと思われる。二塚遺跡、弥勒堂遺跡では人骨がみられることより墳墓とされよう。また、岩崎遺跡や貝島家別邸遺跡についても出土遺物や遺跡の状況等よりして墳墓と推定できるようである。

歴史時代に比定できるものの内、人骨の検出されたものは1基もないようである。また、明らかに副葬品として考えられる遺物の出土状況ではないようで、遺物は土師器が多い。山ノ口Ⅱ区1号遺跡では「遺構内から遺物は出土していないので年代はわからないが、新しいのではなかろうか。遺構の性格は、貯蔵用横穴であろう。」とされている。

歴史時代のこの種遺構が最も多く検出されている関東地方の遺跡<sup>註(11)</sup>を見てみると、その性格は中世～近世の貯蔵庫と墳墓等があるようである。東京都日野市平山橋遺跡<sup>註(12)</sup>、千葉県柏市中馬場遺跡<sup>註(13)</sup>などより人骨が検出されており「墳墓」と考えられている。「貯蔵庫」と考えられているものに、千葉県松戸市大谷口遺跡<sup>註(14)</sup>、東京都国立市仮屋上遺跡等があり、埼玉県上福岡市川崎遺跡<sup>註(15)</sup>では淡水産の貝類・植物の種子（エノコア7）が出土している例もある。しかし、墳墓、貯蔵穴の性格を有するこの種遺構に明確な違いがあるものではない。したがって、出土遺物のないものについては多様な機能・性格が考えられることになる。

九州地方においては、大分県大野郡野津町宮原字中山<sup>註(8)</sup>や、熊本県荒尾市野原字今寺<sup>註(8)</sup>のこの種遺構より五輪塔が出土しており「墳墓」を考えさせるものがあり、貯蔵庫を想定させるような遺物が検出された遺跡はないようである。しかし、山の口Ⅱ区1号遺跡のように遺構の状況等より貯蔵庫と考えられているものもあり、関東地方のように墳墓と貯蔵庫等が想定され、他に「隠し穴」、「人の隠れ穴」、「僧侶等の修業場」説もある。

地下式土壙について九州、関東地方のものを例にみてきたが、その性格については出土遺物や、構造の相違、とくに閉塞部の問題、そしてその遺構が持ち合せる遺跡の立地や状況等を考慮して判断すべきであることはいうまでもないことである。

そこで、中屋敷遺跡の場合を考えると、①丘陵上にあり高燥地である。②構造上の特徴は竪坑部と主室部であり、竪坑部に二段の階段が付属している。③主室部は不整円形に近く屍床や排水溝は見られない。また掘削途中で中止している。④副葬品に相当する遺物はなく、また出

土遺物は摺鉢片と瓦質土器片である。など①～④が上げられる。

中屋敷遺跡の場合は、問題となるのは閉塞の状況である。閉塞は自然石を用いて階段部まで埋め込んでいる。この閉塞石には石臼が含まれていて、閉塞部は石組遺構と重複しており石組遺構の方が新しい。この石組遺構については江戸時代の17世紀と推定した第Ⅰ地点F区北の建物群に伴うものと思われる。この石組遺構の下に地下式土壇はある。

中屋敷遺跡の古墳時代をみると第Ⅰ地点第1・2号住居跡があるが、これは古式土師器を出土している。他に須恵器1点があるのみである。歴史時代は既に記したように三期が考えら

Tab. 4 福岡県内地下式土壇一覽表

遺跡名	所在地	出土遺物	文献
二塚	糸島郡前原町東字二塚81	墓室の奥壁中央部に骨片・閉塞した際に土・石と共に埋められたと思われる須恵器無類壺と土師器壺	註10
山の口Ⅱ区1号	筑紫野市古賀字山の口	ナシ	註7
諸岡1号	福岡市博多区諸岡9-22	主室床面直上崩落土中より土師質小皿1	註8
諸岡2号	福岡市博多区諸岡9-22	主室埋土内から土師質皿1	註8
諸岡3号	福岡市博多区諸岡9-22	主室床面よりやや浮いて土師質土器片と同皿、竪坑埋土中より滑石製石鍋片1	註8
諸岡4号	福岡市博多区諸岡9-22	崩落土中より土師質皿、須恵器坏身	註8
諸岡5号	福岡市博多区諸岡9-22	ナシ	註8
諸岡6号	福岡市博多区諸岡9-22	主室の天井部中央の崩落土より土師質皿、軒先瓦	註8
谷吉1号	粕屋郡粕屋町大隈字谷吉		註4
谷吉2号	粕屋郡粕屋町大隈字谷吉		註4
大分宮後方	嘉穂郡筑穂町大分	1基に糸切り底の土師器を出土したものあり	註1
岩崎1号	嘉穂郡稲築町岩崎	} 第何号かは不明であるが、須恵器・鉄鎌・鉄鏝	註5
岩崎2号	嘉穂郡稲築町岩崎		註5
岩崎3号	嘉穂郡稲築町岩崎		註5
岩崎4号	嘉穂郡稲築町岩崎		註5
貝島家別邸1号	直方市頓野	奥壁に近いところに2個の銀環	註1
貝島家別邸2号	直方市頓野	ナシ	註1
弥勒堂	鞍手郡鞍手町小牧字藤郷	人骨3体・鉄刀・轡・須恵器	註6
藤郷1号	鞍手郡鞍手町小牧字藤郷	ナシ	註6
藤郷2号	鞍手郡鞍手町小牧字藤郷	ナシ	註6
藤郷3号	鞍手郡鞍手町小牧字藤郷	ナシ	註6
藤郷4号	鞍手郡鞍手町小牧字藤郷	ナシ	註6
向山	鞍手郡鞍手町新北字向山	ナシ	註9
中屋敷	鞍手郡鞍手町中山字中屋敷	摺鉢片・土器片	
赤坂	北九州市八幡西区本城		
善弘寺	北九州市八幡西区本城		
堀立1号	築上郡黒土村(現豊前市)		註2・3
堀立2号	豊前市堀立字太郎羅753~2	主室内の剝落せる砂礫中より石台1個	註2・3
堀立3号	豊前市堀立字太郎羅755		註2・3
堀立4号	豊前市堀立字辨		註2・3

れ、Ⅲ期の江戸時代の17世紀より新しいとすると、Ⅰ・Ⅱ期の時代のものと考えられ、出土遺物よりⅡ期の室町時代の15世紀と想定される。

しいてその性格を推測するならば貯蔵庫と思われる。それは諸特徴をふまえた以外に、この種遺構の歴史時代墳墓とされるものが九州地方においてより明確でないこと。中屋敷遺跡における室町時代の15世紀の状況を察するに中屋敷遺跡の後背地には「剣岳城跡」があり、根子屋形居館が十分に推測されること。この種遺構が中世城跡に関連する遺跡で発見例が多いことなどである。

最後に、名称については地下式横穴を用いず地下式土壇としたのは貯蔵庫と推定できることによる。

- 註1 中山平次郎「考古雑録」(『考古学雑誌』第11巻第9号)1921年(大正10年)5月。  
 註2 弘津弘文「豊前国黒土村の地下式横穴」(『考古学雑誌』第14巻第13号)1924年(大正13年)10月。  
 註3 吉村鉄臣「豊前国築上郡黒土村の地下式横穴」(『考古学雑誌』第19巻第7号)1929年(昭和4年)7月。  
 註4 山本博「福岡県粕屋郡遺跡遺物」(『考古学雑誌』第12巻第1号)1930年(昭和5年)1月。  
 註5 児島隆人・藤田等篇(『嘉穂地方史』先史編)1973年(昭和49年)7月。  
 註6 鞍手町誌編集委員会編(『鞍手町誌』上巻)1974年(昭和48年)9月  
 註7 川述昭人編「山の口遺跡の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-VI-)1975年(昭和50年)3月。  
 註8 横山邦継・後藤直編『板付周辺遺跡調査報告書(2)』(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第31集)1975年(昭和50年)3月。  
 註9 中間研志「向山遺跡の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XII-)1977年(昭和52年)3月。  
 註10 大神邦博氏(福岡県文化財調査員)の「遺跡(文化財)管理調査報告」1974年(昭和49年)3月による。  
 註11 中田英「地下式土壇」『草山遺跡』(神奈川県埋蔵文化財調査報告11)1976年(昭和51年)4月。  
 中田英「地下式土壇研究の現状について」(『神奈川考古』第2号)1977年(昭和52年)4月。  
 註12 雪田隆子他「平山橋遺跡」1974年3月。その後、日野市遺跡調査会にて隣接地が発掘調査されており、筆者は久しく遺跡見学をした。人骨等の出土遺物があった。  
 持田友宏・池上悟「日野市平山遺跡第2・4・9次調査」(『調査・研究発表会』IV)1978年(昭和53年)12月。  
 註13 下津谷達男他『中馬場遺跡・妻子原遺跡』1972年(昭和47年)  
 註14 大川清他『大谷口』(松戸市文化財調査報告第2集)1970年(昭和45年)3月。  
 註15 松尾鉄城他「上福岡市川崎遺跡の調査」『第8回埼玉県遺跡発掘調査報告発表要旨』1975年(昭和50年)3月。  
 上福岡市教育委員会編『川崎遺跡第1次調査概報』1975年(昭和50年)3月。  
 なお、関東地方の「地下式土壇」や、文献については日野市遺跡調査会池上悟氏より種々ご教示を受けた。記して感謝する次第である。  
 註16 副島邦弘編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-XXIII-』1978年(昭和53年)3月。

#### D 土壇(木棺)墓について

中屋敷遺跡において第Ⅰ地点より4、第Ⅱ地点より2の合計6基の歴史時代の土壇(木棺)墓が検出された。

これらの内、人骨がみられたのはⅠ-1号、Ⅱ-2号のみであるが、他は形状・出土遺物等よりお墓としたものである。

各土墳墓の形態はⅠ-1・3・4号が長方形、Ⅰ-2号が不整形円形、Ⅱ-1号は長方形で木棺墓、Ⅱ-2号は隅丸長方形である。Ⅱ-1号は釘が数個出土しており、また形状よりして木棺墓である。

副葬品は青磁、白磁、土師器が主で、Ⅰ-3号からは刀子とみられる鉄製品、Ⅱ-2号より鉄刀が出土している。これらの副葬品から各土墳（木棺）墓の年代を考えると6基とも12～13世紀代と思われる。なお、Ⅰ-1号より出土している六角口縁の青磁は流れ込みの遺物であり新しい。

構造上においてⅠ-1号には床面に二条の溝がある。これは太宰府遺跡の学校院で検出されている太宰府SX863土墳墓が参考となり、土墳内に木棺を納める場合床面に丸太材を置いている。この木棺墓では、土墳床面上に木口と平行にして木棺の両端と中央部に丸太材が置かれている。このことを考えると中屋敷Ⅰ-1号土墳墓においても南側木口方には溝はないが、他の二条の溝は木棺を置くための台として木材を入れた可能性は十分に考えられる。

Ⅰ-2号は炭が床面にみられることより火葬墓とも考えられたが、火葬土墳墓とは異なっているようである。なお、この土墳墓の床面上には硅化木2個と自然石3個があり、Ⅰ-1号と同様に棺台となっていた可能性もある。

Ⅰ-3・4号は、切り合っていて3号墓が新しく、形状からして木棺墓の可能性が強い。

Ⅱ-1号は釘が数本出土しており明らかに木棺墓である。また、覆土中に多くみられる自然石は標石、あるいは配石と思われる。副葬品の青磁碗は棺外副葬品であろう。

Ⅱ-2号は遺体の下半身部が遺存しており副葬品の位置を明確に示した。副葬品は頭部の左側の土器類と身体中央の鉄刀である。

以上、中屋敷遺跡の歴史時代土墳（木棺）墓についてみてきたが、最近福岡県内などにおいて歴史時代の墳墓発見が急激に増加しており、特に中世の土墳（木棺）墓が多い。そこで若干歴史時代の土墳（木棺）墓について考古学的に発掘、調査されたものについてふれてみたい。

歴史時代のお墓には古墳時代より続いた土墳墓と、新たに火葬が導入され、土葬と火葬の二種がみられる。火葬墓については既にふれたことがある。福岡県内出土の土葬墓は Tab. 5 に示す。註(1)（本文の各遺跡は Tab. 5 の同遺跡註による）

土葬には主体部の構造によって墓壇内に直接遺体を納めた土墳墓と、木棺（方・円形）に納めて埋葬した木棺墓。さらに甕に遺体を埋葬した甕棺墓等がある。

古墳時代の土墳墓は発見例が少ないが、横穴式石室を有する古墳が築造され始める古墳時代後期になると、古墳が数多くみられるようになり群集化していく。この古墳時代後期に墳丘を伴わない土墳墓がいくつか見られる。

粕屋郡古賀町の唐ヶ坪遺跡、糸島郡前原町上鎌子遺跡、朝倉郡夜須町城山遺跡、小郡市津古内畑遺跡などがある。城山遺跡は20基の群集墓であり、唐ヶ坪遺跡は古墳の墳丘裾に1基のみ

みられるものである。これらには須恵器、鉄器を副葬しているものがあり、時期は須恵器編年Ⅱ期以後のものである。

奈良時代になると九州でも数多くの骨蔵器を伴う火葬墓がみられるようになるが、土壙墓はほとんど発見されていない。干潟遺跡は筑後国御原郡日方郷に比定されているところであるが前半の土壙墓14基が竪穴住居跡などと検出されている<sup>註(2)</sup>。8世紀も後・末期になると君畑14号土壙墓、剣塚5号木棺墓遺跡、道場山4・6号土壙墓などがみられるようになり平安時代に入ると遺跡は増加し、中世には火葬墓より多く検出されている。近世においても最近では考古学的に調査された例が増加している。古代・中世は土壙墓、長方形木棺墓であるが、近世になると甕棺墓と円、方形木棺墓が多くみられるようである。

主体部の種類については記したが、主体部は単独に所在するものと、古墳のように周溝をめぐらすものもある。干潟遺跡Ⅰ区では円形周溝のほぼ中央に墓塚がある。

鏡原遺跡では円形周溝の中央部分に土壙墓があり土師器、瓦器が出土している。

方形周溝では伯玄社遺跡があり、主体部は土壙墓で土師質坏が出土しており、室町時代に比定されている。

北牟田遺跡では方墳の墳丘内に木棺墓を主体部とするものが5基ある。

佐賀県内ではあるが、三養基郡千塔山遺跡では円形周溝が11基検出されており、この内には明らかに盛土を伴うものもあると云う<sup>註(3)</sup>。

しかし、全体的には周溝を有するものはわずかであり墓塚単独のものが圧倒的に多い。

木棺墓については木棺自体が遺存している例が少なく、鉄釘などの出土遺物や墓塚の掘り方などからして木棺墓とされる場合が多いが、歴史時代のものについては若干知られる程度のものである。

太宰府SX863の木棺墓は遺存が良いものであり、ほぼ全容が知られる。門田遺跡木棺墓は鉄釘や、構造等が考察されていて、木棺の材質についてもコウヤマキと報告されている。

墓塚のみの土壙墓については多種多様としか云いようがない程でありここでは省く。

さて、中世の土壙(木棺)墓の遺跡をみるとまず位置では、丘陵上に墓地のみが検出されるものと、他の遺構と共に検出される場合がある。土葬墓の場合は古代の火葬墓と異なって圧倒的に後者の例が多く、他の遺構と共に一集落(村)に付帯して検出されるようである。

君畑遺跡は古代より中世にかけての25基が検出されており、遺跡の立地や状況より独立した墓地と思われる。最も集中して検出されているのは筑紫野市の塔ノ原、杉塚、武蔵地区であり、平安時代より中世にかけてかなりの数に達している。

このことは古代の火葬墓が比較的に見晴らしの良い丘陵頂部付近に選地しているのに対して好対照を示している。そしていくつかの群をなしている場合が多く、遺跡における立地は、中心部的な所ではなくやや隅に近い所に位置しているものが多いようである。このような状態は

「屋敷墓」的なことが多分に察せられるところである。

土壇（木棺）墓の副葬品についてみると、古代では火葬墓と同じように土器類と鉄・銅器類があり、土器類が多く出土している。中世ではないが門田遺跡の八稜鏡，鉄製紡錘車。津古内畑遺跡の八稜鏡と鑄銅製鈴は注目される遺物である。

中世には土器類がほとんどであり土師器，青磁，白磁などが多くの遺跡より出土している。鉄器類はほとんどみられず鉄刀，刀子が若干の遺跡より出土している。

銭については火葬墓と同じく古代・中世の出土遺跡は少ない。

最近，とくに多く検出されている近世の土壇墓，木棺墓，甕棺墓については省いた。

以上，古代・中世の土壇（木棺）墓を概観したが，中屋敷遺跡の土壇（木棺）墓は墓地としては群集していないようであり，中屋敷遺跡Ⅰ期の鎌倉時代に比定できる住居は見い出せないようであるが，土壇など多くの遺構が検出されており「屋敷墓」的な性格を有していたものと思われる。副葬品にⅠ-3号，Ⅱ-2号の鉄器類は被葬者の性格を示唆するものであろう。

註1 渋谷忠章・上野精志「日本各地の墳墓—九州—」(『新版仏教考古学講座』第7巻)1975年(昭和50年)9月。

上野精志『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-XX-』1978年(昭和53年)3月。

註2 第Ⅰ次調査は昭和51年12月から昭和52年3月に渡り福岡県教育委員会が調査を実施する。第Ⅱ次調査は昭和53年8月から昭和54年2月まで福岡県教育委員会が調査を行う。第Ⅰ次は橋口達也氏，第Ⅱ次調査は副島邦弘氏よりご教示を受けた。

註3 基山町遺跡発掘調査団編『干塔山遺跡調査概報』1977年(昭和52年)2月。詳細は同調査員中牟田賢治氏よりご教示を受けた。

Tab. 5 福岡県内土葬墓一覧表

遺 跡 名	所 在 地	埋葬状況	副 葬 品	時 期	文 献
三雲・番上Ⅱ-6号	糸島郡前原町三雲番上	土壇墓	土師小皿・青磁片・石鍋		18
三雲・八龍Ⅰ-71号	糸島郡前原町三雲八龍	土壇墓			21
三雲・八龍Ⅰ-72号	糸島郡前原町三雲八龍	土壇墓			21
上鐘子周溝墓?	糸島郡前原町篠原字上鐘子	周溝墓(方形)			30
飯氏馬場1号	福岡市西区飯氏字馬場	土壇墓	熟年人骨・龍泉系青磁	12C~13C	6
飯氏馬場2号	福岡市西区飯氏字馬場	土壇墓	小児人骨	中世	6
飯氏馬場4号	福岡市西区飯氏字馬場	土壇墓			6
飯氏馬場5号	福岡市西区飯氏字馬場	土壇墓	熟年人骨		6
飯氏馬場6号	福岡市西区飯氏字馬場	土壇墓	小児人骨		6
飯氏馬場7号	福岡市西区飯氏字馬場	土壇墓			6
鏡原	福岡市西区飯氏字鏡原	周溝墓(方形)	土師器4・瓦器1	平安末	6
藤崎	福岡市西区藤崎	土壇墓		鎌倉	42
金武1号	福岡市西区金武字浦江谷				5
金武2号	福岡市西区金武字浦江谷		寛永通宝	江戸	5
有田3次31画区	福岡市西区有田1丁目23-1	土壇墓	白磁碗・刀子	中世	36
多々良1号	福岡市西区多々良字宗原	土壇墓	青磁碗(龍泉窯片)・スラッグ		9
多々良2号	福岡市東区多々良字宗原	土壇墓	土師器2		9
和白7号	福岡市東区上和白	土壇墓	土師器皿3・青磁・鉄刀	鎌倉	7
和白8号	福岡市東区上和白	土壇墓	土師器皿	鎌倉	7

遺 跡 名	所 在 地	埋葬状況	副 葬 品	時 期	文 献
和白9号	福岡市東区上和白	土墳墓	土師器皿		7
和白11号	福岡市東区上和白	土墳墓	青磁碗	鎌倉	7
板付G-5a地点1号	福岡市博多区板付2-9-6	木棺墓	土師器皿4・糸切り		12
板付G-5a地点2号	福岡市博多区板付2-9-6	木棺墓	漆器・土師器・銅銭・青磁		12
久保園第1号	福岡市博多区大字東平尾字久保園	土墳墓	青磁	中世	43
久保園第2号	福岡市博多区大字東平尾字久保園	土墳墓	青磁	中世	43
諸岡	福岡市博多区諸岡9-22	土墳墓?	土師器皿・鉄	中世	22
諸岡	福岡市博多区諸岡9-22	土墳墓?			22
諸岡32号竪穴	福岡市博多区諸岡9-22	土墳墓?			19
諸岡34号竪穴	福岡市博多区諸岡9-22	土墳墓?			19
諸岡39号竪穴	福岡市博多区諸岡9-22	土墳墓?			19
諸岡42号竪穴	福岡市博多区諸岡9-22	土墳墓?			19
中・西コモリ	大野城市中字コモリ	木棺墓	白磁碗・土師器小皿3	13C~14C	47
伯玄社	春日市大字小倉字伯玄町	周溝墓(方形) 土墳墓	土師質坏・人骨(男)	室町	1
門田	春日市上白水字門田	木棺墓	八稜鏡・刀子・紡錘車・釘・土師器・瓦	平安10C前後	35
門田1号	春日市上白水字門田	土墳墓		中世	35
門田2号	春日市上白水字門田	土墳墓		中世	35
辻田10号	春日市上白水辻田	土墳墓	土師器小皿8	平安	51
御供田1号	春日市春日字御供田	土墳墓			
今光	筑紫郡那珂川町	土墳墓			
今光1号	筑紫郡那珂川町	土墳墓			
今光2号	筑紫郡那珂川町	土墳墓			
太宰府SX629	筑紫郡太宰府町観世音寺字学業院201-1	木棺墓	青磁碗・龍泉窯・土師器	鎌倉	20
太宰府SX863	筑紫郡太宰府町観世音寺字学業院203-1	木棺墓	白磁・瓦器碗・土師器・鉄刀	12C中頃	28
太宰府SX864	筑紫郡太宰府町観世音寺字学業院203-1	土墳墓(木蓋)	青磁碗・土師器坏		28
筑前国分寺SX065	筑紫郡太宰府町字国分	木棺墓(石蓋)	土師器小皿・杯		46
君畑1号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	木棺墓	土師器・黒色土器・釘	9C末	31
君畑2号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	木棺墓	土師器・釘	9C中葉	31
君畑3号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	木棺墓	土師器・内黒土器・釘	9C後半	31
君畑4号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	土墳墓		9C中葉	31
君畑5号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	土墳墓			31
君畑6号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	木棺墓	白磁・土師器・釘	12C後半	31
君畑7号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	土墳墓	土師器・釘		31
君畑8号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	木棺墓	土師器・釘	10C前半	31
君畑9号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	木棺墓	土師器・釘	10C前半	31
君畑10号	筑紫郡太宰府町字君畑2797		土師器・黒色土器		31
君畑11号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	土墳墓	土師器	11C	31
君畑12号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	土墳墓	土師器・釘	10C後半	31
君畑13号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	土墳墓	土師器		31

遺跡名	所在地	埋葬状況	副葬品	時期	文献
君畑14号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	土壙墓	須恵器	8C末~9C前	31
君畑15号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	土壙墓			31
君畑16号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	土壙墓	土師器・黒色土器	10C前半	31
君畑17号	筑紫郡太宰府町字君畑2717	土壙墓	釘		31
君畑18号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	木棺墓	土師器・内黒土器・黒色土器・釘	9C後半~10C初頭	31
君畑19号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	木棺墓	土器・釘	10C前半	31
君畑20号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	土壙墓	釘		31
君畑21号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	土壙墓	釘		31
君畑22号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	土壙墓	土師器・釘	10C前	31
君畑23号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	不明	土師器	10C前	31
君畑24号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	不明	土師器	10C前	31
君畑25号	筑紫郡太宰府町字君畑2797	不明	白磁	12C後半	31
桶田山D 1号	筑紫野市塔ノ原	土壙墓		平安?	16
桶田山D 2号	筑紫野市塔ノ原	土壙墓			16
桶田山D 3号	筑紫野市塔ノ原	土壙墓	土師器甕・坏		16
桶田山D 4号	筑紫野市塔ノ原	土壙墓			16
桶田山M 1号	筑紫野市塔ノ原	木棺墓	鉄釘(角)	平安後半	16
桶田山M 2号	筑紫野市塔ノ原	木棺墓	鉄製刀子・鉄釘・		16
桶田山M 3号	筑紫野市塔ノ原	木棺墓	土師器坏・鉄釘		16
桶田山M 4号	筑紫野市塔ノ原	木棺墓	土師器坏・須恵器・鉄釘		16
桶田山M 5号	筑紫野市塔ノ原	木棺墓	鉄釘3		16
桶田山M 6号	筑紫野市塔ノ原	木棺墓	土師器坏		16
山の口1号	筑紫野市古賀字山の口	土壙墓(木棺墓?)	土師器坏	中世	17
八隈1号	筑紫野市武蔵字八熊	土壙墓	鉄釘	中世	26
八隈2号	筑紫野市武蔵字八熊	土壙墓			26
八隈3号	筑紫野市武蔵字八熊	木棺墓	釘		26
八隈4号	筑紫野市武蔵字八熊	土壙墓			26
唐人塚1号	筑紫野市杉塚	土壙墓		近世	39
唐人塚2号	筑紫野市杉塚	土壙墓	土師器・陶器	近世	39
唐人塚3号	筑紫野市杉塚	土壙墓	洪武通宝	近世	39
唐人塚4号	筑紫野市杉塚	土壙墓		近世	39
塔ノ原6号土壙墓	筑紫野市塔ノ原	土壙墓(木棺墓?)	土師器小皿・鉄釘	中世	13
塔ノ原7号土壙墓	筑紫野市塔ノ原	土壙墓	土師器坏	中世	13
剣塚1号木棺墓	筑紫野市杉塚	木棺墓	須恵器長頸壺	平安9C	44
剣塚2号木棺墓	筑紫野市杉塚	木棺墓	灰釉長頸壺・土師器小皿・鉢		44
剣塚3号木棺墓	筑紫野市杉塚	木棺墓	土師器小皿		44
剣塚4号木棺墓	筑紫野市杉塚	木棺墓	白磁碗・土師小皿・高台付碗	9C後半	44
剣塚5号木棺墓	筑紫野市杉塚	木棺墓	土師器小皿・刀子・鏝子	8C後半	44
剣塚6号木棺墓	筑紫野市杉塚	木棺墓	土師小皿	9C~9C中頃	44
剣塚7号木棺墓	筑紫野市杉塚	木棺墓			44
剣塚1号土壙墓	筑紫野市杉塚	土壙墓	土師器小皿	9C~9C中頃	44
剣塚2号土壙墓	筑紫野市杉塚	土壙墓			44
剣塚3号土壙墓	筑紫野市杉塚	土壙墓			44
剣塚4号土壙墓	筑紫野市杉塚	土壙墓			44
剣塚5号土壙墓	筑紫野市杉塚	土壙墓			44
道場山4号土壙墓	筑紫野市武蔵	土壙墓	土師器坏2	奈良末~平安初	45

遺跡名	所在地	埋葬状況	副葬品	時期	文献
道場山5号土壙墓	筑紫野市武蔵	土壙墓		奈良末~平安初	45
道場山6号土壙墓	筑紫野市武蔵	土壙墓(木蓋)	土師器坏5	奈良末~平安初	45
道場山7号土壙墓	筑紫野市武蔵	土壙墓			45
道場山8号土壙墓	筑紫野市武蔵	土壙墓			45
道場山9号土壙墓	筑紫野市武蔵	土壙墓			45
原口1号	筑紫野市杉塚	土壙墓			13
原口2号	筑紫野市杉塚	土壙墓			13
原口3号	筑紫野市杉塚	土壙墓			13
原口4号	筑紫野市杉塚	土壙墓			13
原口5号	筑紫野市杉塚	土壙墓			13
原口6号	筑紫野市杉塚	土壙墓			13
常松1号	筑紫野市常松	土壙墓	人骨・土師器坏		3
常松2号・3号	筑紫野市常松	土壙墓			3
野田1号	筑紫野市針摺	土壙墓	人骨	室町	15
野田2号	筑紫野市針摺	土壙墓	青磁		15
前田1号	筑紫野市杉塚	土壙墓	須恵器・土師器	平安前期	40
前田2号	筑紫野市杉塚	土壙墓	鉄滓・須恵器・土師器	平安初期	40
前田3号	筑紫野市杉塚	土壙墓			40
前田4号	筑紫野市杉塚	土壙墓	鉄釘		40
津古内畑1号	小郡市津古	土壙墓			2
津古内畑2号	小郡市津古	土壙墓	須恵器・鉄鎌		2
津古内畑3号	小郡市津古	土壙墓			2
津古内畑4号	小郡市津古	土壙墓			2
津古内畑5号	小郡市津古	土壙墓			2
津古内畑6号	小郡市津古	土壙墓			2
津古内畑7号	小郡市津古	土壙墓			2
津古内畑8号	小郡市津古	土壙墓			2
津古内畑	小郡市津古	土壙墓	瓦質高台付碗・土師器坏 ・鍔銅製鈴・瑞花双鳳八 稜鏡・土師高台付碗・土 師坏・土師質壺形土器		8、10
北牟田1号	小郡市三沢北牟田	木棺墓		中世	11、53
北牟田2号	小郡市三沢北牟田	木棺墓			11
北牟田3号	小郡市三沢北牟田	木棺墓			11
北牟田4号	小郡市三沢北牟田	木棺墓			11
北牟田5号	小郡市三沢北牟田	木棺墓			11
干潟Ⅰ-1号	小郡市干潟	周溝墓(円形)	内黒土師器	平安	註2
干潟Ⅱ-1号	小郡市干潟	土壙墓			註2
干潟Ⅱ-2号	小郡市干潟	土壙墓	須恵器蓋坏・刀子	奈良	
干潟Ⅱ-3号	小郡市干潟	土壙墓			
干潟Ⅱ-4号	小郡市干潟	土壙墓			
干潟Ⅱ-5号	小郡市干潟	土壙墓			
干潟Ⅱ-6号	小郡市干潟	土壙墓			
干潟Ⅱ-7号	小郡市干潟	土壙墓			
干潟Ⅱ-8号	小郡市干潟	土壙墓			

遺跡名	所在地	埋葬状況	副葬品	時期	文献
干潟Ⅱ-9号	小都市干潟	土墳墓			
干潟Ⅱ-10号	小都市干潟	土墳墓	須恵器蓋環10个体		
干潟Ⅱ-11号	小都市干潟	土墳墓			
干潟Ⅱ-12号	小都市干潟	土墳墓	須恵器蓋環・刀子		
干潟Ⅱ-13号	小都市干潟	土墳墓			
干潟Ⅱ-14号	小都市干潟	土墳墓	須恵器蓋環		
柿原野田B-1号	甘木市柿原字野田	土墳墓	土師器片		25
柿原野田C-1号	甘木市柿原字野田	土墳墓			25
柿原野田D	甘木市柿原字野田	土墳墓?	土師器片		25
西谷1号	久留米市山本町豊田字西谷	土墳墓			4
西谷2号	久留米市山本町豊田字西谷	土墳墓			4
東光寺Ⅱ区H5	久留米市山本町東光寺	土墳墓			14
東光寺Ⅳ区H12	久留米市山本町東光寺	土墳墓			14
東光寺Ⅳ区H13	久留米市山本町東光寺	土墳墓			14
東光寺Ⅳ区H14	久留米市山本町東光寺	土墳墓			14
今寺	久留米市櫛原町今寺	土墳墓	青磁		41
下見1号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、陶器		48
下見1号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、白磁片		48
下見2号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、陶磁片		48
下見3号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、		48
下見4号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、土錘2		48
下見5号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、支脚		48
下見6号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、		48
下見7号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、須恵器、陶器片		48
下見8号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、播鉢、陶器		48
下見9号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、陶器		48
下見11号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、陶器片		48
下見12号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、須恵器、土鍋、砥石		48
下見13号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、須恵器		48
下見14号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、青磁、伊万里焼		48
下見15号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器、須恵器、土鍋		48
下見16号	久留米市東合川町字下見	土墳墓	土師器		48
下見17号	久留米市東合川町字下見	土墳墓			48
祇園山	久留米市御井町高良内	土墳墓	青磁碗、土師器小皿	中世	52
中屋敷	鞍手郡鞍手町中山字中屋敷	土・木棺墓	[本文参照]	中世	37
向山	鞍手郡鞍手町新北字向山	土墳墓	土師器皿	中世	33、38
遠園	鞍手郡若宮町山口字遠園	土墳墓	白磁、土師器皿、鉄刀	鎌倉	34
小原1号~29号	鞍手郡若宮町山口	土墳墓	ナシ	鎌倉	32
宮林	中間市中間字宮林	土墳墓			50
白山1号	北九州市八幡西区香月字白岩	木棺墓	青磁・瓦器・釘	中世	23
白岩2号	北九州市八幡西区香月字白岩	木棺墓	釘	中世	23
白岩3号	北九州市八幡西区香月字白岩	土墳墓		中世	23
白岩4号	北九州市九幡西区香月字白岩	土墳墓		中世	49
白岩5号	北九州市八幡西区香月字白岩	土墳墓		中世	49
白岩6号	北九州市八幡西区香月字白岩	土墳墓		中世	49
白岩7号	北九州市八幡西区香月字白岩	土墳墓		中世	49

遺 跡 名	所 在 地	埋葬状況	副 葬 品	時 期	文 献
椎木山43号	北九州市若松区蟹住	土墳墓		室町前半?	29
屏賀坂	北九州市小倉北区金鶏町	土墳墓	磁器		27
居屋敷	行橋市居屋敷	土墳墓			24
上鑑子1~2号	糸島郡前原町篠原字上鑑子	土墳墓		7 C	30
諸岡38号	福岡市博多区諸岡	土墳墓?	鉄斧、紡錘車	古墳	22
城山1~20号	朝倉郡夜須町四三島字城山	土墳墓	須恵器	古墳	54
古賀	小郡市三沢字古賀	土墳墓	須恵器	古世	55
下見1~42号	久留米市東合川町下見	土墳墓		近世	48
唐ヶ坪	粕屋郡古賀町鹿部	土墳墓	須恵器	古墳	56
キャンベラ	京都郡厚川町花熊	土墳墓		古墳	
辻田1~41号	春日市上白水字辻田	土墳墓、甕棺墓		近世	51

- 註1 松岡史・亀井勇「福岡県伯玄社遺跡調査概報」(『福岡県文化財調査報告書』第36集)1968年(昭和43年)3月。
- 註2 西谷正編『津古内畑遺跡』1970年(昭和45年)3月。
- 註3 山崎純男他『福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡調査報告書』(別府大学文学部考古学研究報告書1)1970年(昭和45年)10月。
- 註4 宮小路賀宏編「西谷火葬墓群」(『久留米市文化財調査報告書』第3集)1971年(昭和46年)3月。
- 註5 佐田茂・松本肇「金武古墳群発掘調査報告-1・2号墳近世墳墓の調査-」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第15集)1971年(昭和46年)3月。
- 註6 柳田康雄・副島邦弘・浜田信也編「飯氏馬場遺跡・鏡原遺跡」(『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第2集)1971年(昭和46年)3月。
- 註7 柳田純考他編「和白遺跡群」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第18集)1971年(昭和46年)3月。
- 註8 柳田康雄編『津古内畑遺跡,第3次(遺構篇)』1972年(昭和47年)3月。
- 註9 三島格総括(島津義昭・山崎純男)「多々良遺跡調査報告書」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第20集)1972年(昭和47年)3月。
- 註10 柳田康雄「津古内畑遺跡」(『日本考古学年報』24,71年版)1973年(昭和48年)3月。
- 註11 西谷正「北牟田遺跡」(『日本考古学年報』24,71年版)1973年(昭和48年)3月。
- 註12 横山邦継編「板付周辺遺跡調査報告書(1)」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第29集)1974年(昭和49年)3月。
- 註13 石山勲・酒井仁夫編「塔ノ原遺跡」(『九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告』-IV-)1974年(昭和49年)3月。
- 註14 樋口一成「茶白山・東光寺遺跡」(『久留米市文化財調査報告書』第9集)1974年(昭和49年)3月。
- 註15 宮小路賀宏「野田遺跡」(『日本考古学年報』25,72年版)1974年(昭和49年)3月。
- 註16 川述昭人編「桶田山遺跡」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-VI-)1975年(昭和50年)3月。
- 註17 川述昭人編「山ノ口遺跡」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-VI-)1975年(昭和50年)3月。
- 註18 柳田康雄編「井原・三雲遺跡発掘調査概報昭和49年度」(『福岡県文化財調査報告書』第52集)1957年(昭和50年)3月。
- 註19 横山邦継・後藤直編「板付周辺遺跡調査報告書(2)」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第31集)1975年(昭和50年)3月。
- 註20 石松好雄他「太宰府史跡昭和50年度発掘調査概報」1976年(昭和51年)3月。
- 註21 柳田康雄編「井原・三雲遺跡発掘調査概報昭和50年度」(『福岡県文化財調査報告書』第53集)1976年(昭和50年度)3月。
- 註22 山口讓治編「板付周辺遺跡調査報告書13」(『福岡県埋蔵文化財調査報告書』第36集)1976年(昭和51年)3月。
- 註23 山手誠治編「白岩遺跡」(『北九州市文化財調査報告書』第17集)1976年(昭和51年)3月。
- 註24 福岡県教育委員会編『福岡県遺跡等分布地図(行橋市・京都郡篇)』1976年(昭和51年)3月。

- 註25 馬田弘稔・小田雅文・川村博編『柿原野田遺跡』1976年（昭和51年）5月。
- 註26 酒井仁夫・松村一良「八隈遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-VII-）1976年（昭和51年）7月。
- 註27 上村佳典編「屏賀坂遺跡」（『北九州市文化財調査報告書』第23集）1977年（昭和52年）3月。
- 註28 石松好雄他編『太宰府史跡昭和51年度発掘調査概報』1977年（昭和52年）3月。
- 註29 木太久守編『椎木山遺跡』1977年（昭和52年）3月。
- 註30 上野精志他編「上籬子遺跡」（『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第5集）1977年（昭和52年）3月。
- 註31 新原正典・馬田弘稔編「君畑遺跡」（『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集）1977年（昭和52年）3月。
- 註32 児玉真一編「小原古墳群の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XI-）1977年（昭和52年）3月。
- 註33 中間研志編「向山遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XII-）1977年（昭和52年）3月。
- 註34 上野精志編「遠園遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XVI-）1977年（昭和52年）3月。
- 註35 井上裕弘編「門田遺跡・門田地区の調査」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第3集）1977年（昭和52年）3月。
- 註36 井沢洋一編「有田周辺遺跡調査概報」（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第43集）1977年（昭和52年）3月。
- 註37 中間研志「中屋敷遺跡第1次調査」（『日本考古学年報』28）1977年（昭和52年）4月。
- 註38 中間研志「向山遺跡」（『日本考古学年報』28）1977年（昭和52年）4月。
- 註39 川述昭人編「唐人塚遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XVIII-）1977年（昭和52年）11月。
- 註40 川述昭人編「前田遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XVIII-）1977年（昭和52年）11月。
- 註41 久留米市教育委員会文化部文化財担当編「東櫛原今寺遺跡」『第3回くるめの考古資料展』1977年（昭和52年）11月。
- 註42 福岡市教育委員会「考古ニュース」（『考古学ジャーナル』1977年11月号142号）1977年九（昭和52年）11月。
- 註43 飛高憲雄・力武卓治「福岡市席田久保園遺跡の調査」『昭和52年度九州史学会大会研究発表要旨』1977年（昭和52年）12月。
- 註44 石山勲・中間研志編「剣塚遺跡群の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XXIV-）1978年（昭和53年）3月。
- 註45 川述昭人編「道場山2地点の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XXV-）1978年（昭和53年）3月。
- 註46 森田勉『筑前国分寺-昭和52年度発掘調査概要-』1978年（昭和53年）3月。
- 註47 副島邦弘編『中・西コモリ遺跡』（『大野城市文化財調査報告書』第2集）1978年（昭和53年）3月。
- 註48 大石昇・小田雅文編「昭和52年度東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査概報」（『久留米市文化財調査報告書』第19集）1978年（昭和53年）3月。
- 註49 北九州市教育文化事業団「白岩遺跡」（『発掘ニュース』7ごう）1978年（昭和53年）11月。
- 註50 小田富士雄・船津常人・武末純一・轟次雄「原始・古代・中世編」（『中間市史』上巻）1978年（昭和53年）11月。
- 註51 井上裕弘編「門田遺跡辻田地区墓地群の調査」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第9集）1978年（昭和53年）12月。
- 註52 石山勲編「祇園山古墳群の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XXVII-）1979年（昭和54年）3月。
- 註53 森田勉他「北牟田遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XXXI-）1979年（昭和54年）3月。
- 註54 橘昌信編『城山遺跡群発掘調査報告書』1973年（昭和48年）3月。
- 註55 小田富士雄編『塚ノ谷竈跡群』1969年（昭和44年）3月。
- 註56 高倉洋彰編『鹿部山遺跡』1973年（昭和48年）12月。

### 3. ま と め

中屋敷遺跡の発掘調査における結果は、次のとおりである。

- 1 弥生時代中期から後期初頭の住居跡群と貯蔵穴群、木棺墓からなる集落の把握。
- 2 弥生・古墳時代初頭の住居跡構造について、とくに周壁溝と周堤に関連する矢板痕を具体的に検出できた。
- 3 弥生時代中期から後期初頭における遠賀川中・下流域における石器の需要と供給についての資料の発見をみる。

4 古墳時代初頭の住居跡の検出と、遠賀川中・下流域における古式土師器の発見。

5 歴史時代Ⅰ期は鎌倉時代で、中屋敷遺跡の所在する中山地区は「植木庄」に属する。植木庄は少なくとも平安時代末期には現われており、その後院領となる。鎌倉時代に入ると七条女院から修明門院、四辻入道善統親王、その後14世紀初頭には万秋門院にうつり、さらに若宮四辻尊台親王にわたり鎌倉時代末期までは四辻官家の所領となっている。

遠賀川右岸の北九州市八幡西区香月地区でも鎌倉時代の遺構、遺物が多数発掘調査され「香月荘（勝木荘）」との関連が具体的に指摘されている。

ここに香月荘（勝木荘）」に対峙する植木庄内の遺構、遺物が具体的に知られたことは当地方の鎌倉時代を考えるうえで重要なことと云えよう。

6 歴史時代Ⅰ期の遺物として多量の中国陶磁器類が出土しており、また土鍋、片口、石鍋なども出土していて当時の生活がうかがえるものである。

7 歴史時代Ⅱ期は室町時代でも15世紀である。植木庄は大内氏の配下にあり、中屋敷遺跡の後背に位置する「剣岳城」が、応仁年間（1467～1469年）に梅野土佐により築城される。その後、剣岳城は宗像氏、秋月氏の下城となり、永禄4年（1561年）に落城している。

剣岳城を主城として、出城に新北の音丸城があり、中屋敷遺跡も地形的などをみて剣岳城と有機的関連性が考慮されるところである。

8 歴史時代Ⅱ期の遺物として明糸の陶磁器、李朝青磁が見られ、また備前焼の壺、摺鉢が出土している。

9 歴史時代Ⅲ期は江戸時代の17世紀であるが、この時期には中山村と新北村は直方藩（東蓮寺藩）の筆頭家老吉田老岐重成の知行地となり、中山村本村に別宅を設けたという。この屋敷跡が中屋敷遺跡のある丘陵上であると云われている。この吉田老岐屋敷跡を考慮して発掘調査を実施したが、江戸時代の遺構・遺物が検出できたのは第Ⅰ地点F区を中心とした地域のみであった。縦貫道建設予定地全域を調査対照したが、丘陵頂部付近などは既に開墾等により旧地形を失っており、遺跡の拡がりは第Ⅰ地点、第Ⅱ地点の範囲にとどまった。しかし、全く

江戸時代の遺構がみられなかったことはないが、家老の屋敷跡としての顕著な遺構の検出はないようであり、明確になしえなかった。

10 歴史時代Ⅲ期の遺物として近世陶磁器，キセル等が出土している。特に近世陶器は我が国の生産によるものがほとんどであり，地形的関係より高取焼や唐津焼，伊万里焼が出土している。このような近世陶磁器が考古学的に窯跡以外の遺跡より出土し，調査された例は少なく近世考古学の重要性を提示するものである。

PLATE



(1) 中屋敷遺跡発掘前の遠景 (東から)



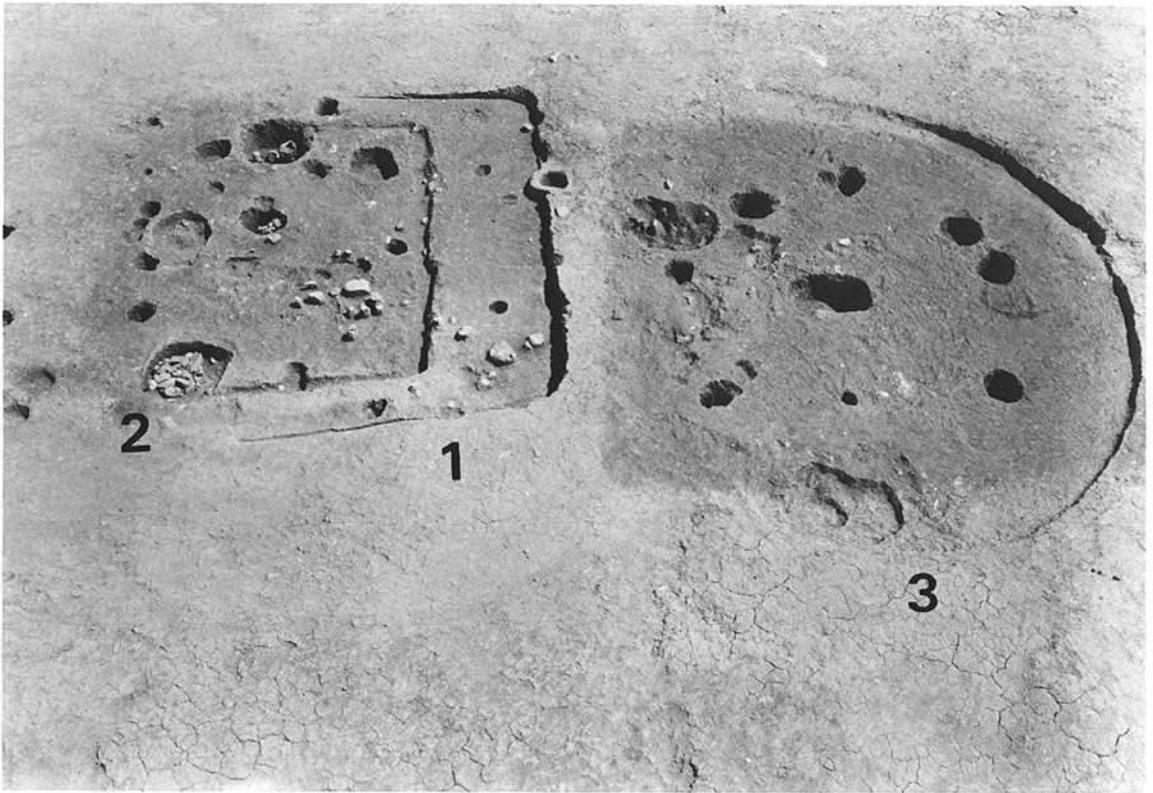
(2) 中屋敷遺跡遠景の航空写真 (南西から)



(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点全景の航空写真(南東から)



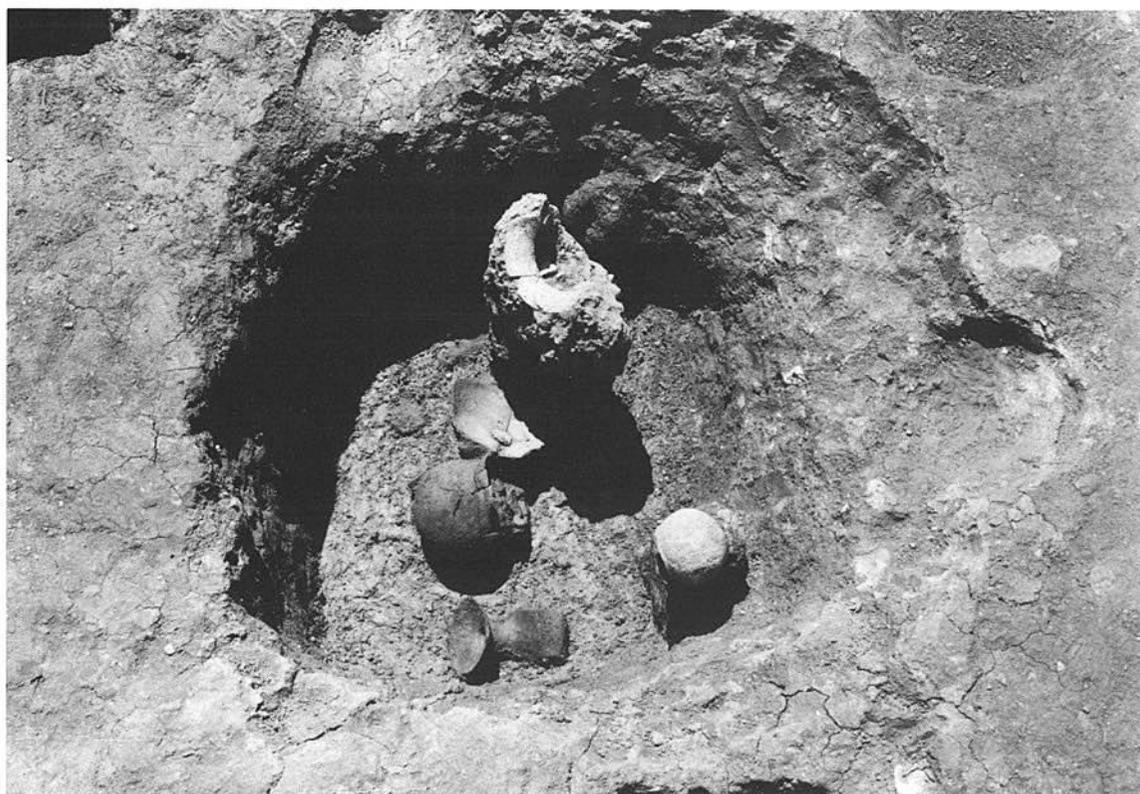
(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点全景の航空写真(北から)



中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1~3号住居跡（北から）



(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1・2号住居跡（東から）



(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第2号住居跡ピット内土器出土状況(東から)



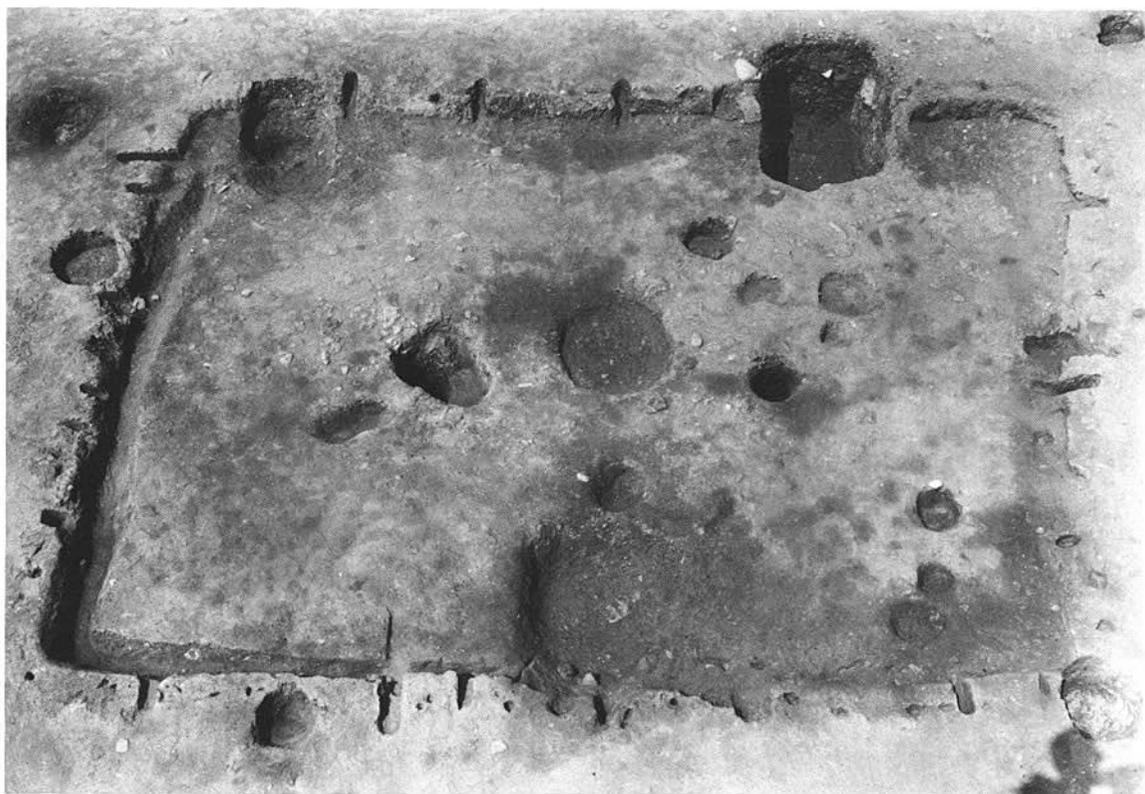
(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第3号住居跡(北から)



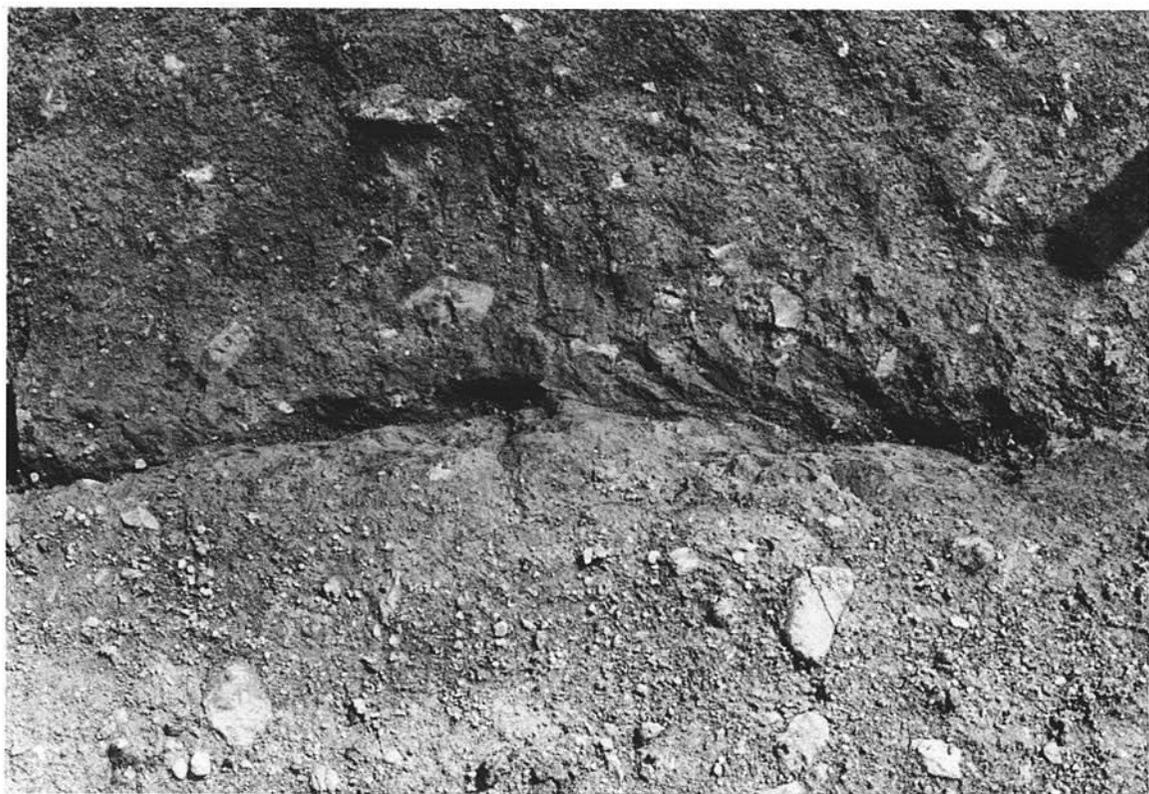
(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第4・6・7号住居跡(東から)



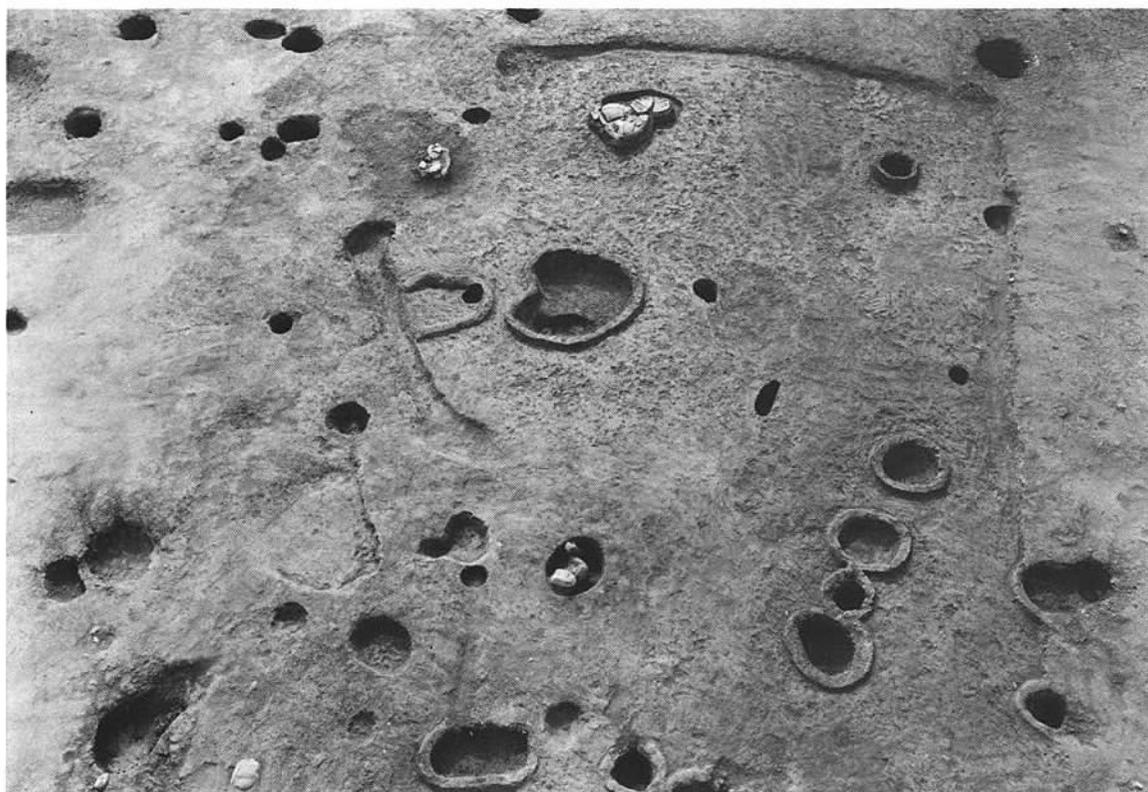
(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第4号住居跡(北から)



(1) 中屋敷遺跡第I地点第5号住居跡(東から)



(2) 中屋敷遺跡第I地点第5号住居跡の矢板痕(西から)



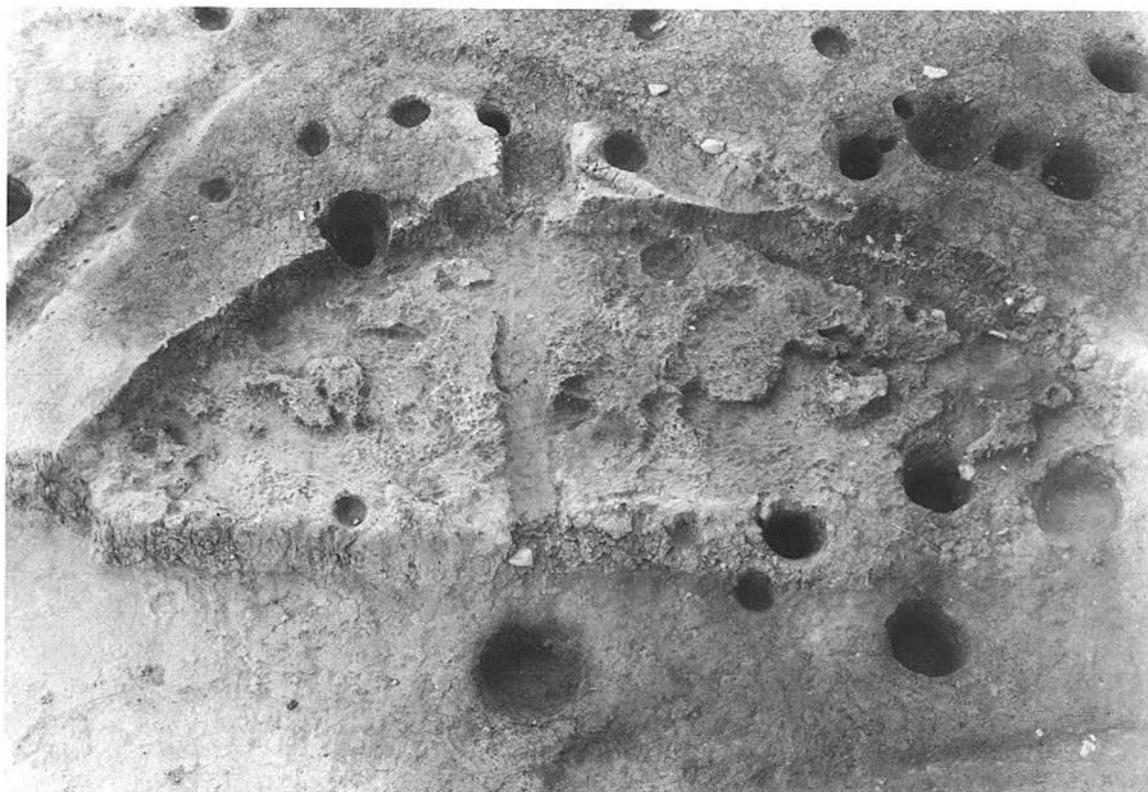
(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第6号住居跡(東から)



(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第6号住居跡土器出土状況(東南から)



(1) 中屋敷遺跡第I地点第7号住居跡(南から)



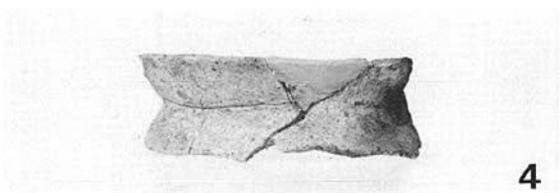
(2) 中屋敷遺跡第I地点第7号住居跡炭化材出土状況(南から)

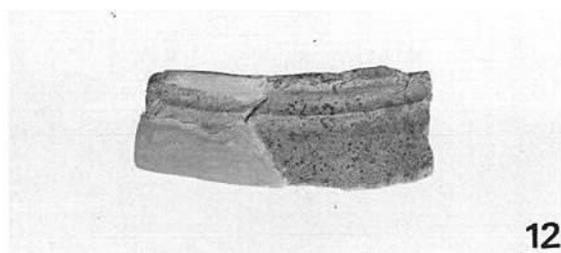


(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第8号住居跡(東から)

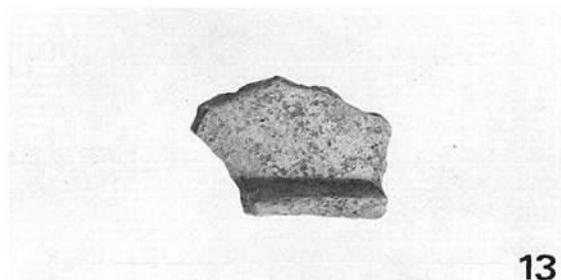


(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第8号住居跡土器・石庖丁出土状況(北から)

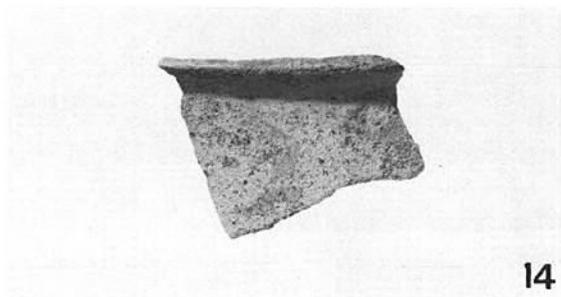




12



13



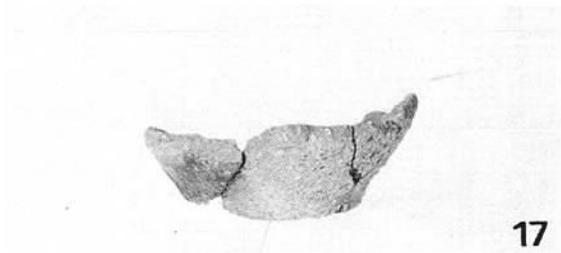
14



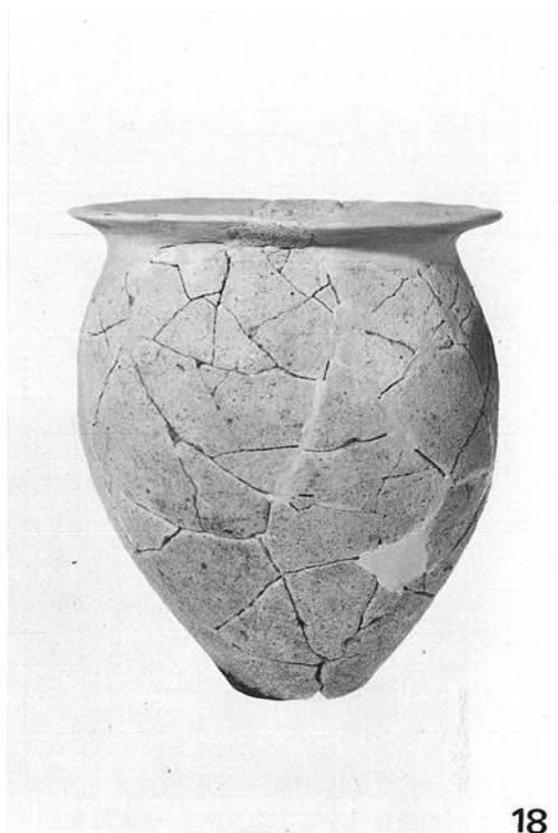
15



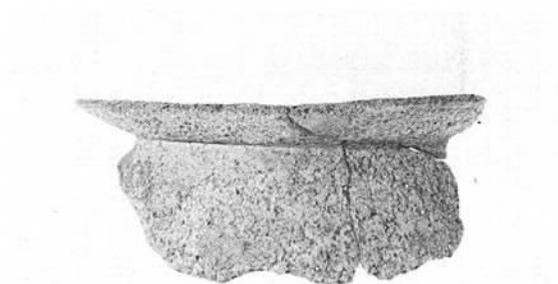
16



17



18



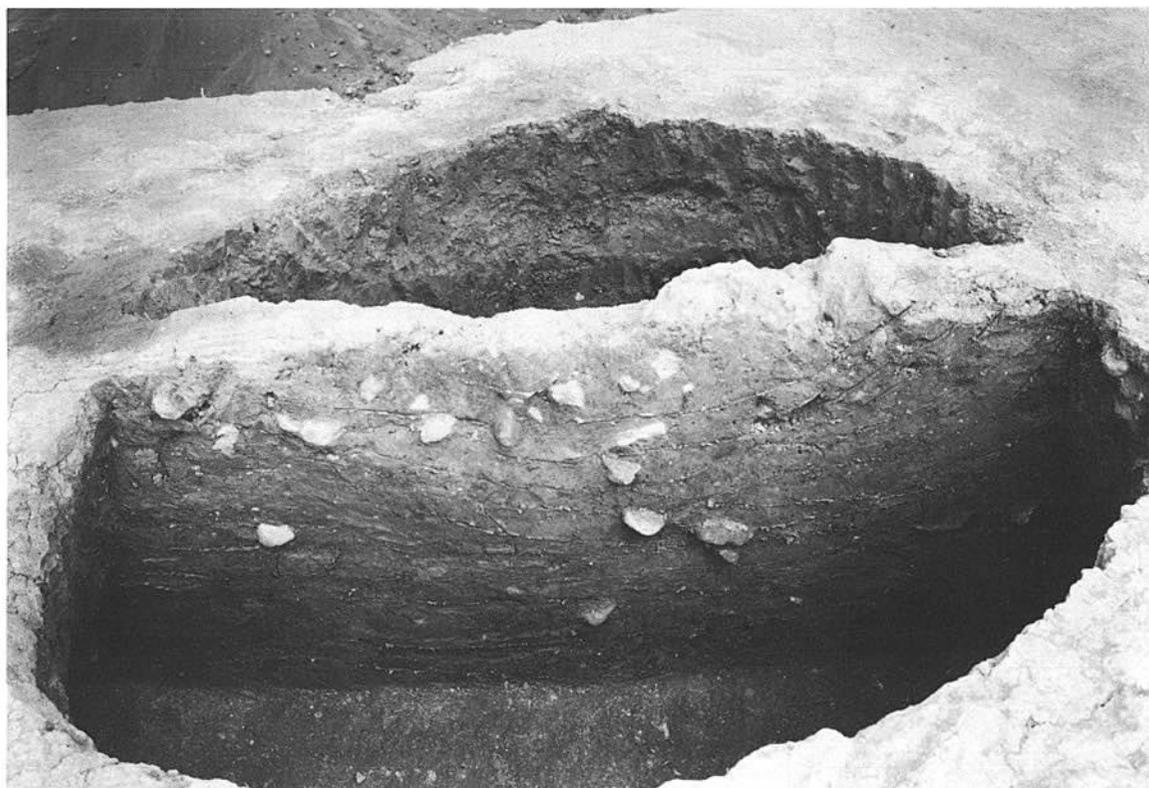
19



20



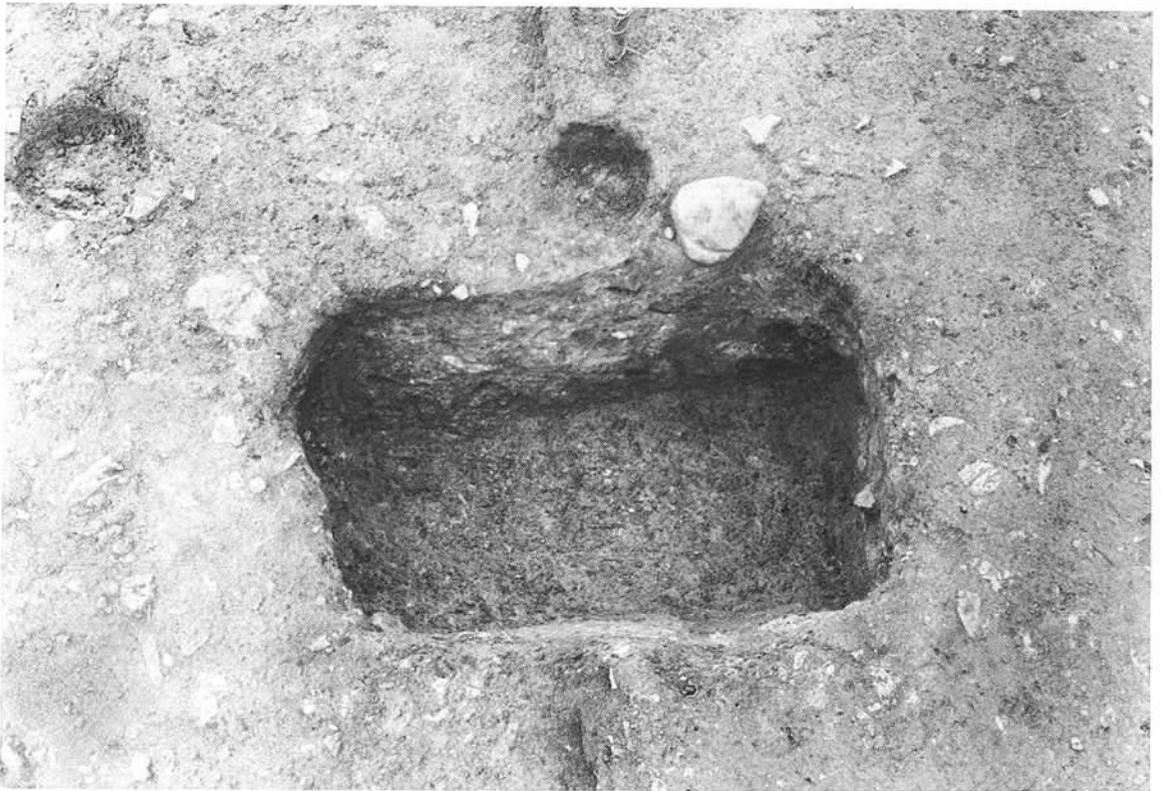
(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1~4号貯蔵穴(東から)



(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1号貯蔵穴(西から)



(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1号貯蔵穴（北から）



(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第3号貯蔵穴（北から）



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



15



14



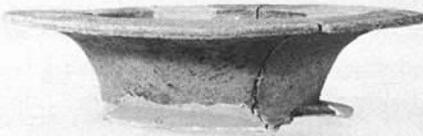
16



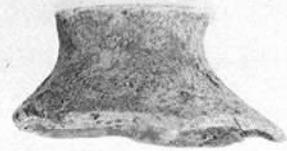
1



6



2



7



3



4



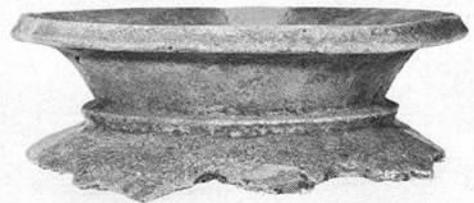
8



9



5

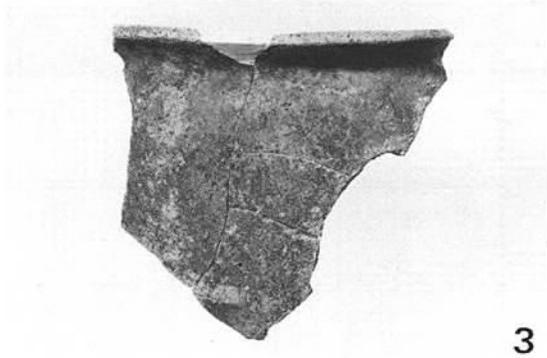




(1) 中屋敷遺跡第I地点第4号貯蔵穴(北東から)

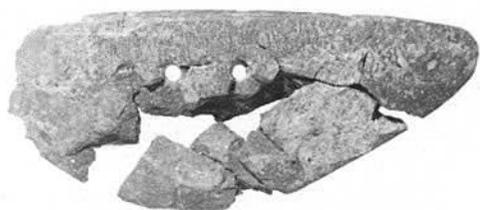


(2) 中屋敷遺跡第I地点第4号貯蔵穴(北西から)





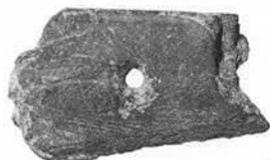
(1) 中屋敷遺跡第I地点木棺墓(東から)



1



2



3



4



5



7

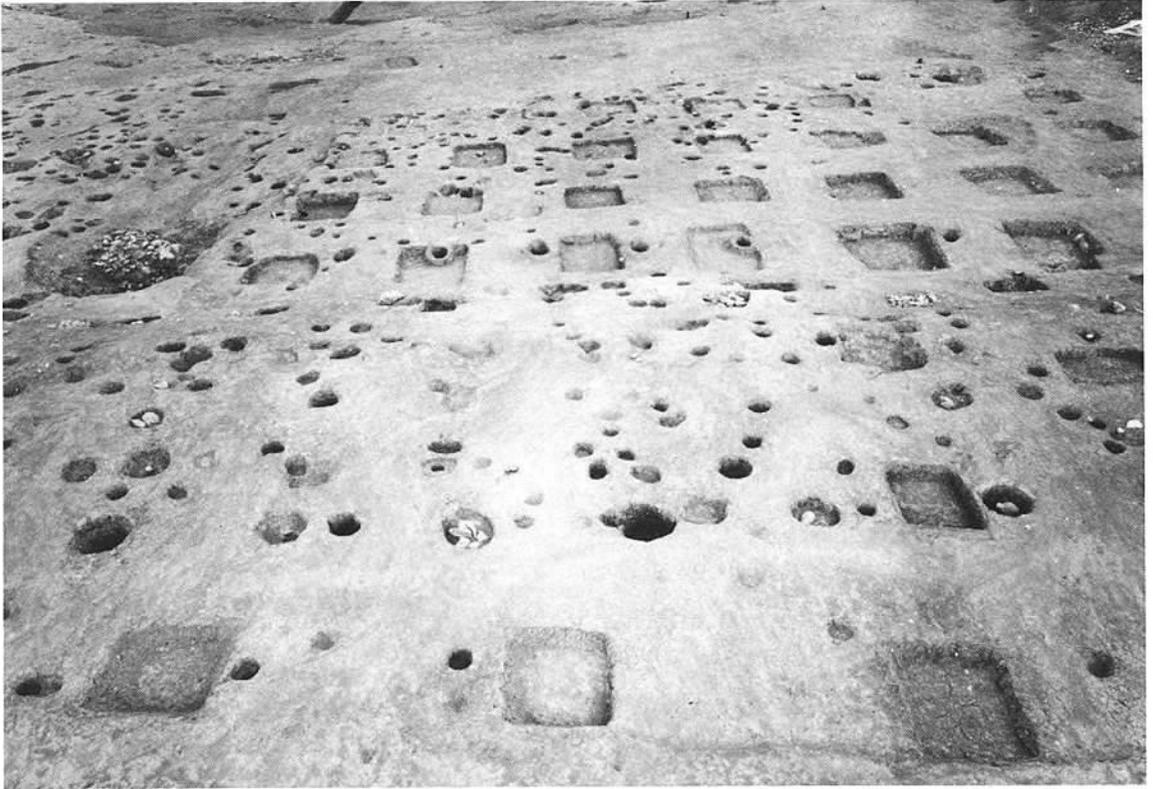


6



8

(2) 中屋敷遺跡第I地点出土石器



(1) 中屋敷遺跡第I地点第1号掘立柱建物（西から）



(2) 中屋敷遺跡第I地点F区北側の柱穴群（西から）



(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1~3号土坑 (西から)



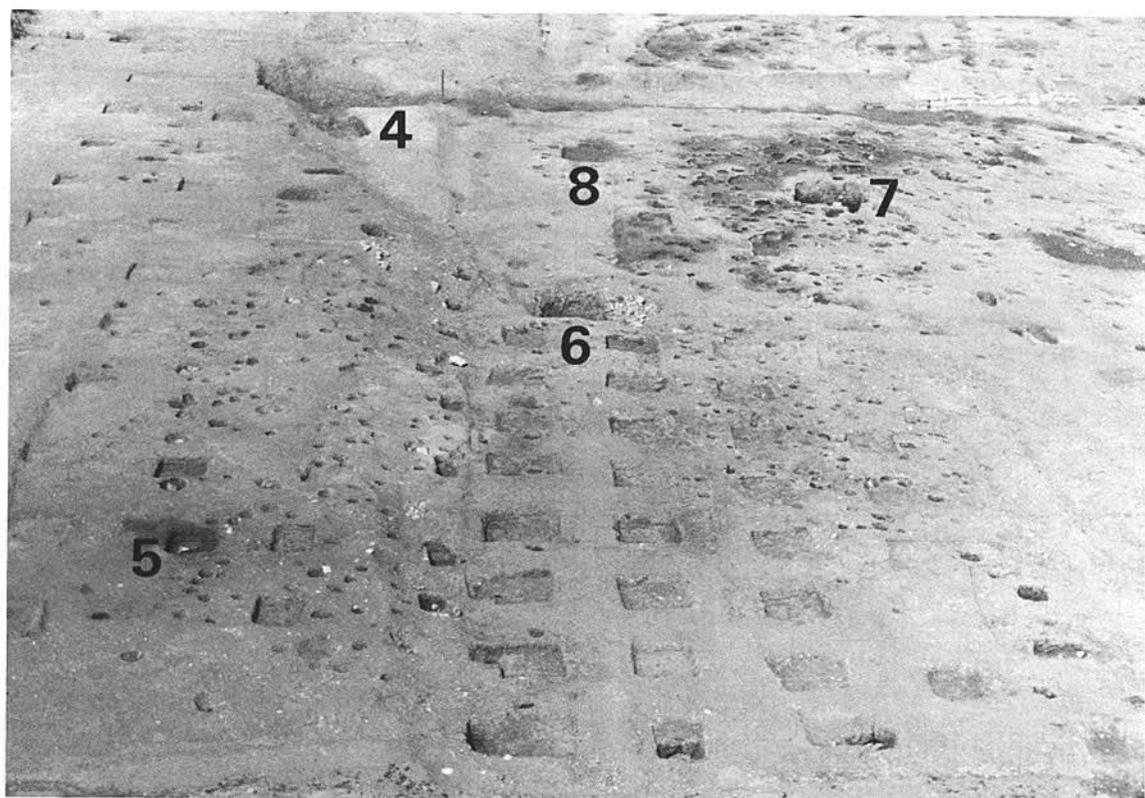
(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1号土坑 (南から)



(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第2号土坑(南から)



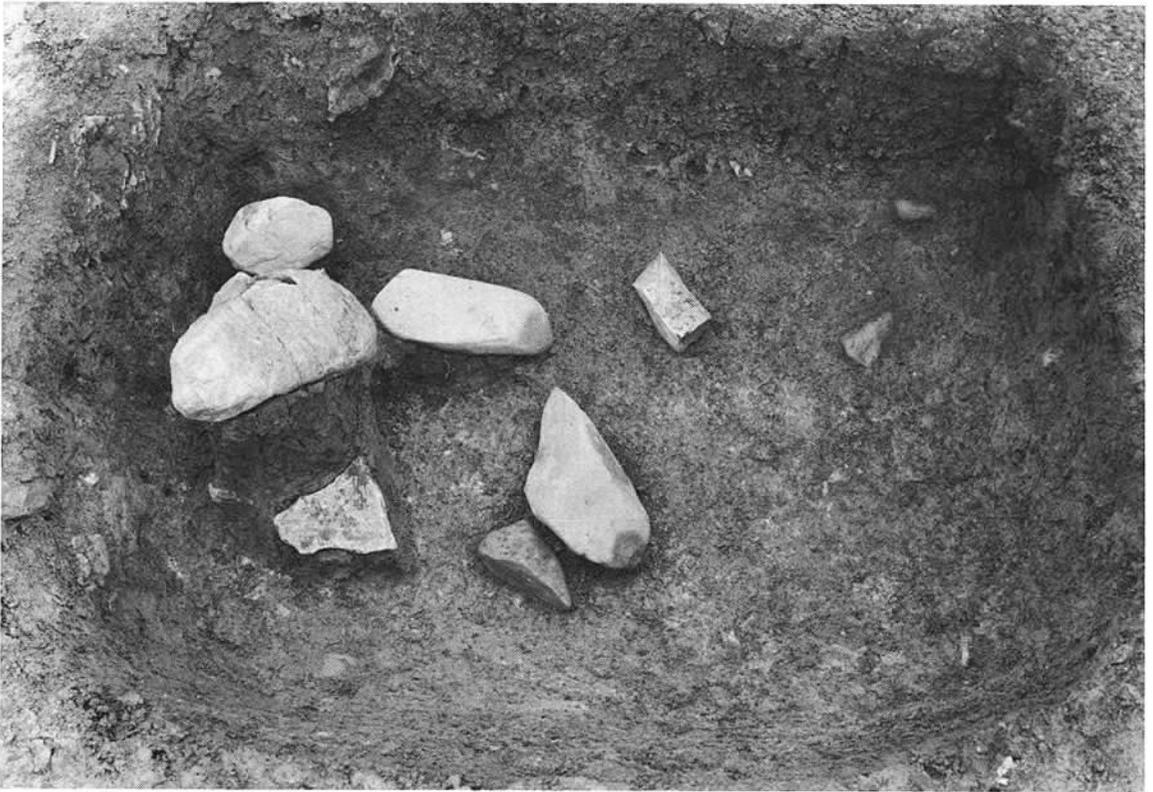
(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第3号土坑(南から)



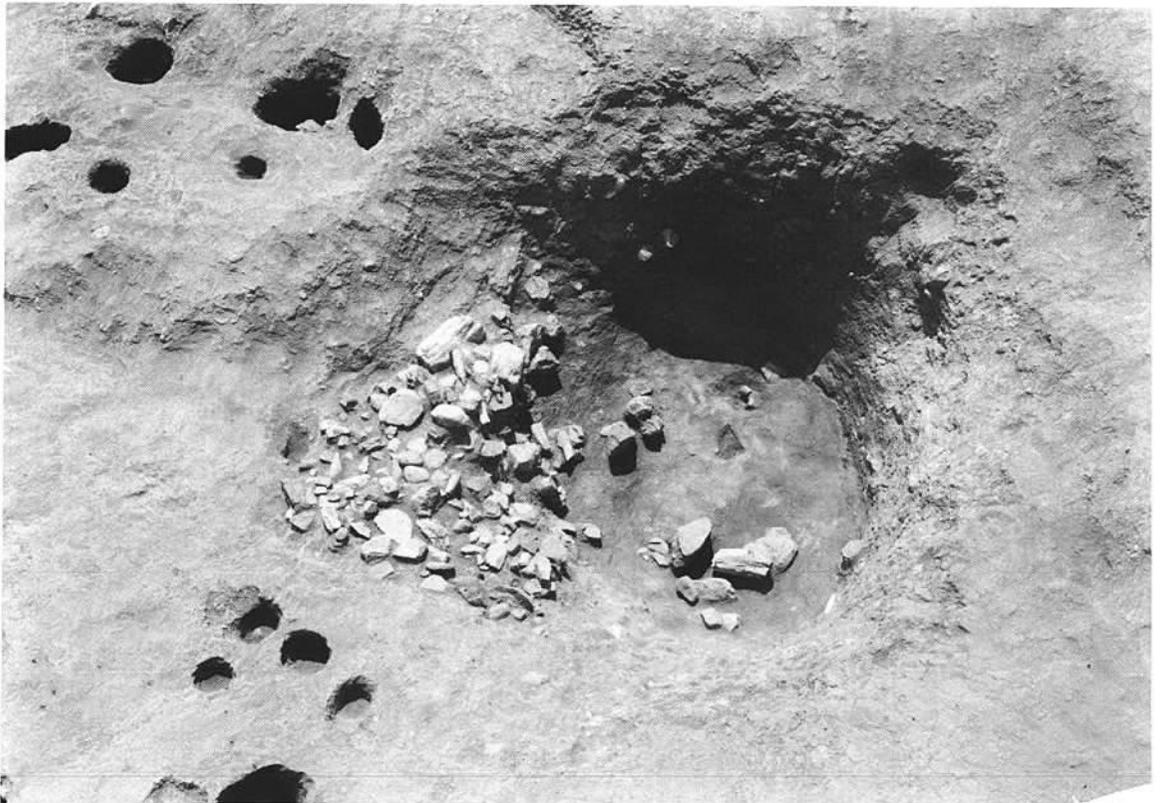
(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第4～8号土壇(南から)



(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第4号土壇(東から)



(1) 中屋敷遺跡第I地点第5号土壙(東から)



(2) 中屋敷遺跡第I地点第6号土壙(北から)



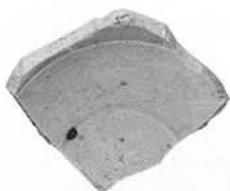
(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第7号土坑 (南から)



(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第8号土坑 (北から)



1



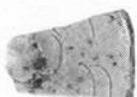
2



10



3



4



11



12



5



6



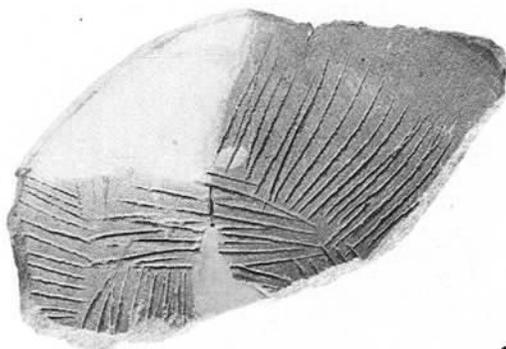
13



7



14



8



15



17



18



9



19



20

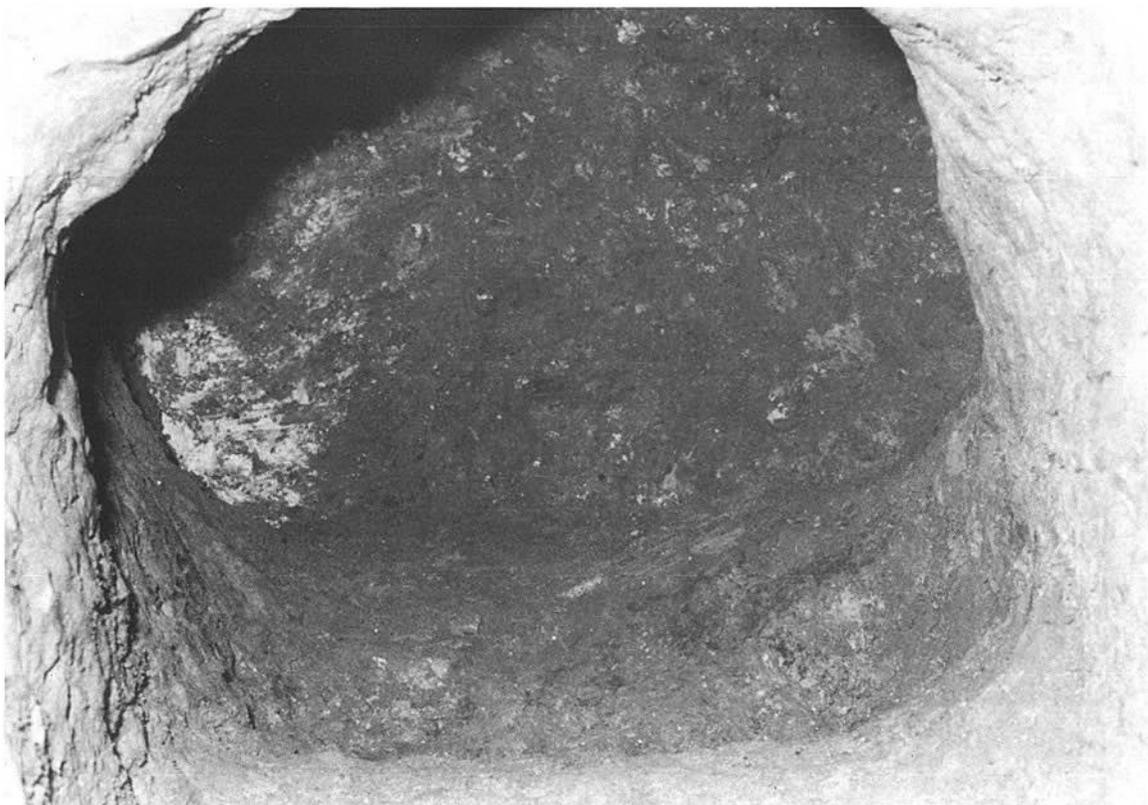


21

中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1・2・3・4・7・8号土壙出土遺物



(1) 中屋敷遺跡第I地点地下式土壇閉塞石の状況(南西から)



(2) 中屋敷遺跡第I地点地下式土壇(南から)



(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1号土壙墓 (南東から)



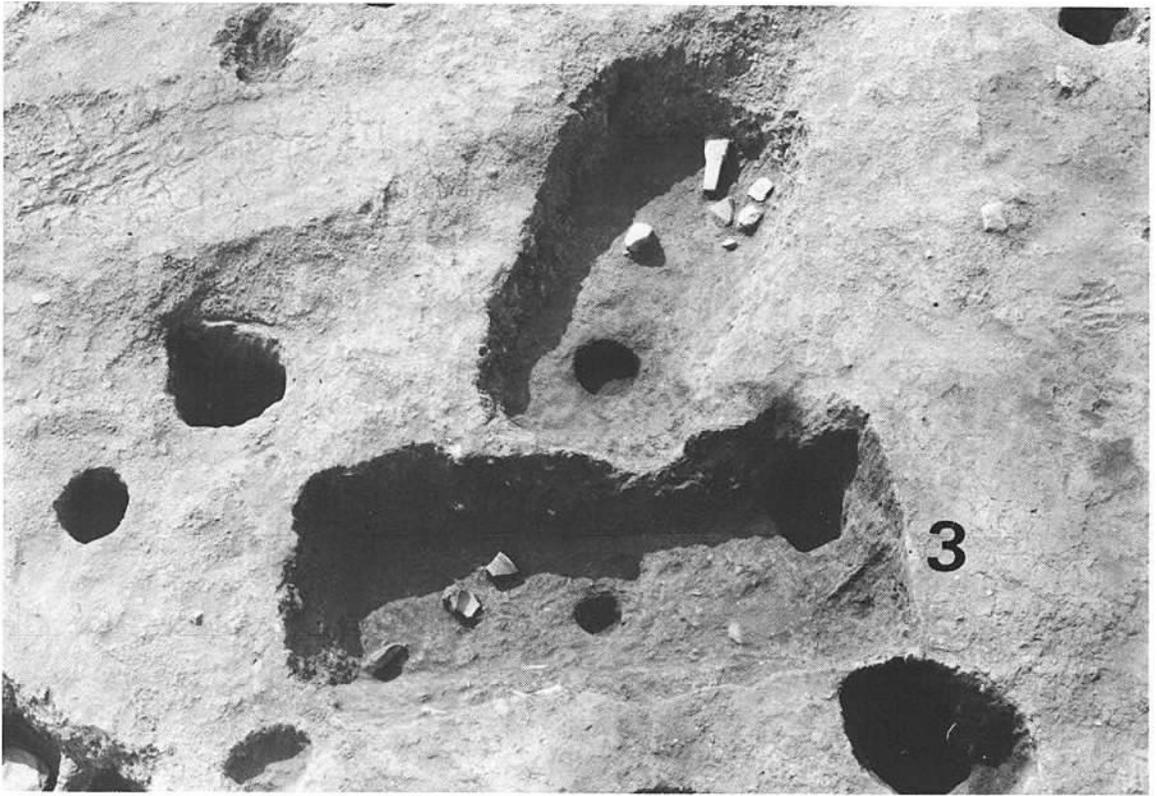
(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第1号土壙墓土器出土状況 (南東から)



(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第2号土壙墓(北から)



(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第3・4号土壙墓(西から)



(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第3・4号土壙墓遺物出土状況(東から)



(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点第3号土壙墓鉄器出土状況(東から)



1



2

(1) 中屋敷遺跡第I地点地下式土城出土土器



1



2



3



4



5



6



7



8

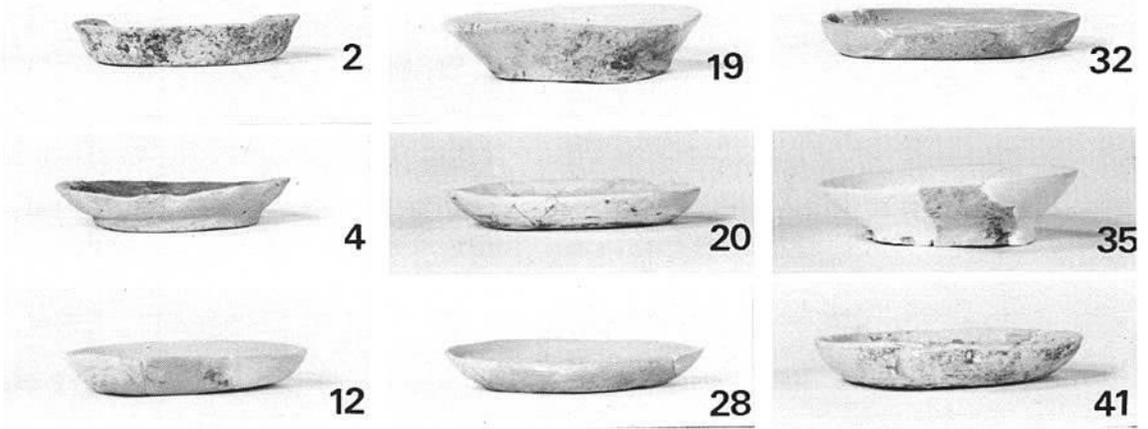
(2) 中屋敷遺跡第I地点第1・2号土城墓出土遺物



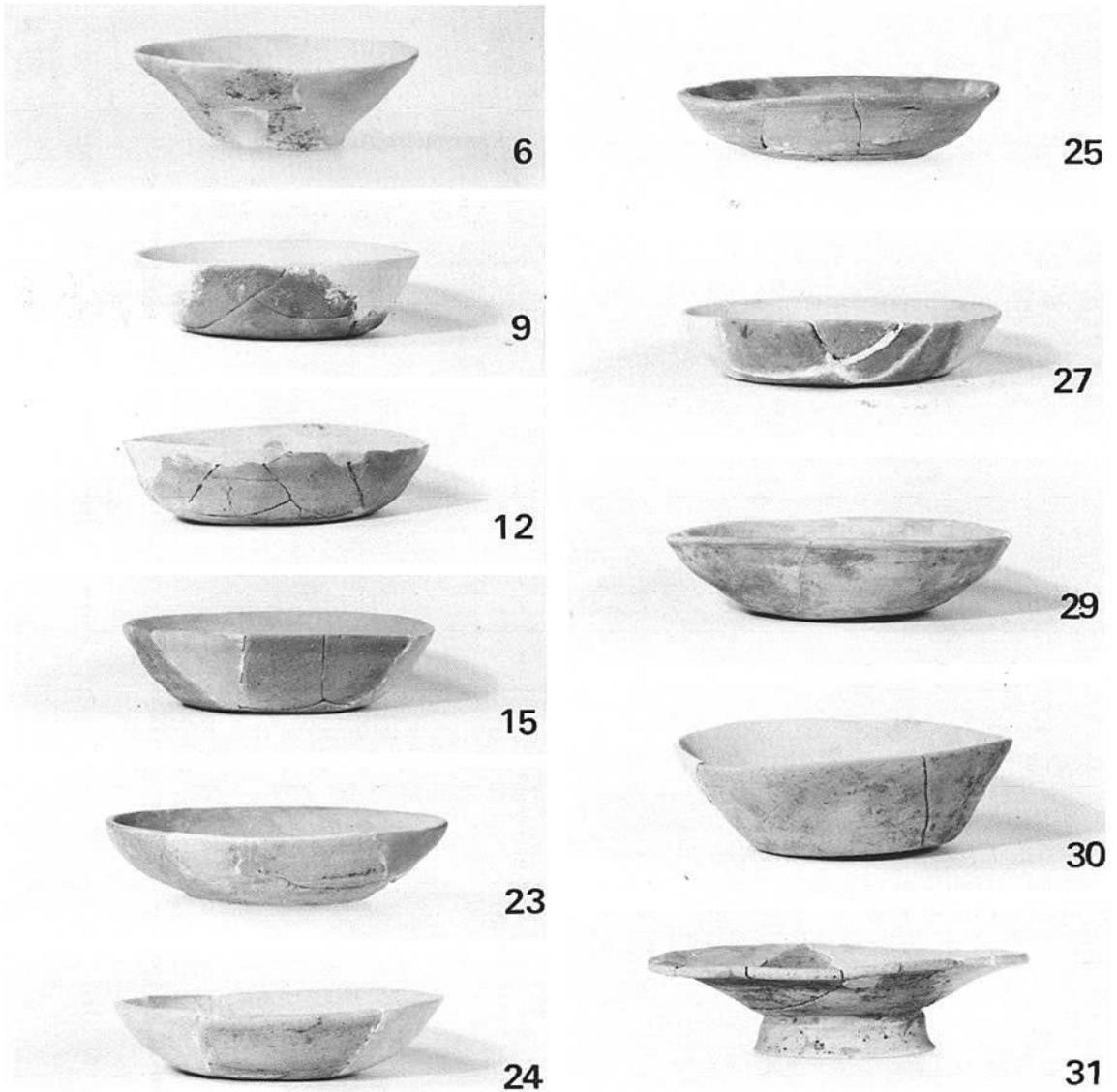
(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点石組遺構 (西から)



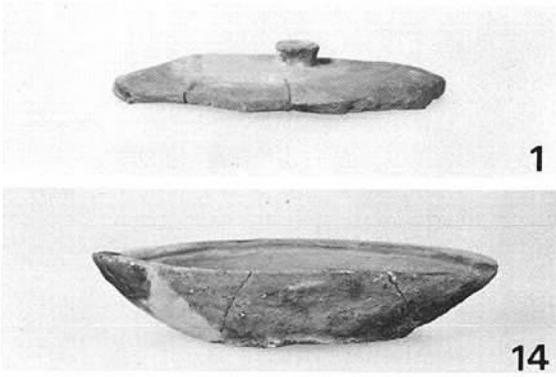
(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点石組遺構 (南から)



(1) 中屋敷遺跡第I地点出土土師器皿・杯



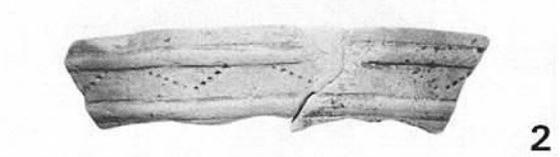
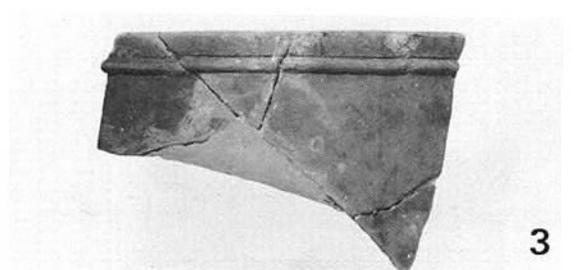
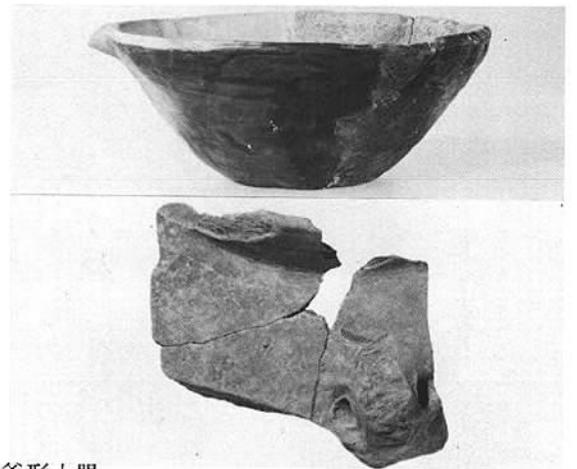
(2) 中屋敷遺跡第I地点出土土師器杯



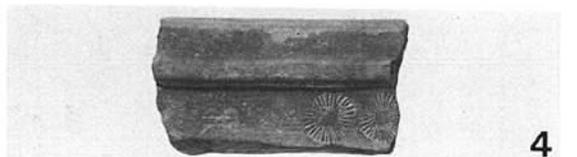
(1) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点出土須恵器・瓦質土器



(2) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点出土土鍋・片口・茶釜形土器



(3) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点出土火舎

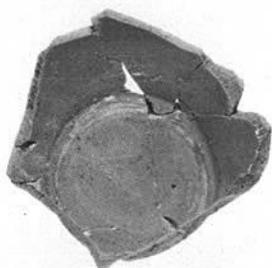


(4) 中屋敷遺跡第Ⅰ地点出土瓦器





2



3



5



6



7



8



9



10



11



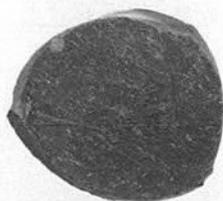
13



15



16



17



18



19



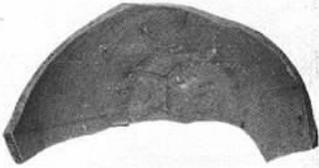
1



5



6



2



7



3



8



4



9



1



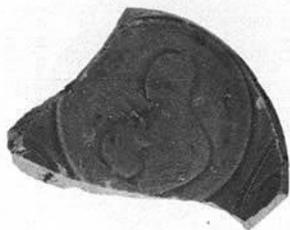
2



3



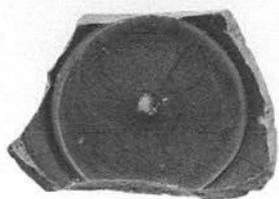
4



5



6



7



8



9



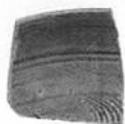
2



3



4



6



7



8



9



10



7



8



2



9



10



3



5



11



12



4



13



14



6



15



16



17



1



2



3



5



8



4



9



6



11



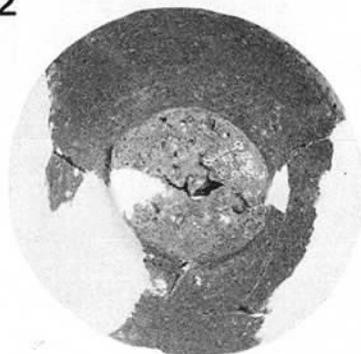
7



10



12



13



1



4



2



3



5



6



7

(1) 中屋敷遺跡第I地点出土合子



1



2



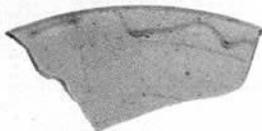
5



6



3

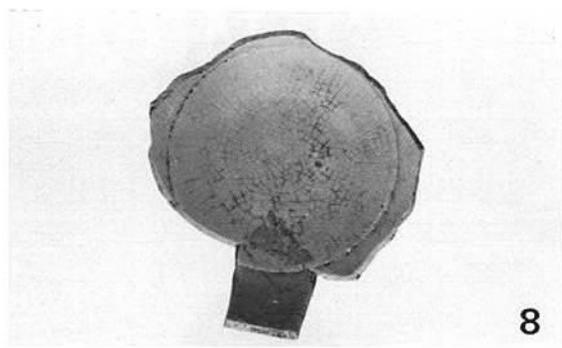


4

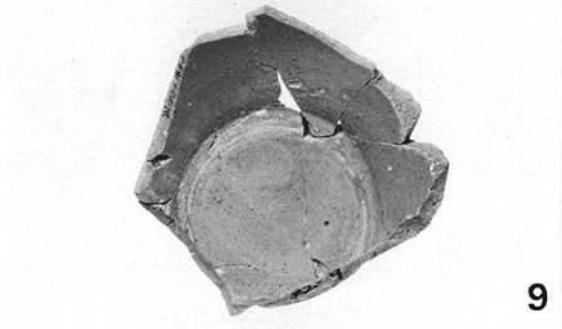


7

(2) 中屋敷遺跡第I地点出土白磁 ①



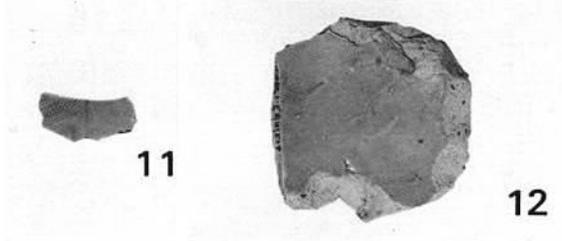
8



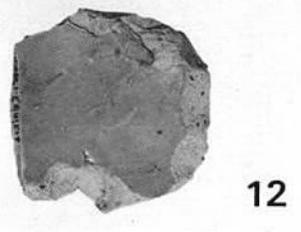
9



10



11



12



13



14



15



1



2



3



4



5



6



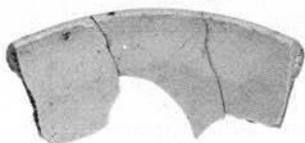
12



7



13



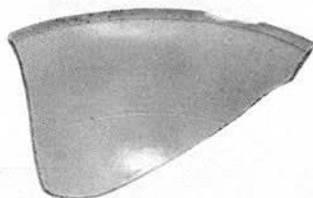
8



14



9



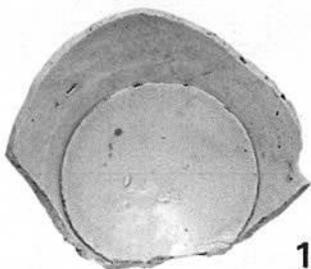
15



10



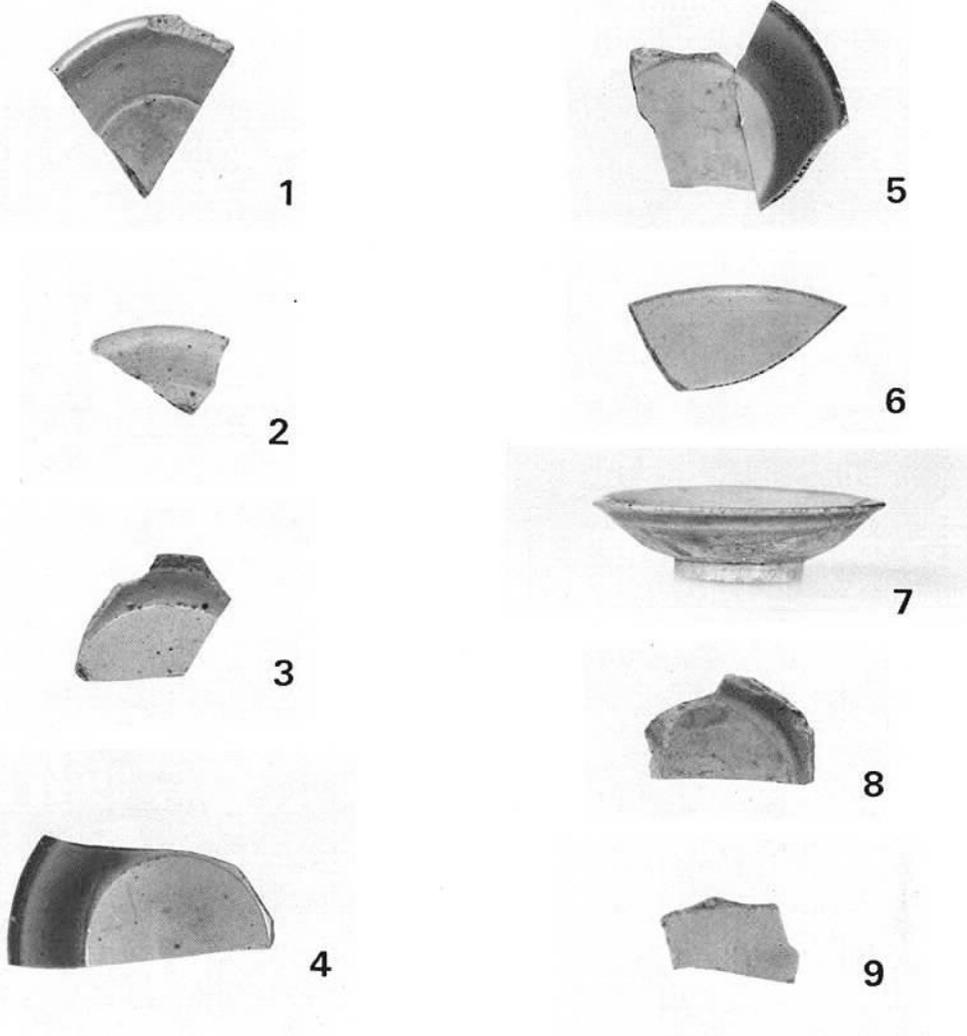
16



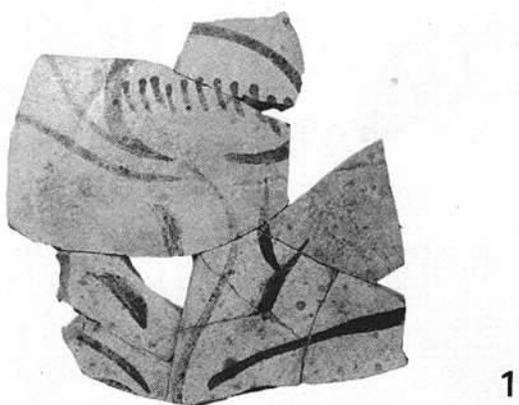
11



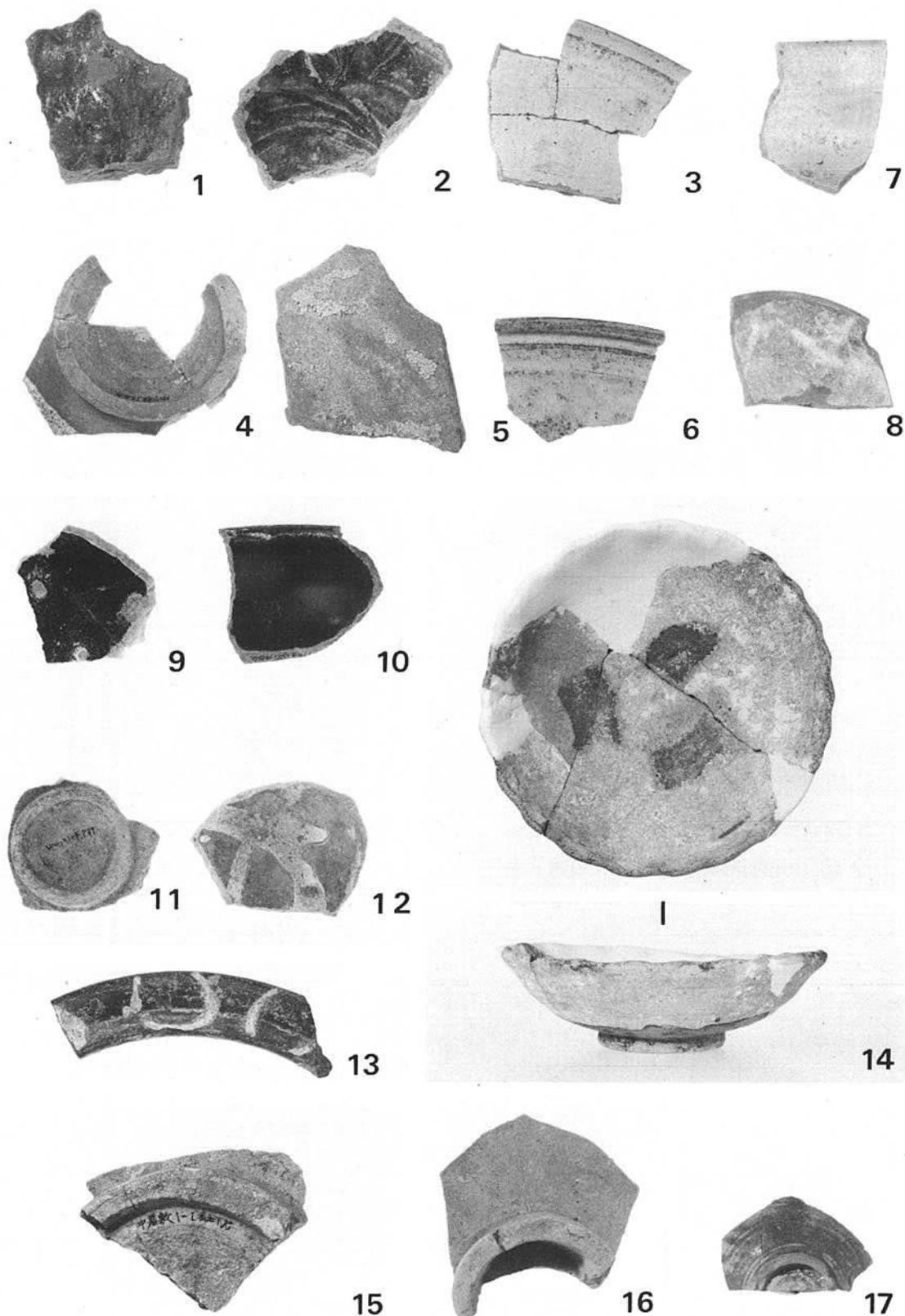
17



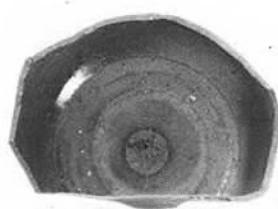
(1) 中屋敷遺跡第 I 地点出土白磁 ④



(2) 中屋敷遺跡第 I 地点出土雑器



中屋敷遺跡第Ⅰ地点出土陶磁器 ①



1



2



1



3



4



5



6



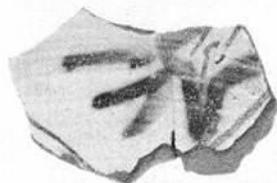
7



8



9



12



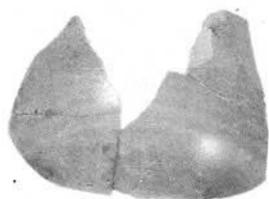
10



11



13



1



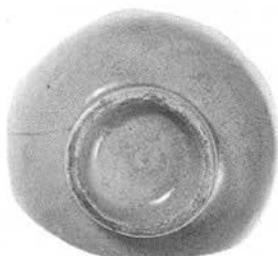
2



6



3



4



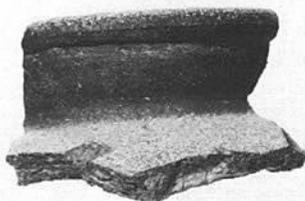
5



7



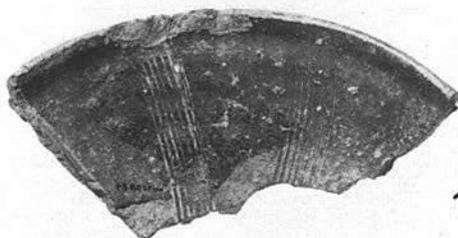
8



9



10



11



1



4



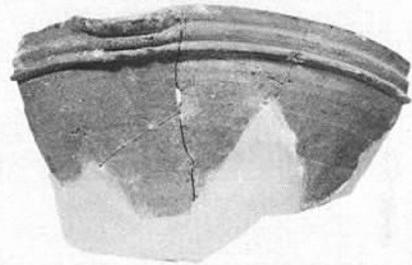
2



5



3



6



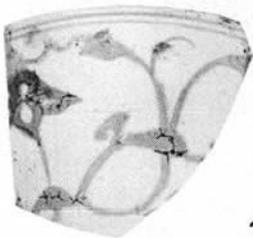
7



8



9



10



11



12



13

中屋敷遺跡第 I 地点出土陶磁器 ④



1



2



3

(1) 中屋敷遺跡第I地点出土土製品



4



5



7



6



7



8



1



3



2



4

(2) 中屋敷遺跡第I地点出土石器 ①



5



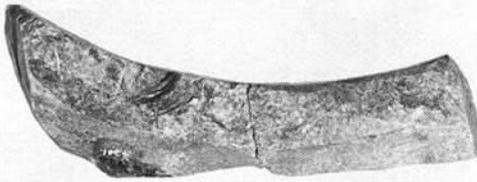
8



6



9



7

(1) 中屋敷遺跡第I地点出土石器 ②



1



5



2



5

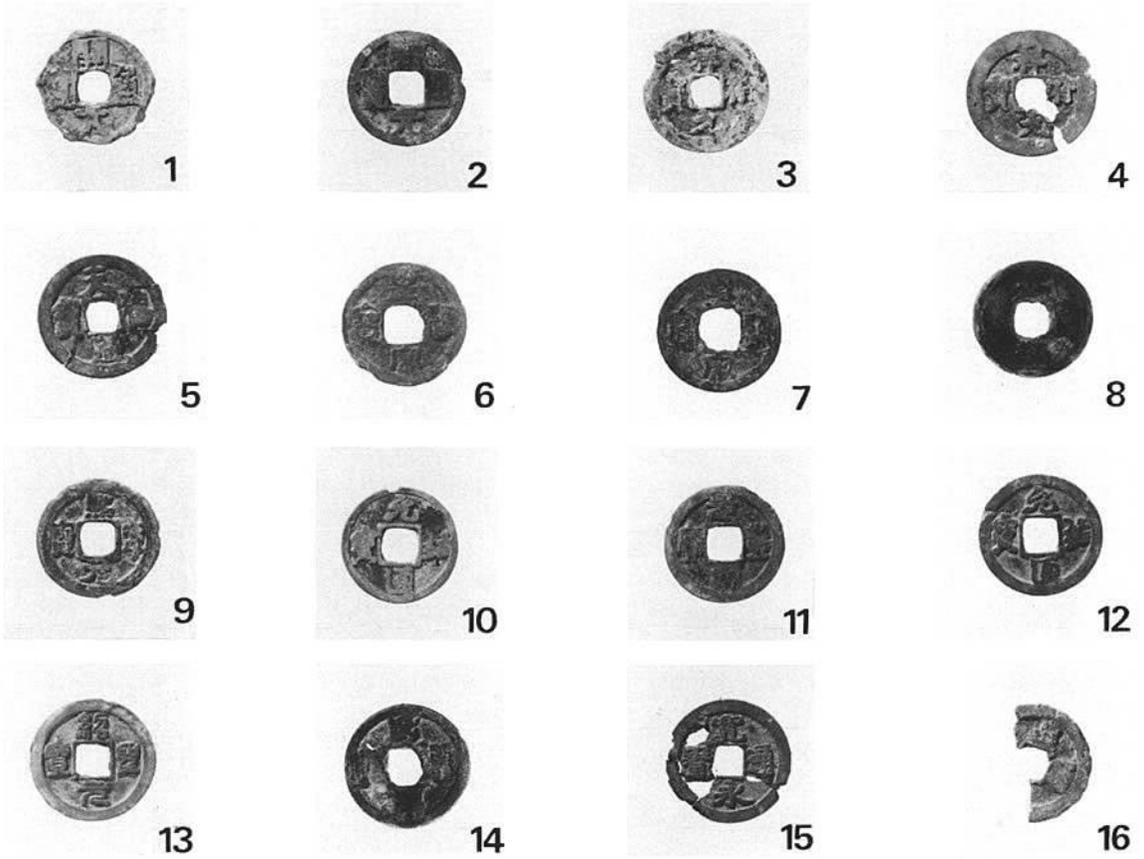


3

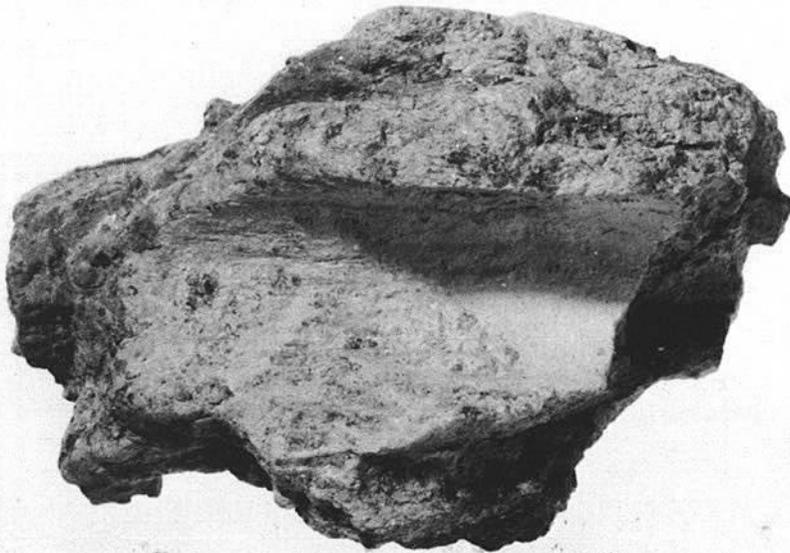


4

(2) 中屋敷遺跡第I地点出土金属器



(1) 中屋敷遺跡第I地点出土銅錢



1

(2) 中屋敷遺跡第I地点出土鑄物關係遺物



(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点全景（北から）



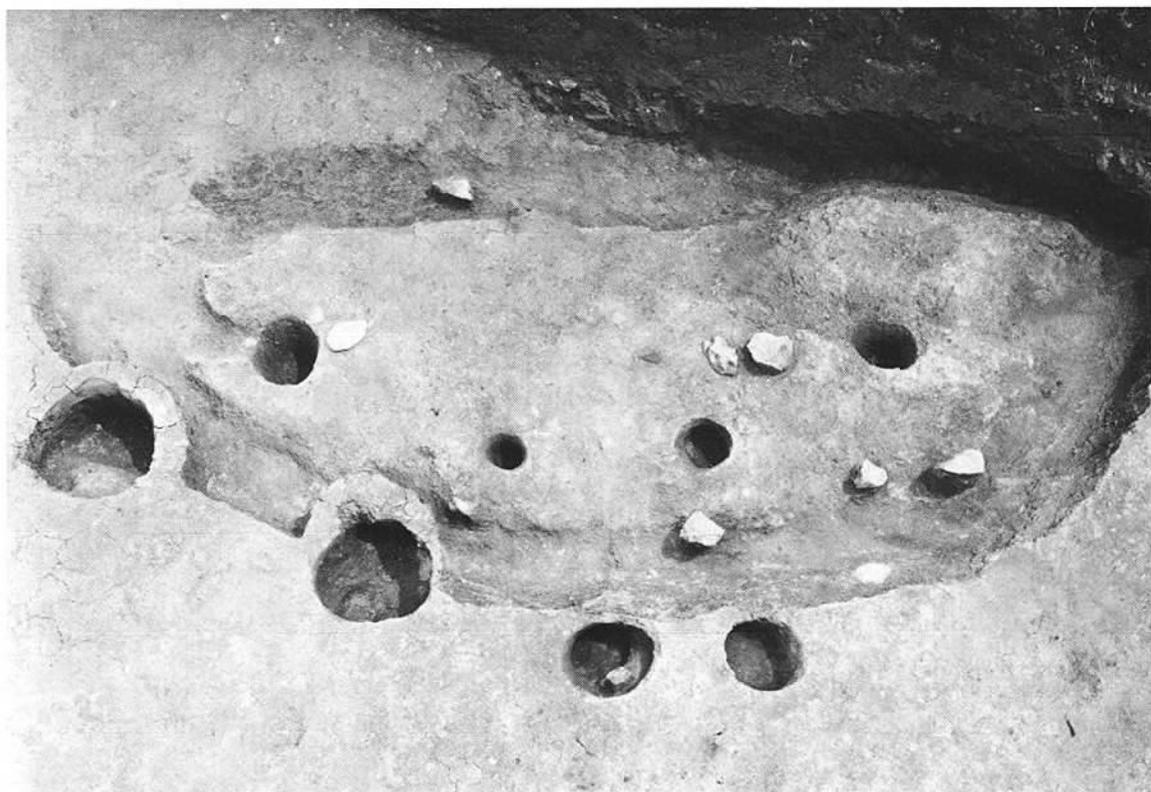
(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点全景（西から）



(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点A区と剣岳城跡(東から)



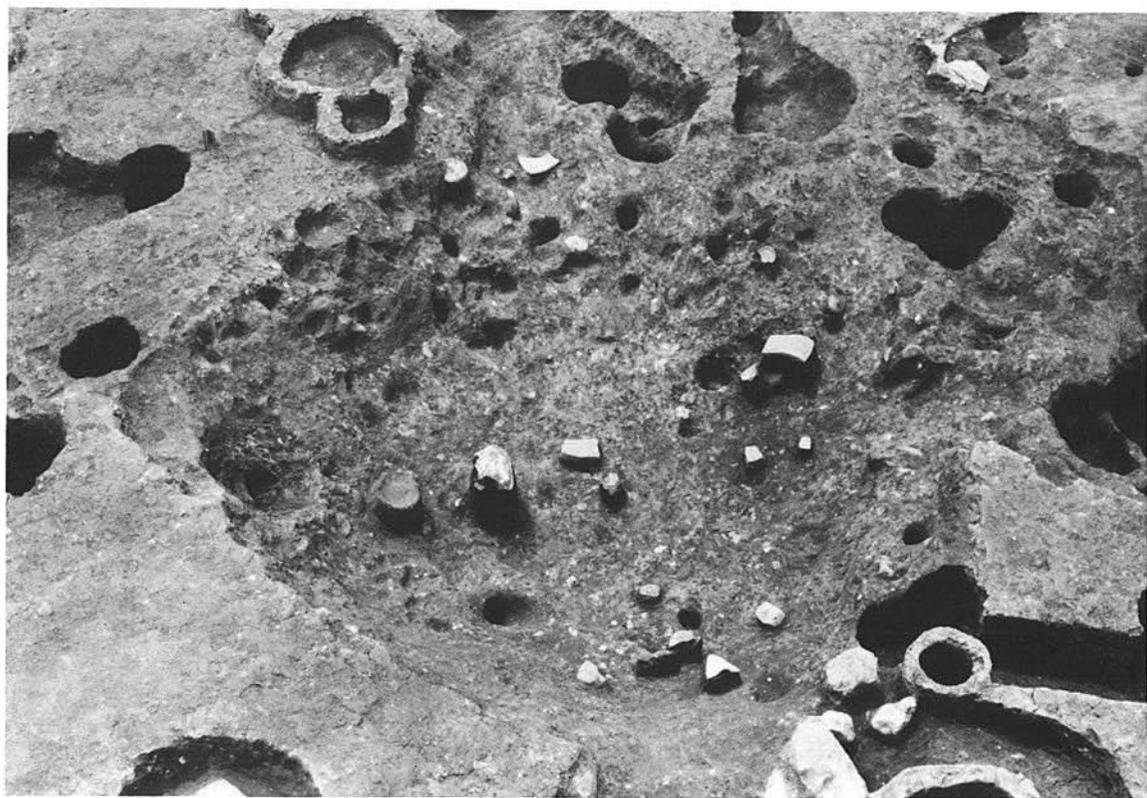
(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点B区全景(東から)



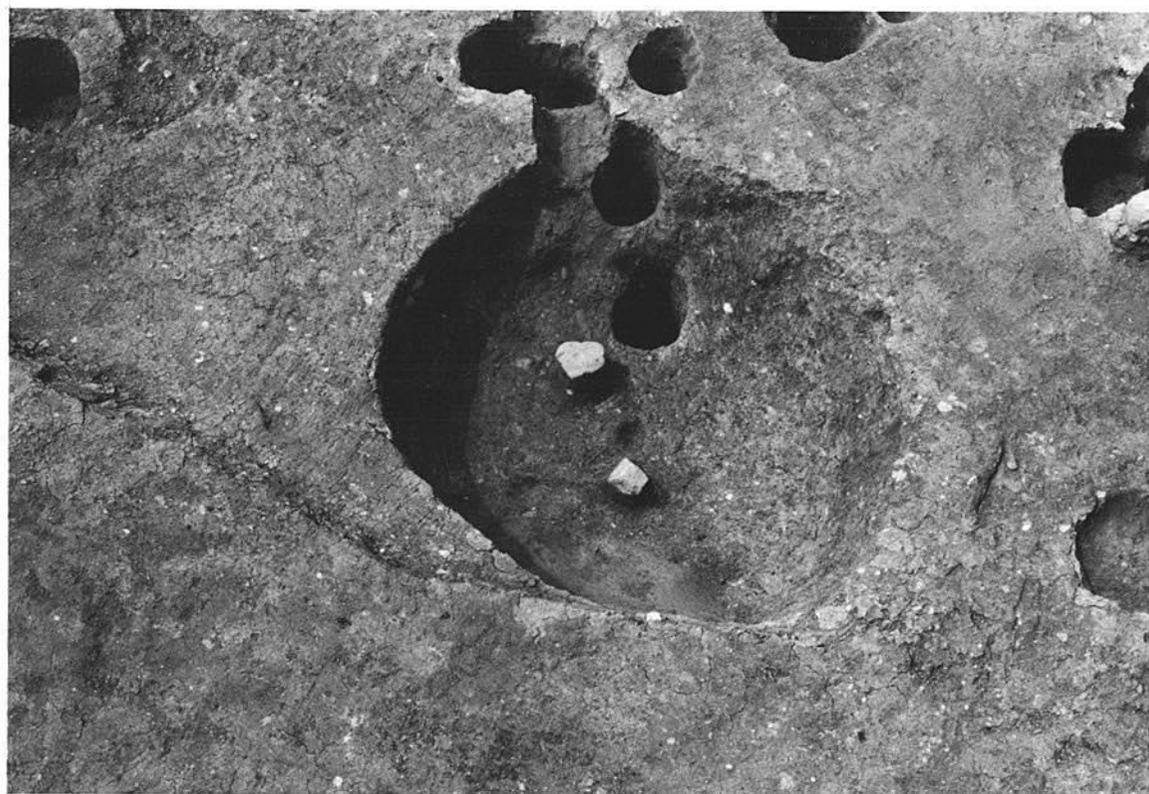
(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号住居跡 (北西から)



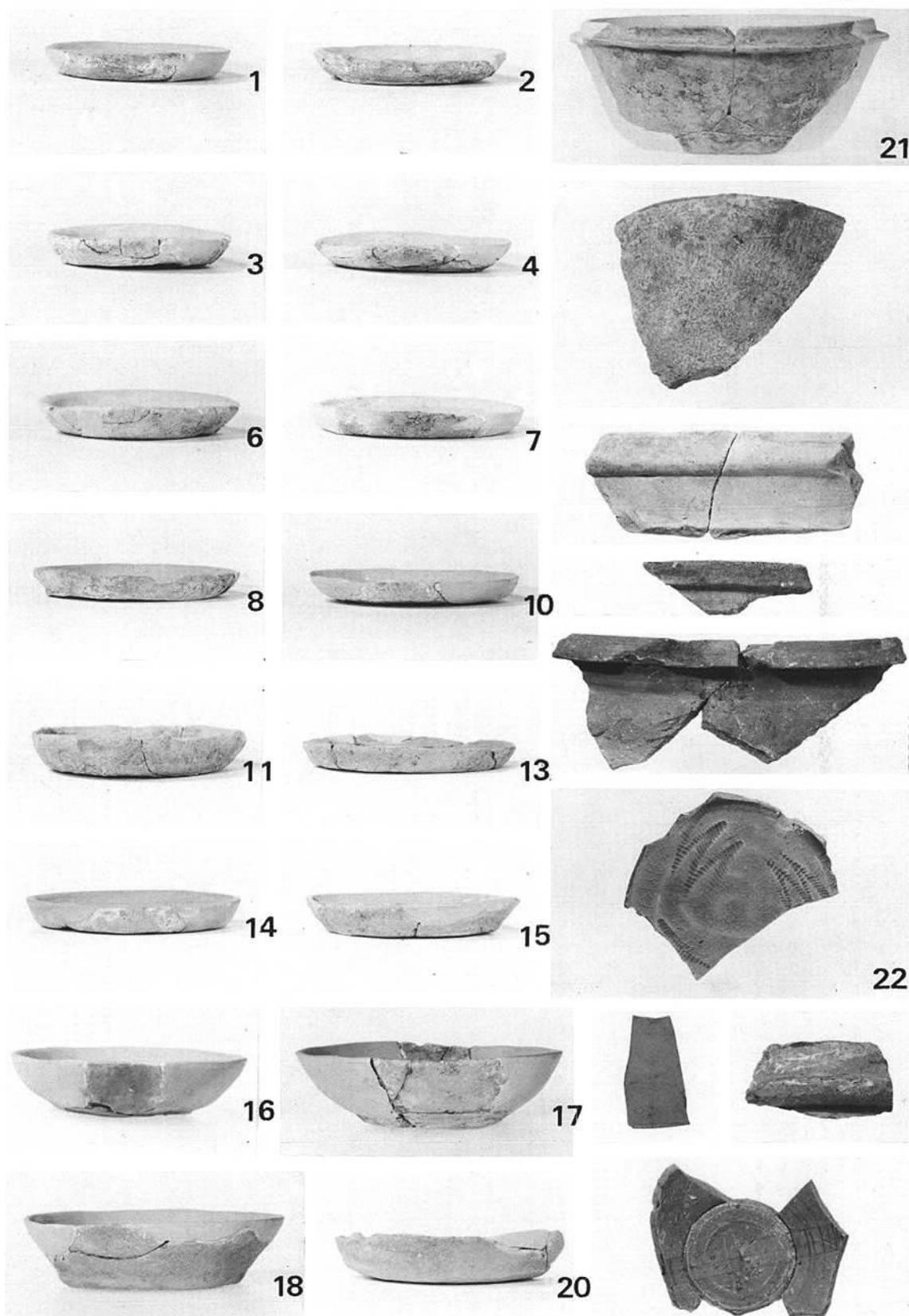
(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号掘立柱建物 (北から)



(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号土坑(北から)



(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第3号土坑(北から)



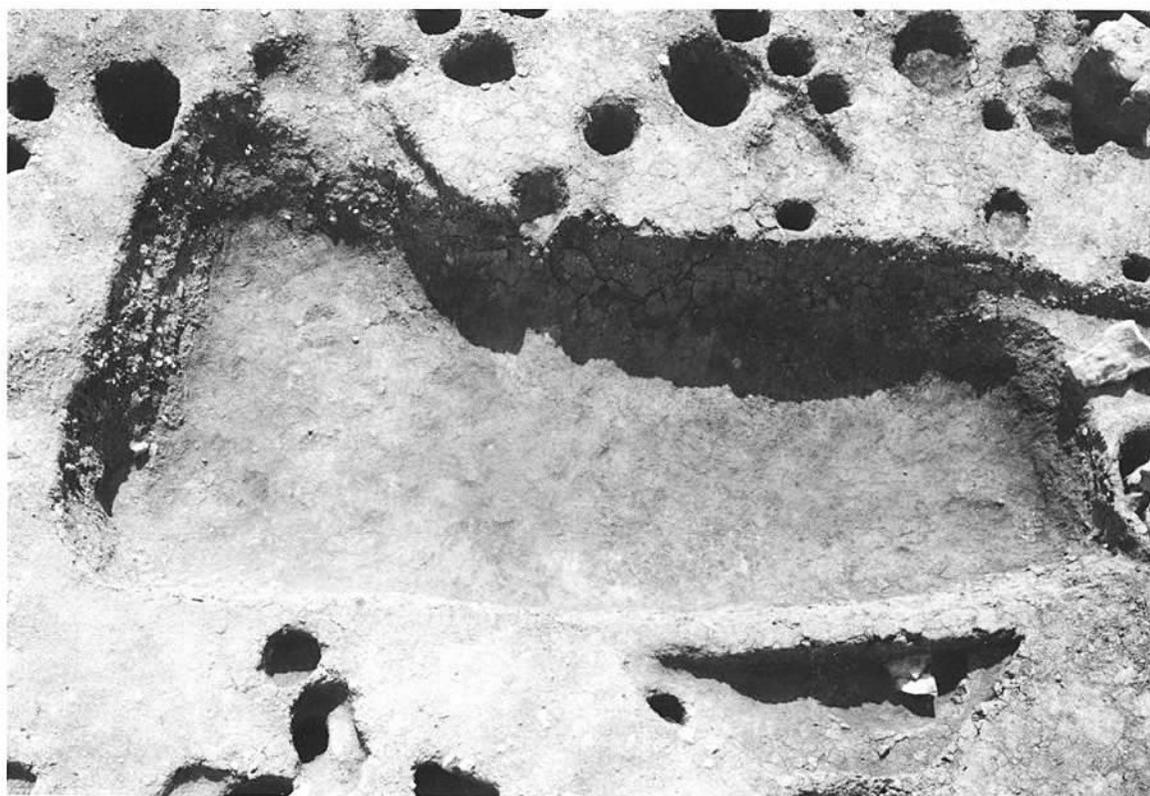
中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1・2号土坑出土遺物



(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第4号土坑(北から)



(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第5号土坑(西から)



(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第6号土壙(西から)



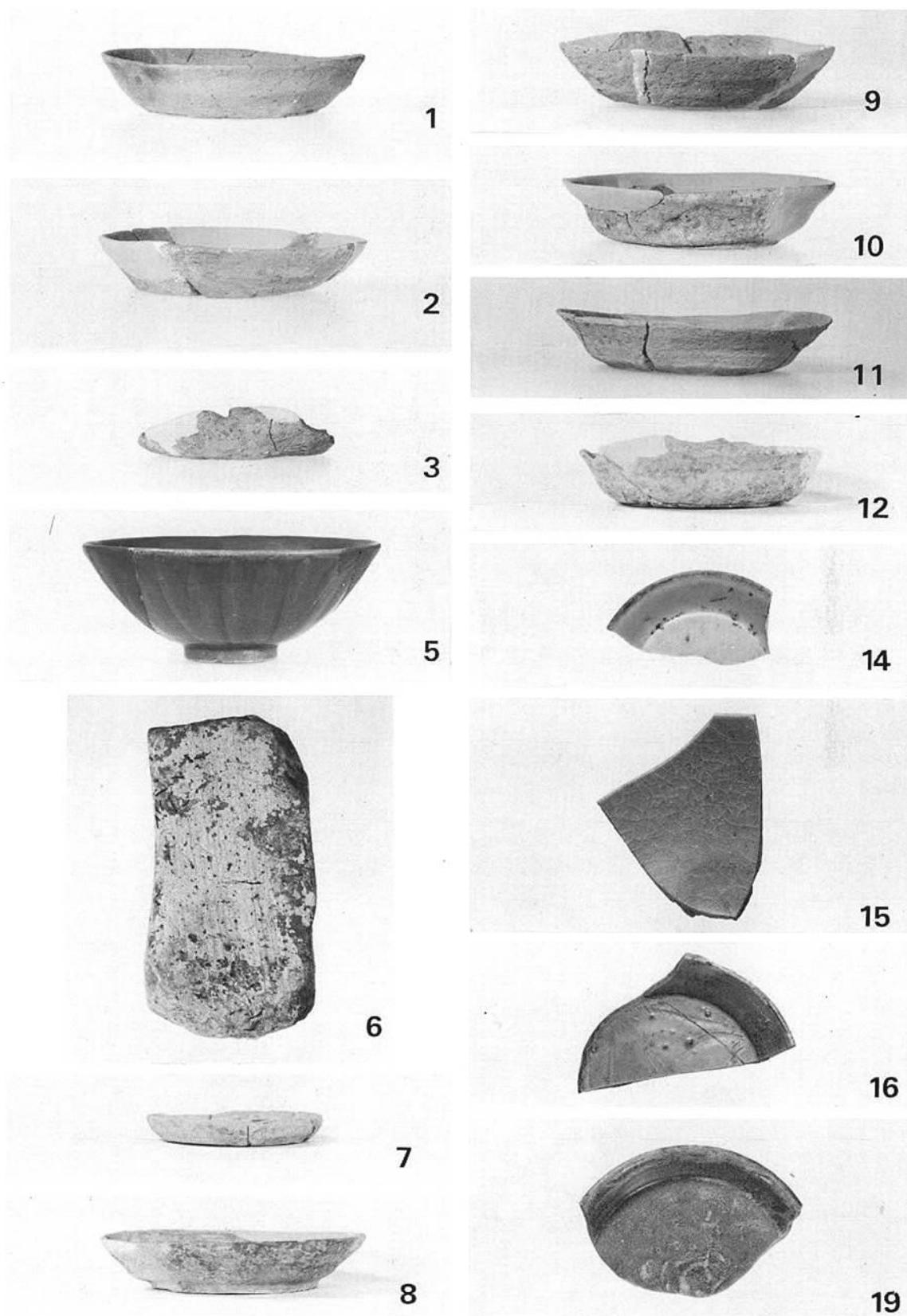
(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第6号土壙土器出土状況(西から)



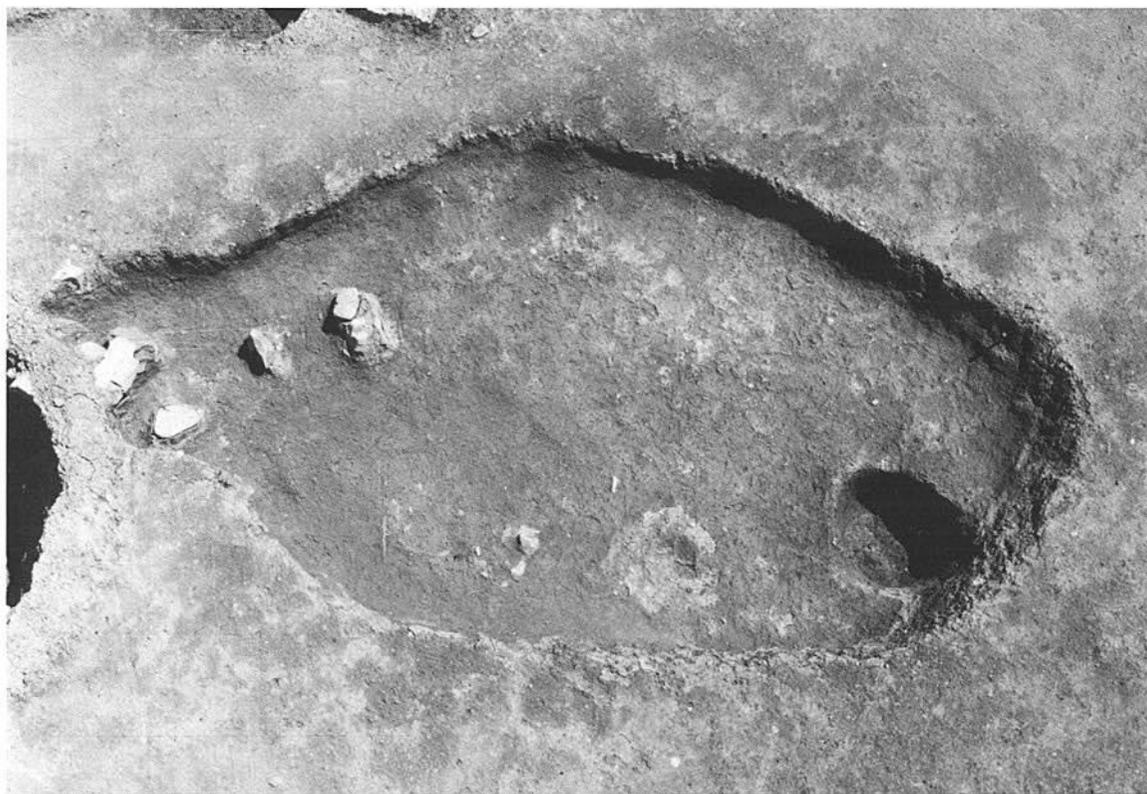
(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第7号土坑(北から)



(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第8号土坑(北から)



中屋敷遺跡第Ⅱ地点第4・6・7・8号土壙出土遺物



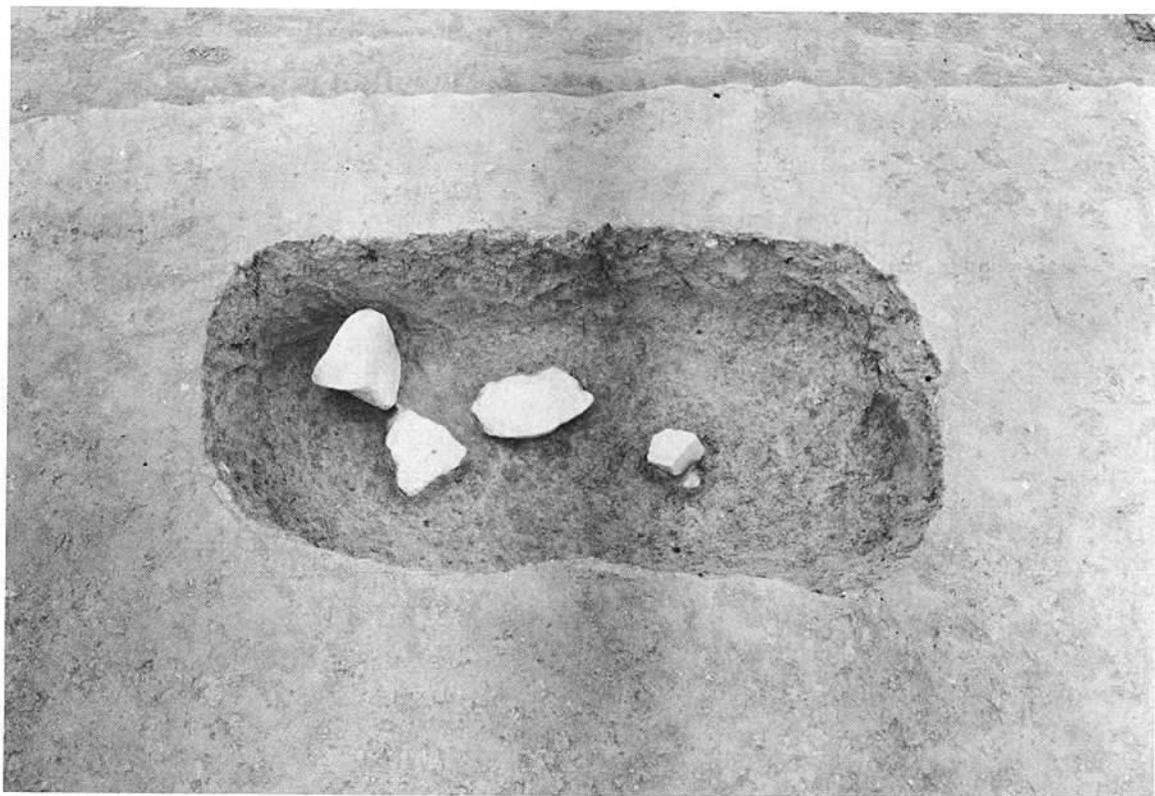
(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第9号土坑(北から)



(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第11号土坑(南から)



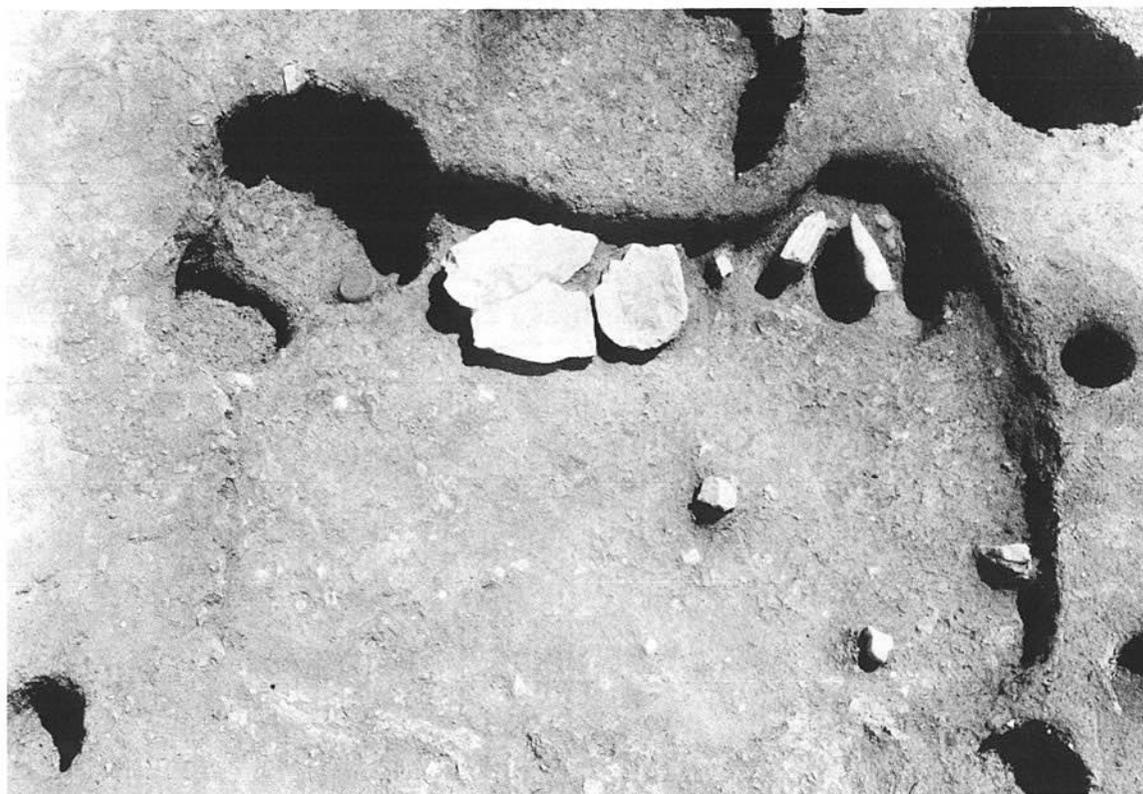
(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第11号土塹（東から）



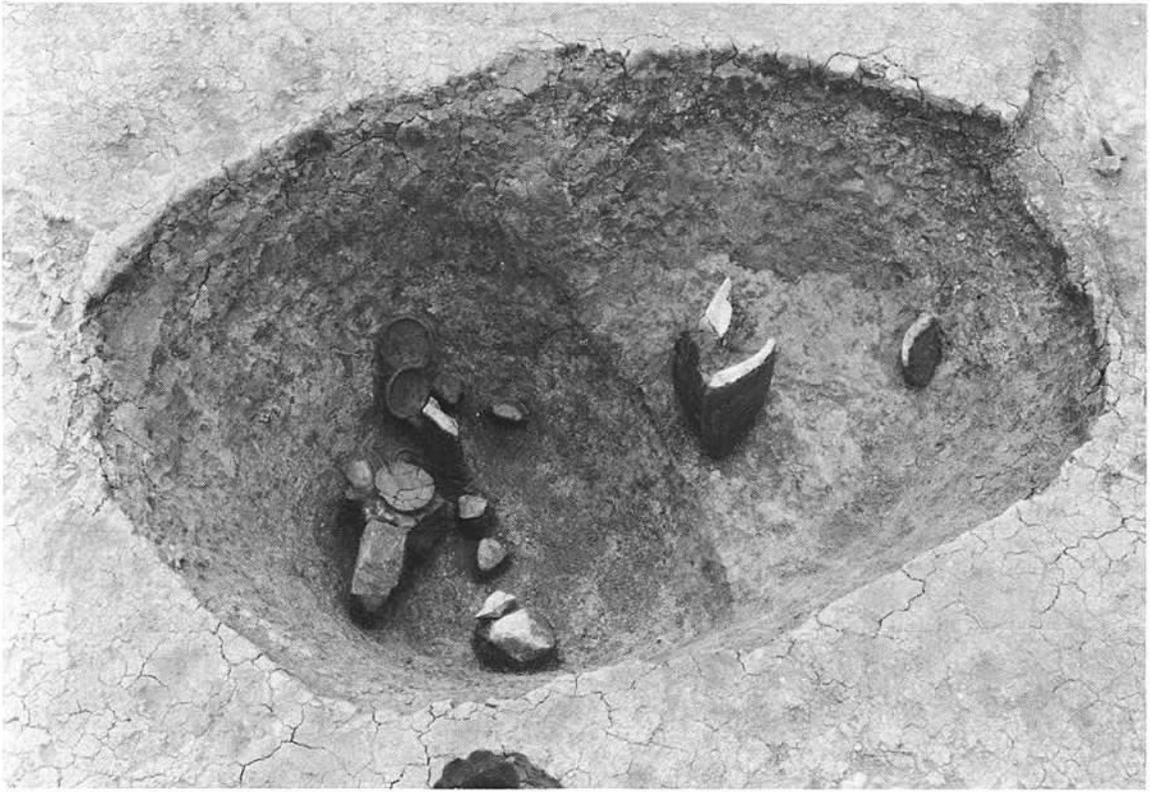
(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第12号土塹（北から）



(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第13号土壙（東から）



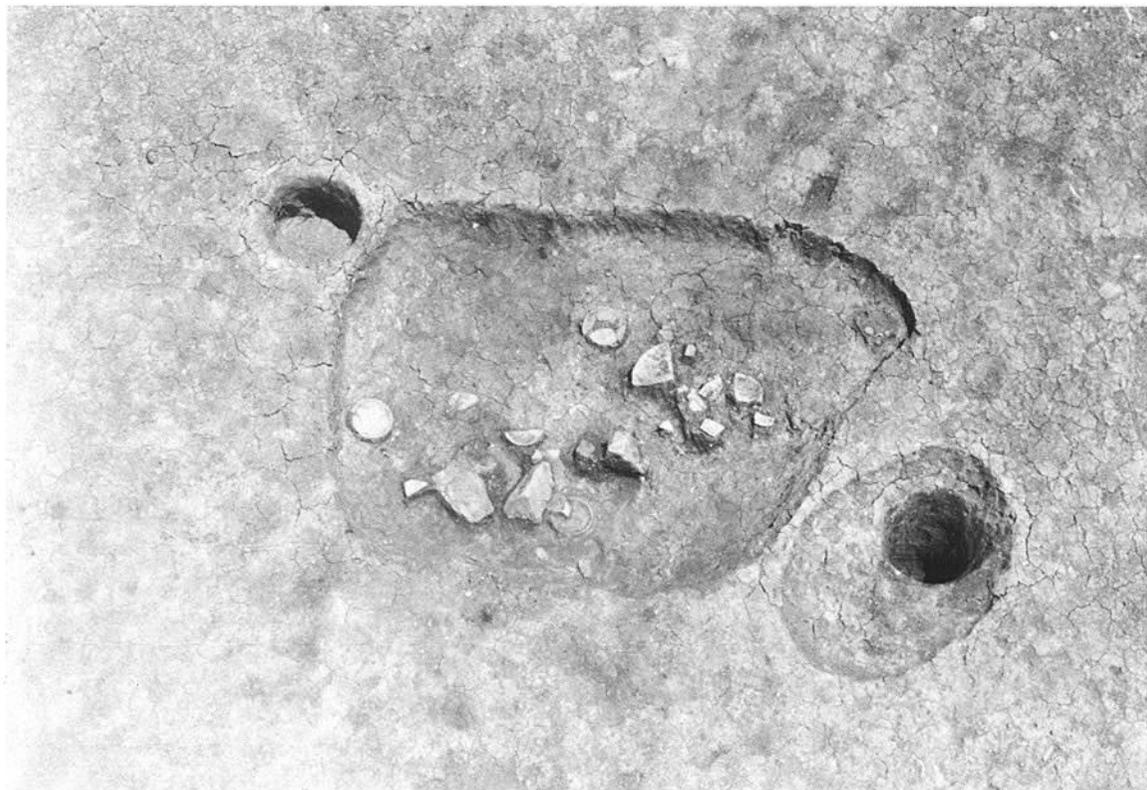
(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第14号土壙（北から）



(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第15号土城遺物出土状況(北東から)



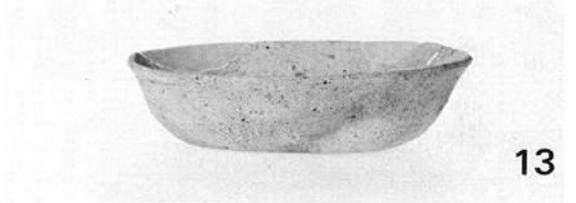
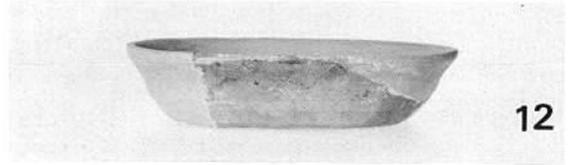
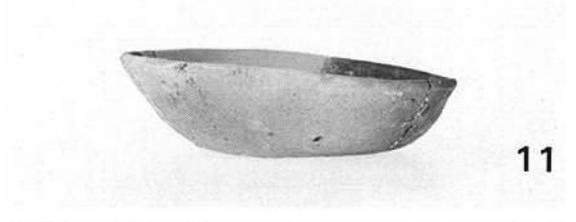
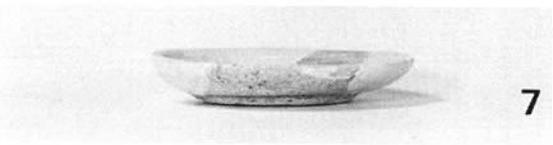
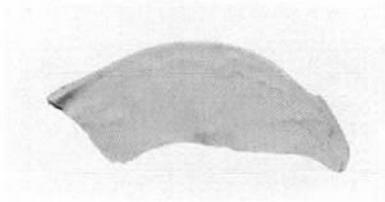
(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第15号土城(東から)



(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第16号土壙(南から)



(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点C区トレンチ(東から)



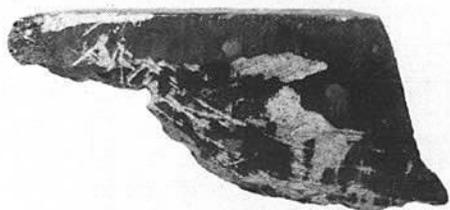
中屋敷遺跡第Ⅱ地点第11・12・13・15号土坑出土遺物



17



18



2



1



3

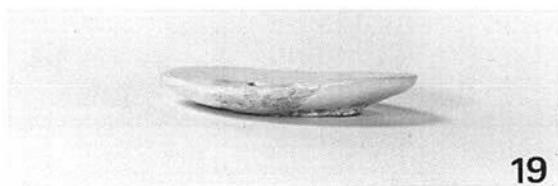


4



5

(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第15号土城出土遺物



19



22



20



23



21



24

(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第16号土城出土土器



(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号土壙墓の発掘状況(東から)



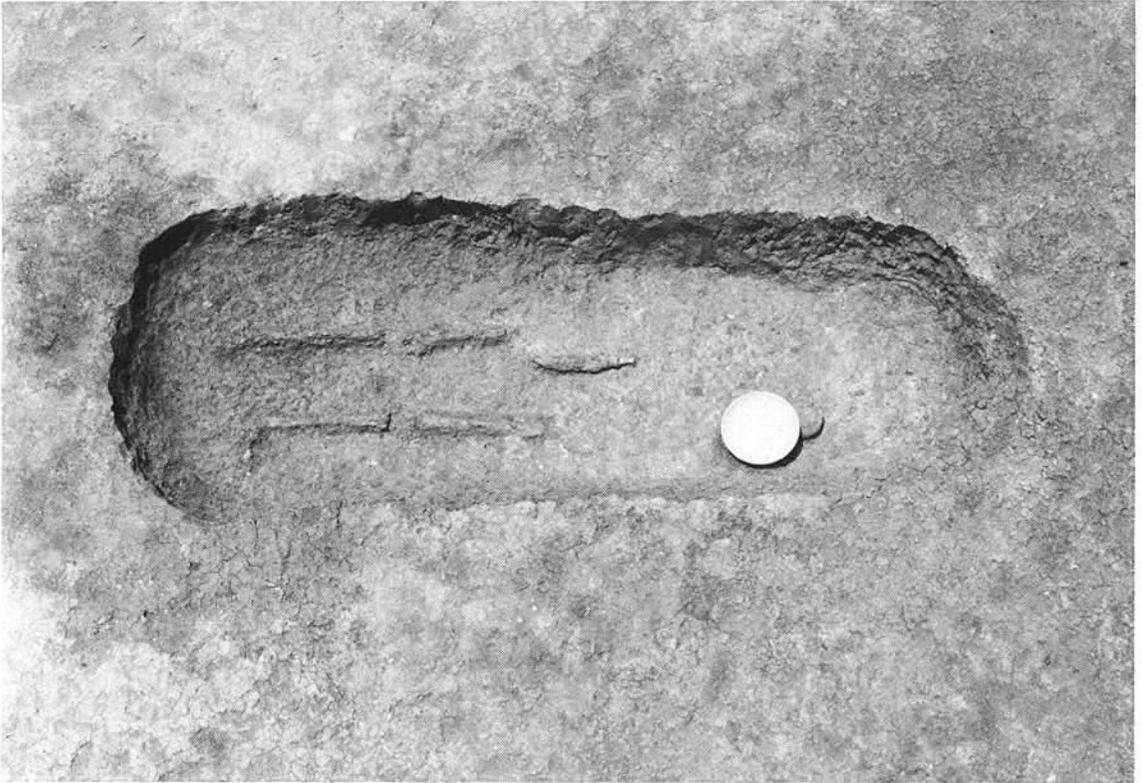
(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号土壙墓青磁出土状況(南から)



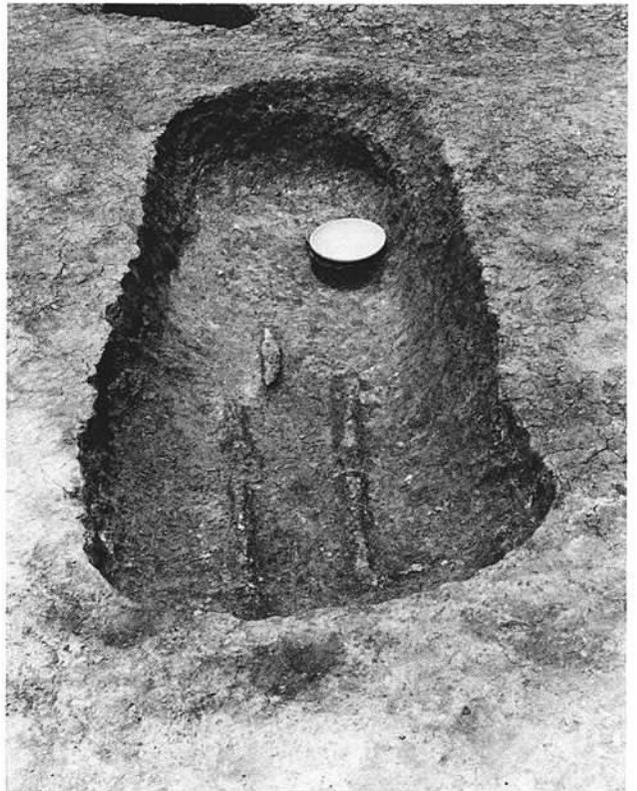
(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号土壙墓(東から)



(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1号土壙墓鉄釘出土状況(南から)



(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第2号土壙墓 (北から)



(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第2号土壙墓 (東から)



2



3



4



5

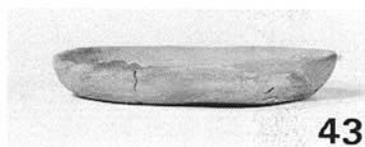


6

(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点第1・2号土塚墓出土遺物



1



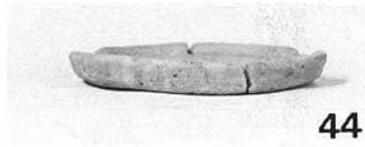
43



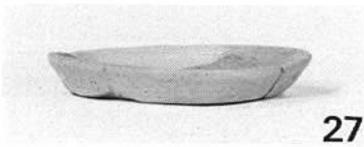
46



20



44



27



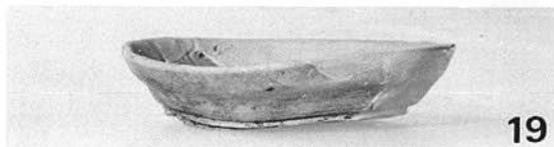
45



49



6



19



13



22

(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土土師器皿・杯



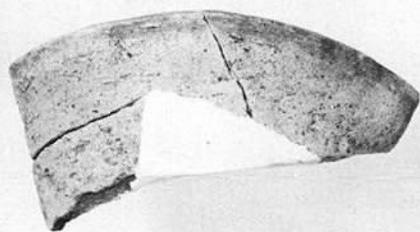
1



(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土須恵器



8



9



10

(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土土鍋・片口



1



6

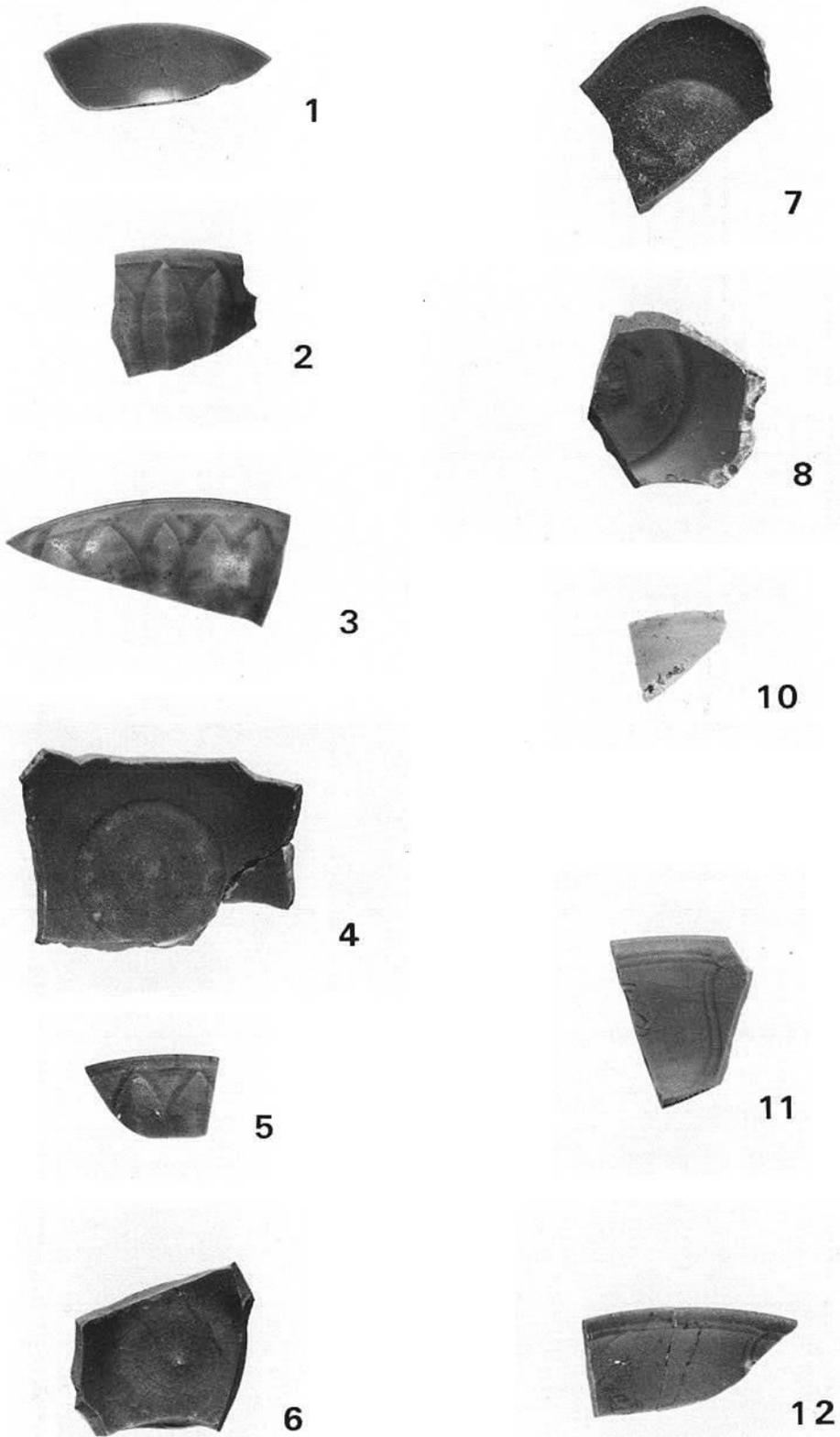


5



7

(3) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土瓦器



中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁 ①



1



2



3



4



5



6



7



8



9



1



2



3



5



6



7



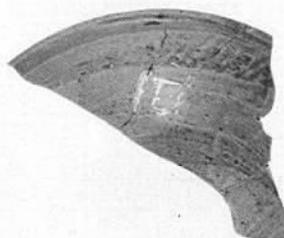
1



6



2



7



3



8



9



11



4



12



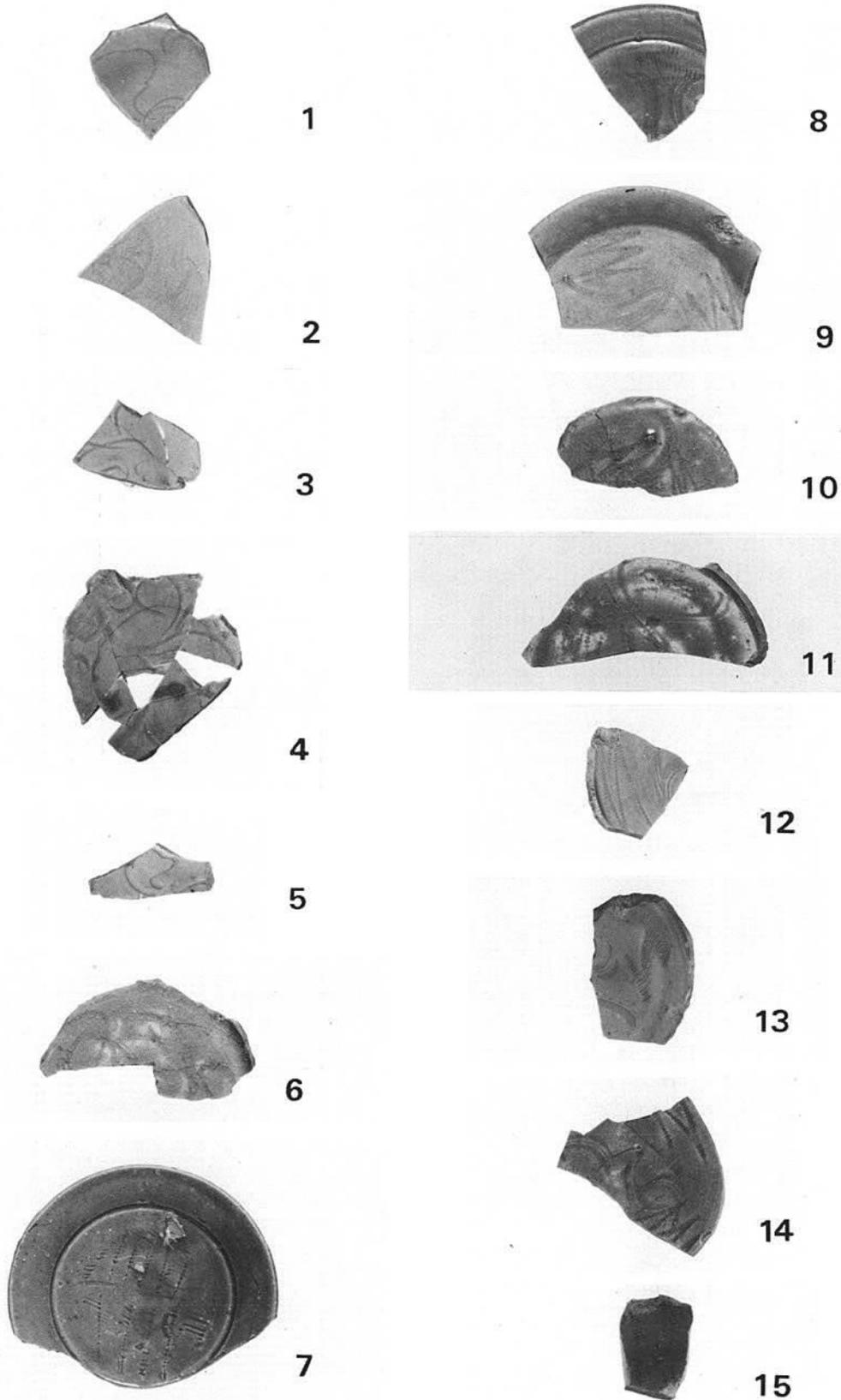
5



13



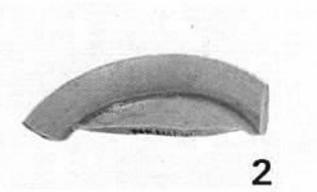
15



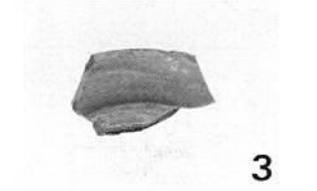
中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁 ⑤



1



2



3



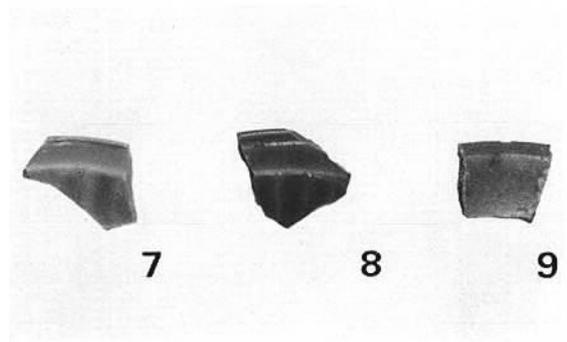
4



5



6



7

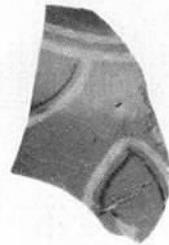
8

9

(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土青磁 ⑥



1



2



3



4

(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土高麗青磁



10



11



12



13



14

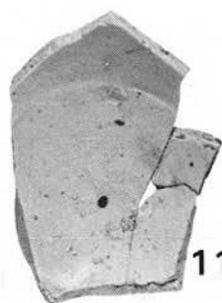
(3) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土合子



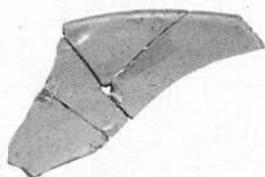
1



10



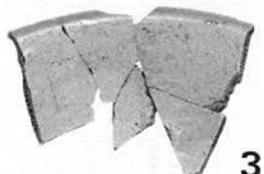
11



2



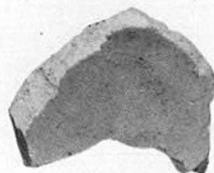
12



3



4



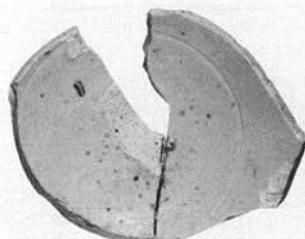
13



5



6



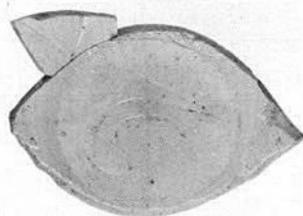
14



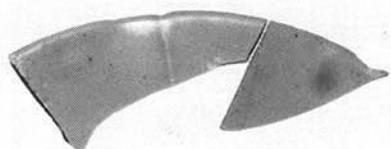
7



8



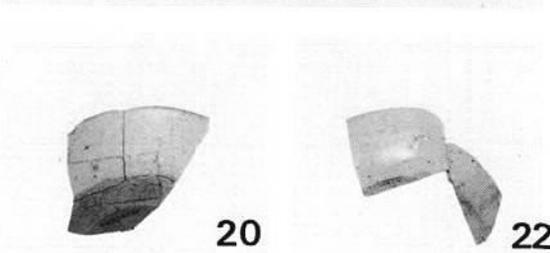
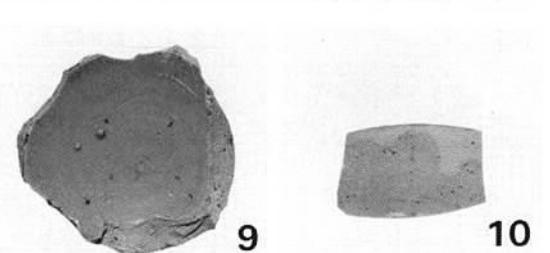
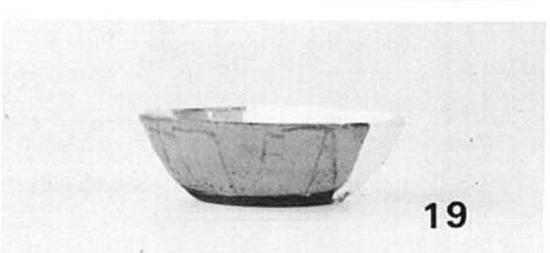
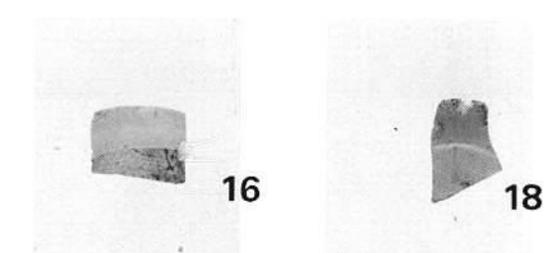
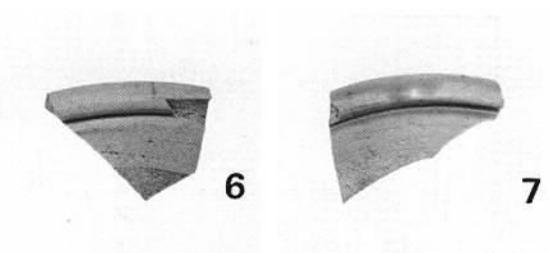
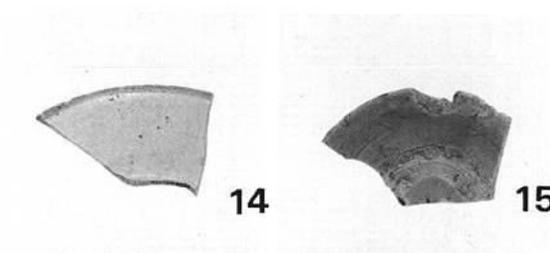
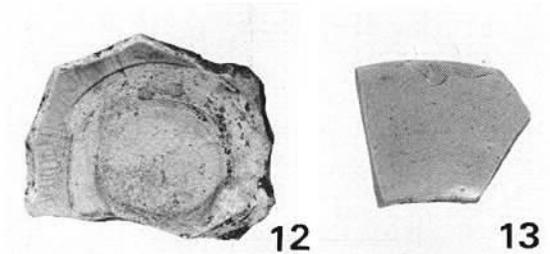
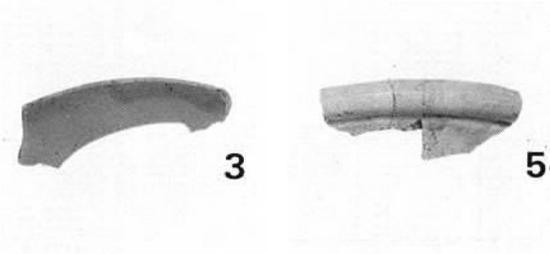
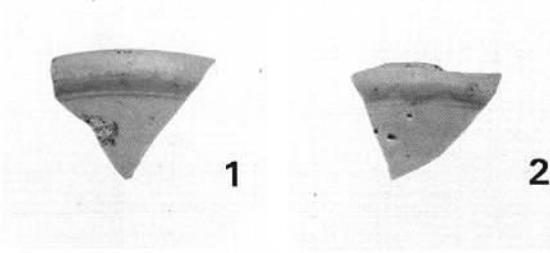
15



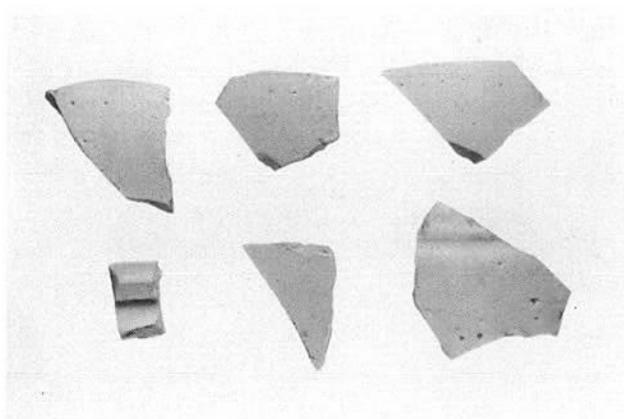
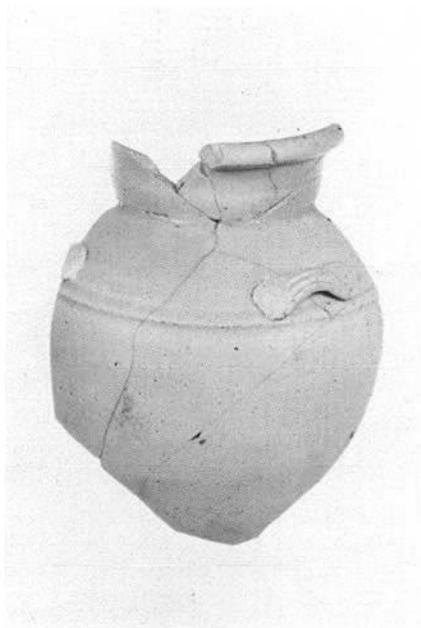
9



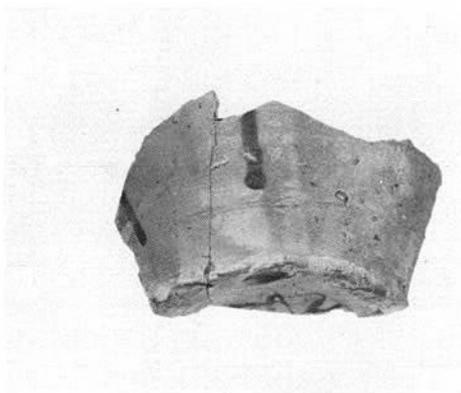
16



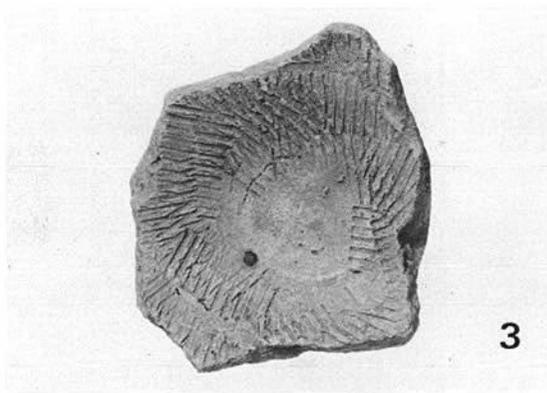
中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土白磁 ②



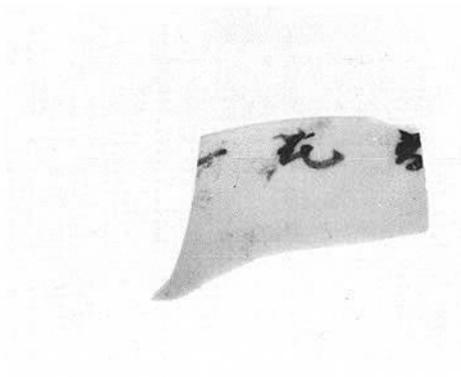
(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土白磁 ③



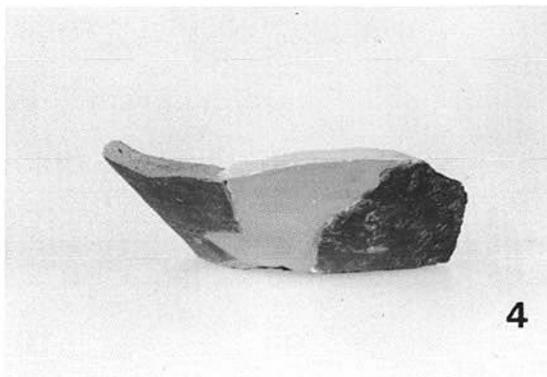
1



3

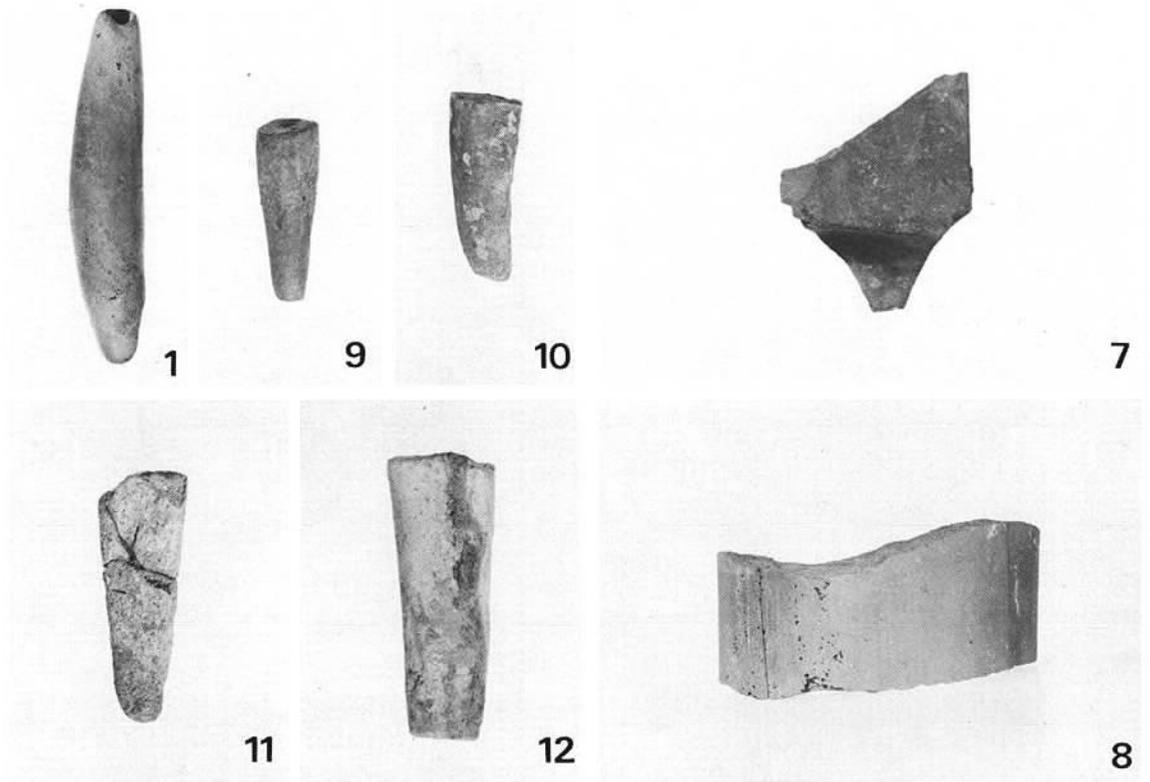


2

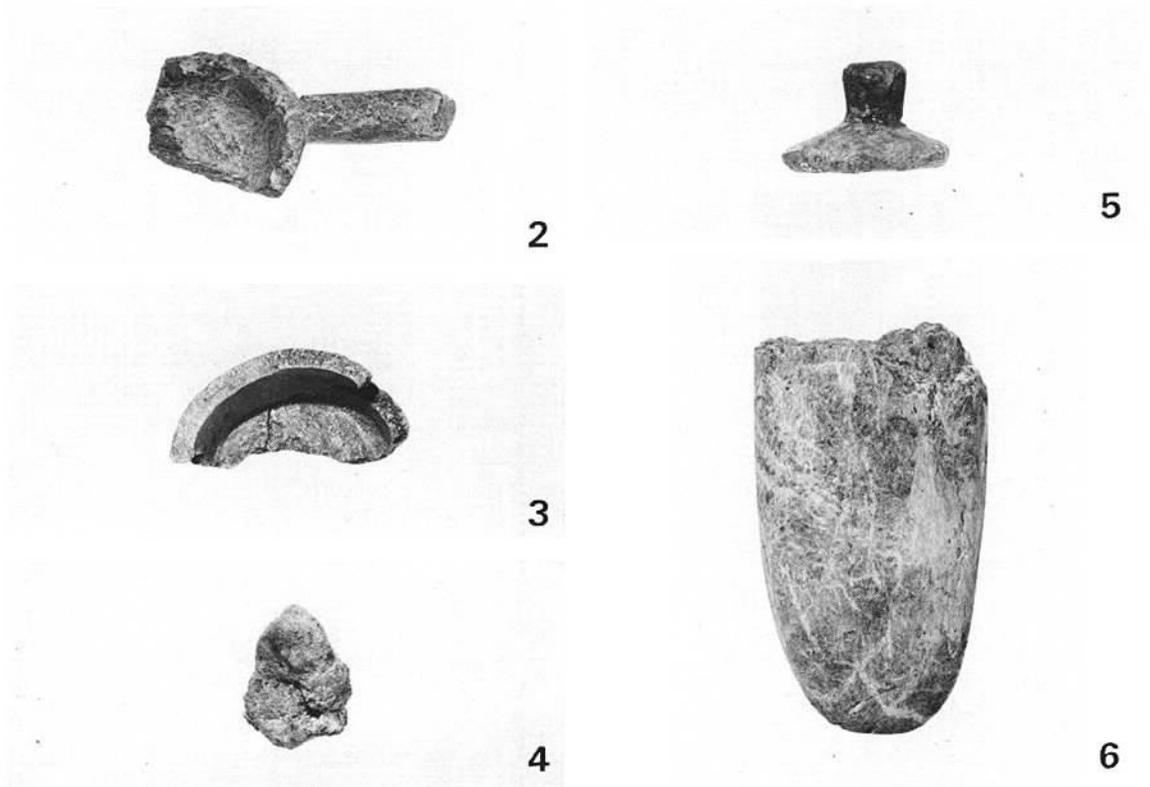


4

(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土雑器・陶磁器



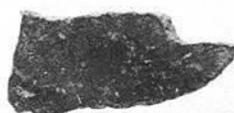
(1) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土土製品



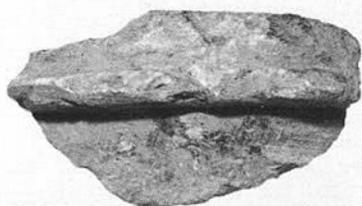
(2) 中屋敷遺跡第Ⅱ地点出土石製品



7



12



8



13



9



14



10



15



11



16

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—X XIX—

昭和54年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 福岡印刷株式会社

福岡市博多区東那珂1丁目10番15号